

印博

館

萬國歷史全書

第四編

東京博文館藏版

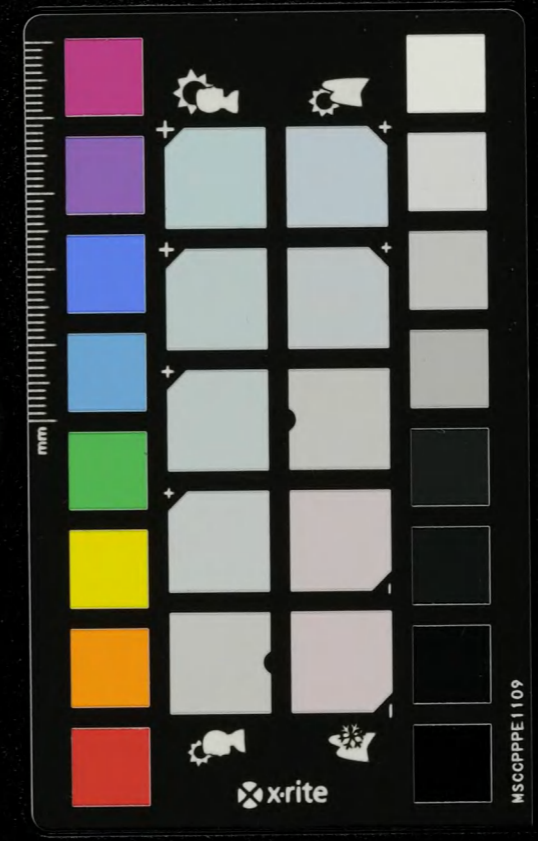
附朝鮮安南緬甸暹羅各國史

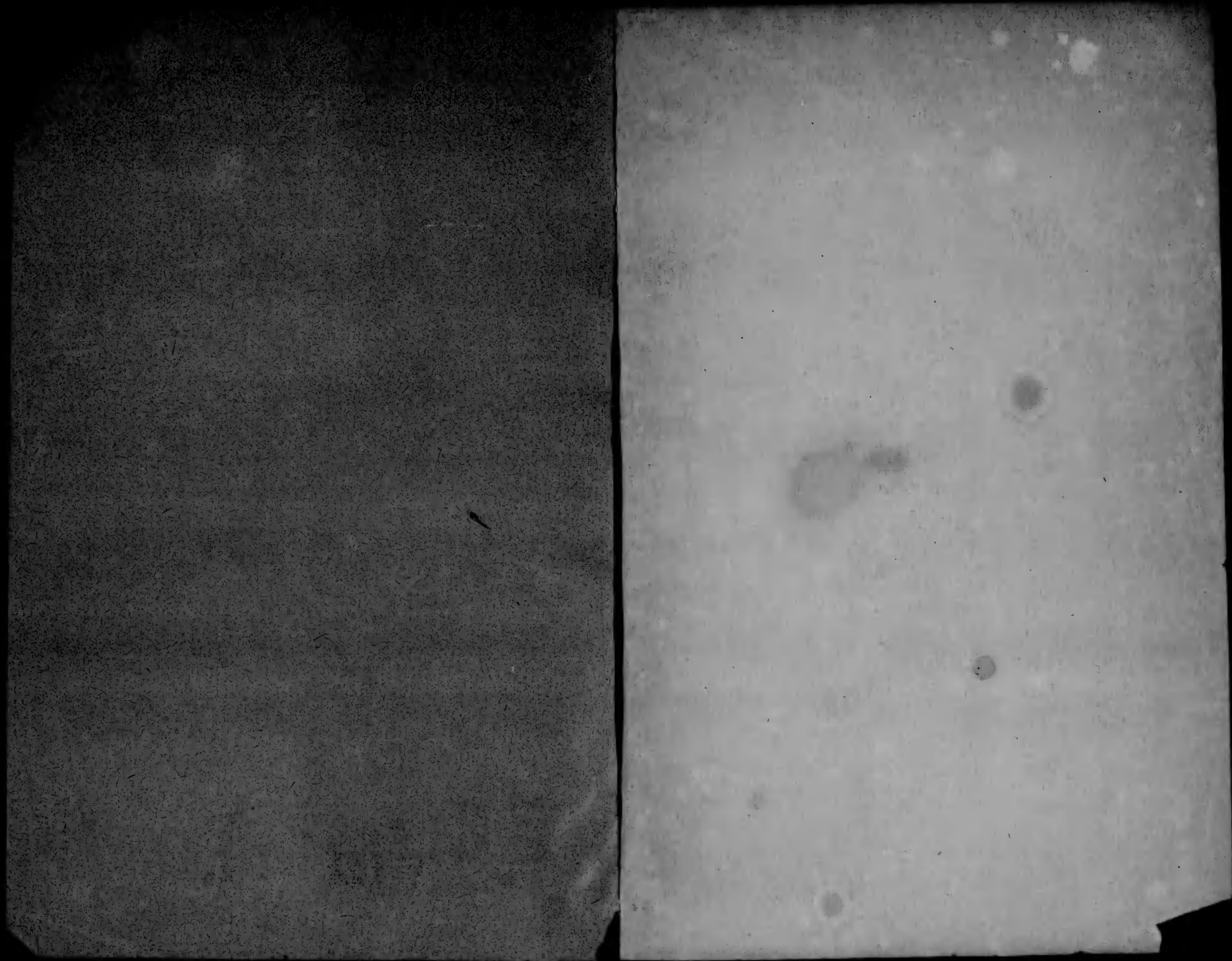
印度史全

北村三郎著

文

印度史全





樞密顧問官正三位子壽島尾小彌太公題辭
大藏省主計局次長深江順揚君序文
大藏省主稅官小山正武君校閱並批評

朝鮮名士朴泳孝題辭
柴山北村三郎著

印度史全

附 朝鮮 安南 緬甸 暹羅 各國史

東京 博文館藏版

A/225/60

讀書遠足就
憂深慷慨
存綫石心
沉時掩
呈卷





讀書還是我
 憂深慷慨吟
 存綫石心清瘦
 沉時掩墨卷



羅柔照在左

本今

明以廿二劫為深河紫
山北却看書花印
卷首得琴



是
非
之
判
御
世
之
鑑

無心有心
因色而現

巳丑之冬朴泳孝書



印度史序

物徂徠作詩、惜豐公、征韓之師、不直渡鴨綠江、古賀侗
菴亦謂、當時西南諸國、如呂宋爪哇等、脆弱易與、以豐
公百戰之餘威、舍韓取之、易於疾風掃枯、嗟乎二子所
見卓々如此、余恨不使二子出於文祿之際、持是論而
說豐公耳、吾友北村紫山、爲人倜儻有大志、嚮編支那
國史、今又著此書、以詳其興敗治忽之所由、顧紫山亦
非有感于此也歟、或曰、支那與印度、國勢強盛、非復曩
日比、今而論之、猶獸去注矢、竟何益、余以爲不然、宇內
廣矣、豈無展志之地、且盛者必衰、豈無可乘之機、則枋

國者、以此書爲經世寶典、亦莫不可、烏得謂無益耶、但至大才英畧如豐公其人者、當於何日見乎、姑書以問之紫山、

帆崖 深江順暢撰

萬國歷史全書第四篇 印度及亞細亞小國史

例言

一 印度ハ、古來ヨリ政治的ノ歴史トシテハ、大ニ觀ルベキモノナシト謂フモ可ナリ、然レモ其國土ハ、無盡藏ノ富源アリ、其哲學ハ、世界未開ノ時ニ當リテ、^{アリ}亞里私特德爾^ト以前已ニ玄妙精微ノ光彩ヲ發シタリ、其宗教ハ、孔子及ヒ耶蘇馬哈默德以前ニ於テ、廣大無邊ノ英靈ヲ顯ハシタリ、之ヲ切言スレハ、歐洲ノ哲學及宗教ノ本源ハ先ツ印度ニ發シタリト謂フモ亦過言ニ非ザルベシ、

米峯曰徵之識者之說英國朝廷之失印度則應非遠雖然至請克路撒遜人種之剛毅堅忍不屈則未減焉故其古領印度霸權根抵猶頗鞏固未遽顛覆也必矣云云果然否

一 今日ノ印度ハ、亡國ノ地位ニアリ、英國ノ所屬タルニ過キズト雖モ、將來ノ印度ハ、其運命未定ノ問題ニ屬ス、他ノ歐洲人ガ之ヲ占領スルニ至ルベキ乎、印度ノ人民果シテ克ク自ラ獨立スルニ至ルベキ乎、其如何ハ、之ヲ今日ニ豫言スベキニ非ズ、然レモ英國朝廷ガ印度ヲ失ハントスルノ兆候アルハ、識者ノ豫測シテ疑ハザル所ナリ、然ラハ則チ印

度ノ歴史、地勢、及風俗、豈其研究視察ヲ忽ニスベケンヤ、
 一 印度ノ歴史ハ、今日ニ於テ完全ナルモノナシ、獨リ之レナキノミナラズ、支那人及ヒ本邦人ニ於テ、未ダ其歴史ヲ編述シタルモノアルヲ見ズ、漢譯佛經、汗牛充棟、管ナラズト雖、其歷史上ノ參考ト爲ルベキモノ、果シテ幾何カアル、且ツ佛經ニハ、往々妄誕人ヲ欺クモノアリテ、妄ニ之ニ據ルベカラズ、本邦人ノ編述シタルモノニハ、唯タ高橋五郎氏ノ印度史アルノミ、氏ノ印度史ハ、僅々タル百頁餘ノ小冊子タルニ過ギサレ、亦以テ霧海ノ南針ト爲スニ足ル著書ハ亦之ヲ以テ參考書ノ一ト爲シタリ、

一 印度史ニ於テ、特ニ卓越シタルモノハ、獨人オランダ人ブルヒノ著述ナリ、其外英人、佛人ノ著書、モ亦鮮カラズ、又其印度哲學ニ關シテハ、浩澗ナル漢譯經典ハ、固ヨリ言フニ及ハズ、歐洲史家ノ論文頗ル多シ、
 歐洲ニ於テハ、殊ニ印度論理學ヲ研究スル學士多シ、
インヂヤン、ロジック
 本邦人ハ、印

度哲學ヲ研究スルモノ、甚タ罕ナリ、但タ我カ畏兄渡邊無邊居士ノ印度哲學小史、簡ニシテ明カニ、約ニシテ備ハル、亦萬綠叢中ノ紅一點タリ、著書ノ參考材料ヲ之レニ資レルモノ、尠ナシト爲サズ、
 一 此稿ハ、全ク是レ、著者、同志ノ士ト史學研究ノ爲ニ之ヲ筆記シタルモノニシテ、敢テ之ヲ大方ノ君子ニ示サントスルカ爲メニ非ズ、且ツ著者ノ如キ、身ニ寸暇ヲ有セザルモノニアリテハ、完全ナル良史ヲ修ムル、亦容易ナル事ニ非ズ、讀者幸ニ之ヲ恕シテ可ナリ、然レ、印度史全体ノ構思及組成ニ至リテハ、全ク著者一個ノ頭腦ヨリ發シタル、支那帝國史ト同一般ナリト知ルベシ、若シ夫レ完全精緻ノ大著述ハ之ヲ後人ニ俟ツト云フ、

一 又支那帝國及ヒ印度帝國ト相聯繫シテ離ルベカラザルモノハ、朝鮮史ナリ、安南史ナリ、暹羅史ナリ、緬甸史ナリ、此等諸國ノ歴史ノ特ニ支那ト相聯繫スル所ノモノハ、獨リ地勢ノ相接近スルノミニ非ズ、其人

種、國語、宗教、文學、風俗、習慣、若クハ法律、美術等ニ至ルマテ大ニ支那ニ基キ、
 宗教ハ印度ニ基クモノ多シ、
 支那ニ依リ、由テ以テ其ノ國ノ存立ヲ得タルモノアルニ由ル、故ニ昔時ニアリテハ、朝鮮ハ實際支那ニ服從シタリ、
 今日ハ曖昧中立ノ地位ニアレド、
 安南ハ、支那ニ征零セラレタリ、
 今日ハ佛國ノ領地ニ歸シタレド、
 緬甸ハ支那ノ藩屬ト爲リシヲアリ、
 今日ハ英國ノ有ト爲リ、唯舊來ノ制儀ヲ守リテ、十年毎ニ支那政府ニ朝貢使ヲ送ルニ過ギザレド、
 暹羅モ亦支那ニ朝貢シタルヲアリ、
 今日ハ僅ニ獨立ノ体面ヲ存スレド、
 是レ此等諸國ノ支那ト相聯繫スル所以ニシテ、著者ノ支那帝國史ニ次クニ、印度、朝鮮、安南、暹羅、緬甸ノ小史ヲ以テスル所以也、

一 安南、緬甸ハ己ニ亡國ノ域ニ陥リテ、今日己ニ悲涼壹鬱タル風色ヲ現ハシタリ、朝鮮ハ、日清、露英ノ相噬噬スル十字街頭ニ立テリ、暹羅ハ、獨立ノ体面ヲ此等亡國ノ間ニ保維セリト雖ド、是レモ亦動搖浮沈、定リナキ地位ニ在リ、而シテ此等諸國ノ存亡安危如何ハ、直接ニ支那帝國、印度帝國ノ勢力如何ニ關係セザルハ、ナシ、是レ實ニ東洋ノ局面ニ取リテ重大ナル關係ヲ有スル所以ニシテ、支那印度ノ國勢ニ注目スルモノハ、歩々相顧ミテ、眼光ヲ朝鮮、安南、暹羅、緬甸ノ上ニ注ガザル所以也、

一 東洋諸國ノ興廢如何ヲ觀察シ、亦其運命如何ヲ討究スルコト、是レ獨リ政事家、兵畧家ノ任ノミナラズ、活眼史家ノ務ムベキ事ナリトス、然ルニ我國朝鮮ノ人士、往々空文空論ニ汲々トシテ、近視淺見、亞細亞ノ大陸ニ着眼セズ、試ニ此輩ト一葦水帶ヲ隔テタル朝鮮ノ題目ヲ論スルモ、概チ守株膠柱ノ見ニ拘ハリ、茫乎トシテ定識アルモノ少ナシ、豈慨嘆スベキノ至リナラズヤ、著者無似ナリ、何ソ嘗テ東洋ノ大勢ヲ知ラシヤ、唯其冀フ所ハ常ニ有爲ノ志士ト共ニ此等ノ問題ヲ講究シテ以

テ東洋ノ爲ニセント欲スルノミ、是レ著者ノ肯テ亞細亞小國史ノ編述ニ從事シタル所以ナリ、

一蓋シ朝鮮、安南、暹羅、緬甸ノ如キ、其歴史タル、微々タルモノニシテ之ヲ支那、印度ノ歴史ニ比較スレハ、猶ホ補助貨ノ本位貨幣ニ於ケルカ如シ、然レモ其地勢ハ、東洋ノ局面ニ緊切ナル關繫ヲ有セリ、故ニ東洋ノ人士ニアリテハ、其地理、歴史、風俗、事情、決シテ之ヲ忽視スベカラズ、否平日ニアリテ、其講究ヲ怠ルベカラズ、是ヲ以テ歐洲有爲ノ人士、往々東方ニ遊歴シテ、其形勢ヲ觀察スルモノアリ、英人コルクホーン、スコット、ハレットノ諸氏ノ如キ、久シク東部亞細亞ニアリテ、専ラ地理風俗ノ探究ニ從事セシ人ナリ、其他露國ノ兵家學士等、往々東洋ニ入りテ、其地理歴史ヲ探究スルモノ頗ル多シ、而モ况ンヤ、吾人東洋ニアルモノニシテ、其歴史及ヒ地理、風俗ノ如何ヲ知ラズシテ可ナランヤ、

一東洋諸國ノ歴史、傳フベキ事蹟アルコモ拘ラズ、今日亡國ノ域ニ陷井

タルカ爲ニ其濯滅シテ世人ノ知ル所ト爲ラサルモノ、亦尠ナシト爲サズ、蒙古、匈奴、突厥、契丹、金等ノ如キハ、支那史ニ據リテ、其一班ヲ知ルベケレモ、中央亞細亞ノ歴史、地理ノ如キハ、史家ノ眼中ニ漏レタルコト非ズヤ、苟モ英才博識ノ史家アリテ、政治的、地理的、兵事的ノ眼光ヲ以テ博引、廣證、上下三千年以上ノ精彩色澤ヲ、第十九世紀ノ今日ニ發揮スルモ、豈啻ニ亞細亞ノ歴史ニ其光輝ヲ生スルノミナランヤ、亦以テ歐洲人ノ膽ヲ破ルニ足ルモノアラン、著者ハ序テニ此ニ論及シテ、之ヲ後人ニ望ムト云フ、

一朝鮮ハ我が隣國ニシテ其歴史、甚ハタ詳ナラズ、著者ノ材料モ亦本邦人ノ編述ニ資レルモノ多シ、著者、或ハ其考證ノ極メテ疎ナルベキヲ以テ、特ニ友人ニ請ヒテ、之ヲ朴泳孝氏ニ示シ、其是正ヲ求メタルガ故ニ精確ナリト明言スルヲ憚ラズ、但シ其明詳ナルニ至リテハ、後人ヲ俟タザルヲ得ズ、又朴泳孝氏ノ題詞ハ、朝鮮史ニ題シタルモノニ

テ今マ之ヲ卷首ニ附ス、讀者之ヲ察セヨ

明治廿二年十月

蘆中雪客北村紫山識

印度史目次

卷一

首篇

第一章 印度ノ形勢ヲ論ズ

第二章 印度ノ地勢畧説

第一篇

上世紀

第一章 亞利亞人種ノ侵入

第二章 印度ノ種族

第三章 日種月種ノ朝

第四章 羅摩ノ親征

第五章 日種月種ノ戰爭

第六章 言語及風俗

目次

第七章 婆羅門教

第八章 印度哲學——釋迦以前，哲學

卷二

第二篇

中世紀

第一章 摩督，法典——釋迦牟尼，時代

第二章 外人，侵入及摩竭陀，革命

第三章 阿輸迦，仁政及諸朝，興廢

第四章 馬毛度，征畧

第五章 瞿里，侵入及諸朝，興廢

第六章 帖木兒，來侵

第七章 宗教(其一)

釋迦牟尼，小傳

第八章 宗教(其二)

佛教，興廢

第九章 宗教(其三)

佛教，傳紹

第十章 文學及美術

第十一章 貿易

卷三

第三篇

近世紀

第一章 婆伯爾，創業

第二章 亞克婆爾，政畧

第三章 莫臥爾朝，衰頹

第四篇

印度覆滅紀

- 第一章 歐亞ノ交通及東印度會社ノ設立
- 第二章 猶普列ノ運動
- 第三章 猶普列ノ敗衄
- 第四章 克雷武ノ征畧(其一)
- 第五章 克雷武ノ征畧(其二)
- 第六章 哈士丁斯ノ征畧(其一)
- 第七章 哈士丁斯ノ征畧(其二)
- 第八章 印度ノ覆滅
- 第九章 印度諸邦ノ位置及英國ノ政治
- 第十章 印度ノ事情(其一)
- 第十一章 印度ノ事情(其二)
- 第十二章 英國ノ苛政

外篇

附錄

佛國記

法顯

西域記

惠生

亞細亞小國史

第一篇

朝鮮史

- 第一章 地理畧說
- 第二章 國朝ノ興亡
- 第三章 今王及大院君
- 第四章 金玉均ノ小傳

第五章 朴泳孝ノ小傳

第六章 政治及風俗

第七章 文學

第八章 産業及貿易

第九章 朝鮮ト各國トノ關係

外篇 附錄

觀馮生所藏倭錦袍歌

王志堅

戰場行

僧清虛

第二篇

安南史

第一章 地理畧說

第二章 國朝ノ興亡

第三章 政治風俗及文學

第四章 劉永福ノ零傳

第五章 安南ト日本トノ關係

第三篇

暹羅史

第一章 國朝ノ興亡

第二章 政治産業及風俗

第三章 兵制

第四章 山田長政ノ小傳

第五章 暹羅ト日本トノ關係

第四篇

緬甸史

第一章 國朝ノ興亡

第二章 緬甸ト英國トノ關係

印度史

北村 三郎 編述

首 篇

第 一 章

印度ノ形勢ヲ論ズ

近世紀ノ初頭ニ於テ、亞細亞ノ大邦タル、印度帝國ハ、一百五十五万方里ノ地積ト、二億五千六百万ノ人口トナ舉ケテ、容易ニ英人ノ脚底ニ蹂躪セラレタリ、嗚呼——麥秀漸々兮、禾黍油々兮——トハ正ニ是レ此歴史ノ經ナリ、——山河破碎水漂絮、身世浮沈風打萍——トハ、正ニ是レ此歴史ノ緯ナリ、吾人ハ豈涙墨ヲ把リ來リテ、此歴史ヲ叙スルニ忍ビンヤ、——野史氏曰ク、印度ノ形勢、今日ヨリ將ニ別ニ一大新局ヲ開ントスルノ氣運ヲ幾微ノ間ニ現出セントセリ、吾人ハ今マ之ヲ歐洲識者ノ說ニ徴シ

テ之ヲ論セン、夫レ印度ノ面積タルピスタユラ以西ノ歐洲大陸ト均シク、其人口ノ稠密ナルニ至テハ、ピスタユラ以西ノ歐洲大陸ヨリモ多キヲ三千万以上ナリ、而シテ古代ノ諸邦國ヲ存シ、宏大ナル都府ヲ有シ、文化武備、貴族僧侶ノ制度ヨリ、卓越高尙ナル宗教ニ至ルマデ、世界人類ノ創設シ得ベキ組織ハ、皆秩然トシテ完備セザルハナシ、^{ベンガラ}榜加拉ノ人口ハ、佛國ニ二倍シ、^{マラッカ}暹都斯坦人ト稱セラルル人口ハ、全合衆國ノ白哲人ニ超過シ、^{マラッカ}麻刺加人ハ、西班牙ノ闔境ニ充滿スルニ足リ、^{ペンヤブ}ペンヤブ領ノ人口ハ、土耳其ノ人口ヲ復スルモノト相同シ、特ニ是レ四大領地ヲ擧ケタルニ過キザルノミ、而シテ爾餘ノ領地モ其概算亦タ之ト類スルモノナキニ非ズ、

東印度ノ人民ハ、其軀幹ノ長大ナルト、氣象ノ勇敢ナルトハ、英人ニ讓ラズ、其健闘奮戰、毫モ死ヲ畏レサルモノニ至リテハ、英人ノ右ニ出ツ、其數殆ンド一億二千万ニ近ク、昔時羅馬帝國ノ最モ至隆至盛ヲ極メタル時

米峯曰試回想之
德川氏之末路其
旗下及親藩之精
兵不下十萬而俯
首屈腰爲薩長數
萬軍兵所制焉者
無他有萬卒而欠
一將而已矣印度
雖有二百萬之壯
丁堪兵役者奈其
無一將何噫

代ノ總人口ト相伯仲セリ、英國ノ兵制ヲ以テ、調發セラレテ政府ニ服役スル士兵ハ、殆ント四十万ニ上リ、其外ニ軍事ヲ以テ專業トシ、一生ヲ軍役に送ラント志スモノハ、少ナクハ二百萬人ニ達スベシ、今マ假リニ日耳曼ノ兵制ヲ東印度ノ地ニ適用セシ、平後備民兵、及ヒ平時ニアリテハ、徵集セサルモノヲ除キテ、現役ノ常備軍二百五十万ヲ備フルヲ得ベシ、而シテ年々役ニ就クノ新兵ハ、八十万ニ下ラサルベシト云フ、若シ英雄ノ士アリ、勇將謀士ヲ網羅シ、此ノ如キ大軍ヲ率非テ、戰爭ヲ事トセハ、亞細亞ノ大地山河ハ固ヨリ云フニ及ハズ、馬蹄ノ指ス所全世界ヲモ蹂躪スルニ足ルベキ也、

又印度ニ於テ富裕ナル農民ニシテ其積聚貯蓄ハ、東印度ヲシテ四隣最富ノ國タラシムルニ堪ヘタルモノ、一千万人ニ瀕シ、之ニ次ク所ノ農民ハ、其數ヲ知ラズ、貧窶ナル農民ト雖、其收入却テ愛爾蘭ノ中農ニ勝レ、^{工匠}工匠ノ數ハ、百万ニ近ク、宮殿ヲ造營スルノ良工ヨリ空手ヲ以テ土ヲ

擣シ、陶器ヲ製造スルノ職工ニ至ルマテ、各々其職業ヲ分テ歐洲ニ存在スルノ職業ハ、大抵東印度ニ存在セザルハナシ、而シテ東印度ハ、歐洲及ヒ他ノ邦國ノ外ニ在リテ國ヲ建テタルモノナレバ、工業ハ國民ノ増加スルニ隨ヒテ繁盛ニ赴キ、自國ノ需用ハ常ニ自國ニテ之ヲ供給スルニ足リ、飲食ノ物品ハ、一切外國ノ輸入ヲ仰カス、白銀ヲ除クノ外ハ、他ニ之ヲ外國ニ待ツ所ナシ、外國ノ輸入品ハ、單ニ東印度ニ滞在セル白哲人ノ需用ニ充ルニ過キズ、今ヤ活潑壯快ナル生活ノ新潮ハ、彼ノ二億五千人ノ中ニ充溢シテ、彼レ人民ノ勞働、競争、希望ヨリ百般ノ行爲等ノ情態ニ至ルマテ、毫モ歐洲人ト異ナルコトナシ、——聞クテユーナイターメルシヤドト云ヘル東印度ノ一民ハ、其富彞時、プンジャブノ領地ヲ征服セシ英國ノ全軍ヲ給養使役スルニ餘リアリト云ヘリ、嗚呼、印度ノ境域、廣大ナルコト此ノ如ク、人口ノ夥多ナルコト此ノ如ク、亦其農工ノ繁盛ニシテ、國力ハ富裕ナルコト此ノ如シ、然リ而シテ、僅々タル英國ノ官吏ト英國ノ鎮戍兵

富貴之家其子多
惰沃土之民不才
印度之不振其病
根蓋亦在于斯歟

トニ制馭セラレ、奄々其殘喘ヲ仰キ、之レカ奴隸タルコトヲ甘ニスル者ハ、何ソヤ、印度廣シト雖、凡果シテ一人ノ奇傑男子ナキ乎、抑モ亦特殊ノ精神氣象、微弱ナル乎、何ソ其ノ衰へタルノ甚シキヤ、
今マ試ニ歐洲全國ニシテ、東印度ノ如ク、茶褐色ノ人民ヲ以テ、充滿シタリト假想セヨ、又其人民ノ上ニ立チテ、之ヲ管治シ之ヲ保護シ、之ヲ稅歛シ、今日ノ所謂ル帝國ナルモノ起リテ、之ヲ組織シ、之ヲ維持スルモノハ、千五百人ニ充タサル異種、異俗ノ外國官吏ナリト假想セヨ、其人民ノ數ハ、羅馬帝國ノ臣民ニ二倍スルモ、之ヲ防衛スル所ノモノハ、羅馬軍隊ノ五分ノ一ニモ足ラザル六万五千ノ外國鎮戍兵ニシテ、瑞典、白耳義及ヒ荷蘭ノ常備軍ヨリモ少ナシト假想セヨ、吾人ハ果シテ如何ナル感覺ヲ惹キ起スヘキ乎、今日ノ印度ハ、即チ是レナリ、假リニ千五百人ノ英國官吏ヲ黒色人種ニ變セン乎、六万五千人ノ英國鎮戍兵ヲ銅色人種ニ換ヘン乎、印度ノ運命ハ、已ニ盡キタリ、絶大ナル東印度ノ建築物ハ、已ニ滅セ

リ、茶褐色人ハ永遠進化セサルモノナリ、否進化スベカラザルモノトシテ、存在スルニ過キザルナラン、(英國人ノ推量ニ從ヘハ)而シテ英國ノ官吏ト、鎮戍兵トハ固ヨリ茶褐色人ノ心服ヲ得タルモノニハ非ズ、試ニ英國ノ官吏、鎮戍兵ノ社會ニ立テ入りテ、精細ニ其情態ヲ觀察セヨ、百事皆姑息因循ニ流レテ、更ニ確乎不拔ノ氣風ナク、大守ハ施政五年ニシテ更迭シ、屬吏ノ職ニアルモノハ、久シキモ三十年ヲ出テズ、任期ヲ終ヘタル所ノ官吏ハ、其後任者ヲ贊助誘掖センカ爲ニ、印度ニ遲淹スル者ナク、(クフリン侯ノ如キハ、其齡未タ中年ヲ越エザルニ、東印度ニ滯寓スル白哲人種中老人ノ老人ト稱セラレタリ)鎮戍兵ハ東印度ニアリテ家室ヲ有セシモノナシ、又東印度ニ於テ、資産ヲ起シタル白哲人種ハ子孫永住ノ爲ニ、家屋ヲ造營シ、土地ヲ買有シタルモノナク、白哲人種ノ農夫技手、職工等ハ、齡尙ホ六旬ニ滿タザルニ皆己ニ東印度ヲ離レテ其隻踪ダモ殘シ置カズ、管ニ東印度ニ屬スル白哲人種ノ殖民地ナキノ

ノミナラズ、永住ノ見込ヲ有セル白哲人種ハ、幾ント一人モ之レナク恰モ飄然タル秋來春歸ノ鴻雁ニ異ナルヲナキニ非ズヤ、
東印度ノ三大都ニ滯在スル白哲人種ノ數ハ之ヲ合併スルモ彼等ノ自身ヲ保衛スルニ足ラス、都外ニ散在スルモノハ、政府ノ使役ニ供スルモノヲ除キテ、耕作商估、及他ノ職業ニ從事スルモノ、總計ハ倫敦府ニアル黒色人ヨリモ減ゼリ、彼ノベチールスノ如キハ、石造ノ都府ニシテ許多ノ堂塔宮殿ヲ有シ、其佳麗典雅ナルハ、世界ノ耳目ヲ驚カスヘキ程ナレ、臣、曾テ白哲人種ノ其地ニ留マリテ一事ヲ經畫シ、一事ヲ成就セシ者ナク、外國人ニシテ、其地ヲ過キタルモノハ、地方ノ富豪紳士ノ交通往來シテ官署ニ至ルノ外ハ、一切白哲人種ヲ見ルヲナクシテ、一年ヲ亘リタルコトアリト聞ケリ、内地ニ至リ、各都府ニ外郊ニ設置セル停車場ヲ離ルレハ、到處同様ニテ、一箇ノ警吏モ一箇ノ驛夫モ、白哲人種ニ屬スルモノニ遇フヲ能ハザルヲアルベシ、故ニ若シ茶褐色人ガ、勞役ヲ廢スルヲ

一周間ニ涉レハ、内地ニアル所ノ官吏ハ、殆ント飲食ヲ得ルノ途ヲ絶テテ手ヲ束テテ官衙ニ蟄居シ、飢渴ヲ待ツノ外アラズ、——曾テ俊敏ナル佛國人、始メテ東印度ニ到着シ嚮導旁々、英國ノ一小吏ヲ伴ヒ、内地ニ遊歴セントテ、^{カレ}甲爾加達府ヲ距ル^{カッ}僅ニ十六里ノ地ニ至リ、忽チ小吏ヲ顧ミテ、白人種ハ何處ニ住シ居ルヤト問ヒケルニ、小吏ハ笑ヒナカラ、何處ニモ住セズト答ヘタリト、此一語ヤ真ニ其實ヲ穿チタル言ナリ、

東印度ニ於テ、此ノ如ク、白哲人種ノ移住スル者ナキハ、一ニ氣候ノ永住ニ適セザルニ歸因スルト云フ者アレハ、清涼爽快ナル高原丘陵地方ニ至リテモ、絶テ永住スルモノナク、殊域羈旅ノ情ハ、深ク白哲人種ノ頭腦ヲ惱マスモノニヤ、年ヲ經ルニ隨ヒ、各々其故國ニ歸ラザルモノナシ、濠洲旱熱ノ曠原ハ、英國人ニ占領セラレタリ、フロリダ炎熱ノ谿谷ハ、米國人ニ割據セラレタリ、西班牙人ハ、南北亞米利加熱帶地方ノ優等種屬ト爲リ、丁抹人ハ、瓜哇ニ蕃殖セリ、然ルニ白哲人種ハ、如何ナル快樂アルニ

モ拘ラス、如何ナル損耗ヲ招クモ、如何ナル金錢名譽ヲ抛ツモ、如何ナル職業ヲ棄ルモ、東印度ノ地ニ永住スル者ナキハ、是レ其ノ故何ゾヤ、蓋シ歐洲ニ於テハ、百事悉ク是レ永續世襲及ヒ各個人ノ經驗ト各時代ノ智能トヲ積聚セルヨリ、發生シ、來ルモノナリ、然ルニ東印度ニ在ル所ノ白哲人種ハ、全ク此ノ如キ形迹ヲ存セズ、亦之ヲ存スルヲ能ハズ、而シテ彼ノ土着モセズ、根據モナク、恒心ナク、恒業ナキ、一群倉卒ノ旅客ガ所謂東印度帝國ナルモノヲ組織シ維持シテ、立法、行政、司法、等歐洲各國ノ君主國及ヒ裁判、警察、収稅等ノ諸官カ、其心力ヲ竭シテ、僅カニ之ヲ整理セル事務ヲ實行シテ、毫モ不満足ヲ感スルヲナキハ、豈咄々タル一大怪事ナラズヤ、

苟モ宇内ニ峙立シテ、邦國ヲ建ツルモノハ、其歐洲タルト、東洋タルトヲ問ハズ、相區劃シテ境域ヲ分ツ以上ハ、縱令ヒ同一ナル種族ヨリ出デ、同一ノ宗教ヲ奉シ、同一ノ文明ニ浸濡スルモノト雖モ、決シテ他ノ一方

印度人何以乏持
殊之氣象歟蓋沃
土遶居之繁遂流
而至此也耳

ヨリ其制馭抑壓ヲ甘ンスルヲ能ハザルベシ他ナシ國民特殊ノ精神各々異ナル所アレハナリ左レハ伊太利人ハ埃太利ノ羈輓ニ服セス波蘭人ハ露西亞ノ政令ヲ喜ハズアルサス人ハ其同種族ナル日耳曼政府ニ甘從セス愛爾蘭人ハ英國政府ニ屬スルヲ屑トセズ支那人ハ鞑鞑人ト抗爭シ波斯人ハ亞刺比亞人ト死闘セリ而カモ况ンヤ其遺傳ノ氣象生活ノ思想社交ノ風習等相互ノ間ニ一大鴻溝ヲ劃シタル氷炭モ雷ナラザル東印度人ト英國人トニ於テチヤ豈其レ相容レ相忍ブノ理アラシヤ然ルニ彼ノ東印度帝國政府即チ僅々タル英國ノ官吏ガ奇怪ニモ東印度ノ人民ヲ統御シテ其使役ニ供セシムル所以ノモノハ何シヤ他ト云フニ過ギザルト是レナリ已往百年間英國政府ハ公約及ヒ公債ノ事ニ關シ尊敬スベキ約諾ヲ履行シ東印度人ノ信用ヲ博センヲ勉メ一般ノ平和ヲ維クニ汲々タリ政府ハ嘗ニ四隣ノ寇患ニ對スルノミナ

ラズ内地ノ爭乱ヲモ鎮壓シ最モ勢力アル王侯ト雖モ苟モ其邦域ヲ越エテ軍隊ヲ運轉スレハ數週間ヲ出テズシテ英國法庭ノ訊問ニ應セザルヲ得ズ最モ驕傲ナル貴族ト雖モ苟モ其愛憎ニ任セテ臣民ヲ殺戮スレハ終身禁錮ノ刑ヲ免ルト能ハザルベシ英國政府ハ東印度ノ卑賤ナル一小民ヲシテ無辜ノ死ヲ遂ケシメンヨリモ寧ロ内亂戰爭ノ危險ヲ賭スルニ猶豫セズ群盜流賊ノ類モ嚴重ニ之ヲ處分シ其剽掠殺戮ノ禍ハ固ヨリ未タ其跡ヲ絶ザルニモセヨ之ヲ概言スレハ東印度人ノ生命財產ハ英國政府ノ下ニアリテ稍々安全ニシテ宗教上ノ自由ハ殊ニ其寛大ヲ極メタリ然レモ此等ノ政畧ハ果シテ東印度人カ異種異族ノ英國人ニ對スル慷慨ノ氣象ヲ調和スルニ足ル乎吾人ノ疑ハサルヲ得ル所ナリ

東印度ノ人民ハ常ニ權勢ハ神ヨリ出タルモノナレハ怨敵タリモ權勢ヲ得タルモノニハ何人タルヲ論セズ之ニ奉事スベシトノ舊說ヲ妄信

セリ、英國政府ハ其權勢ヲ利用シテ、思フカ儘ニ、兵士警吏等ノ小官吏ヲ
傭ヒ入ル、フナ得ルモ、其權勢タルヤ、確乎不拔ナルニアラザレハ、毫モ
恃ムニ足ラス、東印度ノ種族中、最モ有力ニシテ、英國政府ノ丁寧懇篤ナ
ル待遇ヲ蒙リ居ルモノハ、彼ノ斯跛兵ナリ、彼等ハ、其志願ニ由テ、兵役ニ
加ハルモノニシテ、隨意ニ兵役ヲ脱スルヲ得ルモノナリ、兵役ニア
ルノ間タリハ、彼等ノ同意ヲ經タル後ニ非サレハ、如何ナル場所ニモ派遣
移轉セラル、フナク、英國政府ハ豊裕ナル給料ト、養老金トヲ下附シテ
其不平不満ヲ慰撫シ、又才幹アルモノハ、屢々官職ヲ昇進セシメ、其待遇
殆ント驍婦ノ驕兒ヲ鞠育スルニ於ケルカ如キモ、彼等ノ往復書翰中、一
トシテ、英人ノ不誠實、不親切ナルヲ痛嘆シテ、東印度ノ恢復再興ヲ以
テ、言ト爲カハルハナシ、英國ノ指令官ハ、政府ノ主旨ヲ遵奉シテ、注意ニ
注意ヲ加ヘ、之ヲ附循獎勵スルモ、更ニ著ルシキ効驗ナク、彼等ハ、常ニ起
テ英國ノ指揮官ヲ襲撃シ、時トシテ、其妻兒ヲモ害セリ、彼等カ暴動ノ歴

史ハ東印度革命ノ歴史ナリ、千八百五十七年ノ如キハ、盟約ヲ經テ政府
ニ連結セルモノト雖、尙ホ依頼スルニ足ラズ、抗爭二年、互ニ敵視スル
ノ狀ハ、實ニ其慘酷ヲ極メタリキ、爾來幾多ノ歲月ヲ積ミタレ、彼等ノ
感情ハ、毫モ昔時ニ異ナルヲナシ、何トナレハ、彼等ハ東印度人民ノ氣象
ヲ備フルモノナレハナリ、彼等ノ思想ハ、堅硬ニシテ得テ屈スベカラサ
ルモノナレハナリ、彼等ハ、機ニ臨ミテ、獨立ヲ恢復セント欲スルモノナ
レハナリ、先年彼ノ氣焰モナク、勢力モナキ特里王朝ヨリ發布シタル宣
告ノ如キモ、唯其文ノ東印度ノ復興ニ論及スルヲ以テ一時全國ヲ風動
セシメタルニ非ズヤ、東印度ニ於テ、一朝事アラバ、全國ノ茶褐色人ハ、一
人トシテ白哲人種ノ味方ト爲ルモノナカルベシ、而モ况ンヤ、彼等カ生
命ヲ抛キテ英國政府ノ土崩瓦解ヲ救フヲ望ムベケンヤ、斯ル危急ニ
臨ミテ、英國政府ハ、果シテ、信認ヲ防禦ノ衝ニ當ラシムル斯跛兵ヲ有ス
ルカ、都府城壘ノ陥落セントスルニ臨ミテ、英國政府ハ、果シテ茶褐色人

ヲ募集ノ、義勇軍ヲ組織スルヲ得ル乎、此時ニ當リテ、英國政府ハ、果シテ如何ナル運命ヲ保ツベキ乎、東印度ノ農民ハ、租稅負擔ノ過重ナルカ爲ニ、道路ニ彷徨スルモノナキ乎、訴訟判決ノ遲緩ニシテ、失費多キカ爲ニ、愁嘆ヲ抱クモノナキ乎、富豪貴族ノ子弟ノ狡黠無賴ナル、英國ノ狀師ニ欺騙セラレ、財産ヲ喪ヒ、朝夕號泣シテ、白哲人ノ門ヲ叩キ、之レカ憐ヲ乞ヒ、悲憤骨髓ニ徹スルモノナキ乎、——試ニ東印度、古來ノ歴史ヲ繙キテ之ヲ看ヨ、東印度ニ於テ、最モ權勢ヲ極メタル君主シヴァージハ、群盜ヨリ身ヲ起シタルモノニハ非サル乎、パロタニ於テ、王業ヲ創始シタルモノハ、一貧洗フガ如キ、牧畜者ヨリ志ヲ立テタルモノニハ非サル乎、シンギアニ於テ一王國ヲ建立シタルモノハ、奴僮兒ニハ非ザル乎、第一ニサムハ帝國ノ一小吏タルニ過キザリシモノニハ非ザル乎、賣索爾ノ獨立ノ王冠ヲ戴キタルモノハ、一武夫ヨリ出テタル者ニハ非ザル乎、ラヂート、サイノ父ハ、一小縣ノ長官タリシモノニハ非ザル乎、此等英豪

奇傑、天ヲ呑ミ地ヲ破ルノ志ヲ抱クモノ、今日ハ、印度ト雖モ、二億萬人中、豈斯人ナカラシヤ、

顧フニ、英國ガ、東印度ヲ領セシヨリ以來、東印度ノ工藝、教育、文學、建築及ヒ彫刻製等ノ美術、次第ニ消滅シ、所謂ル生活上ノ快樂ナルモノヲモ、併セテ、一掃シ去ラントセリ、然ルニ、生活上ノ快樂、日ニ減スルニ從ヒ、英國人ヲ嫌惡スルノ感情ハ、益々其深キヲ加フルカ如シ、現時東印度人ノ發見スル所ノ新聞雜誌ハ、數百種ニ上ルモ、其論點ハ、唯暗々裡ニ、英國ノ羈絆ヲ脱シ、東印度ノ獨立ヲ勸告スルニアラザルハナシ、東印度人ハ、英國人ト婚姻ヲ結フヲ欲セズ、甚シキニ至リテハ、商業上ノ境界ニマテ影響ヲ及ボサントセリ、歐洲流ノ東印度人ハ、無用ナリ、東印度流ノ歐洲人ハ、死人ナリトハ、其實驗ノ語タリ、此ノ如ク氷炭モ管ナラサル兩人種ノ間隙ヲ補ハンカ爲ニ、政府ハ、種々ノ方法ヲ試ミタリシガ、東印度人ハ、自己ノ純潔ナル良心、雄毅ナル氣力ヲ警發スルノ程度ニ準シテ、愈々相

衝突ヲ生シ到底兩種ノ間ニ戰爭ヲ經ザルベカラザルヲ免ルベカラザル數ナリ否必至ノ勢ナリ

夫レ已ニ英國人ト東印度人トノ間ニ横ハル所ノ一大鴻溝ハ終ニ之ヲ破ルヲ能ハズ早晚其衝突葛藤ヲ生センヲ數ノ免ルベカラサルモノナリトスレハ英國人ノ辛苦經營シテ組織セル此一大帝國ノ破裂ハ亦吾人ノ豫期セザルベカラザル所ナルベシプリンセプ氏ハ印度帝國ハ勇悍猛烈ナル亞細亞種族カ不意ニ喜馬拉連峯ノ側面ヨリ内地ニ侵入スルニ由テ覆滅スベシト預言セリ今日韃靼種族亞刺比亞種族波斯種族ノ如キハ其勢力脆弱ニシテ恐ルニ足ラズ支那ハ大國ナレハ北方露國ガ其背ヲ壓スルノ虞アルヲ以テ西藏ヨリ東印度ニ向フノ危策ヲ取ラザルベシ然レハ將來帝國政府ノ恐ルベキモノハ止マ阿富汗ノ境上ニ虎視龍驤セル露國アルノミ夫レ阿富汗境上ノ一進一退一勝一敗ハ未タ必ズシモ格別ノ影響ヲ東印度ニ及ボスヲ能ハザルガ如クナレハ

阿富汗之於英露實是兩雄勝敗最後判決之地先復此勝地而據之者即是將來印度征服者也

東印度有力ノ人民就中斯跋兵等ノ専ラ心目ヲ注ク所ノモノハ阿富汗ニ於ケル英露ノ勢力ノ消長如何ニアリ故ニ阿富汗ニ於テ英國ガ一領地ヲ失ヒ一軍ヲ覆ヘサレタル報知ニ接スルキハ容易ニ東印度全國ノ破裂ヲ引キ起スニ至ルヘシ然レハ英國人ガ東印度人ヲ誘惑シテ露國ヲ嫌惡セシメントスル計謀ヲ運ラスハ最モ巧妙ニシテ至ラザル所ナシ然レハ一旦東印度人ニシテ憤然義氣ヲ激發シテ彼ノ鎮戍兵ヲ蹙ニスルニ至ラハ英國ハ恐クハ復タ之ヲ奈何トスルヲ能ハザルベシ是レ東印度ニアル英國人ト雖モ亦自ラ確認スル所ナリ斯跋兵ハ常ニ相語テ曰ク英國人ヲシテ充分ニ文明ノ利器ヲ輸入セシメタル後ヲ平和ノ爭ヲ以テ彼等ヲ驅逐スベシト英人曰ク東印度人カ近來英國官吏ノ地位ヲ取リテ之ニ代ントスルノ勢ハ十五年ヲ出デスシテ再タヒ東印度ヲ彼等ノ手ニ回復スヘキノ見込アリト平和ノ爭トハ果シテ何事ツ印度廣シト雖モ未タ華盛遜巴寧爾其人ヲ生セザル乎

野史氏曰ク、印度、富源ノ無盡藏ナルヲ、今ヲ距ルルヲ千有餘年前ヨリシテ、各國ノ能ク之ヲ了悉セル所ナリ、此間甲仆レ乙起リ、印度ノ統御者、幾回トナク變更シタリト雖、前世紀ノ末造ニ至ルマデハ、印度ノ主權ヲ占メタリシ者ハ、悉ク是レ亞細亞人ニ非ザルハナカリキ、而シテ近世紀ノ初ニ當テ、黑白水炭モ亦管ナラザル英人ノ爲ニ征服セラレタリ、然レモ天意別ニ將ニ新局ヲ換ヘントス、紛々タル戰國、漠々タル風雲、海嶽ヲ夷平シ、鯤鵬ヲ變化スルハ、實ニ其人ニアリ、苟モ印度ヨリ、非常奇傑ノ士、起テ以テ、全國ヲ統合シ、二億万人ヲ打テ一丸ト做シ、英人ノ腐敗ヲ一掃シ、獨立帝國ヲ建設スルニ非ザレハ、虎視眈々タル者、將ニ英人ニ代リテ、其後ヲ繼ントス、是レ必至ノ勢ナリ、印度ノ形勢、其レ將サニ今日ヨリ如何ナル變遷ヲ生セントスル乎、是レ豈獨リ亞細亞大洲ノ變局ノミニ止ンヤ、噫、

獅巖曰、書中有人、我知其心、印度無人、我未知其心

龍潭曰、印度之獨立、內一大疑題也、講究者在活眼史家焉、今人往々置而
不問者何也、此篇論印度形勢、極激淋漓、真似山雨來欲風滿樓、不知是淚
耶、不知是血耶、

第二章

印度ノ地勢畧說

印度全國ノ地勢ハ、亞細亞ノ中央ヨリ起リテ、南海ニ斗出シ、大三角形ヲ爲ス、北ハ喜馬拉亞山ニ倚リ、西ハ阿剌比亞海ニ臨ミ、東ハ榜加拉海ニ枕ミ、北緯八度ヨリ起リテ、三十五度ニ至リ、南北ノ長サ、東西ノ幅廣キ所ニテ、大約一千九百英里アリ、之ニ加フルニ、榜加拉東岸ナル緬甸ヲ以テスレハ、全面一百五十五万方里、内英領八十九万六千方里、獨立國領六十五万四千方里、ニ跨リ、人口二億五千六百萬、英領人口一億九

千九百万人、獨立領人口五千七百万人、ナ有ス、故ニ全面ノ地積人口共ニ歐洲全土中ヨリ、露國領ヲ除キタルモノト同シ、又之ヲ我カ日本國ニ比スレハ、土地ハ大約之ニ十倍シ、人口ハ大約之ニ七倍ス、

印度ノ北境ハ、喜馬拉亞山脉ヲ以テ屏障ト爲ス、グリータンチーボルノ獨立國ハ、其山脉ノ南坡ニアリ、西藏ハ、其北ニ聳ヘ、克什米爾ハ其西隅ニ位シ、其西北ノ山脉ハ南ニ走リテ亞業加斯坦ト分界ヲ爲シ、愈々南ノ伯爾日斯坦ト隔斷ス、印度西境ノ極端ナハア河トシテ、其南方ニ斗出スル岬ヲモソセ、暹ト曰ク、其西南ハ、即チ阿刺比亞海、印度海是レナリ、

喜馬拉亞山ハ、東北ノ隅角ニ屹立シ、更ニ南ニ一支ヲ出シ、榜加拉ノ東部及ヒ亞桑ト緬甸ノ經界ヲ畫セリ、之ヲアハル又ハナガリ、パレル山ト名ク、此境界中ニ所在ノ地ハ、風景到處同シカラズ、氣候寒暄大ニ異ナリ、北ニハ峻絶ナル山嶺アリ、南ニハ卑濕ナル河口三角地アリ、今マ試ニ風船ニ乗シテ下視スレハ、印度全地ニ三部分界アルヲ知ルベシ、其第一

部ヲ喜馬拉亞山ニ接スル地方ト爲シ、其第二部ヲ山麓ヨリ南方ナル大河ノ間ニ横ハル一大平地ト爲シ、其第三部ヲ大平野ヨリ南方ニ當リウキンヂーヤ山以南、東西ノ山脉ヲ左右ニ帶ビ、コモリノ岬ニ至ル三角形ノ高原ト爲ス、

第一部喜馬拉亞山地方、喜馬拉亞山ノ名義ヲ釋スルニ、ヒマトハ梵語ノ冬氷、即チ雪塊ノ義ニシテ、ラヤトハ家ト謂フ義ナリト云フ、即チ雪山雪屋ナリト云フ、此山ハ地球上最大ノ山脈ニ非ズト雖モ、其高度ニ至リテハ、世界第一ニシテ、印度ノ北境ニ屹立シ、彎形ヲ爲シ、南方ニ面シテ一千五百英里ノ間ニ蜿蜒セリ、西藏ノツアンア河、亞桑ノアラマアトラ河ハ其東北隅ノ脈路ヲ貫キテ流レ、身毒河ハ其西北ノ方ニ繞リテ南流シ、ブンヤブ洲ニ通ス、喜馬拉亞山ハ、崑崙山ト連リ、甲ハ南ニ横ハリ、乙ハ北ニ連リ、内ニ西藏ノ平地ヲ包括シ、而シテ喜馬拉亞山ハ、印度地方ヨリモ尙遙ニ東西ニ走リ、其長サ凡ソ千七百五十英里ニ亘リ、其南北ノ幅二百

五十里ニ至ル、喜馬拉亞山ハ複嶺ニテ、其南方ノ一系ハ印度ニ枕シ、高サ二万尺アリ、全系中最モ高キ絶頂ハ、二万九千尺ニ達シ、四時氷雪ノ消スル時ナシ、實ニ世界中無二ノ峻嶺ナリ、サトレーシ河、身毒河、ツアンブー河ノ如キ大流、皆源ニ此ニ發セリ、

喜馬拉亞山西北ノ一支ハ、南ニ蟠リテ海邊ニ達ス、セイフド、コー山、スライマン山、ハいら山ハ、最モ其著ルシキモノトス、而シテ其最モ高キモノハ海面ニ拔ク一萬一千尺餘アリ、此山脈中、一二ノ隙アリ、彼ノ身毒河ノ如キハ、此隙中ニ通シテ流ル、モノナリ、其近隣ニカイバル、陝道其南ニクラム、陝道、グラロリ、陝道、ボーラン、陝道等アリ、印度ト亞業加斯坦トノ通路ヲ爲ス、

喜馬拉亞山ハ、印度北方ノ屏障ト爲リ、又南方平地ニ注ク水流ノ源頭トス、夏日ノ間南洋ノ水蒸騰シ、定時風ニ吹蕩セラレテ、北ニ馳セ、喜馬拉亞連山ニ來リ、以テ霖雨ヲ降ス、其雨水ノ夥シキヲ地上無二ニシテ、以テ身

毒河ノ水源ヲ養フ、喜馬拉亞山ノ南坡ハ、此雨水ヲ受ケテ、膏腴ノ田圃ヲ爲スト、雖凡亦洪水ノ爲ニ地面ヲ洗ヒ去ラレ荒蕪ニ至ラシムルヲ免レス、

喜馬拉亞山ノ温度ハ、其上ル一、一千尺毎ニ、華氏寒暖計ニテ三度ト三分一ヲ減ス、今マ人アリ、印度ノ平地ヨリ、此山嶺ニ登ルキハ、草木ノ發生ニ關シテ、熱帶温帶、寒帶ノ三界アルヲ知ルベシ、其平地ニハ、莽叢沼澤多ク野蕃人種、野禽猛獸ノ住所ヲ爲ス、山中ニハ、薇蕨繁茂シ、石楠森林ヲ爲シ、綠竹翠葉ヲ垂レ、松柏、杉、栗、胡桃、楓樹、東西ニ連リ、春ハ新芽ヲ抽キ、秋ハ紅葉ヲ染メ、其樹幹ニハ、莓苔滋生ス、喜馬拉亞山麓ノ住民ハ、大麥、燕麥、稷粟ヲ播植シ、近年蕃薯ヲモ作ルヲ夥シ、山民、鋤犁牛馬ヲ用ユルヲ知ラズ、樹幹ヲ燒キ、丘陵上ニ梯田ヲ作り、墜ツル所ノ樹皮樹葉相重ナリ、樹身或ハ僵レ、或ハ枯レテ蕃薯繁生ス、一二年ヲ經ルニ隨ヒテ、地味枯槁スレハ、更ニ新地ヲ覓メテ耕耘ヲ爲ス、

喜馬拉亞山ノ側、溪谷ノ間、水利ニ富ムノ地ニ米ヲ生ス、山民ハ、山側ニ溝渠ヲ通シテ遠ク水流ヲ引キ、畝畝ニ溉キ、或ハ水車ヲ用ヒテ穀物ヲ磨碎ス、喜馬拉亞山ハ、木材、木炭ヲ出ス、甚タ多ク、馬並ニ騾馬、牛羊ヲ産ス、其牝牛ノ尾ハ、西洋ニ販賣シテ、織物ヲ製スルニ用ユ、山民ノ婦女ハ、農務ニ刻苦シ、松薪ヲ負ヒ、穀類ヲ籠ニ盛リテ遠方ニ運輸ス、羊ハ礪砂ヲ負ヒ、山下ノ市ニ出テ其毛ヲモ賣テ、米鹽ニ換ヘテ歸來ス、山中ノ禽獸ハ、麝香、山羊、熊豹、狐、鷲、雉、竹鷄等ナリ、喜馬拉亞山住民ノ言語ヲ以テ考フレハ、亞利亞人種、チユレン人種、即チ蒙古人種、ノ經界ニテ兩人種相混スルモノ亦少カラズ、印度國中、喜馬拉亞山ヨリ流レ出ル水ヲ以テ灌溉スル部分最モ廣シ、東ハ榜加拉灣ヨリ西ハ阿富汗國境及ヒ亞刺比亞海ニ至ルノ地ニシテ、人口最モ廣ク、地味最モ美ナル處ナリ、古代ヨリ印度ニ入寇セシモノハ、東北、或ハ西北ノ山嶺ヲ踰エ來リ、每次河流ニ隨テ下リ、後ナルモノハ先ナルモノヲ南方ニ逐ヒ自ラ代テ河邊ニ住ス、今マ榜加

拉、亞桑、澳度、ブンジャブ、シンド等ニ住ムモノ凡ソ一億五千人ナリ、
 第二部、平地北印度ノ曠原ニ流ル、大河三派アリ、曰ク身毒河曰クブラマアトラ河曰ク恒河(一名安日河)是レナリ、身毒河ハ、サトレヂ河ト共ニ喜馬拉亞山ヨリ出テ、克什米爾ノ西北ナルイスカルドーノ深峽ヲ貫キ、ブンジャブ州、シンド州ヲ經テ、西南ニ注キテ海ニ入ル、其長サ一千八百英里餘アリ、喜馬拉亞山中ニ流ル、部ハ、凡ソ八百英里、英領中ニ通スル、一千里ナリ、ブラマアトラ河モ亦喜馬拉亞山ノ後ナル西藏ノ山中ヨリ生シ、其水源ハ身毒河サトレヂ河ノ水源ニ近キ地ニアリ、然レモ其流勢ハ、東ニ走リ、喜馬拉亞山ノ東端ヲ貫キ、亞桑ニ入り、ブラマアトラノ名ヲ得、遂ニ榜加拉ノ東部ニ流ル、恒河ハ喜馬拉亞山ノ南側ヨリ落ツル衆水ノ合流スルモノナリ、故ニ印度ノ平原ハ、皆喜馬拉亞連峯ノ雨水ヲ以テ灌溉スルモノト謂フモ可ナリ、此連山ノ上ニ志牟拉アリ、是レ夏日印度政府ノ所在ニテ、即チ身毒河、恒河ノ兩源分水嶺ヲ爲シ、西ナル者ハ流

レテ亞刺比亞海ニ入り、東ナルモノハ、下リテ榜加拉灣ニ注ク、プラマア
 トラ〔河ハ〕ケイラス山中ノ靈湖ヨリ出テ、西藏ニテハ、之ヲツアンブー河
 ト名ク、溪間ヲ東流シ、其首府ナル、ラーサノ南方ヲ過ク、其長サ凡ソ八百
 里アリ、次ニ喜馬拉山東方ノ澗流ト相合シテ英領ニ入り、後之ヲ「ブラ
 マプトラ」〔「プラマ」ノ男ト謂フ義ナリト云フ〕ト稱ス、亞桑ノ地ヲ
 西南ニ流ル、一、大約四百五十里ニシテ、南ニ向ヒ、平地上ヲ過クル、百
 八十里ニテ三角地ニ達シ、恒河ニ合シテ海ニ走ル、プラマプトラハ榜
 加拉ト亞桑トノ間ノ大通路ニシテ、舟楫ノ便利甚ダ多シ、其ノ本流中河
 口ヨリ蒸氣船ヲ以テ湖ルヘキ部八百里ト爲ス、船舸ノ積荷ハ茶、〔其
 價凡ソ百五十万磅〕木材、カウチユク、禾綿、商麻、菜種、煙草、米等ナリ、又
 甲爾加達ヨリ運輸スルモノハ、洋製ノ布匹鹽鑊器ナリ、
 恒河ハ、喜馬拉山ノ麓、高サ一万三千八百尺ノ雪洞中ヨリ起リ、一千五百
 五十里ノ地ヲ貫通シテ、其末支條ニ分派シテ、海ニ入ル、本流ハ北ニ大山

アリ、南ハウキンヂーヤ山ヲ限リ、中央ノ平原ニ連リ、四十万里ノ地ヲ包
 括ス、古今印度全域ノ開化ヲ誘導セシ要路ナリ、恒河ノ濱ハ上流ヨリ下
 流ニ至ルマテ、皆靈地ト稱シテ、土人到處之ヲ尊崇セザルハナシ、殊ニ其
 ノ一支ナル「茹牟那」河ト合流スル亞刺幡拔土ノ一沙角ハ「プラヤダ」ト稱
 シ温都信徒數十万人ノ巡拜シ來リテ靈水ヲ以テ其罪ヲ洗淨スルノ地
 ナリ、中央及ヒ南方ノ河流モ、皆地下ニテ恒河ト交通スルモノト思惟シ
 均シク其聖澤ヲ仰カザルハナシ、故ニ古諺ニ曰ク、恒河ハ、喜馬拉亞
 王「ヒマウア」神及「メナカ」后ノ美女ニテ罪障多キ土地ヲ洗淨スルカ爲ニ
 流ル、者ナリ、ト又ナルハナ河邊ニ棲ム所ノ婆羅門徒ノ言ニ曰ク
 此罪業深キ世界ニテハ、聖徳ナル恒河モ、此汗濁ノ河ヲ退キ去リテ地下
 ヨリ源流ニ還ルベシ、ト恒河ノ口ニ「サガルト」ト稱スル一嶋アリ、年々
 巡拜ノ旅客群集シ、其ノ河流此ニ至リテ、幾支流ニ分レ、榜加拉ノ三角地
 ナ生スルハ土人衆生ノ罪障ヲ洗ヒ盡サンカ爲メナリト稱シ禮拜ヲ行

フモノナリ、恒河ノ源頭ヨリ河口ニ下リ、又源頭ニ還ル六年間ノ旅行ヲ「アラタクシナ」ト稱シ、信徒ノ遠征ヲ企ツルモノ、今日ヨ於テモ尙掛カラズト云フ、要スルコ恒河ハ、本流支流トモコ、印度北方人煙稠密ノ地ニ灌漑シテ田圃ヲ養ヒ、物産ヲ豊ニスルコ千歲竭キ去ルノ期ナク、其仁惠他水ノ比コ非ズ、無比ノ愚民ガ之ヲ尊戴スルモ亦謂レナキコ非ズ、

第三部、南方ノ高原、印度南方ノ地ハ、三邊ノ高原ヲ爲ス、古代之ヲ稱シテ「德干」ト謂フ、即チ南方ノ義ナリ、今ニ此部ニ屬スルモノハ「ウヰンヂヤ」山脈ノ南ヨリ「コモリ」ニ至ル一大地方ニテ、中央州ベラール、麻特、拉薩、孟買、賣索爾、ニザム及ウヰンヂヤ、ホルカル等ノ本土侯伯領ナリ、人口ノ總計大約一億万人アリ、其北東西ノ三邊ニ山脈アリテ、疆界ヲ畫シ、東西ノ兩邊ハ「コモリ」ノ角ノ處ニ至リテ相合ス、北境ノ山脈ハ、群巒相疊ナリ、殆ント東西ニ走ル、之ヲウヰンヂヤ山脈ト名ク、其西端ニ「アブ」靈山アリ、其地ニ「禪那」宗ノ寺院アルヲ以テ其名著ルシ、ラヂア、タナ平原上ニ聳ユ

ルコ、五千六百尺餘ニテ、恰モ海上ノ嶋形ヲ爲ス、サトブラ山モナルバナ河ノ南ニアリテ、東西ニ連リ、ナルバナ河ト「タプナ」河ノ分水嶺ヲ爲シ、ウヰンヂヤ山脈サトブラ山系ノ東端ハ、共ニ印度中央ノ高原ニ至テ盡ク、猶東スレハ、之ニ連ナル「カイムール」山ノ突起スルアリ、榜加拉下部ノ西界ヲ畫シ、正ニ恒河ノ古流域上ニ臨メリ、更ニ東シテ極端ニ「パラスナ」ス山アリ、恒河ノ平地上ニ抜クコ四千四百尺餘ナリ、
「ウヰンヂヤ」連山ハ、高低一ナラズ、一千五百尺ヨリ四千尺ニ至リ、共ニ中央高原ノ北屏ヲ爲シ、昔時ハ、印度南北兩部ノ山澤ノ關門ニテ、全城ヲ統轄スルノ妨ヲ爲セシト雖モ、近來ハ、大道鎮路ノ貫通スルアリテ、其通行亦困難ナラズ、

高原ノ二邊ニアル山ヲ、東山脈、南山脈ト曰フ、此南山脈ハ、ウヰンヂヤ連山ノ東端及西端ヨリ起リ、共ニ南走シテ、印度ノ東西岸ヲ繞ルモノナリ、東山脈ハ、起伏一ナラズ、遂ニ延キテ麻特、拉薩嶺ニ下リ、其麓ト海岸ノ間

コハ、一大平地ヲ生ズ、而シテ西山脈ハ、孟買領ノ海岸ニ臨ミテ屹立シ、山麓ト海岸ノ間、平地甚タ狭シ、連山中ノ一二峯ハ、高ク海表ニ聳ヘテ、高梯ノ形ヲ爲セリ、東山脈ハ平均ノ高サ、千五百尺ナリト雖、西山脈ハ直チニ海邊ヨリ起リ、高サ三千尺乃至四千七百尺ニ達シ、其東山脈ニ合スル南隅ノ處ニテハ、八千尺餘ニ及ブト云フ。

斯ノ如ク、三邊ノ山脈ヲ以テ圍ミタル三角形ノ内地ハ、海上ニ抜クコト一千尺乃至三千尺アリ、而シテ處々ニ峯巒ノ凸起シテ、四千尺ニ至ルアリ、夫ノ有名ナル「コルギリ」ス、青山ノ如キハ、麻特拉薩ノ夏季政府、ウタカマンド所在ニテ、其海上ニ秀ツルヲ七千尺餘ナリ、其南隅ノ「ドマベタ」峯ハ、八千七百尺アリ、西方海岸ノ地ヨリ高原ニ登ルノ峽路幾條アリ、「ポールガート」ハ、孟買府ヨリ、東南四十里コアル險壑ヲ經テ、登ル路ニテ、其高サ二千尺餘ナリ、昔時ハ、此地ヲ以テ、德干ニ入ルノ關門ト稱シ、寡兵ヲ以テ大軍ヲ防クニ足ル、險要ノ地ト爲シタリシカ、英領ニ歸セシヨリ以來、此

嶺上ニ大兵路ヲ開キ、内地ヨリ孟買ノ海關ヲ扼スルニ供セリ、近來此要地ニ鎮道ヲ設ケ、線路ハ、峯巒ノ肩ヲ繞リ、巉巖ノ隧道ヲ貫キ、狹隘ニ沿ヒテ、高原ニ出ツ、一二ノ部ニ於テハ、其彎曲ノ度、急迫ニシテ、車ヲ回スノ頗ル難キ、ガ故ニ、列車ヲ平地ニテ駐メ、方向ヲ轉スル所アリ、孟買ノ東北ト「ールガート」ニモ一線ノ鎮路アリ、其形以上ノ者ト相同シ（以上大島圭介氏ノ印度志ヲ折衷増補ス）

野史氏曰ク、余聞ク、歐洲人士ノ印度ニ遊ブモノ、往ク所トシテ、其土地ノ宏大否沃饒ナルニ驚キ、爽然トシテ自失セザルモノナシト云フ、蓋シ印度ノ地タル、天然ノ富ヲ具ヘ、草香シク泉甘ク、支那ヲ除キテ、世界中ニ其比ヲ觀ザル國ナリ、人民ハ永ク外國ノ奴隸ト爲レリト雖、其國語、文學、宗教、風俗、慣習等ハ、數百年間之ヲ維持シテ變更セズ、斯ノ如キ般富ト、此ノ如キ江山トヲ以テ、獨立スルヲ能ハザルモ、ハハ何ゾヤ、余ノ深ク浩歎スルニ堪ヘザル所ナリ、

第一篇 上世紀

第一章

亞利亞人種ノ侵入

印度ノ開國ハ、今チ距ル^ル、幾^シト五千年以前ニアリ、其草昧ノ時ニ於ケル形勢ハ、他國創世ノ事蹟ト同シク、荒唐怪誕ナル小説ヲ以テ附會スルカ故ニ之ヲ徵スルニ由ナシト雖^モ、正史ハ九百年ニ至リ、回教人ノ著ハセシモノヲ始メト爲ス、^シ悉曇(Sanskrit)トナリテ記シタル古典、古諺、古經、詩賦、又ハ貨幣面ノ古文字、又ハ古代石面及ヒ金屬物ニ彫刻シタル文字等ニ據リテ、之ヲ推考スルニ、其世界中ノ最舊國タリシ^ト疑^ハテ容レザル所ナリ、而シテ今ヨリ三千五百年前ニ於テ、已ニ野蠻ノ陋習ヲ脱シ、寢開化ノ風ニ趨キタリシ^トモ支那及ヒ歐洲ノ史家ノ、皆之ヲ認識スル所ナリ、

上古紀ノ初頭、即チ印度草昧ノ時ニ當リテ、「ハウ、アジャ」^ニ高地ノ亞細

亞^リノ人種^ニ蒙古人及ヒ高加索人^ニカ水草ヲ追ヒテ漸々西來シ彼ノ喜馬拉山ノ西北ノ凹處ヨリシテ北印度ニ入り、有名ナル恒河^ニ一ニ安日^ガ斯^ト稱ス^ニト身^イ毒^ス河^ニ一ニ温^イ都^ス斯^ト稱ス^ニトノ二大河アルヲ見テ、欣喜自ラ勝ヘス、叫テ曰ク^ニ此ノ如キ二大河アルヲ以テ大ニ國ヲ建ルニ足ルベキナリ^ニト是ヨリ一雨毎ニ堤塘ニ芳草ノ殖ヘタルカ如ク、皆此二大河ニ沿ヒテ、散棲シ、遂ニ住居ヲモ開クニ至リタリ、

抑モ「ハウ、アジャ」人ノ印度ニ侵入スルヤ、其國內ニ住居セシ黑人種ヲ驅逐シ、殺戮シ、又ハ之ヲ屬隸ト爲シテ、恒河ト身毒河トノ水涯ニ棲メリ、其中ニテ、恒河ト茹牟^ガ那^ト河トノ相合流セシ處ニ來レル、「アング」^ニマ^カダ^ニヒラハ^ニカ^ツシ^ニユ^サラ^ニ等ノ人種ハ更ニ進ミテ東印度ニ入りタリ、而シテ他邦ノ人種、思ヒ思ヒニ印度ニ侵入カシカバ、亞利亞人種^ニ一ニ之ヲ印度獨逸人種ト云フ、即チ婆羅門人種、白哲西洋人種ノ遠祖ナリ^ニハ合

シテ一團ト成リ結ヒテ一塊ト爲リ、恰モ崩濤巨浪ノ一時ニ來ルカ如ク、身毒河邊ノアーンシヤブニ侵入セリ、此人種ハ、以上ノ諸人種ト異ナリテ、最モ強大ナル勢力ト新鮮ナル文明トヲ以テ侵入セシカバ、内地ノ土人ヲ驅逐スルト同時ニ、之ヲ風化シ、幾モナクシテ印度ノ全地過半ハ亞利亞人ノ占奪スル所ト爲レリ、是レ實ニ温都人種蕃殖ノ基ナリ、蓋シ此時代ハ未タ詳カナラズト雖モ、大約紀元前千四百年ノ頃ニ當レルヲ、疑ナ容レザル所ナリト云フ、

社會發生ノ以前ニアリテハ、無智蒙昧ノ原人ハ、未タ禾穀ヲ耕作スルノ術ヲ知ラス、亦牛羊ヲ牧養スルノ方ヲモ知ラサル事ナレハ、自然ニ成長スル動物及ヒ植物ヲ取リテ食物ト爲シ、生存スルノ外ナク、然ルニ寒帶ノ地ニアリテハ、動物植物ノ成長充分ナラズシテ食物乏シキヲ免レズ、故ニ人民、争ヒテ熱帶地方ニ群至スルヲ、自然ノ勢ニシテ、當時亞利亞人種ノ印度ニ入り早ク社會ノ狀態ヲ成シタル所以ナリ、一然レモ此人

種ノ印度ノ全地ニ蔓延スルニ及ヒテ、其土人ト雜婚ヲ行ヒ、其風俗習慣隨テ混淆シタルカ爲ニ、歲月ヲ經ルニ從ヒ、全ク亞利亞人種ノ氣象精神ヲ失ヒ、一種特殊ノ亞利亞人種ト爲レリ、是レ實ニ印度人種即チ亞利亞人種ガ、他ノ亞利亞種族ノ如ク、進取活潑ノ氣象ナク、文化ノ發達モ亦中途ニシテ沮輟シタル所以ナルカ如シ、而シテ此國民ガ上古ニアリテハ、最高ノ文明ニ達シタルニモ拘ラズ、數千年ノ間、世界ノ劇場ニ當リテ、其伎倆ヲ出スル能ハザリシモ亦之レガ一原因タルベシト云フ、

第二章

印度ノ種族

亞利亞人種、己ニ印度ニ侵入シタルモ、唯タ一村毎ニ聚落ヲ成シ、別ニ國

王ト云フモノモナカリキ、然ルニ、亞利亞種族ノ中ニ於テ、婆羅門種姓（婆羅門ノ稱號及ヒ創唱ノ地、未タ詳ナラズ）最モ智力アリ、勇力アリシト見エテ、此等種族ノ人民ノ上ニ立ナテ、殆ント族長的ノ位置ヲ占メタリキ、

印度ノ種姓族類ノ群分セルコト、今マ盡ク數フルニ違ナシト雖、之ヲ大別スレハ、四姓ニシテ即チ其一チ婆羅門 (Bramins) ト稱シ、（婆羅訶摩、跋濫摩、沒囉憾摩）ト云フ、唯々僅カナル轉訛アリ、然レモ梵ヲ梵摩ト謂ヘハ、婆羅門トハ梵天ト云フ稱ナリ、天神即チ婆羅門ノ口ヨリ生レタル種族ト爲ス、而シテ諸姓ノ中ニアリテ、最モ其清貴ナル所以ノモノハ、始メテ世界ヲ創造セル梵天王ノ子、梵天ノ苗裔ニテ、世々其稱ヲ襲ヒ來ルニ由ル、（義淨三藏ガ寄歸内法傳ニ、五天之地、皆以婆羅門爲貴勝、凡有座席、並不與餘三姓同行、自外雜類故宜遠矣）トアリ、刹利ノ如キハ、王族ナルニモ拘ラス、同席同行セスト云ヘルヲ以テスルモ、婆羅門ヲ以テ、最モ清貴

優等ト爲スヲ知ラレタリ（又其稱ヲ雅トシテ國號ニモ付シタル所以ノモノハ、梵天ノ梵ト同語ナルカ故ナリト云フ、）大般若經ノ音義ニハ、婆羅門梵語、即梵天名也、唐云淨行、或云梵行、此類人自云、我本始祖從梵天口生、便取梵名爲姓、世々相傳、學四圍陀論、皆博識多才、明閑衆論、多爲王者師傅、高道不仕、或求仙養壽、時有證五通仙者也、ト云ヒ、又金光明最勝王經音義ニハ、世業相傳、學四圍陀論、皆博學多智、守志貞白、文儒雅操、高道不仕、其中聰俊穎達者、多爲王者師、受封邑而自居、最爲上等也、ト見エタリ、（婆羅門、四韋陀ヲ研究ス、一ニ曰ク壽、養生、繕性、醫方ノ諸事是レナリ、二ニ曰ク祠、享祭、祈禱、事火、懺悔是レナリ、三ニ曰ク禮義、占卜、兵法、軍陣是レナリ、四ニ曰ク術、異能、伎數、禁呪、符印是レナリ、而シテ國民ニ、道義ノ模範ヲ指示シ、又祭師ト爲リテ、天神ニ隨侍ス、印度人之ヲ尊崇シテ、神僧ト爲ス、）

其二ナ刹利 (Kshatriyas) ト稱シ、天神ノ隣ヨリ生シタル種族ト爲ス、其族

ニ兩種アリ、一チ「ダクサ」ト云ヒ、日種ノ先祖ナリト云フ（一チ「アリトリ」ト云フ、月種ノ先祖ナリト云フ）此兩族ハ印度ノ政治及ヒ兵事ヲ掌握ス、一其三チ吠舍（Vaishyas）ト稱シ、天神ノ脇ヨリ生シタル種族ト爲ス、印度ノ商業及ヒ農業等ニ從事シ、兼テ醫師、訟師、銀行等ノ事業ヲ擔當ス、一其四チ首陀羅（Sudras）ト稱シ、天神ノ脚ヨリ生シタル種族ト爲ス、専ラ牧畜耕作及雇工ヲ業トス、——此四種姓ノ外ニ尙ホ數族アリ、其中「パリス（Parths）」チ以テ最モ卑賤ノ族ト爲シ、鞋工皮匠等チ以テ業トス、人之チ稱ン旃陀羅ト爲ス、此種族ハ印度ニアリテ、殆ント人類ノ中ニ齒セラレズ故ニ教育ヲ受クルヲスラモ、亦之ヲ禁止セリ、——要スルニ以上四種姓ノ中ニ在リテ、婆羅門ハ獨リ、其尊榮ヲ極メ、且ツ勢力アリシナリ、長阿含四姓經ニ婆羅門稱ノ常套語ヲ擧ゲタルニ——我カ婆羅門種ハ、種モ第一タリ、餘ハ皆卑劣ナリ、我カ種ハ清白ニシテ、餘ハ皆黒冥ナリ、我カ婆羅門種ハ梵天ヨリ出テ、楚口ヨリ生マル——ト云ヒシトゾ、

上古印度ノ社會ニ、此ノ如ク階級ヲ設ケテ以テ、人民ノ權利ヲ制限シタルヲ、埃及ニ於ケルト異ナラズ、蓋シ印度ニ於テ、婆羅門教義チ以テ、斯ル階級法ヲ立テタルモノハ想フニ全ク亞利亞人種ガ土人ト混交センヲ恐レテ之ヲ制根セント欲シタルニ原由スルモノ、如シ、是レ印度語ノ Varana 即チ階級ト云ヘル文字ハ、色ノ字義ヲ含ムト又ハ他ノ階級ト婚姻ヲ結ブノ禁令ノ階級規則條項中ニ重要ノ位置ヲ占ムルヲ見テ之ヲ知ルベキナリ、併シナガラ、其國民ハ、終ニ其目的ヲ達スルヲ能ハスシテ却テ之ヲシテ徒ニ文化發達ノ妨害ト爲ラシメタリキ、

第三章

日種月種ノ朝

相傳フ、上古亞利亞人種ノ中ニ二王種アリテ其國ヲ分治セリ、其一ナリ日種ト稱シ、其一ナリ月種ト稱ス、日種ノ始祖ナダクサト云ヒ、月種ノ始祖ナアトリト云フ並ニ本ト梵天王ヨリ出ツ、

日種ノ第一王ナイク尸婆克ト稱シ、其都府ハ、沽蹉邏ノ阿歐度耶城ナリ其孫カクッタ之レニ嗣キテ立テ數十世ヲ經テ羅摩大王ニ至ル、月種ノ第一王ナブルラエスト稱シ、茹牟那河ト恒河ト二水ノ合流スル所ニ今ノ亞刺幡拔土ニ其首府ヲ定ム、之ヲ布羅底尸他那ト名ク、其家子アユス之ニ嗣キ、二子ヲ生ム、長ナ那扶沙ト云ヒ、次ナ刹帝利部底陀ト云フ長子王位ニ登リ、次子ハベナレスノ地ニ一國ヲ立ツ、那扶沙ノ嗣耶也底父ノ位ヲ繼ギ、五子ヲ生ム、末子布爾嗣キ立テ、其他ノ四兄ハ、各總督ト爲リテ政ヲ掌ル、布爾ノ子孫ニ婆羅多ト稱スル王アリ、勇武ニシテ大ニ

其版圖ヲ擴張セシカハ、國人印度ヲ稱シテ、婆羅多氏之國ト稱スルニ至レリ、其後布爾王ノ苗裔ニハステト稱スルモノアリ、其首府ヲ北ニ移シ、之ヲ幡斯底那布爾ト名ク、即チ婆羅摩爾多ニアリ、此王ノ子孫ニ克爾王出ツ、

古傳ニ據レハ、那扶沙ノ第三子、度爾耶ノ子孫ニガンダルト稱スルモノアリ、干達爾爾ノ地ヲ領シタリト云フ、又那扶沙ノ第四子、亞督ノ末裔ハ、婆羅爾ノ地ヨリ、沽棲曼提爾ノ海岸マテ其領地ヲ擴張シタリト云フ、西曆紀元前大約一千年ノ頃ニ於テ、最モ廣大ナリシハ、日種ノ人ニシテ、其首府阿歐度耶ニ難勝城ニハ實ニ其名ノ如ク光威赫々トシテ遠近ヲ震耀セリ、當時之ト鑣ヲ並ベテ雄ヲ爭ヒシモノハ、干牙克布牙ニ迦奴侍ニ城邑ナリキ、

第四章

羅摩ノ親征

紀元前大約二千年ノ頃ニ當リテ、羅摩ト稱スルモノアリ、自ラ親征ノ勞ヲ執リ、南方ニ侵入シテ、其版圖ヲ擴張シ、威名ヲ輝カセリ、——羅摩ハ日種ノ王ナリ、彌底羅國王ノ女西多ヲ娶レリ、相傳フ羅摩、父ノ爲ニ逐ハレ、久シク南方ニ住セシガ、其妃西多之ニ從ヒ、一日二人相伴ヒテ逍遙セル時ニ、蘭迦國——錫蘭——王拉巴那、西多ヲ奪ヒ去ル、拉巴那ハ一身十頭ニシテ、軀幹偉大勇方アリシト云ヘ、是レ假リニ現ハセルニテ、其本形ニ非ズ、羅摩大ニ怒リ、其讎ヲ復セント欲シ、大軍ヲ起シテ、拉巴那ヲ追ヒ、德干ニ進入セシガ、居民ハ皆是レ野蠻人ニシテ、常ニ山中ニ居リ、樹林ニ住ムカ故ニ、之ヲ稱シテ猿猴或ハ羅刹ト呼ブ、羅摩、此等ノ居民ヲ先導ト爲シ、其名ヲ須俱利婆又ハ幡奴曼ト云フ、遂ニ蘭迦ニ至リ、大ニ敵軍ヲ破リ、拉巴那ヲ誅シ、其弟毘比西那ヲ立テ、王ト爲シ、妃西多ヲ救ヒ本國阿

印度古傳記妄誕
修飾誇大不足信
焉者居多

歐度耶ニ凱旋セリ、是ニ於リ南北ノ通路始メテ開ケ、羅摩大王ノ威名四隣ニ震ヒ、遠近心ヲ歸ス、是時ヨリ亞利亞人、中天竺ヨリ南天竺ニ移リ、大ニ其文化ヲ彼地ニ及ボセリ、
羅摩ノ勝利等ニ付キテハ、妄誕修飾ノ事甚タ多ク取ルニ足ラザルモノアリト雖、其南征ノ事實ハ疑フベキニ非ザルカ如シ、其後ノ詩人婆爾彌其ナルモノ、大王ノ功業ヲ稱讚シテ、羅摩耶那ト名ク、又當時王宮ノ形狀ヲ記シテ曰ク、——王宮ノ前門ハ穹形ニシテ上ニ種々ノ旌旗ヲ立ツ、其旗旖旎ト風ニ從テ靡ク、其門扉ハ銀鉸ニ由テ開閉ス、扉面ニ彫刻アリ、華麗ヲ盡シ、奇巧ヲ極ム、——ト而シテ王宮ニ七廷アリ、七大臣アリテ、國政ヲ實施セリ、此等ノ言ニ由レハ、當時ノ文運武功、一時ニ輝キシモノノ推想セラル、ニ足ルガ如クナリト雖、其事實ハ太々文飾ニ過クルカ如シ、
獅殿曰、所謂爲叢殿、爲淵殿、魚者、

第五章

日種月種ノ戰爭

羅摩大王、其基業ヲ太子克沙ニ傳フ、爾後子孫世襲シテ六十代ニ至ル、
(阿歐度耶ノ名、已ニ衰フ、或ハ言フ、後王已ニ其都ヲ迦奴侍ニ遷セシ)然ル
(ナラント、蓋シ然ラノ、其後ニ至リテ遂ニ雪山ニ入りシト思ハル)
 ニ是時月種ノ朝ハ、國力益々強大ト爲リ、其威勢莫ニ日種王ノ右ニ出ツ、
 紀元前大約三百年ノ頃、日種ノ王ニ瑜提西底羅ナルモノアリ、兄弟四人
 之ヲ般陀婆稱トス、皆勇敢ニ武シテアリ、俱ニ皆雪山ノ森林ニアリテ、隱
 遯行者ニ養育セラレシカ、長スルニ及ヒテ中原ニ下リ其都ヲ因陀羅布
 列西多レシマニ因陀羅トハ、天主ナリニ建テ月種王ノ都幡斯底那布爾
 ニ近シ、其ニ特里ノ地ニアリ、其都宏壯華麗、月種ノ都ニ過ク月種王克爾
 之ト威ト争ヒ終ニ特里ノ野ニ戰ヒ、其雌雄ヲ決スルニ至レリ、此戰爭ノ
 起ルヤ、四隣ノ國王、大小ニ論ナク、各々兵馬ヲ率ヰテ、中原ニ入り、或ハ日
 種ヲ助ケテ、月種ヲ擊テ、或ハ月種ヲ援ケテ日種ニ抗シ、其中、南天竺ヨリ

來レルモノアリ、印度河ノ西方ヨリ來レルモノアリ、又希臘人耶婆那ヤマ
 ルモノ來リテ之ニ會セリト云フ、其餘ハ皆是レ北中天竺ノ王侯ニシテ
 就中摩竭陀マガダ(Magadha)國王ノ如キハ最モ強大ナリキ、當時摩竭陀王ハ許
 多ノ屬國ヲ有セリト云フ、

此戰爭ニ於テ、月種王ハ、終ニ敗衄シテ、日種王、瑜提西底羅ノ爲ニ、其土地
 ナ併呑セラレ、日種王特里ノ王ト爲ル、是戰ハ印度古來未曾有ニシテ、其
 殺傷算ヲ知ラズト云フ、是レヨリ日種王ノ相繼クテ六十九代ニ或ハ
 二十九代ニ云フニナリ、此間ニ日種月種ノ區別、全ク其跡ヲ絶セリ、
 此戰爭ノ起リシ頃ニハ印度ハ、稍々文明ノ城ニ躋リシガ、此役ノ爲ニ、教
 化陵夷シ、風俗敗頹セリ、彼ノ婆羅門ノ徒ノ如キハ、此時代ヲ以テ「邪惡之
 世」ト稱シタリ、但シ此變亂アリシカ爲ニ、四姓ノ區別漸ク廢セラレ、藩閥
 ハ、風習稍々其跡ヲ滅スルニ至レリト云フ、

爾巖曰、若藥不眠眩、厥疾不瘳、

第六章

言語及風俗

〔言語〕印度人ハ、上古ヨリ梵語ヲ用ヒズシテ、多クハ他彌爾語ヲ用ヒタリ、今、マ其語体ヲ考察スルニ、大ニ韃靼種ノ語体中、土羅尼衍トロンニモン又ハ嘶底安語シチアンニ類スト云フ、左レハ土耳其語ニ似タルモノナルベシ、南天竺ノ如キ、ハ獨リ、他彌爾語ノミナラズ、其外ニモ尙ホ五六種ノ言語アリテ、並ニ行ハレタリ之ヲ總稱シテ度羅毘提安語ト曰フ、

梵語ハ、亞利亞人種ノ製シタル文字ニシテ、其文法造句、典雅、精微實ニ世界稀有ノ語ナリ、其言辞ハ、希臘、羅馬、獨逸、日耳曼等ノ語ト其本相同シク其造句文法、亦大ニ似タル所アリト云フ、印度人ハ、梵語ヲ悉曇(Sanskrit)ト稱ス、文雅ノ意義ナリ、相傳フ、此文字ハ梵天王ノ製シタルモノコシテ四十七言アリト、——或ハ云フ、梵天ノ古語ハ、三十五字コテ、其本ハ十四字ナルベシト、又佛滅後五百年ニ迦膩色カニシカ迦王ノ頃ニ當リテ、沒伽尼ボツガニト稱

スル哲家、聲明論及十八章等ヲモ撰ビタリ、

亞利亞人種、印度ノ全國ニ充滿スルニ及ヒテ數多ノ方言ニ分レ、其最モ大ナルモノハ、摩竭陀語マカダ、波利語バリ、布羅克利多語ブラクリタ、阿羅陀摩伽提迦等アラダマカチカコシテ婆羅爾知ト稱スル古昔ノ學者ノ著ハセル文法ニ詳カナリト云フ、但シ此等方言ノ異ナル所ハ、多ク語尾ノ變化文字ノ轉置等ニアリトス、近世紀ニ及ヒテ言語亦大ニ駁雜セリ、

風俗)上古印度ノ風俗氣象、錯綜一ナラズ、然レモ一般ノ人民ニ於テハ、質素淳朴ノ氣風ナリシト知ラル、——其中婆羅門ノ俗ハ、寂靜ヲ好ミ、家ヲ捨テ山林ニ入リテ道ヲ學ブモノ多カリキ、(名義集ニ、普門ノ疏ニ云ク、刳初種族アリ、山野ニ自ラ閑ニス、故ニ人、淨行ヲ以テ之ヲ稱ストアリ、)

食料ハ、婆羅門ノ徒、肉類ヲ食セス、又胡蘿蔔、蕪菁、並ニ葱蒜等ヲ用ヒス、然レモ其他ノ種族ハ、食物ニ制限ナク、牛肉、鳥肉ヲ除クノ外ハ、各種ノ肉ヲ食ス、但シ回教ノ徒ハ、猪肉ヲ以テ不淨ト爲シテ之ヲ嫌忌セリ、又喫飯ノ

時ニハ男女交坐雜食セザルヲ法ト爲ス、
 衣服ハ、印度ノ國俗、上古ヨリ裁縫ヲ經タル衣裳ヲ着セス、其後ナ回教徒
 ニ征服セラレシヨリ、其風俗漸ク弛ミ、近世紀ニ及ヒテハ、男子多ク裁縫
 セル裡衣ヲ以テ、上服ト爲シ、其下ニ腰衣ヲ着ス、回教人ノ如ク、緊密ノ内
 褲ヲ着シテ、其上ニ外褲ヲ加フルモノ多シ、唯釵面ノ位置ヲ以テ、彼此ヲ
 別ツノミ、(上古ノ服飾ハ、多ク裁製セザルモノヲ着シタリト見エテ、佛書
 ニモ)外道服飾紛、雜異製、或衣孔雀羽尾、或飾鬪體瓔珞、或無服露形、或草板
 掩体、或拔髮斷髻、或蓬髮椎髻、裳無定、赤白不恒トアリ、
 婦女ノ服裝ハ、三丈ヨリ六丈餘マテノ廣濶ナル綿布、或ハ絹帛一段ヲ用
 ヒテ、其一分ヲ腰ニ繞ラシ、之ヲ足マテ垂レシメ、裳或ハ裙ト爲シ、其餘ヲ
 身ニ纏ヒ、之ヲシテ頭上ヲ過キ、右ノ方ニ下リテ後ニ垂レシム、其外許多
 ノ婦人ハ、緊密ナル胸當ヲ着ケ、服飾凡テ質素ニシテ、清艶嫺雅ナルモノ
 多シト云フ、

第七章

婆羅門教

婆羅門教ヲ創建シタル人名及ヒ創唱ノ地方未ダ詳ナラズ、一説ニ據レ
 ハ北印度ニハバラマバルタニ迦伽爾及ヒ素爾座兩河ノ中間ニアリ、
 ト名クル勝地アリ、世人之ヲ梵天王ノ居處ニ稱ス、婆羅門教ノ創唱、
 蓋シ此地ヨリスト云フ、

婆羅門教ハ、多神教ナリシモ一變シテ萬有神教ト爲ル、其説ニ曰ク、
 神ハ宇宙ノ精神ナリ、神ハ即チ宇宙ナリ、神ハ世界ノ歸スル所ナリ、神ハ
 世界ノ由テ以テ出ル所ナリ、神ハ万物ヲ包有スルモノニシテ、万物ハ神
 ノ由テ以テ現ハル、所ナリ、萬物ヲ離レテ神ノ存スルコトナク、万物ハ皆
 神ナリ、ト又曰ク、神ニ三種アリ、一ハ宇宙ノ創造主ニシテ、一ハ
 宇宙ノ破壊者ナリ、而シテ其一ハ宇宙ノ中保者ナリ、而シテ其天地ノ
 神ハ地天、水天、火天、風天、大梵天、伊邪那天、帝釋天、毘沙門天、羅刹天、日天、月

天、焰摩天是レナリ、又其特ニ尊崇スル所ハ、婆羅摩^ヒ、毘^シ、尸^ヌ、奴^ス、嘶^ス、婆^スノ三神ナリトス、——印度古傳ノ大旨ロハ、大虚空ニ大梵天トモ、梵自在天トモ、大自在天トモ稱スル無始無終ノ天界アリテ、其界ニ大梵王トモ、那羅延^ナ、天トモ、摩醯首羅^マトモ稱スル大主宰ノ天神アリテ、是レモ亦無始無終ノ神ナルガ、無ヨリ有チ出シテ此世界ヲ創造シ、人類万物ヲモ化成セルカ故ニ世間衆生ノ祖神ナリト云ヘリ、——提婆論^{テイ}ニ「摩醯首羅論師說、梵王那羅延、摩醯首羅、一體三分、所有一切命、非命物、皆從自在天生、從自在天滅、自在尺身者、虚空是頭、日月是眼、地是身、河海是尿、山丘是糞、火是熱、風是命、一切衆生、是身內蟲、自在天常生一切物云々」ト見エタリ、是レ寓言タルニ過キザルガ如クナリト雖^レ、其實ハ宗教創建ノ本、却テ此等ノ處ニアリ、一、婆羅門教ニ於テ、造物ノ等差ヲ定ムルニ、八階ノ順序アリ、第一ニ植物、第二ニ動物、第三ニ動物中ノ人類、第四ニ人類中ノ僧侶、第五ニ僧侶中ノ學術ニ通曉セルモノ、第六ニ學術ニ通曉スルモノ、中ニテ、高尚ナル哲學ニ

達スルモノ、第七ニ智識德行兼備ノモノ、第八ニ經典及ヒ他學ニ達シ、生前死後ノ盛福ヲ受クベキモノ、——此八種ノ等差中、僧侶ハ最モ高等ノ地位ヲ占ムルヲ以テ、其責任モ亦重シ、一般ノ僧侶ハ、祭祀ニ從事スルヲ以テ本務ト爲シ、中等ノ僧侶ハ、普通ノ學術ヲ兼修セリ、高等ノ僧侶ハ、人民ノ爲ニ、德義ノ模範ヲ示シ、最上優等ノ僧侶ハ、祭祀教誨ノ外ニ、學術及ヒ技藝ニ通シ、兼テテ神學哲學其他ノ學術ヲ研究シ、最モ其底蘊ヲ極ム、一、

婆羅門教ノ僧徒ハ、世間ノ煩累ヲ避ケンカ爲ニ、或ハ樹下ニ、或ハ石上ニ、其居ヲ占メ、衲衣ノ如キハ固ヨリ兪惡濫褻ヲ着ケ、枯草ナドヲ纏フモノアリ、飲食ハ、多ク一日ニ一餐——遁世ノ僧徒ハ、肉類及ヒ葱韭、蒜齒類ヲ食セス——或ハ穀類ヲ斷テ、草根木實ヲ食スルモノアリ、又苦行ノ景况ハ、苦因ヲ以テ樂果ヲ惹キ起スベキ教規ニ本キ、艱難ヲ辭セズ、軀命ヲ惜マズ、或ハ烈火ヲ蹈ミ、或ハ荆棘ニ坐シ、刀ヲ以テ肉ヲ割キ、針ヲ以テ膚ヲ

刺スカ如キ、皆遁世苦行ノ務ナリト爲セリ、
 倭改ノ法ハ、犠牲ニ供スルニ非ズシテ、若シ有命ノモノヲ害シ、又無益ニ
 樹木ヲ伐採シ、漫ニ路傍ノ青草ヲ蹂躪スルトハ、河ニ臨ミテ、身垢ヲ洗除
 シ、韋陀ノ頌文ヲ諷誦スルヲ常ト爲ス、其他ノ過誤ニ於テモ亦多ク此倭
 改法ヲ用ユ、——讀經ノ方規ハ、清潔ノ地ヲ撰ヒテ、北面シ、讀經ノ前後ニ
 於テ、「オーム」ト稱スルヲ以テ方規ト爲ス、——「オーム」トハ、一説ニ據レハ
 婆羅門ノ神德ヲ表示セル尊號ナリト、

婆羅門教ハ、人魂游轉ノ説ヲ信ズ、其説ニ曰ク、——人ノ魂魄ハ、過去、現在
 未來ノ三世ニ流轉シテ、罪障ノ消滅ニ從事スルモノナリ、人ノ現世ニ生
 レタル所以ノモノハ、其過去ノ世ニ行ヒタル罪業ヲ消滅センカ爲メニ
 シテ畢竟スルニ、前世ニ惡業ヲ行ヒタル罪ニ由テ、此世ニ生活セザルベ
 カラザルモノト爲レリ、故ニ人ハ、常ニ讀經、捨財、捨身等ヲ行ヒ、其身ノ罪
 過ヲ消滅セシムルヲニ從事シ、來世ニ於テ、劣等ノ禽獸ト爲リテ、此世ニ

出ルヲ免ルベシ——ト、此説ハ是レ埃及ナドニ行ハレタル教ト毫モ
 異ナルコトナシ、

摩訶ノ經典——教法及ヒ政法ノ律例ヲ掲載セシ古書ナリ、摩訶ハ纂述
 者ノ稱號ニシテ、紀元前千年内外ノ聖人ナリ、後段ニ詳ナリ、——婆羅門
 教ノ三誠及十誠其他ノ諸誠アリ——其五誠ニ曰ク、第一輕神、第二蕪僧、
 第三誇心、第四不快、第五不實、——又其十誠ニ曰ク、第一輕神、第二悖反、第
 三慳吝、第四讒誣、第五輕薄、第六鄙倍、第七詐僞、第八毀休、第九放恣、第十剽
 盜、是レナリ、

婆羅門教傳播ノ地方ハ、重ニ印度諸邦——五印度ノ地ハ、他教ナキニ非
 サレ、概テ蔓衍セリ——ニシテ、紀元前第六世紀ノ頃マデハ、其勢威、最
 モ強大ニシテ、全國ノ人民、之ニ風靡セリト云フ、

野史氏曰ク、社會發達ノ際ニ於テ、鬼神敬信ノ念ハ、由テ以テ人種ヲ團
 結スルニ於テ、最モ其効力アルヲ見ル、婆羅門教ノ上古印度ノ秩序ナ

保持シタルカ如キ是レナリ、印度ノ地タル天地ノ現象、驚クベク怪ムヘキモノ甚タ多シ、人民ノ惑溺殊ニ深キヲ、勿論ナリ、婆羅門ハ人智ヲ束縛シ、民權ヲ制限シタル弊アリト雖、神學ニ於テモ、哲學ニ於テモ其功多シ而テ其哲學ハ後人ノ注目ヲ要スヘキモノ亦尠ナシト爲サズ、今日ノ宗教家請フ精細ニ之ヲ講究セヨ、

獅巖曰所過者化、所存者神、婆羅門教祖有在焉、
龍潭曰關尹子云無一物非命、無一物非神、無一物非玄、此語與婆羅門主旨、亦暗合矣、

第八章

印度哲學（釋迦以前ノ哲學）

婆羅門教ノ盛時ニ際シテ、其教徒及學士ハ神學哲學ヲ研究シ、互ニ競爭勃起シテ、真理ノ機軸ヲ出シ、新說異論最モ夥シ、分レテ九十五種ト爲レリト云フ、其主義ノ要領學派ノ異同ニ至リテハ、史家ノ注意ヲ惹クモノ亦尠カラズ、故ニ簡單ニ之ヲ畧述スベシ、

印度ニ於テ、純正哲學ノ始メテ創起シタルハ、地、水、火、風、空ノ一ヲ執テ以テ宇宙ノ原因及ヒ歸處ト爲シタル、五種ノ哲學ナリトス、——其一ヲ地論師哲學ト爲シ、地ヲ以テ萬有ノ原因ナリト説ク、其二ヲ水論師哲學ト爲シ、水ヲ以テ萬有ノ原因トナリト説ク、其三ヲ火論師哲學ト爲シ、火ヲ以テ萬物ノ原因ナリト説ク、其四ヲ風仙論師哲學ト爲シ、風ヲ以テ萬物ノ原因ナリト説ク、其五ヲ口力論師哲學ト爲シ、虚空ヲ以テ萬有ノ原因ナリト説ク、——此說一轉シテ無因論師哲學ト爲ル、無因論師ハ、自然

無因ヲ以テ万有ノ原因ナリト説クモノナリ、
 之ニ繼テ起ル所ノ哲學ハ、蓋方論師——方トハ上下四方ヲ云フ——時
 論師——時トハ古往今來ヲ云フ——ニシテ、方論師ハ、諸方ヲ以テ主ト
 爲シ時論師ハ時ヲ以テ主ト爲ス、此兩論師ニ繼テ起リタル者ハ、聲論師
 ニシテ、聲ヲ以テ常住不變ノ法ト爲ス、——此聲論師哲學中ニ、二種アリ
 其一ヲ聲顯論師ト爲シ、体性ヲ以テ常住不變ナリト主張シ、其二ヲ聲生
 論師ト爲シ、聲ノ体ヲ以テ有始無終ナリト主張ス、——聲論師ニ反對シ
 テ起リタルモノハ、非聲論師ナリ、其說聲体ヲ撥無シ、無相離言ヲ以テ宗
 極ト爲ス、

以上ノ哲家ハ、皆客觀的ノ物体若クハ性質ヲ執テ、哲學ノ本源ヲ尋テシ
 モ、非聲論師哲學ニ至テ全ク其本領ヲ失シタリ、之ニ繼テ起ル所ノ哲學
 ハ、始メテ主觀的ノ問題ニ進ミ、思辨ノ研究ヲ爲スニ至ル、印度ノ哲學、是
 ニ至テ一段ノ歩武ヲ進メタルモノト云フベシ、

其一ヲ識論師哲學ト爲ス、其說意識ヲ以テ我ト爲シ、天地萬物ノ原因ト
 爲セリ、——其二ヲ阿頼耶論師哲學ト爲シ、阿頼耶——阿頼耶ハ梵語ノ
 室ト云ヘル義ニシテ執持含藏ノ意ヲ表ス——ヲ以テ天地萬物ヲ含藏
 スルモノト爲ス、——其三ヲ知者論師哲學ト爲シ、其四ヲ見者論師哲學
 ト爲ス、其五識五根ニ依テシテ、能ク色聲香味觸ノ五塵ヲ緣スルニ、身中
 知アリ、能ク苦樂ヲ知ルト云フハ、是レ知者論師ノ說ニシテ、眼識眼根ニ依
 テシテ、色塵ヲ緣シ、色塵ハ一切ヲ包含スルカ故ニ、能見者ハ即チ眞我ナ
 リト云フハ見者論師ノ說ナリ、——其五ヲ內知論師哲學ト爲シ、內知ヲ
 以テ我ト爲ス、——其六ヲ外知論師哲學ト爲シ、外知ヲ以テ我ト爲ス、——
 其七ヲ能執論師哲學ト爲シ、其說識心ヲ離レテ別ニ能執者アリ、即チ
 是レ眞我ニシテ、能ク身口意ヲ運動シ、諸事業ヲ爲スト云フ、——其八ヲ
 所執論師哲學ト爲シ、唯タ是レ識心ノミ、其所執ノ境界ヲ眞我ト名ケ、此
 我ハ、一切處ニ遍滿セリト云フ、——其九ヲ摩訶婆論師哲學ト爲シ、

摩納婆ハ梵語ニシテ勝我ト譯ス——其說我ハ身心ノ中ニ於テ最モ勝妙ナリト爲ス——其十ヲ常定生論師哲學ト爲シ其說我ハ是レ常住ニシテ破壞スベカラズト爲ス——其十一ヲ補特伽羅論師哲學ト爲ス補特伽羅ハ梵語ニシテ數取趣ト譯ス數取趣トハ煩ニ業ヲ迷リテ諸趣ニ流轉スルノ義ニシテ或ハ之ヲ譯ソ人ト云フ數々諸趣ニ流轉スト雖モ一我ノ体常住不變ニシテ事ニ隨テ名ヲ異ニスルノミナリト主張ス——其十二ヲ瑜伽我論師哲學ト爲ス瑜伽トハ梵語ニテ佛家之ヲ内心相應ノ理ト譯ス其主旨ハ眞性湛然トシテ能ク因果ヲ離レタル瑜伽成就ノ一理ヲ以テ其宗極ト爲ス之ニ繼テ起ル所ノ哲學ハ印度哲學ノ精粹ニシテ議論幽遠大ニ見ルニ足ルベキモノアリ——

第一ハ數論師哲學ニシテ「サンキヤ」又ハ僧法ト稱セラルモノ是レナリ——其始祖ヲ迦毘羅ト云フ——輔行記ニ迦毘羅此云黃頭頭面俱如金色トアリ——僧法トハ譯ノ制數論ト爲シ數ヨリ論ヲ起シ論能ク數

ヲ生ス一切ノ法ヲ明カニスルニ二十五諦ヲ出テズ一切ノ法二十五諦ノ中ニ攝入ス即チ金七十論アリ此論ハ諸法ヲ總合シテ一切法ハ一体ナリト執ス其論ノ詳細ハ本著ノ掲載スベキ所ニ非ズ其概要ハ金七十論ニ就キテ之ヲ見ルベシ純然タル「イデーリスム」主義ナリ

（說經十萬偈アリ名ケテ僧法論ト云フ今マ其綱要ヲ序センニ一ニハ神我能ク諸法ヲ生ス常住ニシテ不變ナリ是レ廿五諦ノ主ナリ故ニ名ケテ主諦ト爲ス若シ我此身ニ依レハ作用アリ若シ我ノ依ルナケレハ作ス可能ハズ五大ノ聚ヲ身ト名ク此身ハ自爲ニ非ス必ス他ノ爲ニス他トハ即チ是レ我ナリ譬ヘハ牀席等ノ聚集ハ自用ノ爲ニスルニ非ス必ス皆人ノ爲ニ設クルガ如シ）三ニハ自性或ハ勝因ト名ク或ハ名ケテ梵ト爲ス此本有ナルガ故ニ從生スル所ナク三德アルナリ三德トハ一ニ樂二ニ苦三ニ痴ナリ次ニ自性先ッ覺チ生ス覺ヨリ次ニ我慢次ニ我慢リ五唯チ生ス次ニ五唯ヨリ五大ヲ生ス次ニ五作根次ニ心根迦毘此二十五諦ノ理ヲ究メテ以テ解脱ヲ得ルモノト爲ス而シテ總端ニ羅ト云フシヨノ從空而時自然四德一法二慧三離欲四自在總四爲昔有仙人名迦毘羅出テタル時自然四德一法二慧三離欲四自在總四爲身見此世間沈沒盲闇起大悲心唯我生死在盲闇中遍觀世間一婆羅門姓阿修利千年一嗣天而伽毘羅在虛空中不現其身語曰汝觀世間法耶盲竟即去滿千年已而復來重說上言阿修利答曰戲仙人聞已復去其後復更來又說上言答之亦如是仙人語曰汝能修道不阿修利言能修其從人即爲說三苦言一內苦風熱淡等從下是爲風熱從上至心名熱處從心已上名爲淡處有時風大增長逼狹熱則起風病熱痰亦爾如是名自

苦、八分、醫方、能治、身苦、心苦者、愛別離、怨憎會、集、所求不得、分別此三者、則生心苦、二外苦、謂世人、禽獸、蛇山、崩岸、折等、三天苦、謂寒熱風雷電等、時阿修利、即便信捨、家法、修出家行、因說二十五諦、度脫為云云、トアリ、苑、經、不經ノ談ニ涉レ、當時迦毘羅時代ノ狀態亦推想スルニ足レリ、

第二ハ、勝論師哲學ト為ス、ベイヤセシガ哲學又ハ吠世史迦等ト稱セラル、モノ是レナリ、——其始祖ヲ憂樓佉(即ナ衛世師)ト云フ、——輔行記ハ憂樓佉、此云休留仙、其人晝藏山谷、以造經書、夜則游行說法教化、猶如彼鳥、故得此名、亦名眼足、其在佛前八百年、出世亦得五通、說論十萬偈、名衛世師、ト云ヒ、因明論疏ニハ、成劫之末有外道名嗚路迦(舊云優樓迦訛也)、此云鴟鷂、身形醜陋、晝則隱伏山林、夜則來人間乞食、因驚他產婦、令墜胎、便不乞食、乃於確礮、擣春塲糖中、拾取碎米而食之、因此亦號蹇擊僕、此云食米齊仙人、造論名吠世師、迦奢薩恒羅トアリ、——衛世師、万有ヲ大分シテ六種ト為ス、——第一、實梵ニ陀羅標ト云フ、——万有ノ實体本質ナリ、第二、德梵ニ求那ト云フ、——萬有ノ性能現象ナリ、第三、業梵ニ羯磨ト云フ、——事物運動ノ行業ナリ、第四、大有性梵ニ三摩若ト云フ、——實德業不滅

ノ原能力ナリ、第五、同異性梵ニ毘尸沙諦ト云フ、——實德業差別ノ原能力ナリ、第六、和合性梵ニ三摩夜諦ト云フ、——實德業、集和ノ原能力ナリ、而ノ實ヲ分析スレハ、九種ト為ル、地、水、火、風、空、時、方、我、意是レナリ、德ヲ分析スレハ、廿四種ト為ル、色、聲、香、味、觸、數、量、別性、合性、離性、彼性、此性、重性、液性、潤性、行性、覺、樂、苦、欲、瞋、勤、法、非法是レナリ、業ヲ分析スレハ、取、捨、屈、伸、行ト為ル、萬有ノ本体モ、顯象モ、作業モ實德業ノ三句ニ攝合シ、大有性ヲ別立シ、同異性及ヒ和合性ヲ想像スルニ至ルモノナリ、後末ノ代ニ十八部中ノ上首ヲ戰達末底ト名ク(即チ惠月論師ナリ)十句論ヲ造リ、同異ノ句ヲ開シテ二ト為シ、更ニ有能、無能、無說(或ハ無有ト云フ、英語ノ所謂ル)ノ一、ン、エキ、ジ、ス、テ、ン、ス、ト云フモノ是レナリ、ノ三句ヲ加ヘタリ、此勝論哲學ハ、數論哲學ニ反對シテ起リタルモノニシテ、數論ノ如ク、時間的ニ因テ万有緣起ノ原因原理ヲ論セズ、空間的ニ因テ、萬有ヲ本來實有トスル說ナリ、勝論哲學ハ、己ニ空間的ノ研究ナレハ、萬有ノ分析法ヲ用ヒテ、異

體論ヲ主張シ、數論ノ如ク總合法ヲ用ヒテ、同體論ヲ立テズ、是レ勝論ハ
 純然タル「マテリヤズム」主義ナリ、「勝論」ノ概要ハ、勝論十句義論ニ詳ナリ
 ——抑モ數論哲學ト、勝論哲學トハ、佛家哲學已前ニアリ、印度哲學ノ圓妙
 精微ニ達シタルモノニシテ、二派確然相爭ヒテ互ニ論駁攻撃ヲ事トシ
 ナレバマザリキ——

第三ハ、尼隄子論師哲學ニシテ、「ニヤ」哲學又ハ、那耶修摩^{ナヤシム}稱セラル、モ
 ノ是レナリ、——其始祖ヲ勒沙婆^{ロクサバ}ト云フ、——百論ニ勒沙婆ノ弟子誦尼
 乾子^{ケンシ}經言、五熱炙身、拔髮等受苦法是名善法「下アル所ノ疏ニ、勒沙婆者、此
 云苦行仙、其人計身、有苦樂二分、苦現世、併受苦盡、而樂法自出、所說之經、名
 尼隄子、有十萬偈、尼隄子、此云無結、依經修行、離煩惱結、故以爲名、亦名那耶
 修摩、舊云尼隄子」云トアリ、——尼隄子論師ハ、數論勝論二派ノ哲學ヲ
 和合セント欲シテ起リタルモノニシテ、其說、心境ノ二ツノモノハ、一體
 ナレバ異體ナリ、異體ナレバ一體ナリト執シ、「十六諦ヲ立ツ、——十六諦

トハ、第一ニ量諦、第二ニ所量、第三ニ疑、第四ニ用、第五ニ譬喻、第六ニ悉權
 第七ニ語言分別、第八ニ思擇、第九ニ決、第十ニ論議、第十一ニ修諸義、第十
 二ニ壞義、第十三ニ自證、第十四ニ艱難、第十五ニ諍論、第十六ニ墮負ナリ、
 ——百論ノ疏ニ經說有十六諦、開慧生八、一天文地理、二算數、三醫方、四咒
 術、及四章陀、故云八也、次修慧、生八、修六、天行爲六、及事星宿天、行爲七、修長
 仙行、爲八、修長仙法、意欲捨無常苦、故求常樂、即第十六諦也「トアリ、又方便
 心論、ヲ引キテ、有五智六鄣四濁、以爲經宗、五智者、謂聞智、思智、自覺智、慧智、
 義智、六鄣者、不見鄣、二苦受鄣、三愚智鄣、四命盡鄣、五不好得姓鄣、四濁者、一
 瞋、二慢、三貪、四諂也、而明因中亦有果、亦無果、亦一亦異、以爲經宗「ト見ヘタ
 リ、蓋シ印度論理學ノ高妙精緻ヲ極メタルモノハ、「ニヤ」ニシテ、歐洲ニ
 於テ、「インヂヤン、ロヂック」ト云ヘハ、即チ「ニヤ」ニ指スモノナリト知ラ
 レタリ、」

第四ハ、若提子論師哲學ニシテ、六師哲家ノ一人ナリ、——百論ノ疏ニ「六

師者一富蘭那^フ其人計斷謂無君臣父子因果之義二俱舍利子其人計一切法自然爲宗三毘羅^ビ倪子^ロ其人計道不須修經八万劫自然而得如轉縷丸於高山縷盡則止四欽婆羅^{チン}其人計身有苦樂二分現受苦盡樂法自出五迦羅鳩^カ其人計亦有亦無應物起見他問有耶答云有他問無耶答云無六若提子其人計業決定得報今雖修道不能中斷也トアリ若提子論師ハ前ノ三派コ反對シテ起リタルモノコシテ非有非無ヲ以テ主義ト爲シ一切法ハ一体ト言ント欲スレハ万有歷然タリ異体ト言ント欲スレハ彼此相待テ存在ス一切法一体ト云フモ非ナレハ一切法異体ト云フモ非ナリト云二說己コ非ナル以上ハ之ヲ和合シタル亦一亦異ノ論モ亦非ナリト云フベシ三說皆己コ非ナルカ故ニ一切法ハ一体ト說クベカラズ異体ト說クベカラズ亦一亦異ト說クベカラズト主張シ寂默無言ヲ貴ブノミ此等ノ哲家之ニ繼テ印度哲學ヲ大成シタルモノハ釋迦牟尼ガ新發明ノ佛家哲學ト爲ス

〔提婆論師ノ百論ハ殊ニ異論ヲ破シカ爲ニ編述シタル書ナルカ初品三迦毘羅^チ婆^ビ論^ロ沙婆^サ立^リ特^ト牛^ウ戒^ケ等^ト是^レ名^ニ善^ク法^トト云^ハル所^ニ疏^ニ三^ニ實^ニ行^ニ世^ニ此^中凡^レ列^十師^一迦^毘羅^羅寂^默常^立特^牛戒^等是^レ名^ニ善^ク法^トト云^ハル所^ニ疏^ニ三^ニ實^ニ行^ニ世^ニ此^中四^師以^自戒^爲道^第五^師以^投淵^求聖^第六^師以^赴火^爲道^第七^師以^持牛^戒爲^道前^之求^道第^八師^以寂^默爲^道第^九師^以常^立爲^道第^十師^以持^牛戒^爲道^前之^三師^廣列^經法^以三^寶行^化後^之七^師直^辨苦^行而^已ト^アリ^蓋シ^其自^戒ノ^法ト^ハ或^一日^ニ三^果ヲ^食シ^或ハ^風ヲ^吸ビ^或ハ^服シ^或ハ^氣ヲ^服ス^ルト^謂フ^寂默^トハ^若提^子非^有非^無ヲ^立テ^宗ト^爲シ^無ト^言ヘ^ハ明^ニス^若シ^是レ^有ト^言ヘ^ハ一^法ノ^取ル^ベキ^ナク^若シ^是レ^無ト^言ヘ^ハ而^モ萬^物歷^然タ^リ心^ヲ以^テ境^ヲ取^ル無^境心^ニ稱^フ境^ヲ以^テ心^ヲ取^ル無^心境^ニ稱^フ故^ニ非^有非^無ト^云ビ^無然^無音^ナリ^境ヲ^以テ^心ヲ^取ル^無心^境ニ^稱フ^故ニ^非有^非無^ト云^ビ無^然無^音ナ^リ持^牛戒^トハ^俱舍^論ニ^說ク^カ如^ク眼^ヲ合^シ頭^ヲ低^レ草^ヲ食^フヲ^以テ^牛法^ト爲^ス彼^レ牛^死天^上ニ^生ル^ハ得^テ即^チ此^牛ヲ^尋メ^ルニ^八万^劫來^猶牛^身ヲ^受ク^爾前^ニ天^因ニ^アリ^牛死^天ニ^生ル^ト得^ルト^謂ヘ^ルニ^違フ^ス是^レ故^ニ相^共ニ^牛戒^ヲ持^ス成^論ニ^云ク^持牛^戒若^成則^隨牛^中如^其不^道苦^行世^人信^之外

野史氏曰ク古來歴史ノ傳フル所ニ據レハ世界最モ早ク哲學ヲ創起シタルモノハ印度人ナリ之ニ次クモノヲ希臘人ト爲ス然レモ希臘哲學ノ元素ハ亦多ク印度哲學ニ基クモノアリ左レハ希臘ノ哲家ハ皆印度ヲ以テ上古聖人ノ道ノ出ル所ナリト爲シ此地ニ游學スルニ

至レリト云フ、而シテ印度哲學家ノ前後、繼起シテ、互ニ其新機軸ヲ出シ、宇宙ノ真理ヲ究ムルモノハ實ニ印度人が高遠幽微ノ思想ニ富メルヲ證スルニ足ル、其起源、其發達、其進歩ノ沿革ヲ詳ニシテ、以テ印度哲學ヲ闡明スルヲ今日哲學家ノ大任ナリ、故ニ余ハ今マ諸書ヨリ折衷シ其概畧ヲ摘ミテ、敘述スルモノ此ノ如シ、

獅巖曰、玄圃積玉、無非夜光、

龍潭曰、支那周之時、老子、莊子、楊子、墨子、荀子、關尹子、孟子、告子、等哲學家、輩出爭其主義、爛然現出香園玉削世界來、當時印度哲學家、交互錯綜、出新機軸、彼此殆相肖、然而、支那哲學、至孔子、而大成之、印度哲學、至釋迦、而大成之、東西出一轍、亦可謂奇矣、

印度史卷一終

印度史卷二

第二篇

第一章

摩督ノ法典及釋迦牟尼ノ時代

社會ニ革命アル時ハ、法典制定ノ必要アリ、法典制定ノ起ルハ、其國民ノ氣象ノ發泄スル時タリ、而シテ此時代ニ於テ豪傑若クハ賢哲ノ士アルハ、必ラズ法典ヲ制定シ治安ノ要具ト爲サバ、ルハナシ、印度ニ於テハ日種月種ノ戰鬪アリテ、藩閥ノ積弊一洗シ、社會ノ革命終リシ後、三四百年即チ大約紀元前九百年ノ頃ニ當テ、法典制定ノ美舉アリ、當時一箇ノ政專家ヲ生ス、摩督實ニ其人ナリ、摩督英敏ニシテ器識アリ、印度ノ法典ヲ制定シテ、社會ノ秩序ヲ整ヒタリ、是レヨリ、印度ノ文明ニ改進ノ氣運ヲ興ヘ、國運蔚然トシテ勃興スルニ至レリ、

印度ハ上古ヨリ許多ノ列國ニ分裂シ、政府各々同シカラズ、其組織モ亦

皆駁雜ニシテ、政治法律何レモ其体制ヲ異コシタリシガ、摩督ノ法典ヲ制定スルニ及ヒテ、列國ノ君主、概テ其律例ニ由テ政治ヲ施スニ至レリ、抑モ摩督ノ法典ハ、梵名ニテ之ヲ摩那婆陀縷摩薩斯多度ト稱シ、其書十八卷アリ、其主趣ヲ三部ニ分ツ、即チ宗教ノ本務(第一)法律ノ執行(第二)罪過ノ補贖(第三)是レナリ、而シテ社會ノ關係、人民ノ權利義務等ニ至ルマテ細大遺スコナク、之ヲ説明セリ、但シ此憲法ニ説ク所ノモノハ、摩督ガ一己ノ理論ヲ以テ之ヲ制定シタルニ非ズシテ、多クハ其當時ニ於テ實行シタルモノ、若クハ目撃シタルモノヲ記シテ、之ニ意見ヲ附セラレタルモノナリト云フ、

此法典ニ由テ、當時ノ政体ヲ考察スルニ、印度ノ政府ニハ、凡ソ七大臣アリテ百政ヲ辦理セリ、第一ニ司法大臣、第二ニ營生大臣、第三ニ大藏大臣、第四ニ軍務大臣、第五ニ外務大臣、第六ニ教務長、第七ニ預言長是ナリ、此等ノ諸大臣ハ他ノ百僚ト共ニ王ヲ輔佐シテ國政ヲ掌ル、而シテ政府ノ歳

費ハ租稅ヲ以テ之ヲ支出セリ、但シ租稅ハ、都テ穀物ヲ以テ之ヲ収ムルノ例規ニシテ、所謂年貢ナリトス、田地ノ主之ヲ收稅者ニ収メ、收稅者ハ、特許ヲ得タル官吏ヨリ成ル、然レモ租稅貢賦ニモ亦自ラ一定ノ法アリテ國王ト雖モ濫ニ之ヲ徵收スルコトヲ得ズ、收稅者ノ如キハ隨意ニ之ヲ攫取スルコトヲ得ザルハ勿論ナリ、此法ハ摩督ノ制定シタルモノニシテ、地味ノ厚薄、勞力ノ多寡等ニ由テ其稅額ヲ定ムルニアリ、印度ハ古來、刹帝利種ノ人士、國土ヲ分割シテ之ニ據リ、自ラ其地ノ王ト爲リテ之ヲ統治シタレモ、土地ハ、皆其王ノ私有ニ歸シタルモノニ非ズシテ、農民ニ屬セリ、摩督ノ法典、己ニ此理ヲ明ニセリ、其言ニ曰ク、
「古代ノ事理ニ通曉セル聖賢ハ、布利底昆ニ土地ニ以テ布利菟王ノ配偶ト爲シ、諸ノ耕地ハ悉ク最初ニ之ヲ開墾セル人々ノ所有ナリト決定ス」
トアリ是ヲ以テ農民ノ租稅ヲ納ムルハ、之ヲ借地稅トシテ納メタルニ非ズシテ、全ク國王ノ保護ニ報センカ爲ニ之ヲ納ムルモノナリ、尙ホ其法典

ノ書ニ由テ、之ヲ考察スルニ、印度ノ地ハ、古來許多ノ鄉村——波縷伽尼——ニ分チ、各鄉村ノ人々皆一和シテ其土地ヲ耕シ、郷長及ヒ其他ノ屬吏ヲ以テ公共ノ事務ヲ處理セシメタリ、即チ租稅ヲ政府ニ納メ、鄉村内ノ費用ヲ支辨スル事、及ヒ初審ノ裁判、輕罪ノ責罰等ハ、皆其鄉村ノ人之ヲ爲シタリキ、

法律ノ施行ニ至リテハ、己ニ政府ニ司法部アリテ、法廳ヲ十八種ニ分チ、法官ヲ分置シテ民事、刑事百般ノ案件ヲ審理セシム、而シテ法官ハ情狀ヲ訊問スルニ方リテ、其公平無私ヲ表センカ爲ニ常ニ廳外ニ出デ、而シテアタリ、衆人ノ前ニ於テ、之ヲ爲セリ、又案件ノ大事ニ涉ルモノ或ハ是非ノ決シ難キモノアレハ、之ヲ國王ニ上申シ、國王ハ重臣ト共ニ之ヲ審理セラレタリ、訴訟ノ判決ハ都テ摩督ノ律例、又ハ其他ノ法律書ヲ案シ、種族ノ古例ニ照シテ、之ヲ行ヒタリ、但シ律例ニ明文ナキモハ、國王自ラ之ノ判決セラレタリキ、

宗教ノ事モ、亦大ニ摩督ノ苦心セラレタルモノニテ、其法典ニハ、婆羅門教ノ五誠十誠及ヒ其他ノ諸誠ヲ掲ケ、婆羅門ノ教法ヲ改良シ且ツ之ヲ鞏固ニシ、由テ以テ當時ノ人心ヲ正路ニ誘導セシメタリキ、

當時印度ハ、政治法律及ヒ宗教大ニ整理シ、文化著ルシク進歩シタリ、殊ニ商業學ノ如キハ、最モ進歩シ、一般ノ商人ハ海陸ニ於テ貿易シ、其中ニハ許多ノ銀行アリ、其銀行ニハ、皆日用帳、日記帳及ヒ大帳等ヲ用ヒ、其記載ニハ單複二式ヲ用ヒタリ、彼等又海陸ノ保險ヲモ爲シタリキ、

其後チ印度ノ國勢漸ク衰運ニ傾キ、政治法律ハ、勿論、宗教モ亦腐敗シタル時ニ當リテ、大約紀元前六百年ノ頃、釋迦牟尼起テ、印度哲學ヲ興シ、宗教ノ改革ヲ謀リ、之ト同時ニ政治法律モ舊來ノ面目ヲ全變シ、一代ノ思想ヲ更新セリ、是ニ於テ、印度ノ國運、蒸蒸日上シテ、旭日ノ如ク、印度新文明ノ精神ニ一段ノ歩武ヲ進メタリ、彼ノ八萬四千ノ經卷ノ中、王法政論經ノ如キハ、己ニ政事家ノ龜鑑ト爲ルヘキモノニシテ、印度ノ文明前後此

時代ヲ以テ最モ隆盛ト爲ス、

王法政論經ニ帝王ノ過失ト功德トヲ説明セリ、其言ニ曰ク——王ノ過失ハ凡ソ十種アリ、王若シ其過失ヲ遂グルキハ、假令ヒ、大府庫、大臣佐、大軍衆アルモ歸化スベカラズ、何等ヲ十ト爲ス、一ニハ、種姓不高、二ニハ、不得自在、三ニハ、立性暴惡、四ニハ、猛利憤發、王ニハ、恩惠賒薄、六ニハ、受邪佞言、七ニハ、所作不順古先王制、八ニハ、不願善法、九ニハ、不鑒是非勝劣、十ニハ、一向縱蕩、專行放逸ナリ——ト之ニ反スル十事ヲ以テ帝王ノ功德ト爲ス、同經ノ中ニ——王ノ衰捐門、王可愛法、及起發王可愛法之道等ノ說アリ、起發王可愛法之道、凡五種アリ、其一ハ、恩養蒼生、二ハ、英勇具足ナリ、恩養蒼生トハ、王者ガ其心ニ足ルヲ知リテ、能ク謹慎ヲ爲シ、無貪白淨ノ法ヲ行ヒ、庫藏ノ貨財ヲ散シテ、貧窮孤露ニ給施シ、自ラ柔和忍辱ヲ主トシ、軟言ヲ以テ、國中ニ曉諭シ、又群臣ノ中、法ヲ違犯シテ免ルベカラザルモノアルキハ、罪ヲ量リテ矜恕シ、理ニ順テ之ヲ罰スル等ヲ言フ、又

英勇具足トハ國王タルモノ、神策墮ズ、武畧圓滿ニシテ未ダ降伏セザルモノヲ降伏セシメ、己ニ降伏セルモノヲ攝養スル等ヲ言フト——アリ、當時己ニ政事家ノ議論ヲ發明シ、王者ノ本務ヲ論スルモノ此ノ如シ、是時ニ當テ、印度ノ文明、駭々乎トノ進歩シ、開化四方ニ敷及セリト云フ、

獅巖曰、道在邇、事在易、

龍潭曰、摩督憲法制定之功、不讓羅馬帝、牙士尼地、練釋迦風化之力、與英蘭克麟相類、

第二章

外人ノ侵入及摩竭陀國ノ革命

紀元前五百十八年印度ノ衰ヘシ頃、波斯國王太流士、英武蓋世、四方ヲ經

略シ、遂ニ印度ニ侵入シ、印度河岸ノ地ヲ併領セリ、太流士ハ、其地ヨリ稅ヲ收メ、每歲獲ル所ノ貢賦ハ、波斯全國ノ租稅ノ三分一ニ及ビタリト云フ、其收額ノ多キヲ亦知ルベシ、

是ヨリ百八十四年ノ後、希臘ノ馬基頓王、亞歷山太、威武ヲ亞細亞地方ニ輝カシ、波斯ヲ征服セシガ、紀元前三百二十七年ニ至リ、自ラ精兵十二萬ヲ率ヰテ、東方ニ入り、亞特ニ於テ印度河ヲ渡リ、ブンジャブノ地ニ侵入セリ、印度諸國ノ王侯兵ヲ出シテ、之ヲ防キシカハ、結局皆敗折シテ、印度ノ地、亞歷山太ノ爲ニ併略セラレ、但シ保魯斯王ノ如キハ、頗ル勇武ニシテ屢々西軍ヲ破リ、大ニ亞歷山太ニ抗敵セシカハ、王深ク其ノ勇氣ニ感シテ終ニ之レニ其侵地ヲ返セリト云フ、然ルニ亞歷山太ハ、尙ホ進ミテ當時強大ノ聞アル摩竭陀國ヲ攻メント欲セシガ、兵士戰ニ倦ミテ皆之ヲ好マザリケレハ、遂ニ其軍ヲブンジャブヨリ班スヲニ決シ、印度河ヲ渡リ、波斯ニ凱旋シタリ、——其後四年ニシテ亞歷山太崩シ、其勇將塞留

哥斯巴比倫及印度ノ侵地ヲ獲テ、之ヲ占領セリ、

是時ニ當テ、印度ニ於テハ、一革命ヲ生ジタリ、摩竭陀國ハ、紀元前七百年ノ頃ヨリ、那伽龍——朝ノ王、之ヲ統治シ、亞歷山太侵入ノ時ニ及ビシガ、其時代ノ王ヲ難陀ト稱シ、其母后ハ、首陀種ノ婦人ナリ、難陀王ハ、外寇ノ起ルト聞キ、數萬ノ騎兵ヲ出シ、數千ノ兵士ヲ以テ、西軍ヲ防カントセリ、然ルニ亞歷山太ノ軍ヲ還セシヨリ二年ノ後、難陀ハ、大臣ニ弑セラレ、其國ハ、闍度羅瞿布多ノ有ト爲レリ、闍度羅ハ、首陀種ノ人ニシテ、嘗テ保魯斯ノ軍ニアリテ希臘兵ト戰ヒタル勇將ナリシモ、後ヲ乱ヲ作シテ諸國ヲ攻メ終ニ摩竭陀國王ノ位ヲ篡ヒ、毛利耶朝ヲ立ルニ至レリ、然ルニ塞留哥斯、兵ヲ率ヰテ、再タビ侵入セシカハ、闍度羅王大軍ヲ以テ、之ヲ禦キシガ、塞留哥斯故アリテ之ト和シ、兵ヲ斂メテ國ニ歸リ、一哲學士——其名ヲメガステテスト稱ス——ヲ遣ハシテ公使ト爲シ、首府巴里慕士羅ニ駐在セシメタリ、

闍度羅王ハ、元ト是レ、首陀種ナルヲ以テ、刹帝利種ハ、是時ヨリ、摩竭陀ニ於テ其威ヲ振フヲ能ハズ、國勢衰廢セリ、而シテ婆羅門ハ、其權威ヲ滅殺スルト同時ニ、佛教徒ハ、勢ヲ得、波利語——摩竭陀ノ方語——ヲ用ヒテ、其經論ヲ著ハシ、盛ニ佛教ヲ弘布スルニ至レリ、

龍潭曰、天地尙空、秦日月、山河不見、漢君臣、

獅巖曰、印度、地上之佳肉也、耳、其大開口者、豈啻大流士、亞歷山太、帖木兒、克雷武而已哉、

第三章

阿輸伽ノ仁政及諸朝ノ興廢

紀元前三百年ニ、闍度羅王崩シ、太子密覲羅瞿布多立テ王ト爲ル、密覲羅

世ヲ治ムルヲ、二十五年ニシテ崩シ、太子阿輸伽——阿育王云フ、無憂ノ義ナリ——之ニ嗣グ、

阿輸伽王、仁政ヲ以テ民ヲ懷ケ、頗ル其版圖ヲ擴張シ、國疆ニ石柱ヲ建テ、之レカ標ト爲シ、其柱ニハ波利語ノ銘ヲ識シ、又所々ノ巖石ニ其聖諭、告示ヲ刻セリ、今日ニ至ルモ、尙ホ存スルモノアリト云フ、阿輸伽深ク、佛教ヲ信シ、之ヲ以テ國教ト爲シ、舊來ノ弊政ヲ改革シ、德政ヲ施セリ、刑殺ノ法ヲ除キ、國中ニ病院ヲ建テ、施藥館ヲ設ケ、道路ノ側ニ樹木ヲ植

ニ、井ヲ掘ラシメ、且ツ諸所ニ佛堂、窠、觀、婆、方墳、曼陀羅、壇、

等ヲ建設シ、許多ノ窟社ヲ造ラシメタリ、佛經中ニ著名ナル王舍城、

羅閱祇伽羅、ハ此國ニアリ、印度史附錄、佛國記ヲ參觀スベシ、

是ヨリ先キニ、紀元前二百六十年、佛教ノ諸大法師、大會ヲ開キテ、佛說ヲ結集シ、布教ノ方法ヲ議定セリ、是レヨリ佛教大ニ四方ニ弘マリ、終ニ支那ニ入ル、或ハ云フ、秦ノ始皇ガ囚ヘタル所ノ沙門室利房ハ、即チ其

傳道士ナルベシト——當時迦奴侍國王ハ婆羅門ヲ奉信セシニ依リ、許多ノ婆羅門、彼地ニ逃避セリト云フ、

阿輸迦王ハ、治世三十七年ノ後チ、即チ紀元前二百二十六年ニ崩シ、其國ハ、三子之ヲ分割セシガ、互ニ其權ヲ爭ヒテ止マズ、僅々タル二十一年間ニ七王——或ハ云フ十王——位ニ登ルニ至リ、同シキ百九十五年ニ及ヒテ、牟利耶朝亡ビ、首陀種ノ人士之ニ代ル、之ヲ珊伽朝ト稱ス、血統相襲ク、十世、百十二年ニシテ亡ビタリ、珊伽朝ノ時ニ、拔德德里亞人屢々北天竺ニ侵入セリ、

珊伽朝亡ビテ、安度羅朝之ニ代ル、是レモ亦首陀種ナリシカ、二十九世、相傳ヘテ紀元四百三十六年ニ至ル、此朝ニ毘丘蘭亞提查ト稱スル王アリ、紀元前五十六年ニ王位ヲ踐ミ、南天竺ニ瓦崙具爾ヲ建ツ、其府ハ、ゴマベリ河ノ南ニアリ、印度ノ文學、是ニ於テカ盛大ヲ極メタリト云フ、(加基陀斯ノ戯曲詩ノ如キハ、今日尙ホ諸國ニ傳ハリテ、人皆之ヲ稱讚ス、)——此

朝ノ王ハ、皆婆羅門教ヲ奉シタルカ故ニ、婆羅門ハ往時ノ權勢ヲ恢復シテ大ニ佛教徒ヲ窘メ、之ヲ芟除センコトヲ圖レリ、佛教是ヨリ大ニ衰フ、王ノ時ニ北方ノ種族、印度ノ西部ニ來寇シ、終ニ其地ニ住セリ、此時ニ耶婆那——泰西人——又來侵セリ、

紀元三百十八年、迦奴侍ノ王、南ニ進ミテ諸國ヲ兼併シ、瞿侍刺土ニ入り、具布多朝ヲ立ツ、摩竭陀モ大半之ニ歸セリ、此朝ノ立チシヨリ九年ノ後ケ、耶婆那人、海上ヨリ突進シテ終ニ榜加拉ノ西南ナル病利沙ヲ畧取シ、百四十六年ノ間之ヲ占領セリ、

具布多朝ハ、四百九十八年、相傳ハリシガ、其後チ復タ此名ヲ聞カズ、或ハ云フ、此朝ハ、克什米爾ノ瞿那爾陀朝ト合セリト、——安度羅ノ東ニ榜加拉アリ、其勢益々強大ト爲ル、其王統ヲ巴拉朝ト稱ス、又安度羅國ノ起レル初メニ、韃靼人、克什米爾ニ侵入シテ國ヲ建ツ、之ヲ瞿那爾陀朝ト稱シ、佛法ヲ奉ゼリ、此朝後世ニ至リテ、一タヒ衰ヘタリシガ、紀元四百五十年

ニ復再タビ其勢力ヲ復シ、遂ニ南征シテ錫蘭嶋ニ入リシト云フ、此外ニ
數多ノ強國アリテ、各々久シク獨立セシモ、終ニ皆回教人ニ亡ボサレタ
リ、

(又南天竺ニ於テハ、上古ヨリ他彌爾人等アリテ諸所ニ小國ヲ建テ部
落ヲ成セシガ、羅摩ノ南征ヨリ已來、亞利亞人種ノ此地ニ移ルモノ多
ク、次第ニ之ヲ併領セリ、是ニ於テ中天竺ヨリ來リテ國ヲ建テタルモ
ノ多シ、般提耶朝、光羅朝、知羅朝、查留伽朝等ヲ以テ最大ナルモノトス、
皆ゾ婆神ヲ奉セシモ、後世ニ至リテ禪那教ヲ奉セリ、般提耶王ハ羅馬
與古斯太ニ使者ヲ遣ハセシト云フ、紀元一千八百八十二年、迦羅部樓耶
ト名クル人、查留伽朝ヲ顛覆シ、其都ニ至リ、然ルニ薩巴ト稱スル婆
羅門アリ、琳愛謁教ヲ宣布シテ、其都ニ至リ、大ニ權勢ヲ擅ニシ、遂ニ其
王ヲ廢セリ、此時ニ當テ、耶陀婆朝ノ人來リ、錫比、之
ンガ地ヲ奪ヘリ、是ヨリ回教人又南天竺ニ入ル、之)

第四章

馬毛度、印度ヲ征畧ス、

紀元六百二十二年、亞刺伯ニ回々教勃興シ、其教徒、教祖馬哈默德ノ教ヲ
以テ、唯一ノ遺訓ト爲シ、刀劍ヲ以テ弘教ノ方便ト爲シ、次第ニ其版圖ヲ
擴張シ、早ク己ニ一瀉千里ノ勢ニ乘シテ、波斯ヨリ中央亞細亞ニ及ビタ
リ、紀元七百十一年、ブツソラノ鎮台其兵ヲ遣ハシテ、印度ノ地ヲ畧取セ
シム、國王ノ一族多ク戰死シ、二王女ハ送ラシテ、回教王疴摩爾ノ後宮ニ
入ル、是レチ回々教徒ノ印度軍ヲ破リタル嚆矢ト爲ス、然レモ回教徒ハ、
久シカラズシテ羅侍布土人ニ驅逐セラレタリ、
西曆九百七十七年ニ、回教ノ勇將士武克土壬、阿富汗斯坦ノ祇壽尼ヨリ
進ミテブンシヤブノ地ヲ侵シ、諸所ニ回教堂ヲ建テ、巨多ノ財寶ヲ掠メ
テ去ル、然ルニ其後ブンシヤブノ王、戰ヲ挑ミタルニ依リ、彼レ亦益々侵
入シテ、遂ニ之ヲ敗リ、爾後每歲此地ニ貢賦ヲ課セリ、其後紀元九百九十

七年、士武克土壬卒シ、長子馬毛度其地ヲ領シ、二年ノ後、自ラ蘇爾丹ト稱セリ、

馬毛度、勇敢ニシテ武略アリ、西曆千年八月自ラ一萬ノ騎兵ヲ率キテ祇壽尼ヲ發シ、ブンシヤブニ入ル、是ニ於テ拉保爾ノ王塞巴爾、同年十二月二十七日一万二千ノ騎馬ト三万ノ步卒トヲ以テ逆ヘ戰ヒシガ、馬毛度ノ敗ル所ト爲リ、王及ヒ其一族皆擒ニセラル、馬毛度ハ塞巴爾ノ每歲貢賦ヲ納レンコトヲ約セシニ由テ、之ヲ釋シテ其地ヲ還セリ、此時羅侍布土王毘侍萊モ亦馬毛度ニ以上ノ如キ盟約ヲ爲セシガ後ニ其約ニ背キシカバ、同シキ百四年ニ、馬毛度ノ爲ニ攻メラレ、終ニ其地ヲ奪ハレタリ、翌年、ナナブ河ノ左岸ナル牟爾丹ノ酋長叛キ、塞巴爾王之ヲ援ク馬毛度、復タ來リ戰ヒ、遂ニ之ヲ戡定セリ、然ルニ馬毛度ノ信任シテ、其侵地ヲ託セル西瓦克巴爾王ニ、印度人ニモ亦尋テ叛キシカバ、馬毛度來リ之ヲ禁錮シ、同キ千八年ニ、馬毛度亦來リ塞巴爾王ヲ罰セリ、是レ牟爾丹ノ

酋長ヲ助ケシヲ以テナリ、是ニ於テ塞巴爾王援兵ヲ印度諸國ノ王ニ請ヒミカバ、諸國之ニ應シ、四方ノ志士、皆金ヲ投シテ之ヲ資ケ、婦人モ亦其裝飾ノ金銀ヲ鎔シテ之ニ贈レリ、北方ノ山人數万、復タ來リ加ハリ、其勢當ルベカラズ、馬毛度、其鋒前ナキヲ視テ、營壘ニ入ル、其銳氣ヲ避ケ、敵ノ來襲ヲ待テ居レリ、己ニシテ、對陣四十日ニ及ビシガ、印度兵進ミテ之ヲ襲フ、馬毛度、石油彈丸ヲ投シテ、火箭ヲ射リ、印度兵ヲ乱シ、終ニ大ニ之ヲ敗リ、斬滅頗ル多シ、馬毛度ノ軍進ミテブンシヤブニ入り、其聖社ヲ毀テ、金銀財寶ヲ掠メテ凱旋セリ、

西曆一千十一年、馬毛度復タ來リ、特里ノ側ナル多尼沙爾ニ至聖ノ地ニ入り、之ヲ取テ、掠奪ヲ縱ニシ、社堂ヲ傾覆シ、偶像ヲ破毀シ、其中ノ至尊神儒瞿索摩ヲ携ヘテ本國ニ歸リ、之ヲ市街ニ放擲シテ、人ヲシテ之ヲ蹂躪セシメタリ、是レ偏ニ馬毛度ノ痛ク、偶像異宗ヲ憎惡スルニ出テタル暴行ナリ、

一千十七年、馬毛度迦奴待ヲ征服シ、同シキ二十一年、亞刺幡拔土ノ南ニ到リ、迦林伽^{カリンガ}ニ入ル、其王嘗テ伽奴侍王ヲ害シタルヲ以テナリ、然ルニ王逃避セシヲ以テ馬毛度再ビ伽林伽ニ入リ、遂ニ之ヲ鎮壓セリ、又馬毛度ハ地方ノ海岸ニ、ツムナドノ大社アリテ、重寶ヲ藏スルヲ限ナシト聞キ、之ヲ破滅セント欲シ、翌二十四年ニ祇壽尼ヲ發シ、進ミテ瞿侍刺土^{クワツト}ニ入リシカ、其王遁走セリ、馬毛度其大社ニ至リ、羅侍布土人ト戦ヒ、三日ニシテ終ニ之ヲ敗ル、馬毛度其社ニ入リテ、神像ノ鼻ヲ破毀セシガ婆羅門ノ教徒、其偶像ヲ贖ン^トテ請フ、馬毛度之ニ答ヘテ曰ク、我ハ偶像破ノ名ヲ後世ニ遺サント欲スルモノナリ、豈偶像販賣者ト稱セラル、^トヲ欲センヤ、^ト其破毀シタル中ニハ無數ノ珠玉アリケレハ、皆之ヲ取レリ、^ト其後六年ニシテ、馬毛度病ヲ以テ崩ス、

獅巖曰、馬毛度如暴風、剛者、所爲豈如此哉、

第五章

瞿離ノ侵入及諸朝ノ興廢

馬毛度崩セシヨリ、祇壽尼朝漸ク衰ヘ、西曆一千百八十六年ニ至リテ、内外ノ領地、委ク瞿爾^{クワール}ノ帝ガイヤスニ歸セリ、同シキ百九十一年、瞿爾帝ノ弟瞿離、印度ニ侵入セシガ、羅侍彌爾ノ王布利底萊^{ブライ}兵ヲ起シ、特里ノ王ト力ヲ戮セ、索爾素底河邊ニ迎ヘ戦ヒテ、大ニ之ヲ破レリ、同シキ九十三年、瞿離其耻辱ヲ雪カント欲シ、十二万ノ騎兵ヲ率キテ再ビ侵入セシガ、其勢雄壯ニシテ、當ルベカラズ、印度ノ諸王協力同心シテ、之ヲ防キシカ、終ニ大ニ敗衄セリ、是ニ於テ、回教人、劫奪屠戮ヲ縱ニセシガ、翌年、瞿離復々印度ニ來リ、深ク、伯那列斯ノ地方ニ入リ、到處偶像ヲ毀テ、其社堂ヲ以テ回教堂ト爲セリ、

翌年ガイヤス崩シ、瞿離立テ王ト爲ル、然ルニ千二百五年ニ至テ、瞿離帝、不幸ニシテ兇賊ニ弑セラレ、其甥馬毛度帝位ニ登レリ、當時印度ノ領

地ハ、克土武クツブ——本ト土耳其ノ奴隸ナリシト云フ——ト那西爾ナシノ兩將、之ヲ分治シタリシガ、馬毛度ノ位ニ即クコ及ヒテ、克土武ハ封セラレテ王ト爲リ、其都ヲ特里ニ定メタリ、克土武王ノ血統相傳フルヲ十世、八十年ニシテ、西曆千二百八十八年ニ至リテ亡ビ、祇爾キル侍朝シテ興ル、祇爾侍朝ノ始王ヲシラルト云フ、沙麻羅王ノ子ナリ、前朝ノ時ヨリ蒙古人時々入寇セシガ、此王ノ世ニ至リテ、復タ來リ侵セリ、王撃テ之ヲ退ク、其中ノ一將ハ、三千ノ蒙古兵ヲ以テ王ニ合シ、其女子ヲ娶リテ回教ニ入リタリ、

其後千二百九十四年、王ノ甥亞拉南アラナニ進ミテ、德干ヲ侵シ、耶陀婆王ヲ征服シテ、莫大ノ貨財珠玉ヲ掠メテ還レリ、終ニ王ヲ弑シテ自ラ立ツ、蒙古人大舉シテ侵入セシガ、王撃テ之ヲ退ク、亞拉復タ南征シテ武零ヲ耀セリ、其後蒙古人屢々入寇セシモ、ポンシャブポンシャブノ總督土具祿トルグ之ヲ拒キ王ヲシテ北顧ノ憂ナカラシム、千三百二十一年、反臣アリ、帝ヲ弑ス、土具祿、

馳セ來リ、之ヲ誅シ、國人ノ請ニ應ジテ王位ニ登リ、土具祿朝ヲ立ツ、蒙古人、又大舉シテ來リ攻メ、大ニ侵略ヲ逞クシテ、特里ニ至ル、王乃チ金ヲ投シテ其地ヲ贖ヒシカバ、蒙古人漸ク去ル、

土具祿、都ヲ南天竺ニ遷シ、特里ノ人ヲシテ南天竺ニ移ラシム、老幼途ニ死スルモノ、甚ク多シ、王崩シテ、徒弟匪路斯ヒロス立ツ、匪路斯、一邑ヲ特里ノ近傍ニ作り名ケテ、匪路差婆度ト云フ、——是レマデ、回教王ハ、皆苛政ヲ行ヒテ印度人ヲ虐待セシカ、匪路斯王ハ、頗ル之ト反シ、大ニ力ヲ民事ニ盡シタリ、水道ヲ開キテ、茹牟那、及蘇都列侍ノ諸河ニ通シ、灌漑ノ便ヲ謀ルカ如キ是レナリ、——土具祿ノ朝、七十餘年、相傳ヘテ馬毛度王ニ至ル、

獅巖曰、興亡如反覆手、

龍潭曰、寧知天下事、變化紛似雲、

第六 章

帖木兒ノ來侵

馬毛度ノ時ニ當テ、印度大ニ亂レ、國內騷然タリ、摩爾汗ノ從弟沙賴克ハ、獨立シテ牟爾丹ニ割據シ、國裂ケテ二ト爲ル、此時中央亞細亞ノ皇帝帖木兒、印度ニ侵入セリ。

帖木兒ハ、千三百三十三年五月ヲ以テ生レ、其父ハ、布哈爾ノ西南カルシ、府外ノ地ニ王タリ、帖木兒幼ヨリ聰明、勇毅ニシテ機敏、裁決流ル、ガ如シ、身ヲ艱難流離ノ中ニ置キ、望ヲ將來ニ屬シ、自家ノ威力ヲ養フガ爲ニ、兵制ヲ整備スルヲ以テ先務ト爲シ、成吉思汗ノ律例ヲ採用シテ、編兵ノ基礎ト爲シ、撒馬爾罕ヲ以テ其都城ト爲シ、次第ニ四方ヲ經營シ、終ニ中央亞細亞ノ帝王ト爲レリ、是ニ至テ印度ノ國內亂ルヲ聞キ、九萬二千ノ兵ヲ募リテ以テ遠征軍ニ充テタリ、(九萬二千ノ數ハ、馬哈默德ノ位號ト同數ナリ、是レ帖木兒ノ故ラニ此數ヲ取リテ兵士ヲシテ吉兆ナリト云フ)此遠征軍中三萬騎ハ、右翼ニシテ、其列

隊ハ、現屯所、干達哈爾ヲ發シ、所羅門山間ヨリ進ミテ印度河ヲ越ヘ、牟爾丹府攻撃ノ命ヲ受ケタリ、當時牟爾丹ハ印度ニ於テ大都ノ一ナレハ之ヲ零取ノ以テ交戦ノ根據ト爲サント欲セシ也、故ニ右翼ノ列隊ハ、衆軍ニ先テ發シ、左翼三萬騎モ布哈爾ヲ發シ、印度河ヲ渡リ、ラゴルノ管領ヲ襲撃スベキ命ヲ受ケタリ、帖木兒、自ラ三萬二千ノ兵ヲ督シ、千三百九十八年三月ヲ以テ、撒馬爾罕ヲ發シ、テルメツドニ到リ、浮橋ヲ架シテ亞模河ヲ渡リ、進ミテ拔幹山(ブルカシ)與都克士ノ支脈ヲ踰ヘインデラゴニ赴キ、加非利斯坦ヲ攻撃セリ、此際帖木兒ハ、精兵一萬騎ヲ率ヒ、與都克士ノ支脈ヲ繞テ、パルドイスニ出デ、是ヨリ與都克士ニ向ヒ敵ノ不意ニ出テ、シテ、欲シ、最モ險隘ノ地ヲ冒シテ進ミタリ、然ルニ夏日山中ノ積雪稍ヤ柔滑ナルヲ以テ馬行シテ能ハサルカ故ニ、帖木兒ハ日間ノ進行ヲ停止シ、獸毛ヲ敷テ馬ヲ立テ炎熱減シ、雪層漸ク堅キヲ俟テ、夜ヲ冒シテ運行シ、忽チ山峯ニ達スルヲ得タリ、己ニシテ諸軍絶壁ヨリ或ハ伏シテ、雪層

チ背ニシ或ハ系繩ニ籠シ、各々其能クスル所ニ任セテ山麓ヲ下レリ、
(但シ帖木兒ハ、曳繩ヲ附着シタル一籃輿ニ乘ジ、兵士前後)帖木兒山ヲ超
ヨリ保持シテ下レリト云フ源九郎鶴越ノ師ノミニ非ス)エカメク河ヲ渡リ、長驅シテ加非利斯坦ニ入り、之ヲ突撃シ、土人大半ヲ
屠戮シ、鮮血淋々、山野ニ溢レタリ、是ヨリ便路ヲ取リ、カウークヲ經テ哈
布爾ニ赴キタリ、九月哈布爾ヲ獲シ、十月印度河ヲ渡リ、更ニトールシエ
ム河ニ向ヒ、尋テドハンエナブ河ヲ過ギ、トルンバ府ニ達セリ、
牟爾丹ノ攻圍ハ、六ヶ月ノ久シキニ涉リシガ、城兵饑餓ニ堪ズシテ竟ニ
出デ、降レリ然ルニ、當時霖雨連日、茹牟那河水溢レテ岸ヲ浸シ野生ノ
馬匹、飼草及水質ノ變換及ヒ温氣ニ堪ズシテ惡疫ヲ發シ、漸次ニ斃死シ
テ殆ント一馬ヲ餘サザルニ至レリ、己ニシテ帖木兒ノ兵來リ進ムト聞
キ遽ニ城塞ヲ發シ、ピア河岸ニ到リ、本軍ニ合セリ、時ニ右翼隊中復タ一
ノ馬匹ヲモ存セズ或ハ徒歩シ或ハ牛背ヲ假リ、其狀慘然タリ、是ニ於テ、
帖木兒ハ命シテ軍馬三萬頭ヲ給シ、以テ其舊ニ復セシメントセリ、諸軍

ピア河ヲ渡ルニ或ハ舟筏ヲ假リ、或ハ游泳シ、爲ニ三日ヲ費セリ、帖木兒
是ヨリピアノ右岸ヲ溯リ、一面ニハ以テ左翼ト會合スルカ爲ニシ、一面
ニハ以テチバルプール府民誅罰ノ爲ニセリ、曩キニ蒙古軍ノ牟爾丹ヲ
圍ムヤ、特ニ一萬騎ヲ分チテチバルプールニ屯セシガ、該府民ハ牟爾丹
ノ蒙古軍危急ナリト聞キ、之ヲ鑿殺セリ、帖木兒其罪ヲ問ント欲シテ此
舉アリ、然ルニ右翼ノ兵不幸ニシテ艱難ニ遭遇シ、遂ニ其志ヲ達スルコ
能ハサリキ、因テ道ヲ轉シテ南行セリ、

チバルプールノ住民ハ、帖木兒ノ來襲スルト聞キ、平原ニ位セルバドニ
ルノ堅城ニ據リテ固守セリ、十一月、帖木兒親ラ一萬騎ニ將トシテバト
ニルニ向ヒ、其餘ノ兵ニハ、輜重ヲ附シ、直道ヨリ特里ニ向ハシメ、バトニ
ルヲ拔キ、財貨ヲ掠メテ師ヲ班シ、セレスチー及フアチアバミニ赴キ、十
二月サミチニ於テ、本軍ニ會セリ、帖木兒此ニ陣スルヲ數日以テ糧車ノ
到ルヲ俟テ、己ニシテ左翼亦本軍ニ合ス、左翼ノ列隊ハ、哈布爾ヲ獲セ

シ以來、別路印度ニ向ヒ、沿途ノ種族ヲ征服シ、都府ヲ攻略スルヲ枚擧スルニ違アラズ、蓋シ該翼隊ハ亞特ニ於テ印度河ヲ渡リ、ラゴルニ直行セシモノト思ハル、

帖木兒ハサミチヲ發スルニ臨ミ兵ヲ分チテ三隊ト爲シ、本軍ハ直道ヨリ左右兩翼ノ列隊ハ、支路ヨリ特里ニ向ヒタリ、——本軍ハアツセンチトグロシスルト經テパニバトニ達シ右翼ハ茹牟那ノ河岸ニ築キタルドチユハンチマイ城攻略ノ命ヲ受ケカニグンチ發シ該城ヲ拔キ、再タヒ本軍ニ來會セリ、而シテ全軍ヲ擧ゲテ牟茹那河ヲ渡リルニ府ニ向ヒタリ、蓋シ府外良好ノ牧場多ケレハ、之ヲ掠取スルハ、騎兵ニ於テ、缺クベカラザル所ナリ、帖木兒ノルニ略取スルヤ、再タビドチユハンチマイニ歸リ二十八日ヲ以テ入城セリ、是ニ於テ帖木兒ハ將士ヲ會シ特里攻略ノ事ヲ議セシカ衆議ノ決スル所ニ據レハ、先ツ大ニ糧食其他軍用品ヲドチユハンチマイ城ニ蓄ヘ置キ、然ル後ニ特里封鎖ノ工ヲ起スニア

リ、乃チ蒙古人ノ慣例ニ依リ、兵ヲ四派ニ分チ命スルニ糧餉ノ掠奪及ヒ特里府蹂躪ノ事ヲ以テシタリ、

此時ニ當テ、帖木兒ハドチユハンチマイ城外ヲ視察シ交戦ニ便ニシテ敵軍ヲ誘致シ得ベキ地ヲ搜索セリ、適々一將アリ、帖木兒ニ謂テ曰ク、
|| 印度河ヲ渡リシヨリ、以來印度人ノ擒ニセラレテ軍後ニ繫カルモノ已ニ十萬人、概チ拜像ノ異宗ヲ信ゼリ、希伯來人アリ、一朝特里ノ蘇爾丹馬毛度ト戰チ交ユルニ及ベハ、彼レ機ニ乘シテ脱逸シ、我ニ抗敵スベシ、且ツ聞ク所ニ據レハ前日印度ノ歩兵一萬及騎兵若干、群ヲ率キテ特里ヲ出テ戰ハント欲セシ時ニ、俘虜ノ喜ビ眉目ニ顯レタリ、——ト蓋シ其喜ビシ所以ノモノハ、不日縛ヲ脱スルノ冀望アル所以ナリ、然ルニ蒙古人ハ、却テ之ヲ目シテ不軌ヲ謀ルト爲セリ、帖木兒之ヲ信シ嚴命ヲ傳ヘテ悉ク囚徒ヲ屠ラシメタリ、嗚呼俘虜ノ喜悅ハ、屠戮ヲ招クノ原因ト爲リ、十萬ノ生靈、一令ノ下ニ白刃ニ倒レ、瞬時ニシテ鬼籍ニ入ル、亦悲ム

ハシ、但シ其擒獲セラレタル婦女及糧車ニ至リテハ、帖木兒命シテ十夫、
毎ニ一士ヲ募リ以テ之レカ護衛ニ充テタリ、亦以テ蒙古軍ハ提携セル
糧餉及抄掠物件ハ饒多ナリ、トナ知ルニ足ル、

帖木兒ハ、ルニテ發シテ東進シ、諸將ヲ會シテ兵法ヲ論シ、此ノ如キ機會
ニ於テ、敵ニ克ツニハ、如何ナル方畧ヲ施シテ可ナルベキ乎ヲ討論セリ、
然シテ後ヲ兵ヲ旋シテ再々ビ特里ニ向ヒ、千三百九十九年、一月一日ヲ
以テ該府ニ達シ、茹牟那河ヲ渡リテ陣セリ、是レニ於テ蒙古兵ハ、例規ニ
由テ敵ノ襲撃ヲ警メ、露營ノ周圍ニ溝ヲ鑿リ、又柵欄ヲ設ケテ樹枝草葉
ヲ纏絡シ、柵後ニ野牛ノ四足ヲ縛シ、且ツ之レヲ連結シ以テ其軀觸行動
ヲ妨ケ、更ニ干盾ヲ駢列シテ、出入ヲ戒メ、然ル後ヲ始メテ帳幕ヲ張レリ、
印度蘇爾丹馬毛度ハ、意ヲ開戦ニ決シ、特里ニ出テ、蒙古軍ニ當レリ、馬
毛度ノ督スル所ハ騎兵一萬、歩兵四萬ニシテ、特ニ屬スルニ無數ノ象群
ヲ以テシ、軍裝最モ美麗ヲ盡シタリ、象ハ厚革ヲ以テ、全身ヲ蔽ヒ、以テ羽

箭及槍劍ヲ防キ、其大牙ニハ、毒ヲ施セル大刀ヲ裝ヒ、且ツ背上ニ小樓樓
ヲ設ケ、投石手及弓手等ヲ其中ニ挿入セリ、又兵士象群ノ間ニ立テ施火
セル樹脂或ハ石腦油壺ニ樹脂及石腦油壺ハ、今日ノ榴彈及「ブランド
ス」ス「ゲル」彈ノ類ニ「ナ」投シ、又鎗鐵火箭ニ「火」箭ハ、榴彈ヲ具セル「コ
ン」グレフ「火」ト大同小異ナリニ「ナ」乱射セリ、シ「エ」レフ「エ」ツ「ザ」ンノ説ニ
テ、破裂シ、其聲耳致ヲ穿ツ、疾雷ノ如クナリシト云ヘリ、據ン「バ」鐵鐵「火」箭ハ、地ニ墜
時ニ帖木兒ノ部兵ノ恐レタルハ、其新奇ナル武器ニ非ズシテ、却テ象群
ニアリシナリ、帖木兒之ヲ知リ早ク其妨害ヲ去ラント欲シ、左ノ如キ號
令ヲ下セリ、

- 一、象群進ミ來ルルハ、其脚間ニ投スルカ爲ニ、鎗把ヲ製セヨ、
- 一、象群ヲ驚カシ、其列伍ヲ乱サンカ爲ニ、野牛ニ一説ニハ駱駝、
- ノ頭部及腹部ニ尖針アル樹枝及施火セル木脂皮ヲ結束シ、敵陣ニ
向テ之ヲ驅逐セヨ

一、兵士ハ、羽箭ヲ乱射シ、且ツ刀槍ヲ以テ象鼻ヲ斬ルヲ主眼トセヨ、但シ、象ハ、堅牢ナル獸革ヲ以テ全身ヲ蔽ヒ、刺撃ニ便ナラザルヲ以テ、勉メテ刀槍ヲ口鼻ニ加ヘヨ、

此令ノ一タヒ下ルヤ、兵士ノ勇氣、大ニ倍蕪シ、果シテ能ク大功ヲ奏シタリ、是レ實ニ將帥ノ兵士ヲ駕馭スル所以ノ好手段ナリ、

馬毛度ノ戰隊ハ、右翼本軍、左翼ヲ以テ偏成シ、象群其前面ニ列シタリ、帖木兒ハ、例ニ依リ、戰隊ヲ二列ニ組成シ、屬スルニ本軍ヲ以テシ、先ツ側面ニ於テ戰ヲ開キ、兩軍叱咤奮戰シ、勝敗互ニ決セザル時ニ嘗テ、特里ノ守將シヤンマンスルハ部下ノ兵ヲ率キテ、直往突進シ、蒙古軍ノ本陣ヲ衝キシガ不幸ニシテ帖木兒ノ一子ノ殪スル所ト爲レリ、己ニシテ蒙古軍敵ノ象群ニ向テ迫撃シ、其鼻口ヲ截テ之ヲ走ラセシカバ、象群ハ、咆哮狂奔、反テ馬毛度ノ戰隊ノ兩翼ニ突入シ、向フ所抵觸踐踏セザルハナク、隊伍大ニ乱レタリ、帖木兒之ヲ窺ヒ、直ニ進撃ノ號令ヲ本軍ニ傳ヘ、更ニ象

群ニ突入シ、其大半ヲ殪シ、全ク敵ヲシテ敗走セシメ、尾メ特里府ノ壁下ニ薄ル、帖木兒機ニ乘シテ特里ノ防禦線ヲ視察シ、兵力之ヲ略取スヘキ否ヤヲ察スルカ爲ニセリ、然ルニ馬毛度ハ翌夜竊ニ後門ヨリ遁逃シタリ、是ニ於テ特里ノ府民ハ一月四日戰ハズシテ降り、蒙古軍縱ニ之ヲ掠奪セリ、

特里、己ニ陥キリ復タ抗敵ヲ試ムルモノナキヲ以テ、帖木兒ハ岡噶江ニ向ヒ、是レヨリ喜馬拉山ノ南麓ヲ繞リ、其軍ヲ旋セリ、是時ニ方リテハ、蒙古軍、専ラ掠奪屠戮ヲ事トシ、地方ヲ蹂躪スルノミニシテ復タ著ルシキ戰争ヲ見ズ、帖木兒ハ、某酋長ニ命スルニ茹牟那河ヲ遡リテ、各地ヲ蹂躪シ、希伯來人ヲ屠戮スベキヲ以テシ、親ラ兵ヲ帥キテ岡噶江ニ向ヒタリ、己ニ該河ニ到リ、一部兵ヲ對岸ニ遣ハシ、身ヲ本軍ニ督シ、河ヲ遡リ進ミテトクログヌル府ニ達シタリ、適々希伯來人四十八隻ノ舟筏ヲ假リ、岡噶江ヲ運行スト聞キ、遽ニ兵ヲ分遣シテ之ヲ追撃セシム、而シテ其

兵士ハ外勢ノ猛烈ナルヲモ顧ミズ、馬ヲ以テ流ヲ乱シ、或ハ羽箭ヲ發シテ敵ヲ叢射シ、或ハ舟筏ニ迫リ、刀ヲ揮ヒテ襲撃セリ、希伯人錯愕狼狽シテ措ク所ヲ知ラズ、其舟筏ノ大半、皆蒙古人ノ爲ニ奪ハレタリ、蓋シ帖木兒遠征ノ本旨ハ、回々教擴張ニアリト公言セリト雖、專掠奪ニ在テ、他意ナキニ似タリ、今試ニ之レカ一例ヲ舉ゲンニ、帖木兒一日岡噶江ノ對岸ニ於テ、印度軍ノ步騎、一萬許集合セルヲ窺ヒ自ラ手兵千騎ヲ率、井テ河ヲ渡リ、之ヲ撃テ走ラシタリ、當時帖木兒ノ旗下ニアルモノ、終ニハ僅ニ一百騎ニ過キズシテ、此等ハ岡噶江ノ鎖鑰ト名ケ、其東岸ニ接シテ、聳立スル山脉ノ險隘ニ於テ、敵軍ノ抗拒スル所ト爲リ、勇奮苦戰セリ、其他ノ兵士ハ、帖木兒ノ號令ヲ奉テ、駱駝、牛、羊、及ヒ金銀粧飾品ヲ抄掠シテ、之レカ警護ヲ擔當セリ、時ニ帖木兒殆ント危急ナリシガ適々本軍ノ部兵、疾驅シテ來リ援フニ會シ、僅ニ身ヲ以テ逃ル、トテ得タリ、此戰、木兒力戰シテ彼ノ險隘ヲ拔ント欲シ、進撃ノ號令ヲ傳ヘタリ、希伯來

人ハ、險ニ據テ固守シ十分ニ抗拒セントスルノ色アリシモ、蒙古軍ノ鼓聲忽チニシテ遠ク忽チニシテ近ク變化測ラレザルヲ以テ、大軍ノ來リ襲フカト訝リ、遂ニ守ヲ棄テ、奔竄シ、貨物若干復蒙古軍ノ有ニ歸セリ、且ツ此役ヤ軍隊一日ノ行程僅々タル里程ニ過キザリシハ、以テ抄掠物件ノ饒多ナルヲ知ルニ足ルベシト云フ、蓋シ帖木兒ノ意ヲ班師ニ決境ニ侵入シ又クル一ツヤ人叛乱セリトノ急報ヲ得タルニ由ル、帖木兒モ自ラ此二報ヲ以テ印度退陣ノ口實ト爲セリ

野史氏曰ク、帖木兒ガ兵隊ノ組織編成、及ビ其人才ヲ用ユルノ方略古今英雄ノ企テ及ブ所ニ非ズ、其能ク中央亞細亞ノ雄將悍將ヲ鍊リテ一團ト儼シ、雄大ナル霸業ヲ建テタルモノ、亦偶然ニ非ザル也、余聞ク、帖木兒人ニ語テ曰ク、他邦ヲ經畧スルハ、猶ホ將基ノ戲ノ如シ、ト故ニ彼レ日中ハ、將基ヲ勉メ夜ニ及ビテ始メテ施政ノ手段ヲ講究セリ、而シテ帖木兒カ終日演習セシ將基ハ、自ラ發明セシモノニシテ其基子ノ進退ハ、軍隊ノ進退ニ像ドリ、一進一退、必ズ其要地ヲ占メ

ザルベカラズ、故ニ帖木兒ノ將基ハ恰モ輓近ノ兵基ノ如シト云ヘリ、
 帖木兒ノ智畧雄膽、古今ニ傑出スルモノ、成吉思可汗以後一人ノミ、
 (帖木兒ノ編成シタル軍隊ノ組織及ヒ英雄ヲ駕馭セシ方畧等ハ本史
 ノ掲載スヘキ限ニ非ザルヲ以テ一切ヲ省キ、日帖木兒ノ傳ヲ草
 畧スル時ニ讓ルベシ、但ダ此ニ帖木兒ノ形勢ヲ他國ノ形勢ヲ推察スル手段ヲ
 畧述セシニ抑モ帖木兒ハ隣國ノ形勢ヲ他國ノ形勢ニ推察スル手段ヲ
 以テ派シ、其向フ所ハ、渺茫タル曠野ナレバ、之ニ假スニ略駝ヲ
 邦出スルナ、縱横自在ノ點策ヲ用ヒテ其敵情ヲ探訪セシ、疑ナク、而シテ
 察スルニ勉メタリ、帖木兒ハ分遣隊ノ報道スル所ニ由テ適當ナル籌
 策ヲ運ラセリ、又成吉思可汗ノ例ニ倣ヒ他邦ノ形勢ヲ察スルニ傍ラ
 通商ノ便ヲ假ル、故ニ中央亞細亞各地支那印度埃及亞刺伯西里亞等
 ヲリ歐洲諸國ニ至ルマテ悉ク商隊ヲ派シ、屬スルニ探偵吏員ヲ以テ
 ノ、此輩ハ商隊ニ從テ各地ヲ跋渉シ、其民情風俗ニ注目シ、特ニ君民
 ノ關係如何ヲ觀察シテ之ヲ具シ、且ツ帖木兒ハ常ニ内外ノ旅客
 ナリ、又特ニ委員ヲ置キ任ズル所ナシ、是レ他邦ノ形勢ヲ諳問センガ爲
 事ヲ搜索シ、以テ學士等出入ノ報告外國君主ノ帖木兒ニ對スル策
 節ヲ派報シテ要報ヲ帖木兒ノ企圖スル所ニ於テ不十分ナルキハ、別ニ使

報ヲ蒐集セシ、亦多シト云フ、帖木兒ノ思慮周到ニシテ、遺算ナキハ之レガ爲ナリ、亦一大政治家ナル哉。

帖木兒、羅保爾ノ總督幾儒爾汗ヲシテ代テフンジャフヲ鎮メシム、是
 ヨリ馬毛度特里ニ還リ、十二年ノ後、終ニ崩シ、其朝亡ビタリ、――大臣
 度刺ナルモノ衆望ニ順ヒテ王位ニ即キシガ久カラズシテ幾儒爾汗ノ
 爲ニ亡ボサレ、幾儒爾ハ帖木兒ノ名ヲ以テ其國ヲ統治セリ、
 幾儒爾ノ子孫、千四百七十八年其國ヲ阿富汗人毘路路提ニ傳ヘシガ
 其ノ後、三世ニ至リテ暴逆ヲ極メシカバ、勢威大ニ衰ヘ、國中獨立ヲ謀
 ルモノ踵ヲ接スルニ至ル、就中ブンジャフノ總督度刺路提ハ、哈布爾ニ
 臻リテ帖木兒ノ後裔婆伯爾ニ見エテ、共ニ印度ニ入り、國家ヲ鎮定シ、帖
 木兒帝國ヲ興サンヲ請フ、是ニ於テ婆伯爾印度ニ進入セリ、
 龍潭曰、所謂猛氣吞宇宙者、

獅巖曰、帖木兒、東洋之漢尼巴爾也、而其術畧大過之、是其所以速奏此奇
 功也、

第七 章

宗教 其一

釋迦牟尼ノ小傳

印度、腐敗ノ時ニ當テ、天一大聖人ヲ生シテ、世界ノ溺ヲ濟フ。釋迦牟尼佛、實ニ其人ナリ。其理ハ精微ナリ。其教ハ神靈ナリ。其道ハ豁大ナリ。印度哲學ノ大成シテ、純精ノ極ニ達シ、印度宗教ノ大成シテ、絶美ノ域ニ躋リタルモノハ、實ニ釋迦牟尼ノ力ニ賴ル。

釋迦牟尼ハ、一名ヲ悉達瞿曇ト稱ス。迦毘羅僑窳都首圖駄那王ノ太子ニシテ、其ノ母ヲ摩耶ト稱ス。大約紀元前六百二十三年ヲ以テ(佛敎家ハ、同ト爲シ、紀元前五百四十四年ヲ以テ寂滅ト爲ス、泰西哲家ハ紀元前五百五十年ヲ以テ降誕ト爲シ、同シキ四百七十七年ヲ以テ寂滅ト爲ス、蒙古源流ト爲ス、法顯法師ノ傳ニ據レハ、殷ノ代ヲ以テ降誕ト爲シ、同シク武乙甲午ヲ以テ寂滅ト爲ス、周書異記ニ據レハ、周昭王甲寅ヲ以テ降誕ト爲シ、同シキ穆王甲子ヲ以テ寂滅ト爲セリ、但シ、聖點記ニ據レハ、周靈王乙卯ヲ以テ降誕ト爲シ、同シキ貞定王甲戌ヲ以テ寂滅ト爲ス、又一說ニ據レハ、紀元前五百五十二年ヲ以テ降誕ト爲シ、同シキ百七十二年ヲ以テ寂滅ト爲ス、今暫ク佛敎家ノ說ニ據ル)

中部印度ノ地ニ生ル。迦毘羅僑窳都ハ、波奈羅斯ヲ去ル、東北一百英里喜馬拉亞山ヲ距ル、大約四十英里ナル古波那河ニ瀕ス。其出生ニ關シタル奇事異蹟ハ、種々アレモ多クハ、是レ佛敎家ノ妄誕ニ出ルモノニシテ、其眞僞虛實ヲ問ハス、皆取ラザルガ故ニ今マ此ニ贅ヒズ。其母摩耶ハ、産後數日ニシテ歿ス、其父ノ統御セシ王國ハ、今日ノ標準ヲ以テ之ヲ指示スル、容易ナラザレモ、中印度ニ於テ、重要ナル位置ヲ占メ、富ミ且ツ尊ク、當時ノ仰ク所ト爲リシヲ疑フベカラザルカ如シ。

釋迦、幼ヨリ温粹恭敬、學ヲ國中ノ賢儒ニ受ケ、稍々長シテ聰明敏達、遠ク衆師ニ超越シ、軀幹雄壯ニシテ武藝ニ熟シ、膂力人ニ絶レタリ。年十六、首布羅不駄王ノ皇女耶素駄羅ヲ娶リシガ、其妃ハ穎敏ニシテ太子モ亦深ク之ヲ愛セリト云フ。

首圖駄那王ハ、其子ノ將來大名ヲ轟サン、ヲ欲シ、大器晚成ヲ望ミシガ

竊ニ以爲ラク、若シ之ヲノ世間的ノ事情ヲ知ラシムルハ其英敏ナル却テ其思想ヲ憂苦ノ域ニ傾クルニ至ンコトヲ恐レ太子ヲノ之ヲ知ラシメザラントト欲シ是ニ於テ宏大ナル宮殿ヲ造リ、秀潔ナル庭園ヲ設ケ佳木奇草珍禽異獸皆其中ニ貯ヒ、美姝麗姬ヲノ太子ニ侍セシメ其心意ヲ娛マシメントセリ、其華奢ノ景况ハ、實ニ非常ナリキ、然レモ太子ハ、心ヲ玲瓏高妙ノ天地ニ置キ、此ノ如キ歌舞ノ世界ニアリテモ其快樂ノ奴隸ト爲ラザリシナリ、此ノ如キ富貴ノ樂愉快ノ欲ハ釋迦ノ希望ニハアラザリシナリ、飄々タル春光モ鳩毒ト思ヒ喃々タル鳥語モ朋友トシナラザリシナリ而シテ釋迦常ニ謂ラク世間肉體的ノ快樂ハ皆是レ虛空タリ暫且瞬時ノ間ニ過ギサル也。ト忽チ見ル宮中皆眠ニ就キ、更深ク燈枯レントスル時釋迦ハ、飄然馬ニ乘シテ宮ヲ出デ深山ニ入り、徐ロニ生死ノ問題ヲ考究セント欲シ、行々アノニ河ニ至リ、其馬モ、其衣服モ、其修飾モ一切之ヲ從者ニ授ケテ王宮ニ歸ラシメ自ラ途ヲ摩竭陀國ノ

首府ヲシヤグリハニ取リ、徒步シテウムウエラノ山林ニ至リ此地ニ於テ、婆羅門教ノ隱士ヲ訪ヒ其徒弟ト爲リテ道ヲ學ビシモ、久シクシテ其利ヲキナ知リ、他ノ五人ヲ伴ヒ其師ヲ去リテフウダガヤニ近キ深林ニ入り觀念斷食ニ數年ヲ送レリ、當時釋迦ハ、一日僅ニ米粒數箇ト水トナ食スルノミ、然レモ未タ神智ノ靈源ヲ發明スルコト能ハザリシカバ、是ヨリ、再ビ山中ニ入り、菩提樹下ニ坐チ占メ、自ラ誓ヒテ曰ク、道成ラズンバ、此坐ヲ去ラズト其夜、釋迦ハ哲學ノ極致ヲ發明シ、天明ニ先チテ其心全ク開達セシコト、恰モ蓮華ノ開ケシカ、如ク最神智ノ光明即チ四諦朗然トシテ其心ヲ照セリ釋迦ハ、食料ヲ減セシカ爲ニ、却チ身體疲勞困憊ニ至レリ、已ニシテ生氣ヲ復シ、以爲ラク、最上ノ神智ハ決シテ身體ノ苦行ヲ以テ之ヲ致スヘカラズ、須ラク靈心ヲ發泄セザルヘカラスト是ニ於テ一箇ノ貴女之レニ食ヲ贈リタルヲ受ケテ釋迦、堅忍刻苦スルコト、凡ソ六年、宇宙ノ真理ヲ看破シ、一世ノ風波ヲ洗滌セント欲シ、山ヲ下リ教化ヲ施ス、五十年社會ノ上ニ真理ノ光輝ヲ發

輝セリ七十二歳ノ後ニ、多シ靈鷲山ニ在テ、法華ヲ説キ、中道實相ノ妙理ヲ顯ハシ七十九歳ニ或ハ八十斤稱スニ拘尸那城ニ波奈羅斯府ヲ距ルヲ百廿哩ニ於テ、五月水曜日ノ天明ニ當テ、其子弟ニ圍繞セラレテ成佛セリ、釋迦ハ自ラ其教ヲ記セシヲナシト雖、弟子其教旨ヲ受ケテ能ク之ヲ保存シ、今日ニ及ベリ

百論ノ疏ニ釋迦出時、值十八智人、羅什云三種六師、合十八部、大同小異、皆以苦行爲本、初六誦四韋陀、中六自稱一切智、即是六師、後六得五神通、詳此意、十八人、皇法師云、初六從聞慧生、阿闍迦等也、中六從思慧生、若提子等也、後六從修慧生、須跋陀等也、此皆勒沙婆部中枝流出トアリ、此ノ初六ナル阿闍迦、所謂阿羅々仙人ナリ、大涅槃經ノ音義ニ阿羅々、此云懈怠、獲通定者也、又陀羅々、仙有作阿羅邏、古音云無醫仙也トモ見ユ、又此部ニ阿闍迦羅仙人ト云フモノアリ、是レモ大涅槃經音義ニ阿闍迦、此云懶戲子、坐得非想定、獲五神通、飛入王宮、遂失

通定、途步歸山トモ、阿闍迦古音云勝也、亦名盛也トモアリ、然ルニ、此二人ナルモノハ、共ニ釋迦牟尼ノ師ナルカ如シ、即チ百論ノ疏ニ佛未成道時、就此二人受學、涅槃經云、從阿羅々學無想定、從阿闍迦學非想定、此二人既ニ佛師ト云ヘリ、左レハ釋迦牟尼ガ九十五派哲家ノ學ヲ研究シテ、以テ衆智ヲ集メタルヲ推想セラレタリ、

釋迦牟尼カ所説ノ教ハ五時四教ニ分レテ、各々其主義ヲ異ニセリ、抑モ此五時四教ト云フハ、釋迦三十歳ノ時、成道ノ初メ、寂滅道場ニ佛陀伽耶ニ於テ、法身ノ大士ノ爲ニ、唯一大乘ノ法ヲ説ク、之ヲ第一華嚴ノ時ト名ク、其後チ波羅奈國鹿野ニ於テ、因緣所生ノ實理ヲ説キ、人類ノ同一平等ナルヲ示シ、彼ノ有神説ノ謬妄ナルヲト四姓區分ノ非理ナルヲトチ明ニシ、善因善果、惡因惡果、自業自得ノ常理ヲ説キ、他ノ邪因緣無因果ノ説ヲ力破シタリ、是ニ於テ婆羅門教ノ巨魁タル、三迦葉舍利弗目連ヲ始メトシ、一万二千ノ婆羅門教徒、其過チ悛メ佛ノ弟子ト爲リ、四

方ニ遊説シテ十二年間其教ヲ弘ム、其經甚々多シト雖モ、同一主義ニシテ皆小乗ノ教ナレハ、其所説ノ經ヲ集メテ第二鹿苑ノ時ト名ク、而シテ後ヲ淨名室内ニ説ク所ノ楞伽經、切利天上ニ説ク所ノ經大集經、及ヒ祇陀園中楞山中ニ説ク所ノ楞伽經、切利天上ニ説ク所ノ經大集經、及ヒ祇陀園中八ヶ年三乘共學ノ人ノ爲ニ説キタル衆經ヲ合シテ第三方等ノ時ト名ク、——其後二十ヶ年、十六會上ニ説ク所ノ經ヲ第四般若ノ時ト名ク、前ノ方等ハ、大小兼學ノ教ナリ、今ノ般若ハ唯一大乘ニシテ小乗ヲ混セズ、是ヲ以テ佛門ノ子弟或ハ小乗ヲ信シ、或ハ大乘ヲ信シ、或ハ兼學ヲ信シ、其小乗ヲ信スルモノハ大乘ヲ疎ンシ、大乘ヲ信スルモノハ小乗ヲ棄テ兼學ノ方等ヲ信スルモノハ、其兩宗ノ一邊ニ偏スルヲ輕ンシ、自ラ是トシテ他ヲ非トス、是ヲ以テ、釋迦最後ニ法華ヲ説キテ、其本心ヲ明ニセリ、子弟始メテ、迷夢ヲ破リ、悉ク一佛乘ニ入ル、一佛乘ハ、衆生心性ニ具スル所ノ理ニシテ方便ハ、其對スル所ノ機根ニ應シテ利益ヲ施ス、便宜

主義ナリ、小乗ハ、彼ノ異論者——即チ佛家ニテハ外道ト云フ——ニ對シテ正見ヲ示ス、所以ニシテ大乘ハ、利他主義ニシテ、聖人行フ所ノ大道ナリ、方等ハ、大小兼用シテ、自利ヲ前ニシ、利他ヲ後ニス、是レ初メヨリ大乘ニ入ルヲ能ハザルモノニ對シ、之ヲ説ク、法華、獨リ對スル所ナクシテ直チ釋迦ノ本旨ヲ明ニス、故ニ之ヲ最上ノ第五時ノ教ト爲ス——蓋シ時ヲ以テ五ニ分ツモ教ニ就テ之ヲ論スレハ、四アルノミ、華嚴ト般若トハ、同一大乘ナルカ故ニ、合シテ一教ト爲ス、但タ其説ノ前後アルカ爲ニ、之ヲ分テ二時ト爲ス、而シテ後世華嚴般若ヲ弘ムルヲ唯大乘宗ト名ケ、鹿苑三藏ヲ弘ムルヲ唯小乗宗ト名ケ、方等ト諸經ヲ弘ムルヲ大小兼宗學ト名ケ、法華ヲ弘ムルヲ、最上乘宗ト名クト云フ、——

蓋シ釋迦牟尼ノ發明シタル主義ハ、一言以テ之ヲ蔽ヘハ、因緣生ノ三字ニアリ、——從來印度ノ諸哲家、雲ノ如ク輩出シ、甲論シ、乙駁シ、理論各々一ナラズ、所行モ亦各々同シカラズト雖モ、多クハ是レ、因果ノ理ニ拘泥

シテ、天地万物ノ原因及ヒ歸處ヲ求メントセシカ爲ニ、却テ哲學ノ大本領ヲ失スルニ至レリ、然ルニ、釋迦牟尼ハ、衆說ヲ網羅シ、群智ヲ統合シ、活眼洞識、古今ヲ徹破シ、因ト縁ト相和合スルニ非サレハ、決シテ果ヲ生スルヲ能ハズト云ヘル一新主義ヲ唱へ、諸哲家ノ說ヲ力破シタリ、因ハ親因トテ直接ノ原因ヲ云ヒ、縁ハ疎縁トテ補助ノ原因ヲ云フ、例セハ茲ニ客觀的ニ於テ光明ヲ以テ親因トスレハ、暗黒ハ疎縁ト爲リ、因縁相和合シテ色ト云ヘル結果ヲ生スルカ如シ、釋迦牟尼ハ、此哲理ヲ四諦十二因縁ニ應用シテ以テ我空法有テ主張シ、一切ノ衆生ヲ濟度シタリ、釋迦牟尼ガ新發明ノ主義云々一段ハ、無邊居士ノ說ニ據ル是レ吾人ノ心ヲ獲タル所アレハナリ、

初メ釋迦牟尼ノ世ニ出ツルヤ、印度ノ哲家皆邪見ニ傾キ、私欲穢亂、至ラザル所ナク、社會ノ人心、零落慘憺ノ中ニ沈淪シタリ、釋迦牟尼起テ至道ヲ以テ教ヲ示シ、聖德ヲ以テ民ヲ化スルニ及ヒテ、恰モ太陽一輝、群妖百邪其影ヲ留メザルカ如ク、印度帝國維新ノ運ヲ開クニ至レリ、當時額訥特柯克中天竺ニ四可汗アリ、其一チ摩竭陀國ノ彬巴薩刺汗ト云ヒ、幹喇克城ニ住ス、一チ勃沙拉國ノ巴喇哈訥資達汗ト云ヒ、外沙拉城ニ住ス、一チ巴特沙拉國ノ巴喇迪岳達汗ト云ヒ、一チ穀楚織巴喇國ノ烏迪雅訥汗ト云フ、各々三十二國ヲ領セリ、烏迪雅汗ノ子班達巴汗子五人アリ、幼子魯特ノ汗雅爾隆氏ノ祖タリ、此等ノ諸國ハ、皆釋迦牟尼ノ教ニ化セラレタルナリ、

釋迦牟尼ノ世ニ出ルノ初メニ當リテ、諸派ノ弊其極ニ達シ、國人ハ更ナリ、獸類ニマテ及ボシタルカ如シ、西域記阿耶種法ノ下ニ大城東、兩河、交廣十餘里、東合流口、日數人、自溺而死、彼俗以爲、願求生天、當於此處、絕粒自沈、沐浴中流、罪垢消滅、是以異國遠方相趨、卒止七日斷食、後絕命トアリ、斷食ノ絶命スルニ至レルハ、即チ是レ自餓主義ノ弊、之ヲシテ然ラシムルナリ、又云ク、至於山、獐野鹿、群遊水濱、或濯流而返、或絕

食而死、當戒曰王之施也、有一獼猴居河之濱、獨在樹下、屏迹絕食、經數日後、自餓而死、トアリ、事奇異ニ涉レルカ如シト雖_レ亦其弊ノ極度ニ達シタルヲ知ルベシ、又云ク故諸外道、修苦行者於河中、立高柱、日將旦也、便即昇之、一手一足、執柱端、踊傍棧、一手一足、虛懸外伸、臨空不屈、延頸張目、視日右轉、逮乎曛暮、方乃下焉、若此者其徒數十、冀斯勤苦、出離生死、或數十年、未嘗懈怠トアリ是レ末派ノ徒カ獼猴ニ倣ヒテ斯ル行ヲ爲ス者ナリト知ラル、又大涅槃經ニ外道九十五種皆趣惡道トアル所ノ音義ニ外道者邪見猥雜、不堪僕說、所行所執、各々不同、今且畧舉數般以明差別、所謂數論勝論執我計常、五熱炙身、編椽臥棘、塗炭掬食、翹足裸形、自餓投河、鷄狗等戒、板衣芒草、赴火投巖、矯亂鬪、習諸邪見、無利勤苦、不得解脫、是故經言皆趣惡道云々トアリ、此ノ如キ濁風積弊ヲ一洗シテ清明純潔ノ天地ヲ更メ造リタルハ、實ニ釋迦牟尼ノ功ナリト知レバ、今日佛教ノ徒ガ其功德ヲ稱讚スルモ、無理ナラヌ事共ナリ、

(一) 印度ニ於テ、諸哲學、諸神學、諸宗教ノ諸道ヲ指シテ外道ト云フ、猶ホ彼ノ耶蘇教徒ノ他ノ教徒ヲ指シテ、異教人ト言フカ如シ、元來外道テフ語ハ、四吠陀ノ論ヲ奉スル梵志ヨリ他道ヲ貶セル語ヲ、佛教徒ヲ始メトシテ、之ヲ倣ヒタルニ由ルト云フ、然レ_レ外道テフ語ハ、安當ヲ欠クカ故ニ、余ハ一ニ皆之ニ代ユルニ哲家等ノ名辭ヲ以テシタリ、又云ク、當時諸哲家ノ數、陸續トシテ、勝ヲテ數フベカラズ、楞伽經ニハ「百八部邪見」トアレ_レ、過リニ多數ナリ、餘ノ經論ドモニハ「九十六種外道」ト云ヘルソ多カル、說一切有部律ニ「外道六師、各出十六種、合九十六種是也」トアリ、又大毘盧遮那經ニ「三十種外道」ト云ヒ涅槃論ニハ「二十種外道」ナドモ云ヘリ、斯クテ右ノ多數ハ、蓋シ佛教ヲモ入レテ九十六種トハ云ヘリ、即チ分別功德經ニ「九十六道之中、佛以爲其最」ト云ヘルニテ知ルベシ、又大集經ニ「佛教ノ事ヲ勝於一切九十五道」ト云ヘルモ佛道ヲ入レテ九十六種ノ意ナリ、

抑モ釋迦牟尼ガ益世ノ卓識ヲ以テ印度ノ哲學ヲ大成セシヨリ印度ノ社會一新シ印度ノ文明至隆ニ達シ而シテ此文明ノ光彩四隣ニ發揮シ西ハ埃及ニ入り羅甸希臘ニ亘リ終ニ歐洲ヨリ亞米利加ニ瀰蔓シ(事載セテシリツセルノ萬國史ニアリ)又東ノ方ハ中央亞細亞ヲ貫キテ支那ニ入り終ニ我ガ日本ニ來レリ亦盛ナル哉

野史氏曰ク釋迦牟尼ノ法幢ヲ振フヤ泄々者流ノ妖言妖行一世ヲ欺蔽スルヲ見テ快刀截斷空文ヲ掃蕩シ雷霆ヲ青天ニ飛ハシ龍蛇ヲ平地ニ起シ常ニ斷頭上ニニ在テ活ヲ求ム所謂ル宇宙手ニアリ万化身ニ生スルモノニ非ズヤ而シテ其識以テ百世ヲ照スニ足リ其德以テ億兆ヲ服スルニ足リ其膽以テ万夫ヲ壓スルニ足リ其器以テ群民ヲ化スルニ足リ印度新文明ノ基礎ヲ創建シ東方亞細亞ノ精神ヲ更造シタル者ハ實ニ釋迦牟尼ガ一個好頭腦ヨリ出ツ嗟乎亦偉ナル哉(傑爾曰ク)一代事迹ノ由テ以テ興ル所ノモノ之レヲ一世ノ本領

ト謂フ此本領ナルモノハ必ズ當世ノ哲家ニ於テ之ヲ綜ブルモノナリト印度ノ本領ヲ綜ベタルモノハ釋迦牟尼實ニ其人ナリ

獅巖曰明珠在手弄去弄來

龍潭曰釋迦牟尼於本源上有所見自修自行自藏自發自學自教一視一聽一言一動一思一慮處々無碍在々顯靈其切要則在乎識一字新約書曰由靈而生者靈也

又曰米峯居嘗評釋迦曰釋迦到底一大哲家平等視一切平等施一切使其生于今日則亦不外于英蘭麒麟華盛東一流之人也蓋然

第八 章

宗教 其二

佛教ノ興廢

釋迦牟尼、新哲學ヲ大成シ、新宗教ヲ創建シ、改進黨主義ヲ實行セシヨリ、舊來ノ陋習、其跡ヲ絶シ、婆羅門教徒ノ如キ、靡然トシテ屈服シ、門閥ヲ以テ他ノ種姓ヲ抑壓セザルニ至レリ、然ルニ釋迦牟尼ノ滅後、佛教ト婆羅門教ノ諍論軋轉、日ニ甚シク、一轉シテ戰爭ト爲リ、印度ノ文明ヲシテ、守舊ノ域ニ復ラシメタリ。

釋迦牟尼滅後、數十年ヨシテ、婆羅門ノ徒、其影ヲ潛メテ、首ヲ出サバルモノ、俄ニ起テ、佛教ニ抗爭シ、或ハ佛語ヲ變シテ己レノ主義ニ附會シ、或ハ王侯ニ游說シテ佛寺ヲ廢セシム、祇園精舍ノ毀壞セラレタルモノ甚タ多シ、是時ニ雪山ノ二大師——商那和修末田地——力ヲ盡シテ佛教ヲ保維シ、婆羅門教ニ抗抵シタリ、——滅後百二十年ノ頃ニ當テ、毘多ノ明

師、内ニ起リ、阿育ノ英主國ニ出テ、共ニ明智卓識ヲ以テ、一世ヲ風動シ、力ヲ協セシ心ヲ同シクシ、婆羅門教ノ勢威ヲ挫キ、再々ヒ法幢ヲ建立シ佛教ヲ中興セリ、阿育王天下ニ散乱セシ所ノ佛教ヲ大成シテ、之ヲ綜合シ、教規宗則ヲ一定シタリケレハ、佛教是ヨリ振興ス、——阿育王、佛舍利ヲ藏スル數万ノ寶塔ヲ建立シ、皇子摩訶因陀羅亦大ニ佛教ヲ弘布セリ、摩訶因陀羅ノ姉僧伽密多自ラ進ミテ資財ヲ投シ、堂塔伽藍ヲ建立セリ、——今日錫蘭地方ノ土民、深ク此皇子皇女ノ遺德ニ感佩シ、オルゴツト氏ノ創立シタル祇智協會ノ會堂ニモ亦此皇子及ヒ皇女ノ肖像ヲ掲ケタリト聞ケリ、

其後、毘多ノ五弟子各々自家ノ見識ヲ立テ、佛教分レテ數派ト爲ル、ル初メ上座太宗ノ兩部ヲ争ヒ、遂ニ又十九部ニ分レテ相争フニ至レリ、是ニ於テ乳中ニ水ヲ和シタルカ如ク、法脉漸ク微弱ナリシガ、和合ノ僧林爭論ヲ起シ、教徒中、骨肉相殘ヒ、内ハ益々乱レテ、外ハ愈々其虛ヲ窺フモノ

多ク婆羅門、再タヒ佛教ヲ撲滅セント欲シ、勢甚ク熾シナリ、——馬鳴、英豪ノ姿ヲ以テ、特ニ佛道積衰ノ時ニ當リテ、縱言濶歩月氏土ノ皈依ヲ得、毘羅無我論ヲ造テ、婆羅門教徒ヲ壓伏セリ、——馬鳴明智辨才、善ク言論ニ通ズ、其始メ外宗ニ從ヒシモ、終ニ心ヲ佛教ニ回シ、一世ノ木鐸ト爲ル、——龍樹共後ニ出テ、能ク内ヲ固クシテ、外ニ當リ釋迦ノ芳ヲ繼ギ、佛教ノ光彩ヲ發揮シタリ、——龍樹ハ、南天竺ノ人ナリ、傳說ニ云ク、始メテ生レシ時ニ龍宮ニ入ルニ由テ始メテ成道ヲ得タリ、故ニ龍樹ト號スト、龍樹天真秀穎、天文地理其餘ノ道術皆綜核セザルハナシ、或ハ云フ、龍樹一日月論三昧ニ入り、唯法音ヲ聞テ形相ヲ見ズ、弟子提婆之ヲ識ル、曰ク、——師佛性ヲ示ス、聲色ニ非ズ、——ト龍樹乃チ法ヲ提婆ニ付シテ、復タ三昧ニ入ル、

龍樹ノ滅後、提婆其法ヲ繼キシモ、是時ニ婆羅門ノ勢復タ盛シニ、傾軋ノ極、終ニ提婆ヲ殺シ、隨テ佛教ヲ覆滅セントシタリ、法戰連年、更々勝敗ア

リ己ニシテ、滅後九百年ノ頃ニ當ル、無着天親出テ、英邁ノ才ヲ以テ講堂ニ上大ノ彌勒ヲ請シ、小乗ノ俱舍、大乘ノ瑜迦、唯識等ノ論ヲ著ハシ、婆羅門教ヲ說破シ、小乗ヲ抑ヘテ大乘ヲ闡揚ス、是ニ於テ佛教ノ光輝復タ印度ヲ炳耀セリ、——然ルニ數百年ノ間、婆羅門ト佛教トノ諍論法戰ニ亘リシモ、婆羅門教徒未ダ全局ノ勝ヲ制スルニ至ラザリケレハ、遂ニ詭策ヲ運ラシ、陽ニ釋氏ノ服ヲ着シ、僞テ佛ノ弟子ト爲リ、兵ヲ興シ、國ヲ乱サント欲シタリ、彼レ謂ラシ、若シ戰勝ツ時ハ自ラ王位ニ上リテ意ノ如ク佛教ヲ撲滅セン、勝ツト能ハサレハ罪ヲ釋氏ニ歸シテ王ヲシテ之ヲ制壓セシムベシト、其徒ヲ集メテ兵ヲ起シ、國王檀彌ヲシテ、其術中ニ陥ラシメ、寺ヲ毀テ僧ヲ屠リ、經典ヲ燒カシム、己ニシテ印度全部ノ戰爭ト爲リ、結局佛教其敗衄ヲ取り、聲價地ニ墜テ、教權更ニ婆羅門教ノ手ニ落ツルニ至レリ、

(釋迦牟尼ノ墳墓ハ中天竺佛陀加耶村ニアリ、其高サ大約八丈餘、其周

園大約十餘丈モアリ、其墳戸ヨリ凡ソ一丈七八尺計リコシテ、其正面ニ三尺四五寸ホトノ黄金ノ釋尊ヲ坐シ其下ニ園大ナル穴ヲ鐵ノ圓板ヲ以テ蓋フト云フ、事載セテ北島道龍翁天竺行路次所見コアリ聞ク佛敎徒ノ婆羅門ヨリ敗績ヲ蒙レル時ニ、婆羅門敎徒來リテ此大墳ヲ粉碎セントセシニ、其墳偉大ニシテ且ツ堅牢ナルカ故ニ、遂ニ之ヲ破壊スルヲ能ハス、之ヲ瘞埋シテ去リシト云フ、後チ一ニ有力ノ人士之ヲ補修スルモノアリト雖、氏之ヲ挽回スルヲ能ハス、今日ノ如ク陵夷衰廢ニ至ラシメタリ、然ルニ今ヨリ二十年前、英國女皇意ヲ「ミトロギ」(古物保存學)ニ盡シ、印度政府ニ命シテ此大墳ヲ掘ルヲ着手セシメタリト云フ)

佛敎壞敗セシヨリ、婆羅門敎、益々其勢力ヲ逞クシタリシガ、全國ノ人民日ニ之ニ歸嚮シ、終ニ此宗ヲ指シテ「ヒンヅル」ト稱ス、即チ印度ノ國敎ト云フヲナリ、婆羅門一ニ之ヲセコズム宗ト稱シ、分レテ三十餘派ト爲リ、

皆盛ナリ、然ルニ佛敎ハ委靡敗壞ノ餘皆去テ他邦ニ入り、印度ノ文明地ニ墜チ、國力亦タ萎縮シテ伸暢セザル至レリ、

野史氏曰ク、余聞ク獨逸ノ「サンスクリット」博士オルデンブルヒハ、印度ニ留學スルヲ數年、印度史ヲ研究シ、其議論確實ニシテ、浮泛ナラズ、其說ニ曰ク、印度ハ炎熱ノ邦ニシテ、禾稷ノ蕃殖ナル全世界中、其比ヲ見ズト謂フモ可ナリ、是以テ人民ノ欲望甚ダ充切ノ敢テ他ニ求ムルノ意ナシ、然レハ其人民ノ精神氣象ハ「チーフデンケン」的ニ傾キ、内部ニ汲々トシテ、他邦ニ向テ、其方畧對交ノ道ヲ講スルヲ知ラズ、唯ダ炎熱ノ爲ニ制セラレ、間暇サヘアレハ、懶惰安眠スルノミ故ニ、人民ノ氣力精神早ク萎靡腐敗シテ、毫モ堅固耐忍スルヲ能ハズ、是レ其一時蔚然トシテ、光彩ヲ發シタル文明ノ精神モ亦早ク消滅シ了タル所以ナリ、即チ彼ノ「サキヤ」モノ、「ブジイス」モス、(釋迦ノ敎ヲ云フ)ノ如キモ、世人ノ意想外ニ早ク衰へタルモ亦此理ニ由ルヲナカラシ耶

ト野史氏曰クホルデンプアルヒ氏實驗ノ語亦翫味スベシ、
 獅山巖曰、人興教興、人亡教亡、

第九章

宗教 其三

宗教ノ傳紹

釋迦牟尼ガ發明シタル佛家哲學ハ、高遠玄微、先賢ノ未タ發セザル所ヲ
 發シ前古ノ未タ論セザル所ヲ論シ、靈妙精大ノ極度ニ達シタリ而シテ
 佛氏ノ諸哲家此哲理ヲ研究シ且ツ之ヲ應用スルニ及ヒテ各種ノ異論
 ナ其間ニ生シ分レテ數派ト爲レリ、

小乘ニ於テ、夙ニ上座太衆ノ兩部アリ釋迦牟尼ノ滅後二百年ヨリ四百
 年ニ至ル、此二百年間ニ諸家交々異論ヲ主張シ、遂ニ分裂ノ兩部ヨリ十
 八部ヲ出スニ及ビタリ、其大要、一切實有ヲ主張スル所ノ守舊的ノ論者
 ト一切皆空ヲ主張スル急進的ノ論者トノ諍論ニシテ其能ク後世ニ行
 ハレタルモノハ實ニ此兩種ノ主義ナリキ、——實有論ハ即チ蔭婆多部
 ニシテ、同宗ニハ本論ニ六足アリ、發智アリ、釋論ニ俱舍論アリ、——又皆
 空論ハ、即チ經量部ニシテ、訶梨跋摩ノ成實論、此宗義ニ同スト云フ、——然
 ルニ此兩派ノ諍論ハ結局一切皆空ノ論最モ其多キヲ占メ、一轉シテ大
 乘論ト爲ル、——大乘ニ於テハ、六百年ニ馬鳴起信論ヲ作り、真如緣起ノ
 法門ヲ顯ス、別ニ一經ニ依ルニ非ザレハ、之ヲ大乘通申論ト稱ス、七百年
 ニ龍樹智論中論等ヲ造リテ般若ノ真理ヲ主倡シ、之ヲ提婆等ニ傳フ、即
 チ大乘一切皆空論ナリ、九百年ニ、無著親シク慈氏ノ瑜伽ヲ傳ヘ、自ラ攝
 大乘論ヲ作り、其弟世親論ヲ作りテ之ヲ解釋シ又唯識三十頌等ヲ作り
 チ深密ノ奧義ヲ明ニシテ之ヲ護法等ニ傳フ、即チ大乘ノ一切實有論ア

法華、涅槃、楞伽、華嚴等ノ諸大乘哲學、相繼テ印度ニ起リシト雖、印度ノ本國ニ於テ、大乘哲學ノ發達セシモノハ、中觀、瑜伽、即チ三論法相ノ二宗アルノミ、(印度哲學小史ニ云ク、唐ノ義淨三藏ガ印度留學中、故郷ニ送レル南海寄歸傳ニ——竺土大乘、無過二宗、一則中觀、一則瑜伽、中觀則俗有真空、體虛如幻、瑜伽則外無內有、事皆唯識——ト云ヘルハ、則チ是レナリ)然ルニ、印度二宗ノ末徒、護法清辨ノ有名ナル空有ノ爭論ヲ爲スニ至リテ、印度ノ大乘哲學ハ、全ク消滅シ了レリ、
大乘哲學ハ、此ノ如ク、本國ニ於テ、消滅シタリシト雖、其中央亞細亞ヲ經テ支那ニ入ルニ及ヒテ、光彩燦爛始メテ、其ノ精妙幽遠ノ域ニ達シタリキ、後漢明帝ノ時ニ佛敎始メテ支那ニ入ル、其宗派概シテ十三宗アリ、又分シテ數派ト爲レリ、
扱テ其十三宗トハ、第一ニ毘曇宗、第二ニ成實宗、第三ニ律宗、第四ニ三論

宗、第五ニ涅槃宗、第六ニ地論宗、第七ニ淨土宗、第八ニ禪宗、第九ニ攝論宗、第十ニ天台宗、第十一ニ華嚴宗、第十二ニ法相宗、第十三ニ眞言宗是ナリ、
——此十三宗中、毘曇、成實ハ、即チ小乘ノ有空兩教ニシテ、三論法相ハ大乘ノ空有兩教ナリ、而シテ他ノ四宗ハ全ク印度ノ四教ヲ傳フルノミ、律宗ハ曇無德派ノ四分律ニ據レハ、性空教ニシテ其始メハ、小乘ナルモ南山ノ本旨ハ全ク分道大乘ニシテ進テ唯識圓教ニ攝シ三學圓融無碍ノ妙行ト言ヘリ、天台宗ハ龍樹ノ主義ニ基キ、法華經ヲ以テ一宗ノ骨子ト爲シ、智論ヲ以テ一宗ノ法門ヲ解釋スル指南ト爲シ、涅槃經ヲ以テ法華ノ圓實ヲ扶ケ大品般若ニ因テ一心三觀ノ觀法ヲ立テ維摩仁王等ノ諸經ヲ引テ行人ノ信心ヲ增長セシメ起信實性等ノ諸論ヲ引テ宗義ヲ助成ス、華嚴宗ハ華嚴經ヲ弘ムルヲ以テ其本領ト爲ス、涅槃宗ハ華嚴ニ依リテ佛性常住ノ義ヲ明シ、地論宗モ亦タ華嚴ノ餘流ヲ汲ム、攝論宗ハ法相ノ一分ニシテ禪宗ハ直指人心不立文字ト稱シ即チ教外ノ別傳ナリ、

眞言宗ハ法身所説ノ密敎ニシテ、即身成佛ノ秘法ナリ、淨土宗ハ、聖道難行ノ外ニ、往生淨土ヲ期スル易行ノ大道ナリ、支那傳紹ノ佛敎事載セテ、支那帝國史前篇及後篇ニアリ參觀セヨ、但シ其宗義ノ概要及ヒ師資相承ノ沿革如何ハ、別個論題ニ付キ之ヲ本篇ニ挿入セズ。

近古ニ及ヒテ、西藏ノ喇嘛敎支那ノ内部及外部ニ蔓衍シ、之ヲ黄敎

黄衣派——ト稱シ、古來ノ佛敎ヲ青衣派ト稱セリ、——支那ノ本部ニ行

ハル、ハ、概テ、雲南、四川、甘肅、陝西、直山、西隸等ノ諸省ナリ、同派ハ、宗敎律

ノ名ヲ立テ、臨濟、曹洞ノ禪家ヲ以テ其宗義ト爲シ、華嚴、天台、法相ヲ以テ

其敎ト爲シ、四分ヲ律トシ、各寺大約テ此三体ヲ具セリ、

佛敎ノ日本ニ入リタルハ、欽明天皇ノ十三年ニ當テ、百濟ヨリ佛像及經

論ヲ貢シタル時ニ始マル、其後テ佛敎般ニ興リ、其ノ宗派分レテ十數種ト

爲ル、其中ニ就テ俱、合、成、實、律、法、相、三、論、華、嚴——所謂ル南都ノ六宗——

ヲ以テ上古ノ宗ト爲シ、天台、傳敎大師、桓武天皇延暦二十三年、支那ニ入

リ、道邃和尚及ヒ行滿座主ヨリ天台ノ宗義ヲ學ビ、又順曉阿闍梨ニ遇ヒ

テ密敎ヲ受ケ、又脩然禪師ニ參シテ禪學ヲ傳ヘ、復タ道邃和尚ニ遇ヒテ

菩薩戒ヲ受ケ、同キ廿四年歸朝シテ之ヲ叡山ニ弘メ、延暦寺ト名ク是ヨ

リ先キニ鑑眞和尚來朝シテ天台ノ敎觀ヲ傳フト、雖モ時機未ダ熟セズ

大師ニ至リテ始メテ一宗ヲ聞ク、眞言弘法大師、延暦ノ末年、遣唐使ニ隨

ヒテ支那ニ入リ、青龍寺ノ僧惠果ヨリ密敎ヲ受ク、居ルヲ三年ニシテ歸

朝シ、普ク諸國ヲ巡リテ其敎ヲ弘ム、弘仁七年、始メテ紀伊ノ高野山ヲ開

キ、金剛峯寺ヲ建テ、眞言宗ヲ興ス、ノ二宗ヲ以テ中古ノ宗ト爲ス、日本ノ

天台ハ、支那ノ天台ト稍々異ナル所アリテ、圓密禪戒ノ四種ノ法門ヲ相

承セリ、蓋シ智者大師ノ遺敎ニ、密禪ヲ加ヘテ、一和合宗ト爲スモノナリ、

眞言ハ支那ノ宗旨ト同シト雖モ、却テ其出藍ノ妙アリ、禪宗、榮西禪師、文

治年間支那ニ入リ、万年寺ノ僧懷敏ニ從テ禪學ヲ受ケ歸テ之ヲ唱フ、ハ

其流派頗ル多キモ、之ヲ大別シテ臨濟、曹洞ノ兩宗ト爲ス、淨土宗、法然上人

之ヲ唱フ、及ヒ眞宗、見眞大師ヲ以テ開祖ト爲ス、ハ各々其宗義ヲ異ニスルモ、道綽善導ノ宗義ヲ傳フルハ、則チ一也、日蓮宗、日蓮上人、身延山ヲ開キ、始メテ此宗ヲ新立ス、ハ天台ノ圓密戒ノ三種ニ據リテ別ニ一頭地ヲ出シタルモノナリ、此外ニ一遍上人ノ時宗、良忍上人ノ融通念佛宗ヲ合シテ、近古ノ宗派ト爲ス、

西藏ノ喇嘛敎ハ、唐ノ時ニ當テ贊普之ヲ興シ、元ノ世祖忽必烈ノ時ニ當テ發思巴ナルモノ、大ニ世祖ノ寵眷ヲ受ケ、紅敎ヲ創建セリ、(紅敎ハ舊敎ノ名ナリ、蓋シ紅黃ハ、袈裟ノ色ニ依レルモノ歟、)明ノ永樂中、宗喀巴、紅敎ヲ一新シテ、更メテ黃敎ト爲ス、蓋シ舊敎ハ、頻ニ秘呪ヲ尊ビ、其流弊、吞刀吐火ノ幻術ヲ行フニ至ル、宗喀巴初メ此敎ヲ學ビシガ時、運ニ應ニ、舊敎ヲ改良スベキヲ看破シ、幻術及ヒ小乘ヲ斥ケ、見生度生ヲ、以テ喇嘛敎ノ綱要ト爲セリ、此敎ハ、蔓衍シテ、支那ノ四蒙古、漢南、漠北、漠西、青海、
 〓 西藏 〓 前藏、中藏、後藏、阿里 〓 及ヒ東三省 〓 盛京、吉林、黑龍 〓

等十ノ七八ハ、皆黃敎ナリ、

佛敎ノ錫蘭ニ傳紹セシハ、阿育王 〓 即チ阿輸迦ナリ 〓 ノ子摩訶因陀羅即位ノ後、出家シテ佛敎ヲ弘布セシニ始マル、當時錫蘭王、摩訶因陀及ヒ其隨行ノ僧侶六名ヲ厚遇シ、自ラ率先シテ其弟子ト爲ル、又摩訶因陀羅姉僧伽密モ亦篤シ佛敎ヲ信シ、其後チ數多ノ比丘尼ヲ伴ヒテ、此地ニ來リ、婦女ヲ教化セリ、是ヨリ先キ(紀元前三百〇七年)デハナンピヤ、タイサ、神悅 〓 佛敎ヲ撲滅スルニ盡力セシガ、此ニ至リテイララ王、亦其遺志ヲ奉シ、大ニ佛敎ヲ攻撃セリ、其後チ(紀元前百六十四年)ニダツサガマニス王、佛敎ヲ興シ、大金殿大伽藍ヲ立テ、廢塔ヲ修メ、荒園ヲ復シ、佛寺ヲ作ル、千六百本ノ花崗石ヲ交叉シテ、建築セシ精舎ノ如キハ、頗ル宏大雄壯ヲ極ム、又ルアンメラト云ヘル塔ヲ作りシ當時ハ、二百七十呎ナリカト、現今ハ頂針折レテ百八十二呎ノ高サナリト云フ、錫蘭ニ一行ハル、敎法ハ、小乘ニシテ四諦五蘊等ノ法門ナリ、暹羅、緬甸、安南

等ノ佛敎ハ祖ホ錫蘭ト同一ナリ、

(陽關ハ南北二百七十里、東西百三十七里、面積二万五千四百方里ノ一小嶋ナリ、人口總計凡ソ二百七十五万九千七百人ニシテ、其中讀書ヲ知ルモノハ男三十九万六千四百二十八人、女三万八千十三人、其他ハ不文ノ民ナリ、此中佛敎ヲ奉スルモノ、男八十八万八千三百五十七人、女九十万九千七百十三人ナリ、又、ヒンドース教ヲ奉スルモノ、五十九万五千人、回教徒、十九万八千基督教徒、二十六万八千人アリ、此人種ハ凡ソ七種ニ分レテ、土言亦一ナラス、其、ンハリス族ハ多ク佛敎ニ歸シ、他彌爾族之ニ亞ク、然レモ佛敎ヲ信スル他彌爾族ヨリハ、基督教ヲ信スル他彌爾族ハ五倍ノ數ナリト云フ、)

(又云ク、古昔支那唐ノ時代ニ、印度ニ至ル路ニツアリ、其一ハ即チ長安ヨリ隴西ニ出テ、玉門陽關ヲ經テ流沙ヲ涉リ、南山ニ沿ヒテ西シ、葱嶺ヲ越テ北印度ニ至ル、支那晋ノ時代ニ法顯惠生等、北印度ニ至ル、此路

由ル、聞ク、法顯ノ印度ニ入ルヤ、印度ヲ指シテ月ト稱セリ、蓋シ當時印度ノ文明其隆盛ニ達シ、光輝皎々タルヲ恰モ明月ノ如クナルヲ以テナリ、印度テウ字ハ月ヲ意味スルト云フハ、蓋シ此ヨリ稱セシナルベシ、彼ノ内法傳ニモ、印度説之爲月、雖有斯理、未是通稱、五天之地皆曰婆羅門トアリ、其餘ノ書ニモ、印度ヲ以テ月ト云フヲナシ、唐書地理志ニ云ク、安西ノ西關ヲ出ルヲ數千里ニシテ、疏勒ヲ渡リ、葱嶺ニ至ル云トアリ、又其一ハ長安ヨリ蜀ニ入り、羅越ヲ過キテ、東印度ニ入ル唐書地理志ニ云ク、西ノ方、永昌故郡ニ至ルヲ三百里、又怒江ヲ渡リ、諸葛亮城ニ至リ、驃國境ニ入り、(今ノ緬甸)西ノ方、黑山ヲ渡リ、東天竺ニ至ル、凡ソ六千里許アリ云トアリ、然レモ其蜀ヨリ、羅越ヲ經テ行ク路ハ、近シト雖モ、甚タ嶮峻ナリ、又隴西玉門ヨリ出ルノ路ハ、遠シト雖モ、少シク平坦ナリ、故ニ支那ヨリ印度ニ入りタル、高僧數名概シテ此路ヨリセリト云フ、

釋迦牟尼ノ新哲學及ヒ新宗教ハ本國ニ於テ其精神本領ヲ失シ支那及ヒ日本ニ傳紹セシヨリ大ニ其光輝ヲ發揮シタリ然ルニ後世ノ僧侶徒ニ佛祖ノ四諦十二因緣等ノ舊套ノミヲ墨守シ膠柱守株毫モ靈妙圓神ハ活機關タル哲學ヲ實地ニ適用スルコトヲ知ラズ終ニ佛家哲學ヲシテ衰殘腐敗復タ振フベカラザルニ至ラシメタリキ顧フニ將來善ク之ヲ活用シテ以テ大作用ヲ爲スモノハ其人ヲ俟ツノミ

野史氏曰ク佛家哲學ハ方法一理ニ歸シ一理方法ヲ攝ス其至靈至妙淺識ヲ以テ之ヲ窺フベカラズ——小乘俱舍ハ理學ヲ包含シ大乘中唯識華嚴天台等ハ純正哲學ナリ而シテ淨土ハ純粹ノ宗教機關ヲ具備セリ空ヲ談スルハ實體論物ノ實體眞アリト立テ理學ニ万象ノ變化ハ分子ノ離合ノ因緣ニ由テ生スナリ俱舍極微ハ化學ノ所謂ル元素ニシテ唯物論ニ似タリ大乘唯識ノ森羅諸法唯識所變ト立ルハ唯心論ニ似タリ天台眞如緣起ハ論理學ニシテ眞如ノ奧義ハ斯比諾沙ノ

本質論、歌傑爾ノ絕對學ナリ、又三世實有、法體恒有ト立テ、五蘊ノ法體實ニアリト執スルハ、實體論也之ヲ要スルニ、佛家哲學ノ本義、廣大精微、ニシテ、一半ハ是レ哲學、一半ハ是レ理學、一半ハ是レ宗教ナリト評セシノミ

獅巖曰雲烟消處山色猶青、

龍潭曰滿目僧侶皆俗矣、達磨禪師果何在、

第十 章

文學及美術

上古ノ印度人ハ、最モ發達シタル言語ヲ有セシカバ其書籍ノ如キモ、後世ニ傳ヘタルモノ、甚タ多シ、而シテ就中最モ古キモノヲ韋陀(Veda)ト

稱シ、大約紀元前二千年以前ニ編成セラレタルモノニシテ婆羅門ノ經典ナリ、韋陀トハ梵語ニテ明論若クハ智論ト譯ス、即チ哲學ナリ、——哲學トハ、英語ニテ斐魯蘇非ト曰フ、本ト是レ希臘語ニ係ル、斐魯ハ、求ノ義、蘇非亞ハ、智ノ義ナリ、希臘ノ哲家比太哥羅斯ノ首創スル所ニシテ後チ詭辨ノ徒、自ラ蘇非士多ト稱ス、即チ智者ト謂フナリ、後チ哲學ヲフ語ト爲ル梵語ノ韋陀ト暗ニ其字義ヲ同ジリス、亦奇ト謂フベシ、——印度ノ諸書ニ吠陀、皮陀、薛陀、圍陀、吠駝、韃陀、達陀、毘陀、婆陀ナド記セリ、言ノ義ハ密嚴經音義ニ、吠陀梵語也、此譯云明論、謂壽祀平術、名四吠陀、ト見ユ、大涅槃經音義ニ、四吠陀、此云四明論、有十萬頌、西方所重、明四種法トアリ、名義集ニ、吠陀此云智論トモ言ヘリ、

四韋陀ハ、一ニ壽、——養生繕性醫方ノ諸事ヲ謂フ、——二ニ祠、——享祭祈禱、事火懺悔ノ諸事ヲ謂フ、——三ニ平、——禮儀、占卜、兵法、軍陣ヲ謂フ、——四ニ術、——異能、伎數、禁咒、符印ヲ謂フ、——左レハ此書ハ養生醫方

ノ諸事ヨリ、享祭祈禱、事火懺悔、事火ノ法ヲ修シテ罪滅スト云フ、ハ婆羅門教ノ法ナルベシノ法ヲ行ヒ、禮義、即チ射御、音樂、冠婚、葬祭ノ事ヲモ含ムトモ言ヘリ、占卜、兵法、軍陣ヨリ、異能、伎數、異能及伎ハ、種々ノ巧藝、伎術ヲ云ヒ、數トハ、算數、曆術、算學ヲ云フ、禁咒、符印ノ道ヲ明ニシタルモノナリト知ラル、

此四韋陀ナルモノハ、婆羅門ノ經典ナレバ、未タ作者ノ名ヲ詳ニセス或ハ云フ、梵天ト云ヘル人アリ、禪道ヲ修學シテ、大知見アリ、一圍陀ヲ造リテ流布教化セリ、其後チ、仙アリ名ケテ、白淨ト曰フ、世間ニ出テ、四韋陀ヲ造ル、一ニハ讚誦、二ニハ祭祀、三ニハ歌詠、四ニハ禳災是レナリ、(摩登伽經ニ據ル、但シ金七十論ニハ初、從梵王乃至仙人、說四圍陀、トモ、聖教名聖言者如梵天及摩菟王所說、四圍陀及證論トモ云ヒ、衆經音義ニ、此四韃陀、是梵天所說、梵天孫毘耶婆仙人、又作八韃陀トモ言ヘリ、又大毘婆沙論ニ、契經說古昔婆羅門造明論者、呪術者、上首有十、一類瑟櫟迦、二婆莫伽、三婆

莫提翠、四毘濕縛蜜多羅、五鬘莫鐸耆尼、六耨耆羅、七跋羅墮闍八婆死瑟據九伽葉波十勃栗罽、如是等諸婆羅門、世雖尊敬、皆不度疑而命終、トモ見エタリ又摩登伽經ニ、次復有一婆羅門名ヲ弗沙ト曰フ、其子衆二十有五於一園陀廣分別之、即便復爲二十五分、次復更有一波羅門、名曰鸚鵡、變一園陀爲十八次、復更有一婆羅門、名曰善道、其弟子衆二十有一、亦變一園陀爲二十一、次復更有一婆羅門、名曰鳩求、變一園陀、以爲二分、二變爲四、四變爲八、八變爲十、如是展轉、九千二百十六種トアリ、是レニテ四韋陀ノ經典ハ多ク次第ニ成リ、遂ニ大成ト爲レルヲ推シ量ラレタリ、

四韋陀經典ノ外ニ、哲學、物理學、道德學、及ヒ論理學ノ書籍、甚タ多ク、詩歌文章ノ如キハ、幾ント枚擧スルニ違アラザル程ナリ、而シテ歐洲ノ學士之ヲ翻譯シテ、各國ニ傳ヘタルモノ、亦數百種ニ下ラズト云フ、

(美術) 印度人、技術ニ於テモ、最モ其精妙ヲ盡シ、其進歩モ亦著カリキ、天文寺アストロノミー、キル(黄金寺)ゴルデン、ツルム(猿寺)アツフニキル

〜等ノ如キハ、其建築ノ最モ雄麗ニシテ、彫刻ノ最モ絶妙ナル世界ノ耳目ヲ驚カスニ足ル——天文寺ハ、石ヲ以テ建築シタルモノニシテ、其結構ノ堅牢周緻ナル歐洲諸國ニ於ケル、石造ノ皇宮若クハ大學校ニ異ナルヲナント云フ、此寺ノ屋上ニ於テ、天文機械、十數箇ヲ陳列ス、其方全ク北極ヲ原トシ組ミ建テタルモノニシテ、人之ニ向フキハ、一年及ヒ一月ノ日數ヨリ一日ノ時間ニ至ルマテ、賢愚ヲ問ハス、一目了然タラサルハナシ、而シテ其機械タル皆石ヲ以テ之ヲ製造シ、其大ハ皆丈餘ニシテ、實ニ壯大無比ナリ、是レヲ「ソフチ、ウオール」ノ日時計ト爲ス、時計ノ濫觴實ニ此ニ本ク、——黄金寺ハ、釋迦牟尼ノ存在セシ時ニ各長者等、相集マリテ建呈セシモノト云フ、此寺ノ屋根ハ、二ツアリテ、其一ハ二丈五尺餘ニシテ、其周圍凡ソ四丈餘アリ、又其一ハ高サ一丈五尺許リニシテ、其周圍凡ソ二丈餘モアリ、之ヲ葺クニ黄金ノ板ヲ以テシテ、其板ノ厚サ八分許リ長サ、四尺餘、其幅ハ一尺二三寸モアリテ、純粹ノ黄金色ナリト云フ、(黄金

寺ニ就キテハ、全地球上ニ於テ、二寺アルニ過キズ、一ハ即チ此「ゴルデン
ツールム」ニシテ、又其一ハ緬甸ノ藍古港ヤンゴンニアリト云フ、——猿寺ニハ、猿
猴ノ多キヲ勝ケテ數フベカラズ、此等ノ寺ハ本ト皆釋迦牟尼ノ建ツル
所ナリト云ヘド、今日ハ悉ク婆羅門教ノ所有ト爲レリ、——蓋シ印度美
術ノ發達シタルモノハ、宗教ノ未來ニ黄金世界アルヲ説キ、之ヲシテ
人民ノ腦裡ニ浸染セシメ、以テ其現世ニ愛着スルノ念慮ヲ絶タシメン
カ爲ニ、黄金世界ノ形容ヲ寫シ出シタルニ由ルト云フ、

第十一章

貿易

上古ノ印度人ハ、亞細亞ノ開化諸國ト政治上ノ關係ヲ離レタルモノナ

ルニモ拘ラズ、貿易上ニ於テハ、非常ニ影響ヲ及ボシタルモノアリ、印度
ハ獨リ、天造物ニ豊饒ナリシノミナラズ、藝術ノ道、早クヨリ開ケ、此國民
ノ發明シタルモノニシテ、精妙人ヲ驚カスモノ、鮮ナカラザリキ、金、銅、錫、
寶石、眞珠、鹽、米、小麥、木綿、砂糖、象牙、香料、辛料等ハ土産ノ最良ナル者トス、
諸國通商ノ初メハ、蓋シ印度ト貿易セシニ始マル、印度人初メハ陸地貿
易ヲ爲スノミナリガ、海商ノ始マルニ及テ、印度諸嶋ハ勿論遠ク亞非利
加東岸ノ諸國ニ及ビタリ、當時未ダ羅針盤ノ發明ナカリシカハ飛鳥ノ
方向ヲ視テ航海ヲ爲シタリ、故ニ海濱ノ航路、江河ノ運漕、特ニ盛ナリシ、
陸地ハ、道路甚ク廣ク、旅舍亦櫛比シ、旅舍ニハ土地ノ僧侶來リテ、客商ヲ
慰勞シ其駄獸ヲ飼畜スル等ノ如キハ、極メテ惻切ナリシト云フ、
紀元前三百二十七年亞歷山太ノ印度ヲ攻畧スルニ及ビテ、歐洲ノ地モ
亦印度ノ貨物ヲ受クルニ至レリ、亞歷山太死シ布土列美プロトリア其人アリテ埃
及ニ在リ、歷山港ノ商業ヲ振興スルニ努力セシカハ、該港ハ、遂ニ富盛ナ

ル一大都會ト爲リ、當時希臘人ハ、南部亞刺伯諸港ニ於テ、亞刺伯商人ヨリ品ヲ購入シテ之ヲ江海西岸ノベレコス及ヒミヨスホルモスニ陸揚シ此處ヨリ駱駝ニ積ミテ、砂漠ヲ運送シ尼羅河ノ上流ヲ下リ、運河ヲ經テ、歷山港ニ輸入ス、亞非利加ノ北海岸及ヒ地中海沿岸ノ地方ニ於テ用ヒル印度品ハ皆其供給ヲ此港ニ仰キタリト云ヘハ、印度貿易ノ盛旺ナル一斑ヲ知ルニ足ルベシ、

其後ヲ羅馬人ハ、四方ヲ征畧シテ、自ラ印度ト貿易ヲ開キ、奇巧ノ物品ヲ獲テ大ニ奢侈ノ風ヲ生ゼリト云フ、羅馬帝如地尼安會テ國中ニ令シテ曰ク——紅海ヨリ東方ニ航行シ、直チニ印度ニ到リテ、產物ヲ交易シ殊ニ其絹ヲ以テ君士但丁堡ニ輸入スベシ——ト紀元十五世紀ノ末造ニ葡國ノ偉人華斯哥、德、噶馬ノ亞非利加ノ南端喜望峯ヲ廻リテ、印度ノ航路ヲ開キタルモ亦之レカ爲ナリキ、

印度史卷二終

印度史卷三

第三篇 近世紀

第一章

婆伯爾ノ創業——弗馬暗ノ繼述

婆伯爾ハ、帖木兒五世ノ孫ニシテ、蒙古種ナリ、天資勇邁、大畧アリ、印度ニ於テ莫臥爾帝國ヲ建立シタルモノハ、實ニ其人ナリ、

西曆千五百十九年、婆伯爾、哈布爾ヲ發シテ印度河ノ西岸ニ入ル、己ニシテ喀戸嘴爾王其領地ヲ襲フト聞キテ、師ヲ班セリ、翌年復タ印度ニ入りシガ、干達巴爾ニ敵アリト聞キテ、再タヒ歸レリ、四年ノ後、婆伯爾復タ印度ニ入り、羅保爾ニ至リシガ、度刺汗、反テ敵ト爲リケレハ、侵地ニ鎮台ヲ置キテ都ニ還ル、幾モナクシテ、婆伯爾再タヒ一萬ノ騎兵ヲ率ヰテ印度ニ進入シ、度刺汗四萬ノ騎兵ニ當ント欲シ、兩陣相對セシモ、交戦ニ及

ハズシテ和議成ル、是ヨリ印度人、欸チ婆伯爾ニ通スルモノ多カリキ、翌年四月、婆伯爾大擧シテ特里ヲ襲ヒ、激戦ノ後、終ニ之ヲ陥リ、度刺戦死シ、路提朝終ニ亡ブ、

婆伯爾、特里ニ入リテ、印度帝ノ位ニ即キ、莫臥爾朝ヲ建設シ、不逞ノ徒ヲ撃テ、之ヲ鎮定ス、此時知土爾王山伽シムガ印度人ニ回教徒ヲ驅逐セント欲シ、拉侍普土族ノ勇士ヲ募リテ、婆伯爾ニ抗セリ、帝頗ル之ニ苦心セシモ、忽チ宗教心ヲ鼓舞シテ、將校兵士ヲ激勵セシカバ、衆皆憤激シ、熱心猛火ノ如ク、奮戦セシコトヲ欲セザルハナシ、拉侍普土ノ兵士モ亦是レ猛勇無比ノ軍ニシテ、加フルニ婆羅門、教徒ナリケレハ、其勇氣爭テカ回教人ニ劣ルベキ、兩軍共ニ死力ヲ盡シテ戦ヒシガ、結局回教軍ノ運命、強カリケン、印度兵終ニ敗績スルニ至レリ、是ニ於テ婆伯爾、兵ヲ四方ニ出シテ、特里ノ屬地ノ叛民ヲ鎮壓シ、僅々タル五年ノ間ニ、國內ヲ平定シ、勢大ニ振フ、千五百三十年帝崩シ、年五十、太子弗馬暗位ニ即ク、

弗馬暗ニ其弟三人アリ、其長チ迦牟蘭ト曰ヒ、其次チ頰太爾、其次チ彌爾沙亞斯加利ト曰フ、先帝ノ遺訓ヲ奉シテ、迦牟蘭チ以テ本國哈布爾、及チ達巴爾ノ總督ト爲ス、然ルニ印度ノ王侯、復獨立ヲ謀リ、國內大ニ乱ル、其中瞿侍刺土ノ王婆幡度爾、大ニ兵力ヲ養ヒ、疆域ヲ擴張セシガ、此ニ至テ大軍ヲ擧ント欲ス、帝親征シテ之ヲ討ツ、時ニ葡萄牙人南天竺ニアリ、婆幡度爾兵ヲ葡萄牙人ニ籍リ、砲銃ヲ執テ之ヲ防戦セシカ、遂ニ敗績シ、提烏ニ走ル、帝乃チ弟亞斯迦利ヲ留メテ還レリ、勇將舍爾シヤル其先ハ阿富汗人ニシテ、婆幡爾地方ヲ併呑シテ、榜加拉ヲ攻メ、其勢猖獗、甚シ、帝往テ之ヲ撃テ反テ其敗ル所ト爲リ進退維レ谷マリ、馬上ニテ河流ニ入り氣喪テ以テ河ヲ涉リ、賤夫ニ拯ハル、千五百四十年、帝復タ勢ヲ合セテ、進ミ、船橋ヲ作リテ恒河ヲ渡リ、舍爾ト迦奴侍ノ邊ニ會戦シ、帝復タ敗績シ、逃レテ河ニ至リ、馬斃レシガ適々一象ノ前ミテ來ルアリ、乃チ之ニ乘リ河ニ入ル、然ルニ象ノ驅者竊ニ惡心ヲ挾ミシテ以テ帝之ヲ河中ニ

投シ、寺人ヲ以テ之ニ代ヘ、前岸ニ近ク、岸高クシテ上ルヲ得ズ、二兵士之ヲ見テ其包頭布ヲ結び、垂レテ之ヲ拯フ、是ヨリ帝其二弟ト共ニ亞羅羅ニ歸リ、財寶ヲ集メテアンジャブニ走ル、

沙爾王ト稱シ、善政ヲ施シテ民ヲ懷ク、此時弗馬暗ハアンジャブニ入テ弟迦牟蘭ニ頼ントセシモ、迦牟蘭已ニ沙爾ト和シテ之ヲ拒ミケレハ、弗馬暗身度ニ至リ、百方苦心シテ舊業ヲ恢復セシメテ勉ム、帝此地ニ於テ一美人ヲ娶リ、其名ヲ幡彌太婆奴ニ榮華女子ト云フ、弗馬暗身度王希仙ニ帝ノ親族ニ投セシモ、志ヲ得ズ、快々トシテ沙漠ヲ涉リ約度布爾ニ赴ク、途上皆渴シ從者多ク死ス、然ルニ約度布爾王之ヲ納レザリケレハ、復タ沙漠ヲ涉リテ亞摩羅拘多ニ不死城ニ至ル、其王羅那波爾沙度厚ク之ヲ遇ス、是ニ於テ皇后、亞克婆爾ヲ生ム、時ニ千五百四十三年十月十四日ナリ、己ニシテ波斯王他麻斯ニ投シ、一萬四千ノ騎兵ヲ以テ之ヲ助ク、是ニ於テ弗馬暗兵ヲ進メテ干達巴爾ヲ略シ、哈布爾

ヲ取リ、十年間、悉ク阿富汗ノ領地ヲ平定シ、千五百五十四年十二月、一萬五千ノ騎兵ヲ率キテ、印度ニ侵入セリ、此時印度ニ於テハ、舍爾已ニ卒シ、王侯蜂起シテ復々寧日ナカリシカバ、弗馬暗、其機ニ乘シテ急ニ突進シ、翌年六月終ニ舍爾ノ阿富汗朝ヲ亡ボシテ再々ヒ莫臥爾朝ヲ復興シ、國內ヲ平定ス、翌年一月帝崩シ、亞克婆爾嗣キテ帝ト爲ル、

獅巖曰、虎兒食牛、婆伯爾不愧爲帖木兒之孫矣、

龍潭曰、婆伯爾、有將略、有將才、今日印度、果有此人乎、則何患其不獨立哉、

第二章

亞克婆爾ノ政畧

亞克婆爾、帝位ニ登ル時、年十四、帝天寶英明、大略アリ、悉ク北中兩天竺ヲ

征服シ、奪テ南印度ニ入り、大ニ其疆域ヲ擴張シ、天下ヲ統一シテ善政ヲ施セリ。

亞克婆爾帝ハ、智勇兼備ノ英主ニシテ、善ク治体ニ通曉シ、不世出ノ才識ヲ以テ、非常ノ改革ヲ施シ、古來回教徒ハ、背信者トシテ蔑視スル所ハ、印度人ヲ登庸シテ回教徒ト共ニ樞要ノ地ニ並立セシメ、治安ノ長計ヲ確定シテ、大ニ民心ヲ收攬セリ、今マ其政略ノ要領ヲ見ルニ、亞克婆爾嘗テ臣僚ニ命シテ精細ニ國中ノ田畝ヲ量リ、然ル後、各毗伽^ビ我二段十歩餘ニ當ル^ルヨリ收穫ノ中數ヲ量リテ、耕者ガ政府ニ納ムル租稅ノ配額ヲ定メシム、其方法ハ、先ツ地味ノ厚薄ニ隨テ、田地ヲ三種ニ分チ、各種ノ田ニ就テ、一毗伽ノ平均收穫ヲ量リ、其三收穫ヲ比較シテ、之レガ中數ヲ取リテ一毗伽ノ收穫ト定メ、其收穫ノ三分ノ一ヲ以テ田租ノ額ト爲シテ之ヲ政府ニ取ル、然レモ若シ耕植ヲ休スル時ハ、之ヲ閑田ト爲シテ、之レカ田租ヲ徵收セズ、又水害ヲ蒙リタル田、或ハ三年以前荒蕪ニ委シ

テ再耕ニ其費用ヲ要スルモノハ、初年ハ、租稅五分ノ二ヲ取リ、次年ハ、五分ノ三ヲ取リ、其次ノ二年ハ、五分ノ四ヲ取リ、第五年ニ至リテ始メテ其全額ヲ徵收セリ、但シ此等ノ租稅ハ、多クハ金ヲ以テ納ムルヲ法トセシガハ亦之ヲ金ニ換フルノ法アリ、其法ハ各鄉村ニ就テ田畝ノ丈量以前ノ十九年間ノ平均市價ヲ量リテ之ヲ決定ス、而メ爾後十年間ニ收穫ノ中數ヲ量リテ、田賦ヲ改定スルヲ例ト爲ス、摩督ノ律例ニ據レハ、古時ハ、土地ノ肥瘠ニ隨ヒテ收穫物ノ十二分ノ一、八分ノ一、六分ノ一等ヲ納レルモノナリシガ、舍爾王之ヲ改メテ收穫物ノ四分ノ一ヲ取ントセリ、然ルニ亞克婆爾ハ更ニ之ヲ改革シテ終ニ三分ノ一ト定ム、帝ハ、之ト同時ニ、其他ノ諸稅ヲ廢シ、又官吏ノ民ヨリ取ル所ノ賄賂ヲ禁シ、大ニ之レカ用ヲ節シタリケレハ、人民ハ、三分ノ一ヲ以テ、尙ホ輕シト爲セリト云フ、又印度ハ、上古ヨリ衆多ノ聚落ニ分レテ、其區分、帝ノ時ニ至ルマデ變易セザリキ、而シテ其鄉村ニハ、鄉長、主簿、防衛人等アリテ、其事務ヲ辦理シ、

此等ノ人ハ、時アリテ、縦ニ租税ノ額ヲ増シテ、自ラ利シ、屢々農耕者ヲ惱
 シ事アリキ、亞克婆爾、其弊ヲ矯正セント欲シ、収税官ニ命シテ、郷長ニ
 由ラズ、直ニ農夫ニ就キテ租税ヲ徵収セシメ、之レカ法ヲ改革セリ、
 又裁判上ノ事ニ至リテモ、帝ハ已ニ印度人ヲ用ヒ、回教人ト同シク樞要
 ノ地ニ立クシメタルカ故ニ、法廷ニモ亦兩教ノ判事ヲ置キ、公平ニ審判
 ナ爲サシメタリ、

帝ノ諸政、光明俊偉、國中ノ耳目ヲ一新シ、大ニ舊來ノ積弊ヲ激破シタリ
 ケレハ、國人皆心服シ、農工業旺盛ニシテ、國家富強ナリキ、

帝晩年、宗教ノ駁雜ナルヲ憂ヘ、別ニ一教ヲ設ケテ以テ民心ヲ定メント
 欲シ、一新教ヲ興シ、名ケテ伊羅羅教ト稱ス、當時葡萄牙人己ニ南天竺ノ
 俄亞ニアリテ貿易セシカバ、帝書ヲ葡國王ニ呈シテ、天主教師ヲ招キ、
 カハ千五百九十五年シエロム、サビル等ノ教師印度ニ來レリ、

千六百五年、十月、帝崩ズ、年六十三、訃下ル、朝野人民皆哀悼セザルハナシ、

帝在位五十一年、其在世中ニハ、歲入一億四千万圓ニ至レリト云フ、

野史氏曰ク、亞克婆爾帝ハ、帝王トシテハ、寬仁大度、和風甘露ノ如ク、人
 心ヲ懷服スルノ明德アリ、政事家トシテハ、善謀能斷、國利民福ヲ圖ル
 所ノ立法行政兼備ノ才略アリ、兵略家トシテハ、戰勝攻取、天下ヲ經略
 スルノ膽量アリ、而シテ其自ラ新教ヲ興シ、民心ヲ収ムルノ術ニ至リ
 ナハ、卓越ナル敎家ノ本領アリ、嗟乎帝ノ如キハ、印度莫臥爾帝朝中、第
 一ノ偉人ナル哉、

釋巖曰、惟天地之量則無限也、

龍潭曰、亞克拔爾帝、光明俊偉、稍類弗勒德力大王、噫、天生人傑、豈限東西
 哉、

第三 章

莫臥爾朝ノ衰頹

亞克婆爾崩シ、位ヲ太子西利牟ニ傳フ、之ヲ儒般祇爾帝ト稱ス、千六百二十八年帝崩シ太子儒般立ツ、千六百五十七年王子四人相攻メ、三子敗レテ死シ、一子澳蘭具塞布、帝ヲ弑シテ自立セシガ、勇敢ニシテ武アリ、大ニ疆域ヲ廓キ、勢威頗ル振フ、是ヨリ先キニ南印度ノ麻刺加人民、起リ、次第ニ四隣ヲ蠶食シテ獨立ス、其酋長ヲ志瓦侍ト云フ、帝之ヲ征伐セシカ、終ニ之ヲ撲滅スルヲ得ズ、晩年帝國中ノ神社ヲ焚滅シ、強テ國人ヲシテ回教ヲ奉セシメ、從ハザルモノハ、之ヲ極刑ニ處セシカバ、人心漸ク解体セントスルノ勢アリ、

千七百七年帝崩シ、三子位ヲ争ヒ、國亂ル、長子牟亞士位ニ即キ、其後十三世ニシテ馬罕未德ニ至ル、此時徳干ノ總督尼參、桀驁ニシテ王室ヲ凌グ、波斯王那提爾來リ侵シ、特里ニ入テ屠戮ヲ逞クシ、無數ノ財寶ヲ奪ヒテ

去ル、又南天竺ニ於テハ、麻刺加王侵畧セシガ、太子亞摩度之ヲ退ク、帝崩シ、太子亞摩度立ツ、帝ノ時ニ當テ、土地大ニ削ラレ、國勢益々衰フ、麻刺加王、帝ヲ虜ニシテ之ヲ廢シ、亞蘭祇爾ヲ立ツ、宰相帝ヲ抑制セシカバ、帝、保護ヲ波斯王ニ請フ、宰相終ニ帝ヲ廢シ、麻刺加、軍ヲ招キ己レヲ助ケシム、然ルニ波斯王兵ヲ牽キテ麻刺加人ヲ敗リシカバ、宰相帝ヲ弑シテ走ル、事西曆一千七百六十年ニアリ、

太子亞利約弗爾、逃レテ榜加拉ニアリ、帝位空虚ト爲ル、麻刺加ノ勇將嬰鳥ニ、婆羅門ニ來リ、太子ノ子ヲ立ツ、其後ヲ太子自ラ帝位ニ登ル、之ヲ亞蘭帝ト稱ス、然レモ徒ニ虛名ヲ存スルニ過キザルノミ、

其後ヲ亞蘭帝、英人ヲ伐ント欲シ、事敗レ、終ニ榜加拉、婆巴爾、病利沙等ノ貢賦ニ、英人ニ與ヘ、英人ノ征伏セシ地ヲ以テ、悉ク之ニ與ヘタリ、是レヨリ、印度漸ク英國ニ屬ス、事皆別章ニ詳カナリ、

問テ曰ク、印度ハ、亡ビタルハ、忠臣義士起テ、以テ禦侮折衝ハ、氣象

ナ鼓舞スルモノナキニ由ル乎、野史氏曰ク、國ニシテ規模立
 タズンバ、忠臣義士ノ血ヲ嘔キ涙ヲ灑クモノアリト雖モ、國家ヲ救フ
 ニ足ラズ、忠臣義士ノ血涙ヲ以テ國家ヲ救フニ至ルハ、其國ノ不幸ナ
 リ。問テ曰ク、印度ノ亡ビタルハ、土地所有權ヲ外人ニ與ヘ、形
 勢ヲ棄テ、自ラ守リタルニ由ル乎、野史氏曰ク、國ニシテ規模
 立ツルハ、土地所有權ヲ外人ニ與フルモ亦何ゾ恐ル、ニ足ラソ乎、土
 地所有ノ權ヲ外人ニ與フルカ爲メニ亡ブルモノハ、亦之ヲ與ヘザル
 モ亡ブヘシ、問テ曰ク、印度ノ亡ビタルハ、外人ヲシテ居留地
 ニ割據セシメ、團結セシメ、隱然一敵國ト爲サシメタルニアル乎、
 野史氏曰ク、國ニシテ規模立ツルハ、居留地ノ制度之ヲ存スルモ
 之ヲ存セザルモ亦問フベキ所ニ非ズ、問テ曰ク、印度ノ亡ビ
 タルハ、諸侯分裂皆自ラ已レノ心ヲ以テ心ト爲シ、私欲アルヲ知リテ、
 國家アルヲ知ラズ、對外ノ道ヲ講セザルニ由ル乎、野史氏曰ク、

規模立ダザルニアリ、問テ曰ク、印度ノ亡ビタルハ、二億万ノ
 人民ヲ打テ一丸ト做シ、鍊テ一團ト做ス所ハ、一大豪傑ナキニ由ル乎
 野史氏曰ク、規模立ダザルニアリ、彼ノ土地所有權ノ利
 害得失如何ヲ講スルハ、政事家ノ本領ニ非ズ、居留地ノ制度如何ヲ論
 スルハ、政事家ノ本領ニ非ズ、諸侯ノ分裂、決シテ恐ルベキニ非ズ、豪傑
 ナシト雖モ、未タ憂フルニ足ラズ、唯ダ其レ規模立ダズンハ、進マズ退
 カズ、和スルカ如クニシテ、和セズ戰フカ如クニシテ、戰ハズ、國家ヲ半
 生半死ノ中ニ投シ、自ラ亡ブルヲ知ラザルニ至ルモノナリ、趙宋ハ
 宋路是レハ、規模トハ何ゾヤ、曰ク其ノ本ニアリ、彼ノ露國ヲ視ヨ、一
 千八百五十六年、黒海禁艦ハ條約ヲ破毀シタルハ、一紙ノ力ニ非ズヤ
 其本ヲ立テズシテ、空論漫議、徒ニ其末ニ汲々タルモノハ、余未ダ
 其可ナルヲ見ズ、印度ノ亡ビタルハ、其本立ダザルニアリ、謀ラズシテ
 斷スルハ、忽必烈以上ノ談ナリ、謀リテ益々斷スルハ、比士麥以上ノ談

ナリ、謀リテ斷スルヲ能ハザルモノハ、徳川氏末路ノ幕更是レノミ、今日果シテ其馬脚ニ倣フモノナキ乎、然レモ謀ルヲ能ハズ、斷スルヲ能ハザルハ、印度朝廷ナリ、其山河ヲ擧テ英人ニ付與スルモノニ至ル亦怪ムニ足ラサルナリ、

獅巖曰、妍皮不裏痴骨、印度是己、

龍潭曰、沃土偷安、士氣灰燼、其士大夫沈於歌舞之娛而不知有大義、熱於聲色之欲而不知有大警、印度不亡而何、後之爲印度者、其亦可省魯矣、

印度史卷三

第四篇 印度覆滅記

第一章

歐亞ノ交通及東印度會社ノ設立

一、葡國人ノ東印度新航路ノ發見

骨、テ、地、ニ、投、ス、猜、然、ト、シ、テ、爭、フ、者、ハ、犬、ノ、常、ナ、リ、天、下、攘、々、ト、シ、テ、皆、利、ノ、爲、ニ、往、キ、天、下、熙、々、ト、シ、テ、皆、利、ノ、爲、ニ、來、ル、其、犬、ト、異、ナル、者、ハ、幾、希、ナ、リ、第、十五世紀ノ頃ニ當リテ、印度ニ大賢ノ君相其人ナシ、紀綱益々振ハズ、元氣愈々消盡セントス、其沃土ハ恰モ是レ地上ノ美肉ニシテ剛邁活眼ナル歐洲男子ノ垂涎スル所ト爲ル、而シテ其先ツ奇險ヲ冒シ、東印度新航路ヲ發見シタルモノハ、實ニ葡國人、バスケヂャ、コデ、マ、ガ、マ、チ、以、テ、破、天、荒、ナ、リ、ト、爲、サ、レ、ル、ヲ、得、ズ、。

印度ノ交易ニ於テ、亞歷山得利ノ通路極メテ困難ナルヲ以テ、敢往勇邁ナル歐洲ノ士民ハ、頻ニ新航路ヲ覓メテ、亞細亞ニ達セシメテ、勉メタレテ、皆其志ヲ得ザリキ、紀元千四百十五年ノ頃ニ當リテ、葡萄牙王約翰第一世ノ三子顯理^レモレプラワーテル^ル〔英語ニテ之ヲ云ヘハ Navigator ナリ、王子ハ熱心ナル航海家タルニ由テ此名稱アリ〕數船ヲ發シテ、亞非利加ノ西岸ニ沿ヒ、新路ヲ發見セシメテ企テタリ、抑モ顯理ハ幾何學ニ長シ星學地理學ニ通シ、兼テ堅忍ニシテ大志アリ、常ニ謂ラク、〓亞非利加ノ海岸ニ沿ヒテ航行スルハ、直チニ東印度ニ達スルヲ得ベシ〓ト然ルニ初メテ派遣シタル所ノ人士、皆果サズシテ歸國セリ、時ニ二士アリ、〓一人ヲコンサレス、サルコト稱シ、一人ハチリスタン、ハスト稱ス〓顯理ニ誓ヒテ曰ク、發見ノ功成ラズンハ、復タ歸ラズ〓ト二士亞非利加ノ海岸ニ於テ暴風ニ遇ヒ、遠ク洋中ニ漂泊シ僅ニ免ル、トテ得タリ、然レテ葡國有志ノ士民、皆航路ノ發見ニ熱心シ、更ニ屈撓スルヲ

ナカリキ、

千四百六十三年王子顯理卒セシ後、葡人航路發見ノ志氣稍弛ヒタリシモ、約翰第二世善ク其遺志ヲ繼キ、千四百八十六年葡人バルトレメイ^ス、シアス遠征ヲ試ミ、亞非利加ノ南端ヲ環リシガ、此航海中、暴風激浪ニ由テ船入強テシアスヲシテ里斯本ニ歸ラシメタリ、約翰王以爲ラク、此航路ヲ行クハ、必ズ印度ニ達セン〓ト故ニシアスガ亞非利加南端ノ岬ヲ荒波臺ト名ケタルヲ更ニ改メテ喜望臺ト稱セリ、即チ印度ノ航路ヲ覓ムルノ望ミニ副フノ謂ナリ、シアス航路發見ノ端ヲ開キシト雖、其大功ノ成リタルハ、華斯哥德、噶馬ノ力ニアリ、千四百九十五年、約翰王殂スルニ及ヒテ、以馬努爾大帝、益々其志ヲ勵マシ、熱那ノ人華斯哥德、噶馬ニ命シ、海舶四隻、船夫百七十人ヲ率キテ、印度ノ航路ヲ發見セシム、千四百九十七年噶馬喜望臺ヲ周航シ、是レヨリ亞非利加ノ海岸ニ沿ヒテ北ニ向ヒ、馬拉巴爾海岸ニ上陸シ、印度ノ貨物ヲ

齋ヲシテ本國ニ歸ル實ニ千四百九十九年ナリキ、——基利督勃閣龍ノ亞米利加ヲ發見シタルモ、亦此時代ニアリ、奇ト謂フベシ、) 華斯哥、德、噶馬ノ印度新航路ヲ發見セシヨリ、葡國ノ航海家大志アル輩ニシテ危險ヲ冒シ、崩濤ヲ破リテ印度ニ入ルモノ益々多シ、千五百二年、噶馬大船二十隻ニ將トシテ再々ヒ印度ニ航シ、直ニ甲爾加達灣ニ入り、印度人ト戰ヲ開キ、之ヲ破ル、千五百五年、以馬督爾弗朗士哥、亞爾明達ヲ以テ葡領印度大守ト爲シ、東印度海ヲ管理セシム、亞爾明達奉職五年、英、敏剛明ヲ以テ、聞ユ、亞爾明達東印度ノ各地ニ於テ城堡ヲ築キ、亦物價ヲ定メ、互市場ヲ開キ、回教國ノ商賣ヲ杜絶シ、屢々偉功ヲ奏セリ、二千五百五十九年、本國ニ歸ル途次喜望峯ニ於テ土人トノ鬪争ノ難ニ死ス、——千五百九年ヨリ同シキ十五年ニ至ルノ間、亞爾本士、亞伯傑兒克、葡領印度ノ大守ト爲リ、膽智絶倫、治績大ニ顯、ハル、千五百九年、亞伯傑兒克、波斯灣頭ニアル、惡末ヲ取ル、此地ハ、從來波斯、亞刺比亞、及ヒ埃及ノ商人ガ、貨物

貯藏ノ要地トセシ所ナリ、(已ニシテ葡人一且之ヲ失ヒシヨ、千五百十年、亞伯傑兒克、俄亞ヲ取ル、此地ハ、港内廣濶ニシテ、且ツ風浪ノ難ナク、寶ニ印度ノ一大埔頭ナリ、) 葡領東印度ノ首府ト爲ル、——千五百十一年、亞伯傑兒克、復々麻刺加ヲ取ル、其他奪取スル所ノモノ甚々多シ、其後亞伯傑兒克大守ノ職ヲ免セラレ、千五百十五年、九月十六日病ヲ以テ卒ス、)

獅巖曰、印度航路發見、以顯理爲破天荒、底亞斯及華哥、德、噶馬、成其功、而其經路之功、以亞伯傑兒克爲第一、

米峯曰、亞爾伯傑兒克將軍之航入印度灣、攻略麻刺加、臥亞、交趾等諸地方、以占東印度貿易樞機、事在于千五百三年乃至十一年、於是葡國王擢亞氏爲印度領地之大守、氏在其職、以材幹膽略大著、其名、千五百十五年、亞氏以病、歿於臥亞焉、其後華哥、德、噶馬、以千五百廿四年、代亞氏爲印度葡領之大守、云云、英人ウイリカム、ケーツ氏等所記如此、蓋印度航路啓

望峯測量發見通航之功、實在于華、荷、德、噶馬氏也不容疑也、雖然其征服麻刺加、臥亞、阿兒謨西等各要地、以振占葡國之權力、于當時東印度者、其功推亞爾伯傑兒克爲首云、聊錄以供參照之一端

一、蘭人ノ東印度ニ於ケル貿易

葡人ニ次テ、東印度ノ地ニ侵入シタルモノハ、荷蘭人ナリ、千五百九十四年ノ頃ニ當リテ、荷蘭ニ於テハ、バレンツヲ以テ船長ト爲シ、氷海ヨリシテ支那印度ノ海路ヲ北方ニ覓テシカタルモ、氷海ニ阻ラレテ空シク歸國セリ、其後、屢々船舶ヲ發シテ、航路ノ發明ニ從事セシメタリ、當時荷蘭ニテ、東印度通商ノ會社ヲ設ケフルレノ商會最モ名アリ、蘭國政府ハ又好多曼ナルモノ、從來葡國ノ首都里斯本ニ在リテ、東印度ノ貿易ニ從事シ、頗ル商業ニ鍊熟スルト聞キ、海船四隻ヲ購シ、之ニ命シテ、東印度ニ航セシメタリ、好多曼、東印度ニ至リ、翌年瓜哇ノパンタムニ航シ、千五百九十七年歸國セリ、此行ヤ、未ダ東印度通商ノ志ヲ達スルヲ得ザリシト

雖此航海ヨリシテ、後來蘭人ノ爲ニ進取貿易ノ氣象ヲ發揮セシムルニ至レリ、千五百九十九年ヨリ千六百年ニ至リテ、蘭國有爲ノ商人、奮然起テ、印度ニ侵入シ、貿易ニ從事スルモノ稍ク多ク、其後、蘭人ノ東印度ニ通航往來スルモノ、踵ヲ絶タザルニ至レリ、

荷蘭ノ商人、東印度ノ通商ヲ爲セシヨリ以來、其商館各々自己ノ心ヲ以テ心ト爲シ、思ヒ思ニ商賣ヲ爲セリ、然ルニ東印度ニ於テ、廣大ナル貿易ヲ爲スニ當リテハ、各自分社ノ貿易ヲ以テ、大利ヲ占メ、樞機ヲ握ルニ足ラザルヲ以テ、千六百二年、蘭政府ハ、各州ノ商館ヲ聯合シテ、東印度商社ト爲シ、特ニ東印度ニ通商スルヲ許セリ、

荷蘭ノ東印度商社ハ、益々盛ニシテ、福運愈々開クルニ至リ、千六百五年、蘭人ハンデル、ハーゲン東印度ニ航シ、葡人ヲ驅逐シ去レリ、己ニシテマテリ、亦東印度ニ來テ、荷領植民地ヲ設ケ、千六百六年、麻刺加ヲ圍ミタリ、葡國ノ軍艦麻刺加人ヲ援ケテ、其圍ヲ解カントセシモ、マテリ、

迎へ戰テ、大ニ之ヲ破レリ、是レヨリ東印度商社ハ、愈々隆盛ニシテ、每歲船ヲ出シテ、其貴重ナル物品ヲ交易シ、船舶ノ運漕、絶ユル時ナク、千六百十一年、商社ニテ賣ル所ノ胡椒ハ、一万八千包ニ至レリ、錫蘭ニ於テハ、己ニ久シク、葡人ト兵戈ヲ交ヘタリト雖、千六百十二年、此地ノ貿易ハ、獨リ其權ヲ擅ニセリ、千八百八年ヨリ同ジキ十年ノ頃ニハ、榜加刺海岸ノ甲爾加達、信地亞ノラジャ、コロマンデル海岸ノヘルウルノ如キハ、皆蘭人交易ノ場所ナリ、而シテ千六百十六年ニ至リテハ、東印度商社、小船ヲ除クノ外、大船三十八艘アリテ、皆海戰ノ準備ヲモ整ヒタリ、千六百三十二年ヨリ同ジキ四十三年ノ間ハ、蘭人、葡領ノ麻刺加及ヒ錫蘭ノ數城ヲ略シ、千六百五十四年ヨリ同ジキ六十二年ノ間ハ、ヤン、マートソイナル蘭領東印度ノ大守タリシガ、葡國ノ領地概テ荷蘭ノ有ト爲レリ、是時ヨリ、蘭人ハ復タ英國人ト爭端ヲ發セリ、當時荷蘭ノ歐洲貿易國ノ最第一ト爲リシモノハ、其海軍ノ強盛與リテ

方アリト雖、其功ノ成就セシモノハ、實ニ東印度商社ノ力ニ由ル、然ルニ商社ハ貿易ノ利ヲ擅ニスルト同時ニ私欲ヲ逞クシ、傲慢自ラ恃ミ、將來ノ利益ヲ興スヲ謀ラザリシカハ、忽チ衰頽スルニ至レリ、

鄉巖曰、今既不如昔、後當不如今、

三、英人ノ東印度ニ於ケル會社及其勢力

閣龍ノ亞米利加ヲ發見セシ頃ニ當テ、英吉利ニ於テモ、亦新地ノ發見ニ從事シタリシモ、事成ラズシテ已ミタリキ、英王顯理八世ノ時ニ當リテ、西班牙ノ一商、ロベルト、ソルン王ニ上書シテ、印度貿易ノ利ヲ論ク、且ツ北海ヲ環リテ印度ニ達スルノ便ナルヲ主倡セシニ、王之然リトシ、ウイルピーニ命シテ、三艘ノ海船ヲ率キテ北海ニ解纜セシメタレ、二船ハ堅氷ニ鎖サレ、水夫皆凍死シ、僅ニ其本國ニ歸港スルヲ得タルモノハ、其一船ノミナリキ、英國ニ於テ、航海貿易及ヒ工業ノ進歩セシハ、女王以利沙伯ノ時ニアリ、女王ハ、北海ノ航路ハ、到底期スベキニ非ザルヲ

ヲ知り、更ニ南西ヨリ米國ヲ廻リテ、印度ニ達スルノ航路ヲ發見セント欲シ、千五百七十七年フランシス、ドレーキヲシテ此遠征ヲ試ミラシム、ドレーキ世界ヲ一周シ、印度ヲ歴テ、無事ニ歸國シタリト雖、此航海ハ四年ノ星霜ヲ費シタル程ナレハ、敢テ貿易ノ通路トシテ、其便利ヲ得ザリキ、其後、英人屢々其貿易ヲ東西印度ニ擴メンコトヲ謀リシガ、千五百九十一年英人レーモンド東印度ニ至リ、各地ニ於テ通商互市ノ條約ヲ訂結シタリ、

千五百九十九年、英國ノ商人、荷蘭ノ商社ニ倣ヒ、三万磅ノ資本ヲ募集シテ、一社ヲ設立シ、女王ノ特許ヲ得タリ、名ケテ東印度會社ト謂フ、此東印度會社ハ、蘭人ノ東印度商社ト相並ヒテ、貿易ニ從事シタリシモ、漸ク相闘キ、反目睥視ノ極、劇戰ヲ起スニ至レリ、是レヨリ先キ、印度在留ノ葡人等ハ、英人ガ東印度會社ヲ設立シテ、其貿易益々盛ントスルノ勢アルヲ見テ、特占ノ利權ヲ奪ハレンコトヲ恐レ

百方之レヲ妨害セシカバ、英人大ニ怒リ、ベストーヲ舉ゲテ、總督ト爲シ、商船ヲ以テ軍艦ヲ組織シ、印度ノシユラツト港ニ於テ激戰シ、大ニ葡軍ヲ破ル是ニ於テ、東印度會社ハ、莫臥爾帝朝ノ信用スル所ト爲リ、遂ニシユラツトニ於テ一箇ノ製造場ヲ設クルコトヲ得タリ、蓋シ葡萄牙人ノ印度ニ入りシヨリ以來、大約百年間、貿易ノ大權ヲ專有シ、且ツ印度ノ内治ニ干涉シ、貿易上ノ姦詐殊ニ甚シク、弊害ノ積ム所、抵止スル所ヲ知ズ、一旦英人ト戰フニ及ビテ、其威權名望ヲ併セテ、之ヲ失フニ至リシモノ、亦怪ムニ足ラザルナリ、

英人ハ、葡人ヲ挫キシヨリ、千七百八十年ノ末ニハ、荷蘭ヲ以テ、敵國ト稱シ、數十日間ニ、英人荷蘭ノ商船二百艘ヲ奪取セリ、而シテ東印度ニ於テハ、英人復タ蘭領ノ要地ヲ征奪セシヲ以テ、東印度商社、西印度會社モ同時ニ衰頹ヲ極メ、貿易日ニ廢シ、千八百年ニ至リテ、一時其名ヲ轟カシタル東印度商社モ、遂ニ自亡スルニ至レリ、初メ千六百三十九

年英國ノ東印度會社ハ、印度ニ於テ彈丸黑子ノ一小地フーグーヲ占ムルニ過ギス、其貿易ノ如キ、日ニ其擴張ヲ圖ルト雖モ、猶ホ未タ荷蘭ノ盛大ナルニ及ハズシテ查列斯第一世ノ時代マテハ、商船三百噸ノモノ僅ニ是レ三艘ニ過キザリシナリ、然ルニ阿力弗格崙空奮勵シテ、貿易ノ規模ヲ擴張シ、航海條例ヲ施行セシヨリ、勢大ニ振ヒ、蘭國ノ貿易ト航海トヲ凌駕セントスルニ至レリ、此時荷蘭ハ、英國ノ海軍貿易此ノ如ク強盛ニ至ルモ、恬然トシテ之ヲ省ミズ、怠惰偷安、深ク慮ルコトナシ、是レ其俄然トシテ巨禍大患ニ遭過シ進退共ニ失スルニ至リシ所以ナリ、然レモ蘭人ノ永ク其貿易ノ利ヲ占メ、航海ノ雄ヲ爭フコト能ハザルモノハ、蘭人特殊ノ精神氣象ナク、到底諸厄路撒遜人種ト頑頑スルコト能ハザルニ由ル。

是レヨリ先キニ、東印度會社ハ、本國ノ政府ノ議論ニ由テ、或ハ勅許ヲ拒マレ、或ハ更ニ之ヲ與ヘラレタルコトアルニモ拘ラス、千六百年代ニ於テ

ハ依然東印度ト交通シテ廣大ナル商業ヲ行ヒ其建設セシ所ノ廬舍ハ布哇、蘇門答臘、婆羅、曼太ノ群嶋、巫來加、暹羅、榜加拉ノ濱岸、及ヒコロマンデルノ地方ニ充塞シ、千六百四十年、印度諸國ノ許可ヲ得テ麻刺加ニ於テセントジョールジ堡ヲ設ケ、千六百四十五年一廬舍ヲ安日河畔ノ支流フグリーニ營メリ、甲爾加達ノ市街即チ是レナリ。千六百八十八年ノ後、英國王ヨリ會社ニ與ヘタル勅許狀ノ實際ニ利益アリヤ否ヤノ疑問俄ニ起リ加フルニ、擾亂相繼キ、官吏ノ私賍等アルカ爲ニ、損耗スル所甚タ多ク、會社ハ、遂ニ其責任ヲ全クスベカラザルニ至レリ、是ニ於テ、千六百九十八年、更ニ國會議院ヨリ許狀ヲ下シ、東印度新會社ヲ設立シ、二百萬磅ヲ政府ヨリ貸與スルコトヲ定約セシム、然ルニ舊新ノ兩會社、相合ハズシテ、遂ニ之ヲ聯合セサル可ラザル勢ト爲リ、千七百二年兩社ヲ合併シ、以テ東印度商業聯合會社ヲ建設セリ。千七百十五年英國政府ハ、使節ヲ特里ニ遣ハセシ時ニ當リテ、醫師哈美爾頓ナルモノ、其行

中ニアリシガ、此時印度帝篤疾アリ、地方ノ醫師皆匙ヲ投シテ治メザルニ會シ、之ヲ療シテ常ニ復セシカバ、大ニ其驢心ヲ得テ、會社ハ、會社ハ、榜加拉地方ニ於テ、甲爾加達ト共ニ三十八万所ノ市街ヲ購求スルヲ許サレ尙ホ、廢業上最要ナル特別ノ權利ヲ得タルヲ以テ、甲爾加達ヲシテ一朝熱鬧ノ植民地ヲラシムルヲ得タリ、

東印度會社ハ益々昌盛ニ赴キ英人ハ愈々跋扈ノ欲ヲ逞シクスルコ及ヒテ其力殆ント印度ヲ壓セントスルノ勢アリ、然レハ、印度諸所ニ建設セル廬舍ハ其監守人ヨリ僕隸ニ至ル迄、皆其防備ヲ嚴コシ、終ニ廬舍ノ体裁ヲ一變シテ戒器ヲ携帯セシ戍兵ノ營所タルカ如キ有様ヲ呈スルニ至レリ——然ルニ印度諸國ノ君主諸侯ハ、偷安逸居、猜忌相攻メ、目前ノ利害ニ汲々トシテ遠水ノ計ヲ知ラズ、其人民ハ、輕佻自ラ喜ビ、徒ニ外客ニ接スルヲ好ミ、一人トシテ英國植民ノ逆意ヲ察シ、其謀略ヲ未然ニ防ントスルモノナシ、是ヲ以テ終ニ英國慣用ノ手段ニ陥リテ自ラ悟

ラズ堂々タル大帝國ヲ舉ゲテ、彼レニ付スルノ己ムヘカラザルニ至レ

ル、

獅巖曰、以苛虐失之者葡人也、以怠慢失之者葡人也、而英人以堅忍得之以術略成之、

龍潭曰、古人云室已焚而徙薪、舟已溺而市壺、疾已成而求艾、雖彈力爲之無及矣、印度無遠識深慮其人、不能制英人之謀於未然、噫印度之滅亡、實在于東印度會社設立之時矣、

又曰、英國殖民政略、堅固不拔、加之以英敏作用、最不可及、如葡如蘭、一時雖拓領地於海外、忽盛忽衰、到底不能傳之後世、無他以無其堅忍不拔之精神也、英國則不然、有增而無減、有盛而不衰、不亦妙哉、雖然今也、英廷勢方衰、保其殖民領地、將出于何等方策乎、

第二章

猶布烈ノ運動

莫臥爾帝國ノ腐敗ニ乗シテ、歐洲人ノ勢力ヲ印度ニ逞クスルヲ決シテ、難キニ非ザルヲ看破シタルモノハ、猶布烈其人ナリ。猶布烈ハ、佛國ノ人ニシテ、天資豪邁、常ニ奇計ヲ好ム。猶布烈、印度ニ來リ、夙ニ形勢ヲ看破シ、英國商社ノ人士ガ、徒ニ荷物ノ勘定、爲替ノ取引等ニ汲々タリシ時ニ於テ、己ニ印度ヲ併呑スルノ大策ヲ畫シ、最モ鞏固ナル目的ヲ立テ、亦能ク之ヲ達スルノ方法ヲモ精査シタリ。猶布烈曰ク、印度ノ諸侯ハ、夥多ノ兵士ヲ有セリト雖、精鍊ナル歐洲兵ノ少數者ニ當ルヲ能ハズ、且ツ土人ヲ募リテ、之ヲ整フルニ、歐洲ノ兵律ヲ以テシ、之ヲ指揮スルニ、歐洲ノ將士ヲ以テセハ、彼ノ弗勒德力王ノ誇稱シタルカ如キ精整勇悍ノ軍隊ヲ編成スルヲ得ベシ。又曰ク、歐洲人ヲ以テ、印度ノ全權ヲ収メント欲セハ、必ず先ツ彼ノ「ナイザム」ヲボツブ等ノ尊號ヲ有シ、

世人ニ尊敬セラル、モノヲ籠絡シ、其口ヲ藉リテ以テ人民ヲ誘導スルニ若クハナシ。ト此策ハ、印度ヲ經營スルニ付キテ、第一着ノ妙計ニシテ、他日英人ガ其大功ヲ奏セシハ、全ク此策ヲ實地ニ適用シタルニ過キザルノミ。

是時ニ當テ、印度ノ國勢益々衰へ、其紀綱廢弛シ、權威地ニ墜テ、莫臥爾帝ハ徒ニ空名アリテ其實ナク、印度聯邦ノ諸侯、皆獨立シテ、之レカ制馭ヲ受ケザリキ、又歐人ノ内治ニ于預スルモノハ、往々東洋的ノ政治ニ適用スルニ、歐洲ノ新法ヲ以テシ、或ハ封建ノ舊慣ヲ引テ先例ヲ取ルモアリテ、其錯雜一ナラザリキ。千七百四十八年、印度ノ新君主中、最モ強大ナル德干大守「ナイザム」亞爾摩利殂シ、其子ヲシテ、シヤング之ニ代テ大權ヲ執ル、然ルニ其版圖中、最モ富饒ニシテ、最モ廣大ナルモノハ、即チカーナナツクナリ、抑モ此カーナナツクハ、當時英人ノ擯斥シテアナルハ、一ベント稱シタル老「チボツブ」ノ支配スル所ナリキ。

此時德干ノ君位ト、カルナチツクノ土地トヲ占奪セシメテ企テント欲シタルモノアリ、ナイザム、亞爾摩利ノ孫、マーザフア、ジヤング、チシヤ、ジヤングノ位ヲ篡ヒ、故チボツブノ義子チヤン、サヒブハアナハルチーハンノ位ヲ篡ハント欲シ、二人相合シテ兵ヲ起シ、且ツ使ヲ遣ハシテ其應援ヲ佛將猶布烈ニ請ヒタリ、——猶布烈ハ大ニ喜ビ、以爲ラク、是レ天ノ我ニ與フル所ノ好機會ナリ、我レカナチツクノチボツブチ立テ、德干ノ大守ヲ定メ、此二人ノ名ニ藉テ以テ南方印度ヲ經畧スベキナリ、ト直チニ其請ヲ容レテ之ト相通シ、其應援トシテ、四百名ノ佛軍及ヒ久シク歐洲ノ操練ニ熟シタル土人兵二千人ヲ遣ハシタリシガ、未タ幾ナラズシテ、戰爭起リ、佛軍到處トシテ、捷利ヲ得ザルナク、アナハルチーハンハ敗死シ、其長子アルコツトノチボツブ馬哈默德阿厘殘存ヲ歛メテトリチノボリーニ走リ、マーザフア、ジヤング等ノ軍、終ニカーナチツクノ全部ヲ占領スルニ至レリ、

此時、チシヤ、ジヤングハ、其臣下ノ爲ニ害セラレ、マーザフア、ジヤング德干ノ大守ト爲レリ、猶布烈ハ政畧軍謀、共ニ其目的ヲ達セシメ由リテ、ボナチエリノ人民ハ、其凱旋ヲ祝センカ爲ニ、各々祝宴ヲ聞キ、權聲ヲ揚ゲ、砲臺ニテハ、祝砲ヲ發シ、寺院ニテハ、戰勝ノ歌ヲ唱へ、其際ニ、ナイザムノ新王、來リテ、其同盟者タル猶布烈等ヲ訪ヒ、華麗ナル儀飾ヲ盡シテ、即位ノ式ヲ行ヒタリ、時ニ猶布烈モ亦回教國最上等紳士ノ着スベキ禮服ヲ用ヒ、ナイザム下共ニ馬車ニ乘シテ市街ニ徘徊シ、其鹵簿行列ノ如キモ、總テ帝王ノ故例ニ從ハザルモノナク、終ニ印度ノ知事ニ拜セラレテ、クリストナ河ヨリコモリーオン岬ニ至ルノ間チ占領シ、其權勢、覓カニチヤンダ、サヒブノ右ニ出デタリ、且ツ猶布烈ハ七千ノ騎兵ヲ領シ、貨幣ヲ鑄造スルノ專權ヲ持シ、德干大守ガ累世ノ間ニ辛苦シテ蓄積シタル財寶モ大抵猶布烈ノ掌握ニ歸シ、——世上ノ風説ニテハ、猶布烈ニハ夥多ノ寶玉ヲ取リシノミナラズ、亦タ二十万磅ノ金貨ヲ得タリト云フ程

ナリキ、其利益ノ多キヲ實ニ無盡藏ニ云フベキナリ、此ノ如ク猶布烈ハ、利益ヲ占ムルト同時ニ、三千万ノ人民ヲ有シテ、自ラ專制權ヲ握リ、其推舉ニ因ルニ非ザレハ、何等ノ爵位ト雖モ、之ヲ印度政府ヨリ得ルコト能ハズ、亦其捺印ヲ經ザレバ、何等ノ請願ト雖モ、ナイザム、王ノ熟讀ヲ請フコト能ハザリキ、

マーザフア、ジャングハ即位ノ後、幾モナクシテ卒去シタリシガ、猶布烈ノ力ニ由リ、猶其家系ニテ、政權ヲ承繼スルコトヲ得タリ、是ニ於テ猶布烈ノ權力ハ、益々熾ンニ、恰モ旭日ノ昇ルカ如ク、今ヤ印度國中第一有力ノ君主ト爲リ、猶布烈ノ名ハ、莫臥爾帝朝ノ宮中ヲ震動セシムルニ至レリ、且ツ土人ノ如キハ、猶布烈ノ俄然トシテ、大勢力ヲ亞細亞ニ展ハセシテ見テ、皆膽ヲ破リテ、驚駭セザルハナカリキ、然ルニ猶布烈ハ傲慢ノ人ナリケレハ、單ニ其實力ヲ得タルノミナリテ、自ラ足レリトセス、極メテ外觀ヲ盛ニシテ、天下ノ耳目ヲ眩殺セント欲シ、彼ノ曩キニテ、ジャン

グノ敗死フーザフア、ジャングノ踐祚シ、己ノ大功ヲ成就シタリシ地ヲ撰ヒテ巨大ナル紀念碑ヲ建設シ、其碑ノ四面ニハ、四ヶ國ノ文字ヲ用ヒテ、四個ノ銘ヲ刻シ、東洋諸國ノ人々ヲシテ、偏ク其大功大勝ヲ知ラシメント欲セリ、亦其偉績ヲ記シタル紀念錢ヲ鑄リ、之ヲ碑石ノ下ニ埋メ、其周圍ニハ、猶布烈、フアナハバット (depleix 佛語 fatihabad 梵語) ト稱スル都府ヲ立ルニ至レリ、其驕傲亦知ルベシ、

獅巖曰、猶布烈、豪邁之氣有餘、而沈深之畧不足、

龍潭曰、猶布烈、有好骨、其看破印度形勢處、殆與范增論立六國後一段、相似、

第三章

猶布烈ノ敗衄

猶布烈ノ勢力ヲ印度ニ退クシ、威權赫々タル時ニ當リテ、英人ハ、優柔姑息、其事業ヲ妨害スルヲ能ハズ、止ク馬哈默德、阿厘ヲ認メテ以テカーナチツクノ「チボツブ」ト爲スニ過キザリキ、然ルニ當時馬哈默德、阿厘ノ領地モ僅ニ是レトリチノポリーノ一小地ニシテ、今ヤ己ニチヤンダ、サヒブ及猶布烈ノ爲ニ攻メラレ、孤城落日重圍ニ陥キリ、憐レ墓ナキ有様ナリキ、——此危迫ノ時ニ於テ、英人中ニ、一個ノ良將ヲ出ス、羅德克雷武其人ナリ、後來猶布烈ノ驕威ヲ挫キ、チヤンダ、サヒブノ兵力ヲ殺キ、英軍ヲシテ雄ヲ印度ニ擅ニスルヲ得セシメタルモノハ、實ニ此人ナリ、」
克雷武ハ、千七百二十五年、九月廿九日ヲ以テ生ル、天資精悍、剛毅ニシテ事ニ耐ヘ、慧敏ニシテ機ヲ察ス、年十八、雇ハレテ、東印度會社ノ書記ト爲リ、己ニシテ自ラ請テ會社ニ附屬スル軍隊ノ旗手ト爲リ、二十一歳ヲ以

テ、始メテ兵務ニ從事シタリ、是ヨリ久シク商業ト兵事トノ間ニ執掌セシガ、年二十五ノ時、甲比丹ノ位ヲ以テ、輜重ヲ司ドリ、半兵半商ノ役ニ任ゼラル、——是時克雷武ハ、英國ノ威、漸ク將ニ地ニ墜ントスルヲ見テ、其長官ニ告テ曰ク、——若シ今ニシテ、斷然一決ノ處置ヲ施サズンバ、トリチノポリーハ直ニ敵人ノ手ニ落テ、アナバル、デーハンノ家モ亦全ク血食ヲ斷テ、印度ノ半島ハ、擧ケテ佛人ノ有ト爲ラン、故ニ今日一大血戰ヲ爲スハ、實ニ最第一ノ急務ナリ、宜シク進ミテ甲爾加達ヲ襲撃スベシ、抑モ甲爾加達ハ、カーナチツクノ首都ニシテ、世々「チボツブ」ノ住居スル所ナリ、然レハ之ヲ襲撃セハ、トリチノポリーノ圍ハ、救ハザルモ、自ラ解ケン、——ト英人等ハ、口ニハ此策ヲ賛成スルモノアレモ、肯テ自ラ奮テ實行セントスルモノナカリシカバ、全ク之ヲ克雷武一人ニ托シ、之ヲシテ五百人ノ軍隊ヲ引率セシメタリ、一日暴風猛雨驟ニ起リ、雷霆激シテ天ニ吼ユ、克雷武此機ニ乗シテ、兵ヲ集メ、甲爾加達ノ城門ニ突進セシニ、守

兵皆其不意ヲ擊タレ、戰ハスニテ敗走セシカハ、英軍ハ、一彈丸ヲモ費サズシテ其城寨ヲ奪ヒタリ、

克雷武ハ、一時ノ奇計ヲ以テ、甲爾加達ヲ占領シタレバ、安坐シテ以テ之ヲ保守スベキニ非ザリケレバ、直ニ糧食ヲ貯ヘ、墻壁ヲ築キ、専ラ防戦ノ用意ヲウ爲シタリケル、幾モナクシテ、印度兵ハ近隣諸方ノ援兵ヲ得テ再タヒ陣營ヲ襲ヒシガ、之ヲ拔クニ能ハズ、是ヨリ先キニチヤンダ、サヒブハ、佛軍ト共ニトリチノポリーチ圍ミタリシガ、此急報ヲ聞キテ大ニ驚キ、四千ノ兵ヲ分ナテ之ニ應援セシメタリ、此兵ノ甲爾加達ニ達シタル時ニ殘兵モ次第ニ集マリ、且ツ猶布烈ノボンヂチエリーヨリ差遣ハシタル百五十名ノ佛軍サヘモ、到着シタリケレバ、軍勢大ニ振ヒ、チヤンダ、サヒブノ長子ラシヤ、サヒブ之ヲ統率シ、甲爾加達ヲ圍ミタリ、

ラシヤ、サヒブノ攻撃、益々急ニシテ、甲爾加達ノ城寨、五十日間ヲ經過シタリ、此間、克雷武ノ平生ノ剛毅ヲ以テ、之ヲ維持シタレバ、如何セン、城壁

ハ日ニ頽レ、兵糧モ亦漸ク罄キ、城中飢ニ叫ブノ有様ヲ現出シタリ、馬德拉斯ノ主長ハ、之ヲ救ハントセシガ、其計略全ク失敗シタルノ故ヲ以テ、益々危迫ニ陥リケル、

是ヨリ先キニ麻刺加ノ酋長モラリー、ローハ、馬哈默德、阿厘ノ囑ニ應シ、兵士六千人ヲ率テ、英人ヲ援ハンカ爲メニ、カーナチツクノ國境マデ侵入セシガ、佛軍ノ勢、破竹ノ如ク、容易ニ抵抗スベカラザルヲ知り、兵ヲ擁ノ進マザリシモ、已ニシテ、甲爾加達ノ防守、頗ル堅固ナルト聞キ、進テ之ニ應援シタリ、ラシヤ、サヒブ援軍ノ動クヲ見テ、一策ヲ案シ、克雷武ニ陷ハシムルニ、互利ヲ以テシ、速ニ媾和ヲ諾セシメントシタリシニ、克雷武ハ、毫モ之ヲ肯ンズルノ色ナク、却テ痛ク之ヲ辱シメタリ、

ラシヤ、サヒブ、克雷武ノ屈セザルヲ以テ、大ニ怒リ、愈々城寨ヲ擊破スルニ決シタリシガ、恰モ其日ハ、馬哈默德、阿厘ノ長子、ホーセイインノ忌日ナリキ、ラシヤ、サヒブ此日ヲトシテ進撃ニ決シ、城壁ニ押寄せタリ、

克雷

雷武ハ豫シメ其計略ヲ探リテ之ヲ知リケレハ十分之ニ應スルニ足ル
準備ヲ爲シ暫ク楊上ニ臥シ居タリシニ忽チ聞ク砲雷般々トシテ山ヲ
撼カシ彈丸嘍々トシテ星ノ如ク城門ハ忽チ崩レントス克雷武遽カニ
起テ兵士ヲ指揮シ單身馳セテ一門ノ大砲ヲ運轉シ筏上ニアル敵兵ヲ
一掃シ敵兵亦非常ノ熱心ヲ以テ空濠ヲ越ヘテ壁ニ乗ントセシモ是レ
モ亦城兵ノ爲ニ砲撃セラレ敵兵三回押寄せタレト結局終ニ濠ヲ棄テ
退去シタリ、此戰ハ前後殆ント一時間ニ亘リ敵兵ノ斃ルモノ四
百人ニシテ兵僅ニ五六人ヲ失フニ過キザリキ、

此報ノ一タビセリトヨリシ寨ニ達スルヤ同地ノ人民ハ大ニ喜ビ直
ニ英人二百人ト土人七百人トヲ送リテ其勢ヲ援ケタリ克雷武ハ此新
兵ヲ得テ直ニ進撃ヲ始メチメリノ寨ヲ陷ルマラリローノ分隊
ト連絡シラシヤサヒブヲ追撃シテ大ニ之レヲ敗レリ土人兵六百人軍
門ニ降りコンゼヴヘラムモ亦戰ハズシテ降ヲ乞ヒアルニ知事モ

亦チヤンダサヒブニ背キテ馬哈默德阿厘ヲ奉スルニ至レリ己ニシテ
ラシヤサヒブハ再タヒ大軍ヲ率テ四百人ノ佛軍ト共ニセント、シヨ
ソジノ寨下ニ顯ハレ英國諸紳士ノ別業園囿等ヲ破壊スルニ至レリ然
レト是モ亦克雷武ノ爲ニ敗ラレ佛軍百餘名ヲ失ヒタリ克雷武ハ勝ニ
乘シテ直ニセント、タビットニ赴キシガ路ニ猶布烈ノ勝利ノ都府ヲ過
キ彼ノ石碑ヲ見テ直ニ令ヲ下シ都府ト紀念碑トヲ併セテ之ヲ破壊セ
シメタリ、

英軍到處トシテ勝利ヲ得タリケレハ曩キコトリチノボリー府ヲ圍ミ
タル敵兵モ今ヤ却テ圍ヲ受テ降ヲ請フニ至リチヤンダサヒブハ麻刺
加人ノ爲ニ擒ニセラレ死刑ニ處セラレタリ然レト佛將猶布烈ノ精神
ハ雄毅ニシテ毫モ屈撓セズ種々ノ策畧ヲ運ラシタリ然ルニ佛國政府
ハ遠算長計ニ暗ク却テ猶布烈ノ政畧ヲ排シテ毫モ其財用ヲ給與セズ
止メ兵隊トシテ軍事ニ熱セザル水夫ヲ送致スルニ過キザルノミ猶布

烈ハ之レカ爲ニ其志ヲ變セズ、或ハ權畧ヲ試ミ、或ハ財賄ヲ用ヒ、或ハ土人ヲ誘引シテ盟約ヲ爲シ、漸ク私産ヲ傾ケ盡シタルニモ拘ラズ、更ニ許多ノ金ヲ借リ入レ、人心ヲ煽動シテ、馬德拉斯政府ニ背カシメンコトヲ謀リシモ、遂ニ其目的ヲ貫徹スルコト能ハザリキ、

是レヨリ先キ、ローレンスハ再クヒ英國ヨリ來リテ、全軍ノ總督ト爲リ、克雷武其副將ト爲ル、是ニ於テ英國ノ勢力印度ヲ壓セントス、ローレンスハ才畧ノ士ニ非サレテ、善ク克雷武ノ人ト爲リテ信用シ、且ツ之ヲ愛セリ、嘗テ某氏ニ與ヘタル書中ニモ左ノ如キ言アリ曰ク
 世人或ハ克雷武ヲ以テ僥倖奇遇ノ人ナリトスルモノアレテ、是レ決シテ然ラズ、克雷武ノ幸福タル、皆是レ其功業ノ賜ニシテ、克雷武ノ之ヲ受クルハ、當然ノ理ナリ、此人ヤ澹泊ニシテ、決斷ニ富ミ、沈着ニシテ、如何ナル大難ニ遭遇スルモ、更ニ其心ヲ動スコトナク、自然ニ軍人的ハ氣象ヲ有セリ、何トナレハ、克雷武ハ、毫モ軍人ノ教育ヲ受ケタルコトナ

ク、亦多ク軍人ト交際セズト雖、其決斷ト、德義トハ、熟練ナル將校、勇敢ナル兵士ニ讓ルコトナク、能ク必勝ヲ先見シテ、軍隊ヲ指揮スレハ、ナリ、
 適評ト謂フベシ、

一千七百五十四年ニ至リテ佛國政府ハ猶布烈ヲ召シテ國ニ還ラシム、是レ蓋シ英國ノ得意慣用ノ陰計ニ出デシナリト云フ、豪氣不屈ナル猶布烈ハ、本國ニ還リシ後、快々トシテ樂マズ、遂ニ大志ヲ齎ラシテ憤死セリ、拉爾列ハ猶布烈ニ代リテ佛領東印度ノ總督ト爲リシガ、數年ナラズシテ佛人東印度ノ所領ハ、悉ク英人ノ占奪スル所ト爲レリ、

獅巖曰、激水之疾至於潭石者勢也、驚鳥之疾至於毀折者節也、克雷武之堅守、是勢也、節也、

龍潭曰、克雷武以寡軍據孤城、無毫釐、唯神算以制其強、可謂善知兵者矣、

第四章

克雷武ノ政畧

莫臥爾帝國ノ領地中ニ於テ富饒無比ナルモノハ、即チ榜加拉ニシテ印度國中、何レノ場所ト雖モ、農作貿易共ニ天然ノ便利ヲ有スルモノ、此地ニ過グルハナシ、恒河ハ、百條ノ分流ヲ爲シ海ニ注キ平原ノ地皆沃饒ナラザルハナシ、其草木ハ、鬱鬱トシテ繁茂シ、其稻田ハ、穰々トシテ豐熟ナリ、加フルニ香料砂糖ヨリ草木ノ膏油ニ至ルマデ一トシテ充切セザルハナク、魚類ハ、河川ニ溢ル許リナリ但シ沿海ノ諸嶋ハ、住民少ナク、毒樹惡草繁茂シ、糜鹿虎豹、相群集スト雖モ亦食糧ヲ出シテ耕作貿易ノ地方ニ供セリ、而シテ恒河ハ、獨リ土地ヲシテ肥沃ナラシムルニ止ラズ、亦大洋ノ貿易ニ莫大ノ便利ヲ與ヘ、本流及支流ノ沿岸ニハ、印度國中最モ富饒ナル市場アリ、最モ宏大ナル都會アリ、最モ神聖ナル寺院アリ、如何ナル人力モ以テ此天然ノ肥沃ヲ害スルコト能ハズ、然レハ歐人ハ、榜加拉ヲ稱

シ、東洋人ノ爲ニ富裕ノ王國ニシテ「雅典ノ花園ナリ」ト呼ブニ至レリ、然レモ、此富饒ナル地ニ住居スル人民ハ、其氣候ノ溫暖ナルト其生活ノ容易ニシテ勞力ヲ要セザルカ爲ニ、其氣力ノ柔弱ナルコト恰モ婦人ノ如シ、又歐洲ノ諸商會ハ、前方ヨリ、製造所ヲ榜加拉ニ建設シタリ、佛人ハ、フーグリー河ノ沿岸ナルチヤンデルナゴールニ居留地ヲ開キ、英人ハ、其下流ニ沿テ維廉塞ヲ起セリ、其近傍ニハ、寺院アリ、倉庫アリ、河ノ兩岸ニハ、東印度會社官吏ノ家屋アリ、番樓櫺閣、相接シテ、晴波ニ映シ、相隣リテ盛大ナル土人ノ都會アリ、當時英人ノ居留地ハ、純然タル印度政府ノ所有ニシテ、英人ハ、他ノ大ナル借地人ト同シク、其地租ヲ納メ、且ツ其領地内ニ於テ、裁判權ヲ實行スルモ亦曾テ他ノ大ナル借地人ニ異ナラザリキ、抑モ榜加拉州ハ、オリツサ及バハールノ二州ト共ニエライバードーハントト稱シタル一大守ノ管轄スル所ナリキ、此大守モ亦他ノ諸大守ト同シク、莫臥爾家ニ背キテ獨立セシモノニシテ、千七百五十六年ヲ以テ

病歿シ其幼孫士刺牙特拉代リテ主權ヲ掌握セリ、士刺牙、特拉性殘忍ヲ好ミ、同胞兄弟ヲ窘辱スルヲ以テ樂ミト爲シ、其左右ハ皆無能ノ小人ニシテ、政令腐敗、殆ント言フニ忍ビズ、士刺牙、特拉ハ幼年ヨリ英人ヲ厭惡シ、且ツ甲爾加達ヲ畧奪スル時ハ、非常ノ利益ヲ得ベシト思惟シタリ、故ニ常ニ英人ト爭端ヲ開カント欲シ、其口實ヲ求メ居リケルニ、不幸ニモ忽チ之ヲ發見シタリ、此時、英人ハ佛國ト戰爭ノ破裂セソクテ慮リ、チボツブノ特許ヲ請ハズシテ居留地ニ城塞ヲ築キ、且ツ富裕ナル土人ニシテ士刺牙、特拉ノ培克ヲ恐レテ甲爾加達ニ逃走シタルモノアリシニ、英人ハ之ヲ保庇シテ、引渡スコト肯ンセザリケレハ、士刺牙、特拉ハ此等チ口實ト爲シ、直チニ大軍ヲ發シテ維廉寨ヲ陥キリタリ、

士刺牙、特拉ノ軍隊ガ、一大殘虐ノ處置ヲ施シタリシハ、實ニ此時ニアリ、士刺牙、特拉ハ囚徒ヲ擧ケテ、之ヲ番兵ニ托シタリケレハ、番兵ハ之ヲ圍圖ニ入レテ、其夜ヲ過サントセリ、然ルニ此圍圖ハ所謂圍審ニテ方ニ丈

ニ過キズシテ十分ニ空氣ヲ通スルノ窓戶モナク、所々圓穴ヲ穿ツト雖、是レ亦細小ニシテ且ツ閉塞セリ、時ニ三伏ノ炎暑、酷熱燬クカ如シ、高樓ニ倚リテ、扇ヲ解カザルモ猶ホ且ツ堪ユルヲ能ハサル時ニ當リテ、番兵ハ無情殘酷ニモ、百四十六名ノ囚徒ヲ擧テ、此中ニ投シタリ、囚徒ハ一同煩悶號叫ニ堪ヘズシテ、愁訴嘆願セシモ番兵ハ毫モ之ヲ顧ズ、命ニ從ハザルモノハ、劔芒ヲ以テ之ヲ驅リ入レ直ニ其戶ヲ閉チ鎗ヲ箝シタリケレハ、一同ハ互ニ相蹂躪シ呻吟ノ聲ヲ發セリ、正ニ是レ曉天ニ及ブ頃ニ當リテ士刺牙、特拉ハ起テ圍審ヲ開カシメタルニ無殘ナル哉、囚徒ハ概チ死シテ、屍山ヲ爲シ、炎熱ノ爲ニ腐敗セル臭氣ハ、殆ント耐ユベカラズ、其僅ニ生存セシモノハ、廿三人ニシテ、蹣跚トシテ死骸ノ中ヨリ葡萄シタリ、士刺牙、特拉、直ニ番兵ニ命シテ、一大穴ヲ掘ラシメ、都合百廿三人ノ死骸ヲ投シテ之ヲ埋メタリ、其慘毒亦驚クニ堪タリ、

士刺牙、特拉ハ書ヲ特里ノ朝廷ニ送り、華麗ナル言詞ヲ以テ其大捷ヲ奏

セリ又維廉塞ニ番兵ヲ置キ、英人ノ近傍ニ住スルヲ禁シ、後人ヲシテ、其大勝ヲ知ラシメンカ爲ニ、爾後甲爾加達ノ名ヲ改メテ、アリチゴール(天ノ港)ト稱シタリキ、

馬德拉斯ノ英人ハ八月ニ至リテ甲爾加達陷落ノ警報ヲ聞キ、大ニ激シ怒髪上リ街ヲ許リナリニテ此警報ノ到着後、四十八時間ノ内ニ遠征軍ヲ送ルニ決シ、克雷武ヲ以テ陸軍總督ト爲シ、水師提督ワットソンヲ以テ海軍總督ニ任シ、兩將共ニ英軍九百人ト、土人兵千五百人トヲ率テテ出發シタリ、此隊ノ甲爾加達ニ出發セシハ、十月ナリシモ、逆風ノ爲ニ航海ヲ妨ケラレ、十二月ニ至ルマテハ榜加拉ニ到着スルヲ能ハザリキ、

此時士刺牙、特拉ハムールシエダバットノ宮中ニアリテ、日夜歡樂ニ耽リ、大難ノ目前ニ迫ルコトヲ知ラズ、且ツ平生英人ヲ輕蔑シ居タリケレハ、英軍ノ我カ封疆ヲ侵襲スベシトハ夢ニタモ思ハザリキ、然ルニ何ソ圖ンヤ英軍ノフリーグリーチ渡リタルト聞キ、大ニ怒リ直ニ全軍ヲム

ルシエダバットニ召集シ、甲爾加達ヲ指シテ馳セ向ヒケル、

克雷武ハ驕馳電奔ノ勢ヲ以テ、バツヂバツヂヲ取リ、維廉塞ノ番兵ヲ破リ、甲爾加達ヲ恢復シテフリーグリー河ヲ横絶セリ、士刺牙、特拉ハ英軍ノ勇敢比ナキヲ見テ、大ニ驚愕シ、英將ニ請ヒ、製造所ヲ返還シテ以テ和議ヲ結ハンコト謀リシガ、克雷武遂ニ之ヲ承諾シタリ、

士刺牙、特拉ハ、最モ驕傲ニシテ、最モ詐僞ニ長シ、忽チ英人ニ抗スルカト思ヘハ、忽チ之ト和シ、忽チ約束シテ、忽チ之ヲ變更シ、反覆變轉一ナラスナヤンデルナゴール在留ノ佛人ト相通シ、德干ニアルバツシーチシテブイグレリーニ來ラシメ、英人ヲ榜加拉ノ外ニ驅逐セシメントセナリ、克雷武等盡ク其陰謀ヲ偵察シ、以爲ラク、援兵ノ印度ノ北方或ハ歐洲ヨリ到着セザルニ乘シテ、チヤンデルナゴールヲ攻撃スベシト、是ニ於テワツトソンハ水軍ニ克雷武ハ陸軍ニ將ト爲リテ之ヲ襲ヒ、海陸共ニ全勝ヲ占メ、城塞番兵ヨリ大砲兵糧ニ至ルマテ悉ク英人ノ手ニ落チタリ、士刺

牙特拉ハ是ニ於テ益々英軍ニ懾伏セシモ、其後チ驕傲ノ状態ヲ顯ハシ、或ハ英軍ヲ進撃スベシト云フカト見レハ、或ハ其命令ヲ取消シ、其表裏反覆依然タリ、己ニシテ克雷武ハ、終ニ士刺牙特拉ヲ廢シメール、シヤフサルヲ立テ榜加拉ノ太守ヲラシメタリ、
 幾モナクシテ、士刺牙特拉ハ急ニ全軍ヲ集メテ、英軍ヲ破ント謀リタリ、メールシヤーフサルハ自ラ分隊ヲ以テ克雷武ヲ攻撃スルト稱シ、士刺牙特拉ト其陣ヲ異ニセリ、克雷武ハ己ニ進ミテマンシンブカールニ至リ、ブラツセーナール士刺牙特拉ノ大軍、僅ニ數里ヲ隔テ、相對スレドメ、ルシヤーフサルハ猶躊躇シテ未ダ決セズ、克雷武ヨリ至急ノ催促ヲ受ケナガラ、徒ニ遁辭ヲ以テ之ニ應シタリ、

克雷武ハ、痛苦危險ノ地位ニ立テリ、今ヤ一軍ノ存亡ハ、全ク己レノ責任ニアルヲ決定シ、平生剛毅ノ精神モ此ニ至テ始メテ挫ケ、進退ヲ決スルヲ能ハズ、遂ニ將士ヲ會ノ、軍議ヲ開キシニ、過半ハ、進軍ヲ非トセシニ

由リ、克雷武モ一旦ハ之レヲ是認シタリシガ、會議ノ終ルト同時ニ、忽チ其氣力ヲ恢復シ、獨リ樹陰ニ憩ヘ、深思スルコト一時間許、遂ニ勝敗ヲ天命ニ委シ、一大血戰ヲ爲スヘキニ決シ、軍中ニ來リ令ヲ傳ヘテ曰ク、

明朝ヲ期シ、全軍ヲ渡ルノ用意ヲ爲スベシ、

ト後チ克雷武、人ニ語テ曰ク終身止ター一回軍

事ニ就キテ會議ヲ開キタリ、是レ余ガ一大失策ナリ、當時其議決ニ從ハド、英國ノ榜加拉ニ君臨スルヲ能ハザリシナルベシ

英軍河ヲ渡リ夜ニ入り、辛クシテアラツセーニ近キ芒菓樹ノ森林ニ達シ、敵軍ヲ距ルヲ一里ニシテ野營ヲ張リシガ、克雷武ハ憂心忡々トシテ眠ニ就クヲ能ハズ、敵陣ノ鉦鼓ヲ聞キテ夜ヲ過セリ、己ニシテ天正ニ明ク、是レツ印度ノ運命ヲ決スル時ナリケリ、紅日天ニ輝クト同時ニ印度ノ大軍ハ、所々ノ陣門ヨリ出テ、恰モ海水ノ溢ル、カ如ク、英人ノ屯在スル森林ニ向テ進行セリ、四万ノ歩兵ハ小銃、刀槍、弓矢ヲ携ヘテ、原野ニ充満シ之レト同時ニ巨大ナル戰砲六十門アリ、一門毎ニ一列ノ白牛ヲ之ヲ曳カシメ、各々其後チニ象ヲ從ヒテ之ヲ驅レリ、而シテ佛國ノ援

兵ハ少數ナレド數門ノ小戰砲ヲ指揮セリ、此外ニ一万五千ノ騎兵アリ、此軍隊タル慍悍ナル北方ノ種族ヨリ選拔セラレタルモノナリ、克雷武ノ兵ハ僅ニ三千人ニ過キズ、此中ノ一千人ハ、英兵ニシテ其餘ハ盡ク英國ノ操練ヲ受ケ英國ノ士官ニ從フ所ノ土人兵ナリ、此小勢ノ間ニテ、最モ卓越ナルモノハ、第三十九隊ノ兵士ナリトス、

兩軍共ニ大砲ヲ以テ戰爭ヲ始メシガ、英國ノ大砲ハ小數ナレド、連發命中シ、士刺牙、特拉ノ猛將多ク砲丸ニ斃レ全軍稍動クノ色アリ、叛黨ノ一人ハ士刺牙、特拉ニ勸ムルコ、軍勢ヲ引揚クノ利益ヲ以テセシカ、士刺牙、特拉其說ヲ容レテ、退軍ヲ命セリ是ニ由テ自己ノ運命ヲ失シタリ、克雷武ハ敵軍ノ動クヲ見ルヤ否ヤ全力ヲ併セテ、之ヲ侵撃シタリケレバ、士刺牙、特拉遂ニ大ニ潰敗シ其戰死スルモノ僅ニ五百人ニ過キズト雖モ、其陣營ヲ始メ大砲兵糧ヨリ巨万ノ車輪家畜ニ至ルマテ盡ク之ヲ敵軍ニ委シ去レリ、克雷武ハ二十二人ヲ失ヒ、傷ケタルノミニシテ、堂々タル

一 大帝國ヲ征服スルヲ得タリ

メルシヤフサルハ戰爭中、毫モ英軍ノ應援ヲ爲サザリシガ、其勝敗ノ決スルヤ否ヤ徐ロニ其市隊ヲ引揚ケ、視然トシテ祝詞ヲ克雷武ニ贈レリ、其卑劣亦憫笑スルニ堪タリ、且ツ翌日英軍ノ軍中ニ至リシニ、雷克武ハ之ヲ迎ヘ握手接吻ノ禮ヲ施シ、之ヲシテ、榜加拉オリツサハハール三洲ノ「子ボツブ」ト爲サシメタリ、

士刺牙特拉ハ駿足ナル駱駝ニ鞭ヲテ戰場ヲ遁レシガ、廿四時間許リニシテムールシエダハツトニ着シ、英軍ト戰ヒ利アラズ遂ニ微服舟ニ乗シテパトナニ遁レタリ、——克雷武ハ、二百名ノ英軍ト三百名ノ土人兵トヲ護衛トシテムールシエダハツトニ赴キケルニ、メルシヤフサルハ一ノ宮殿ヲ以テ、克雷武ノ寓所ニ充テタリ、此寓所ハ、四面ニ廣大ナル庭園アリシカハ、克雷武ノ軍隊ハ皆其中ニ屯營スルヲ得タリ、是ニ於テ、メルシヤフサルハ即位ノ式ヲ行ヒシカ、克雷武ハシヤーフサルノ手ヲ引キ

テ壇上ニ登ラシメ、東洋古來ノ習慣ニ倣ヒテ黄金ノ贈ヲ呈シ然ル後テ
ニ滿堂ノ主人ニ向テ其善長ノ君主タルヲ祝シタリキ、
士刺牙、特拉ハ逃亡後、僅ニ數日ニシテ、縛ニ就キシヤーフサルノ爲ニ殺
サル、
英人ハ毫モ之ニ關係セザリシガ、其死刑ヲ聞キ竊ニシヤーフ
サルノ殘忍ヲ譏リケルニ、シヤーフサルハ毫モ愧ツル色モナク英人ニ
謂テ曰ク、
余ハ諸君ノ爲ニ其深讎ヲ報シタリ、
ト

今ヤ東印度會社及ヒ其官吏ハ恰モ是レ財貨ノ天ヨリ降ルカ如ク、シヤ
ーフサルハ流ニ沿ヒテ八十万磅ノ銀貨ヲムールシエダハツトヨリ維
廉樂ニ輸送シ之レテ運送セル船隊ハ、百餘ノ小舟ニシテ旗章ヲ翻ヘシ、
音樂ヲ奏シ、目覺マシキ航海ヲ爲シタリ數月前マデハ、零落敗壞シタル
甲爾加達府モ今ヤ舊時ニ倍スル繁盛ト爲リ、商賣活潑コソ英人ハ戸毎
ニ餘裕アルノ狀ヲ顯ハシタリ、克雷武ニアリテハ、金銀財寶唯々意ノ欲
スル所ニ任セテ、自己ノ遠慮ヲ除キテ別ニ之ヲ制スルモノモナカリキ、

榜加拉ノ金庫ヲ開キテ之ヲ見ルニ、印度君主ノ風習ニ從ヒテ金銀貨幣
ノ山ヲ積ミ、其中ニハ歐洲ノ未タ喜望峯ニ通航セザリシ前ニ於テ威内
斯人ガ東洋ノ香料等ト交換セシ「フローリン」貨、「パイサント」錢等モ亦鮮
カラズ克雷武ハ此紅寶石又ハ金剛石ヲ以テ裝飾シタル金銀堆積ノ中
ヲ徘徊シ幾千万ノ貨幣ヲ取ルモ亦容易ナリキ、
克雷武ハ實ニ二三百万磅
ヲ領収シタリ、抑モ克雷武カシヤーフサルヨリ金錢ヲ領収シタリシ
ハ其後十六年ニ至リテ大ニ輿論ノ排撃スル所ト爲リ、國會モ亦劇シク
之ヲ非難スルニ、至リシナリ、然レモ克雷武ノ如ク大功アルモノハ非常
ノ富ヲ貪ルヲ得ルモ亦謂レナキニ非ズ、

克雷武ハ、又、カーナナツクノ北方ニ接スル地方ニ向ヒテ、兵隊ヲ差出シ
タリ、此地ハ當時僧佛人ノ據有スル所ニシテ之ヲ占領スルハ、甚ク必要
ナリトス、克雷武ハフロードヲ遣ハシ連ニ其勝利ヲ得タリ、

此時榜加拉ノ軍隊ハ、遠征ニ從事スル際ニ於テ更ニ一大危急ヲ西阪ニ

生シタリ、是ヨリ先キニ、莫臥爾帝ハ、乱臣ノ爲ニ擒ニセラレ、特里ニ幽居シ其長子亞蘭多年ノ間厄運ニ再會シ、初メハ、麻刺加人ノ爲ニ擁セラレ後ニハ英人ノ爲ニ掌中ニ翫弄セラレシガ、終ニ宮中ヲ遁ル出テタリ、然レモ其系統ノ尊キカ爲ニ印度人中之ヲ尊敬スルモノ少ナカラズ、ドノ大守ヲ始メトシテ、二三ノ強大ナル諸侯ハ大ニ之ヲ援助セント欲スル意アリ、亞蘭帝ハ印度ニ散在スル勇敢ノ死士ヲ招集セシニ、麻刺加人ローヒルラ人ヨリ阿富汗ヤウツ人等ニ至ルマテ、凡ソ四萬人許來應セリ、是ニ於テ意ヲ決シ、英人ノ擁立スル新帝ヲ廢シ、榜加拉オリツサハハールノ諸洲ヲ併吞セントシテ圖ル、

セヤコフキル之ヲ聞キ、恐懼ニ堪ヘズ、以爲ラク多ク金ヲ與ヘテ媾和ヲ亞蘭帝ニ請フノ外、策ナカルベシト欲セシガ、克雷武書ヲ與ヘテ之ヲ諫メ又書ヲ土人パーナノ知事ニ送リテ和議ノ拙策タルヲ論セリ、已ニシテ亞蘭ノ軍パトナヲ攻メテ之ヲ陷ントス、克雷武兵ヲ率テ兼行シ、

之ヲ救フ、當時ノ軍隊ハ、終ニ四百五十名ノ歐人ト二千五百人ノ土人兵トニ過キザリシモ、勢威凜々、印度全國ヲ震動シタリシニ由リ、敵軍ハ、英軍ノ來ルヲ見テ、數日ヲ出デズシテ全ク潰散スルニ至レリ、

克雷武ハ凱旋シテ維廉寨ニ入りシガ、セヤコフキルハ之ニ贈ルニ宏大ナル謝儀ヲ以テスルニ至レリ、當時東印度會社ノ甲爾加達ノ南方ニ在ル土地ノ地代トシテ、チボツブニ納ムル金額ハ、毎年大凡ソ三万磅ニ及ヒシガ、今ヤセヤコフキルハ、此廣大ナル領地ヲ擧ケテ終身間克雷武ニ與フルヲ約シタリ、

幾モナク、セヤコフキルハ、克雷武ノ威權人ヲ凌クヲ惡ミ、窃ニ之ニ抵抗セントシテ希圖シタリ、然ルニ土人兵ハ、固ヨリ恃ムベキニ非ズ、佛國モ當時榜加拉地方ニ於テ、全ク其勢ヲ失ヒ、兵力ヲ得ルノ望ナシ、但タ荷蘭ハ、往古ヨリ名ヲ東洋ニ輝シケレバ、セヤコフキルハ、使者ヲシンシユラニ在ル荷蘭ノ製造所ニ遣ハシテ窃カニ款ヲ通セシニ荷蘭人ハ急ニ書

ナハタビヤニ送り、速ニ榜加拉ノ英人ニ敵スヘキ遠征軍ヲ出サンコトヲ勸メタリ、是ニ於テ、バダビヤニ於ケル七、大軍艦ハ急ニ瓜哇ヨリフーグリー河ニ達シ、其軍勢ハ一千五百人ニシテ一半ハ皆歐洲人ナリ、當時克雷武ハ、佛人ヲ攻メンカ爲ニ、大軍ヲカーナナツクニ出シ、跡ニ留マリシ兵隊ハ、決シテ蘭軍ニ敵スベキコト非ズ、且ツ英國政府ハ、已ニ佛國ト戰端ヲ開キ居レハ、更ニ荷蘭ト罅隙ヲ開クコト、決シテ其得策ニ非ザルコトヲ知ル、然レモ此ニ至テ詮方モナカルヘケレハ、非常ノ英斷ヲ施シ、其屬官モ大ニ力ヲ盡シ、荷蘭人ノ此地ヲ通過シテシンユーラニ至ントスルヤ、英軍ハ水陸ヨリ之ヲ攻撃シタリ、荷蘭ノ軍ハ、水陸共ニ其兵勢英軍ニ超過シタレモ、盡ク大敗ヲ取り、船ヲ棄テ兵ヲ失ヒ、軍中第一ノ強兵ナリシ歐洲人モ概テ戰死シ、又ハ捕獲セラレタリ、英軍ハ勝ニ乘シテシンユーラニ押寄セシニ、此地ノ首領ハ、一ニ克雷武ノ要請スル所ニ從ヒタリ、克雷武ハ、此大勝利後三ヶ月ニシテ英國ニ向ヒ出帆シタリ、

龍潭曰、余聞馬場信房大小百戰未嘗取敗、未嘗蒙傷、或問之曰、無他術、能應變而已、變出意外、吾意逆而應之、故不敗不傷、吾觀今戰士、未戰心先沮、心沮則氣飢、氣飢則目眩、目眩則視亂、視亂欲應意外之變而不可得、吾雷武之奇捷奇功、皆自此段得來、兵家第一義實在此、

第五章

克雷武ノ政畧

克雷武ノ榜加拉ヲ去リシヨリ纔ニ五年ヲ出テザルニ、印度ノ政治ハ、腐敗混亂ノ極度ニ達シ、人ヲシテ會社ノ存亡如何ヲ疑ハシムルニ至リ、其一二年間ニ於テ會社ハ非常ノ収斂ヲ擅コシタリ、東印度會社ノ吏員ハ、其曩キニ擁立シタルシヤーフ井ルヲ廢シ、子ボツナメル、コツシムヲ立

テタリ然ルニコツシムハ才器アリト雖也其臣民ヲ壓制スルヲ好ミ、
動モスレハ英人ニ向テ抵抗ヲ試ミタリケレハ英人ハ復之ヲ廢メ再々
ヒレヤーフ井ルヲ立テタリ是ニ於テコツシムハ非常ナル虐殺ヲ行ヒ、
走リテ澳度ノ大守ニ頼レリ、

英人ハ内地貿易ノ全權ヲ握リ卑シ賈ヒ高シ賣ルカ如キ所爲ハ固ヨリ
言フニ及ハズ其專横暴慢ナル裁判警察理財ノ諸官吏ト雖也毫モ之ヲ
制止スルヲ能ハザリキ加フルニ此輩ハ乱暴ナル土人ヲ驅使シ國中ヲ
剽掠セシメタリケレハ英商ノ臣僕ガ主人ノ威ヲ假リテ暴行ヲ逞シク
スルハ殆ント其主人ノ會社ノ威ヲ假リテ惡事ヲ行フニ異ナルヲナシ、
左レハ甲爾加達ノ英人ハ暫時ノ間巨万ノ財産ヲ積ミタリト雖也三千
万ノ土人ハ之レカ爲ニ窮迫ノ極ニ陥リタリ蓋シ印度人ハ居常暴政
ニ慣レタリト雖也斯ル暴政ニ逢ヒシヲ未ダ之レアラズト云フ昔日ニ
在テハ甚シキ暴政ニ遇フキハ其政府ヲ顛覆スルヲ得タル也之ニ反

シテ英人ノ組織ハ鞏固ニシテ容易ニ之ヲ顛覆シ得ベキニ非ズ勿論英
人モ野蠻的ノ壓制ヲ行フト雖也亦能ク文明ノ利器ヲ活用シ巧妙ナル
壓制ヲ行フヲ以テ榜加拉人ハ失望ノ餘ト雖也必死ノ勇氣ヲ發スル能
ハザリキ、

全体己ニ腐敗シ文官ノ貪婪驕奢ハ次第ニ武人ニ傳染シ更ニ兵卒ニ及
ボシ終ニハ食堂ノ中マテ同盟徒黨ヲ現出シ土人兵ノ如キハ騒然トシ
テ相乱レ荷モ全隊ヲ刑スルニ非ザレハ之ヲ鎮壓スルヲ能ハザルニ至
リタリ、

東印度會社ノ貪婪紀綱ノ腐敗邊疆ノ戰爭軍隊ノ不平ハ終ニ本國人ヲ
シテ杞憂ニ堪ヘザラシムルニ至レリ英人万口一談皆曰ク我カ克
雷武ニシテ始メテ其建設シタル帝國ヲ救済スベキ也ト是ニ於テ
克雷武ハ英領榜加拉ノ知事ニ撰ハレ又總督ノ任ヲ諾セリ然レバ東印
度會社ノ改撰ヲ見ルマテハ決シテ赴任セザルベキヲ告ケタリ此等

ハ、終ニ克雷武ノ勝ト爲リ、是レマテ東印度會社ノ權力ヲ專有セシサウ
ルリバンハ其地位ヲ失ヒ、社長及副社長共ニ新知事ノ親友ト爲リタリ、
「克雷武ハ、千七百六十五年、五月ヲ以テ、甲爾加達ニ到着セシガ、其紀綱ノ
腐敗シ、百事廢弛セシト本國ニアリテ、想像セシヨリモ甚シキモノアリ
シヤ一フキルハ其長子ミートランヲ喪ヒタル後、其身モ亦克雷武ノ航海
中ニ死去セシカハ、甲爾加達在留ノ夷人ハ、曩キニ印度諸王ヨリ贈物ヲ
受クベカラストノ嚴令アリシニモ拘ラズ、只管利ヲ得ルニ熱心ノ本國
會社ノ命令ヲ遵奉スルニ慣レザリシカハ、復榜加拉ノ王位ヲ賣ントシ
タリシモ、有力ナル輩ハ、竊ニ十四萬磅ノ賄賂ヲ得テ遂ニ亡トボツブノ
幼兒ヲ擁立シタリ、」——克雷武ノ上陸スルヤ否ヤ、此ノ如キ卑陋ナル商
議ヲ聞キ、聞モノナク、親友ニ寄セタル書中ニ於テ、之ヲ慨嘆シタリ、其言ニ
曰ク——嗚呼悲哉、英人ハ、名譽ハ己ニ、地ニ墮チタリ、余ハ英人が消失シ
タル名譽ニ對シテ、多少ノ別涙ヲ澣カザルヲ得ズ而シテ亦其恢復ノ期ナ

カラソト恐ル、然レモ、余ハ上帝ニ誓ヒ、余カ潔白ナル精神ヲ持シテ此
ニ來リ、種々ノ猛烈ナル弊害ヲ排除スルニ非ザレバ、斃ルモ止マザラン
トテ公言スベシ——ト

克雷武ハ、會議ヲ開キテ、大改革ヲ行フノ決心ヲ告ゲ、又此目的ヲ達スル
カ爲ニハ十分ニ其兵力ヲ用ヒテ疑ハザルベキヲ告ゲタリ、會員中、最モ
剛膽ナル一人ジョンストーンハ之ニ抵抗セシガ、克雷武ハ其言論ヲ中
止シ、傲然トシテ之ニ向ヒ、我權力ヲ認メザルヤヲ質シタリケレバ、ジョ
ンストーンハ決シテ斯ル惡意ヲ懷カサルヲ陳ベ、滿場ノ顔色蒼然ト
シテ、復タ一人ノ異論ヲ發スルモノナカリキ、克雷武ハ、印度ニ在ルコト、一
年半ニ過キザリシモ、鐵石ノ心腸ト、猛烈ノ志氣トヲ以テ、直ニ百難ヲ排
シ、何レノ政事家ニモ劣ラザル至大ナル改革ヲ舉行シタリ、——克雷武
ハ、土人ノ贈物ヲ受クルコトヲ嚴禁シ、私ニ商賣ヲ營ムコトヲ制止シタリケ
レバ、全殖民地ノ人々ハ、一人ノ如ク、悉ク起テ之ニ抵抗シタリシト雖モ、

克雷武ハ、毫モ之ニ屈セズ、自ラ公言シテ曰ク——余ハ維廉塞ニ於テ、味方ヲ得ルヲ能ハサルベケレハ、之ヲ他方ニ求ムベシ——ト終ニ其行政ヲ輔翼スベキ文官數名ヲ馬德拉斯ヨリ聘シ、過激ナル反對黨ヲ擧ケテ之ヲ放逐シタリケレバ、其餘ハ己ムヲ得ズ、命令ニ屈從シ、復一人ノ抵抗ヲ試ムルモノナキニ至レリ、

東印度會社ハ、元來官吏ノ私利ヲ營ムヲ默許シ、毫モ給料ヲ増加セズ、評議役ノ給料スラモ、一年僅ニ三百磅ニ過キザリシナリ、此等ノ給料ノミコテハ決ノ其生計ヲ支フルヲ能ハズ是レ實ニ會社ノ官吏ガ、私利ヲ營ミ、己レヲ富マスヲ默許シタル所以ナリ、克雷武以爲ラシク、會社ノ官吏ヨ報スルニ、十分ノ俸給ヲ以テスルニ非ザレハ、何等ノ改良ヲ施スル終ニ其實効ヲ見ルベカラズ——ト因テ己ノ權限内ニ於テ、一策ヲ運ラシ、印度歳入中ニ於テ第一ト云フベキ彼ノ食鹽ノ專賣權ヲ官吏ニ與ヘテ其給料ニ充テタリ、

克雷武ハ、文官ノ弊害ヲ一掃シタルト同時ニ、軍隊ノ跋扈ヲ制シ、之ヲシテ己レノ權力ヲ奉戴セシメ、又外交政畧ニ於テモ、大ニ其勢力ヲ展バシタリ(當時オールドノ大守ハ大軍ヲ擁シテバハールノ疆場ニアリ、移多ノ阿富汗人麻刺加人等モ皆之ト力ヲ戮セ、印度諸國相叛キテ英國ニ抗セントスルノ狀アリシモ、一旦克雷武ノ名ヲ聞キ悉ク兵ヲ解キテ去リ和親ヲ乞フニ至レリ)是ニ於テ、榜加拉政府ノ弊害一掃シ去リテ、英國領地ノ基礎、定マル、

扱テメル、シャーフキルノ嗣ハ、ムールシエダバツドノ舊都ニ居リ、チボツフノ名稱ヲ存シ、英人ハ人之ヲ尊ヒテ大王ト爲シ、稍々其祖先ノ儀仗ヲ存スルヲ許シ、年々十六万磅ノ俸給ヲ與ヘ、馬車ニハ護衛ノ兵アリ、銀棒ヲ把テ前驅スルノ列アリ、其身体第宅ハ、通常司法官ノ權外ニアリト雖、亦更ニ政務ニ預ルノ力ナク、其實唯東印度會社ノ富貴ナル一箇ノ臣民ニ異ナラズ、

克雷武ハ、印度ニ留ルヲ、十八ヶ月ニシテ、大ニ其健康ヲ損シ、千七百六十七年一月ヲ以テ、終身其盛衰ニ關シテ、勢力ヲ振ヒタル帝國ヲ立テ去レ

リ、然ルニ其前日ノ運動及所爲ハ、大ニ世論ノ攻撃ヲ蒙リ、國會ハ其罪狀ヲ議決シタリ、千七百七十四年十一月四日、克雷武ハ憂ヲ以テ自殺ス、年四十九、

英儒マコーレー、克雷武ヲ評シテ曰ク——英軍ノ名ヲ轟カシタルハ、克雷武ガ第一ノ印度行ヨリ、其起源ヲ發スルモノナリ、——次ニ英人ガ印度ニ於テ政治上ノ主權ヲ掌握スルヲ得タルモノハ、克雷武ガ第二ノ印度行ヨリ、其起源ヲ發スルモノナリ、——最後ニ我カ東洋行政ノ清廉ニ赴キタルハ、實ニ克雷武ガ第三ノ印度行ヨリ、其起源ヲ發スルモノナリ、——ト確言ト謂フベシ、

野史氏曰ク、克雷武ノ勇悍、納爾遜ニ過キ、其兵ヲ用フルノ才、馬爾保羅ノ上ニ出ツ、而シテ政治上ノ幹略ニ至リテハ、斷シテ克林登ノ及ブ所ニ非ズ、其能ク隻手ヲ以テ印度帝國ヲ建設シタルモノ、豈偶然ナランヤ、然レモ克雷武ノ胞中、玲瓏脱灑ノ氣宇ニ乏シク、英人固有ノ商癖ヲ

脱出スルヲ能ハズ、是レ其舉動ノ往々人ヲシテ不快ヲ感セシムル所以ナリ、

第六章

哈士丁斯ノ征服其一

克雷武ニ於テ、印度帝國ノ事業ヲ擴張シ、武畧ヲ輝カシタルモノハ、瓦倫^{ワレン}ハ士丁斯其人ナリ、哈士丁斯ハ西曆千七百三十二年十二月六日ヲ以テ英國ニ生ル、幼ヨリ個儻不羈ニシテ、大志アリ、年十七ノ時、——千七百五十年一月、榜加拉ニ向テ出帆シ、東印度會社ノ書記ト爲リ、——甲爾加達^{アールガタ}上官局ノ書記——商業ニ従事シタリ、己ニシテ國內ノ形勢一變シ、兵戈動モスレハ天ヲ覆ヒ、戰塵時ニ地ヲ動カス、哈士丁斯蹶起、簿書ヲ抛テ

隊伍ニ加ハリタリ、時ニ元帥克雷武ノ活眼ナル、忽チ哈士丁斯ノ非凡ノ男子タルヲ看破シ以爲ラク、此壯士ノ膂力ヲ使用センヨリハ、寧^ニ其才幹智腦ヲ使用スルノ愈レルニハ若カザルナリト布刺西爾^{アラセ}ノ戰爭終ルヤ否ヤ、哈士丁斯ハ、東印度會社ノ使節トシテ、榜加拉ノ朝廷ニ滞在スベキノ命ヲ蒙リ、尋チ參事院ノ讓員ト爲レリ、
 千七百六十四年哈士丁斯ハ、一旦國ニ歸リシガ、未ダ幾ナラズシテ復タ眼光ヲ東印度ニ注クニ至レリ、哈士丁斯ハ、印度ニ航シ銳意シテ商業ニ從事セシガ、東印度會社ノ爲ニ、大ナル改革ヲ施シタリ、役員諸氏ハ其功勞ヲ賞センカ爲ニ意ヲ決シテ、哈士丁斯ヲ、榜加拉政府ノ大守ニ進メタリ、哈士丁斯ノ參事院ノ首領トナリシ時ニ當テ、榜加拉政府ハ、尙ホ前大守克雷武ノ組織ト異ナラザリキ、即チ當時印度ニハ、二様ノ政府アリ、一ハ實權的ノ政治ニシテ一ハ虛名的ノ政治ナリ、印度ノ主權ヲ掌握スルモノハ、無限制ノ專權ヲ有セル商會ニアレトモ、名義上ニ於テハ、尙ホ主

權者ナリトハ言ハズ、但タ英人ハ特里帝國家ノ臣民トシテ領地ヲ支配シ、又帝ノ委任ヲ受ケタル收稅官ノ資格ヲ以テ人民ヨリ租稅ヲ徵収シタリ、又其國璽ニハ帝號ヲ鐫刻シ、其造幣局ニ於テ、鑄造セル貨幣ニモ帝號ヲ印セリ、而シテ榜加拉ノ「ナボツブ」ナルモノモ存シ、百般ノ布告等ハ、皆其名ヲ以テ之ヲ發シタリキ、
 當時、加爾甲達ニ於テ商會ヲ代表スル英國ノ參事院ハ、大ニ權勢ヲ占メ、大守ハ專斷ヲ以テ、如何ナル行政上ノ處分ヲ爲スモ自由ナラザルナシ、宣戰、媾和、官吏黜陟ノ權ハ皆大守ニ屬セリ、議員ハ、大守ノ失政ニ對シテ、之ヲ論争シ、反對ノ意見アレハ、之ヲ本國ニ通知スルヲ得ルノ權利アレハ、要スルニ主權ノアル所ハ、全ク大守ニアリ、但シ榜加拉ノ内政ニ付キテハ、英人之チ、ムールシエダバツドニアル土人ノ一執政ニ委シ、軍務及ヒ外交事務ニ單ニ儀式ニ屬スル事柄ヲ除キ、ハ總テ其管理外ニアリト雖、其他萬端ノ施政ニ至リテハ、全ク此官ノ掌ル所タリ、而シ

テ其年給ハ、殆ント十萬磅ニ近ク、一年三十萬磅以上ノ「ナボツブ」王室費モ亦此執政ノ手ヲ經ザルベカラサルカ故ニ、其間ニ取捨増減ヲ受クルモ多シ、此ノ如ク歳入ヲ徵集シ、君侯ノ家政ヲ監督シ司法ノ事務ヲ行ヒ、秩序ヲ保維スル等、皆此高官ノ管轄内ニアリ、斯ル重要ニシテ權威アル地位ナルヲ以テ土人中、最モ英才ニシテ、最モ權勢アルモノハ、皆之ヲ得ンコト望マザルハナシ、其希望者ニテ、嶄然頭角ヲ出シタル二箇ノ人物アリ、其一ヲ馬哈默德、列沙干ト稱シ、波斯種族ノ回々教徒ニシテ、才略アルモノナリ、其一人ヲ麻幡列牙、南哥馬爾ト稱シ、印度ノ婆羅門教徒ナリ、然ルニ、克雷武ハ、回教人ヲ擧ゲテ榜加拉ノ行政長官ト爲サンコトヲ嫌忌シタリ、左レハトテ、南哥馬爾ノ如キ狡猾ナル人物ニモ此任ヲ與マルコト欲セズ、孰慮ノ後、斷然意ヲ決シテ馬哈默德列沙干ヲ推撰シタリ、當時、ミーヤ、シヤツフイヤノ幼子「ナボツブ」ノ位ニアリ、是ニ於テ南哥馬爾ハ、其冀望ヲ達セントスル心ト、怨恨ヲ報セントスル心ト、交々相激シ、彼ノ

成功ヲ得タル競争者ヲ顛覆セシメテ企テタリ、

哈士丁斯ハ、南哥馬爾トハ、意氣相投セズシテ、常ニ相嫉怒シタレ、列沙干ニ對シテハ、毫モ讎敵ノ思ヲ做サズリキ、而シテ哈士丁斯ハ、銳意シテ商會ノ命令ヲ實行シ、彼ノ榜加拉ニ於ケル二頭政府ノ組織ヲ廢セント決心シタリ、哈士丁斯ハ、平生ノ勇氣ト警敏トヲ以テ、万般ノ處置ヲ行ヒ、夜半印度兵ノ一隊ヲ率非テ、ムールシエマバツドニ於ケル列沙干ノ宮殿ヲ圍ミ、執政ヲ熟眠中ヨリ一攬シテ其己ニ囚人タルコト告ケダリシカバ、列沙干大ニ驚キ唯々トシテ命ヲ奉ゼリ、此時囚人ノ加爾甲達ニ至ル途ニ至ルマテハ、議院ノ議員等ハ夢ニダモ此舉ヲ知ラザリシト云フ、其機敏風霆ノ如シ、亦驚嘆スルニ足ル、

哈士丁斯ハ、己ニ改革ヲ企テ、悉ク之ヲ實行シタリ、是ニ於テ執政ノ職ハ廢セラレ、榜加拉ノ内政ハ、商會ノ握中ニ落チ、民事刑事ノ裁判制度モ成立シ、英人之ヲ管理シタリ、是レヨリ「ナボツブ」ハ名義上於テモ政府ニ關

繫スルコト能ハズ、但々年々俸給ヲ受ケ、依然トシテ居主タルノ虛名ヲ保ツニ過キザルノミ、當時ノ「ナボツブ」ハ猶ホ幼少ナルヲ以テ、其身体財產保護者ヲ置カザルベカラス、左レハ其身体ノ保護ハ、其父ノ後宮ノ貴女、曼尼比加牟^{マニビカム}ニ托シ、一家財產ノ管理ノ任ハ南哥馬爾ノ子具爾達斯^{グエダス}ニ命ゼリ^(改革ノ際ニ當テ、南哥馬ハ、種々ノ盡力ヲ爲シ英人ニ利益ヲ與ヘタリト雖、之ニ重大ナル權力ヲ授クルハ危險ノ嫌ナキニ非ス)故ニ哈士丁斯ハ、以爲ラク此才幹アリテ主操ナキ父ニ酬ユルニ、無害ナル其子ヲ推選スルコソ、最モ策ノ得タルモノナラント思惟シ、之ヲ用ヒタリト知ラナ^(ル)

是ニ於テ哈士丁斯ハ、曩キノ執政等ヲ糺問シ、寛大ナル道ヲ以テ、之ヲ處置シ、キタブロイノ如キハ、直ニ無罪ノ放免ト爲リ、列沙干モ亦釋放セラレタリ、

當時榜加拉政府ノ財政ハ危迫ノ極ニ達シ、哈士丁斯ハ、正邪順逆ノ如何ヲ問ハス、之ヲ救済スベキ手段アレハ、之ヲ採用セント決心シタリ、先ツ榜加拉ノ「ナボツブ」ニ、年々給與スル三十二万磅ヲ、(一時ニ)其半額ニ減シ、

又會社ハ、莫臥爾帝ヨリ領地ヲ受ケ居ルニ付、其臣屬ヲ證シテ、年々三万弗許リノ貢租ヲ納ムルノ義務ヲ取り、且ツ會社ハ交拉亞刺備拔土ノ二州ヲ莫臥爾帝ニ與ヘタリキ、是ニ至テ哈士丁斯ハ、莫臥爾帝ノ主權ハ、有名無實ナルベケレハ、此等ノ讓與ヲ爲スニ及ハズト決心シ、英人ハ最早貢租ヲ拂ハザルベシト宣告シタルカ上ニ、交拉及亞刺備拔土ノ二州ヲ占領センカ爲ニ軍隊ヲ派出セリ、然レモ哈士丁斯ハ、貨幣コソ必要ナレ、土地ハ其望ム所ニアラザルヲ以テ、此二州ヲ賣ント決心シタリシガ、幸ニ其購求者ニ缺カザリシ、莫臥爾帝國瓦解セシ頃ニ當リテ、烏土州^{ウツド}ハ回教家ノ領スル所ト爲リ、今尙ホ其所有タリシガ、是ヨリ先キニ英國政府ノ認可ヲ得テ王號ヲ僭シタリ、哈士丁斯ノ時、烏土侯ハ、其實ハ大權ヲ有セリト雖モ、敢テ全權者ノ名稱ヲ用ヒス、「ナボツブ」即チ副王ノ名稱ニ加ヘテ、印度帝國ノ大宰相ト稱セリ、當時ノ大宰相王タル士刺牙特拉^{スリヤトラ}ハ、英人ト甚々親密コシテ、且ツ富裕ナリシカバ、爰ニ双方賣買ノ契約忽チ整

ヒ、彼ノ莫臥爾帝國ヨリ収奪シタル地ハ、凡ソ五十万磅ヲ以テ、烏土政府
ノ有ニ歸セリ、

然レモ、爰ニ印度大宰ト大守トニテ決了スベキ一大事件アリ、魯比拉士
人民ノ運命ヲ定ムルコト是レナリ、魯比拉士人ハ、豪壯勇悍ノ軍隊ニシ
テ、莫臥爾帝ノ旗下ニ屬セリ、莫臥爾帝ハ、其勇氣ト功勞トヲ賞シテ、之ニ
一大領地ヲ賜ハリシガ、其地極メテ豐富ナリケレハ、士刺牙特拉ハ之ヲ
己レノ所領ト爲サント欲ヒシモ、其勇剛ノ氣力アルヲ以テ、輒ク之ニ向
ハザリキ、是ニ於テ士刺牙特拉ハ、英國ノ助ヲ借ント欲シ、哈士丁斯ニ哀
願セリ、哈士丁斯ハ直チニ其請ヲ容レ、魯比拉士ヲ服従スルヲ得ベキ
軍勢ヲ與ヘンコトヲ約シ、曰ク、大宰副王ハ、英軍ヲ借ルヲ得、其
借料トシテ大宰副王ハ、四十万磅ノ金ヲ拂フベシ、但シ戰爭ニ使役スル
間、ノ軍勢ノ諸入費ヲ支辨スルハ此限外ナリ、ト
榜加拉軍ハ、三隊ヲ以テ組織セラレタリシガ、大佐チヤンピオン其一隊

ヲ率キテ士刺特拉ノ軍ニ合シタリ、流石ノ魯比拉士人モ、勇戦ノ後、英軍
ヲ破ルコト能ハズ、遂ニ敗衄シ、國中ノ良府美地、到處トシテ殘暴ノ禍ヲ蒙
リ、全州ハ屠戮ト灰燼トニ非ザルハナシ、十万以上ノ人民ハ、斯ル禍ニ苦
シヨリハ、寧ロ瘴烟毒霧ノ林澤ニ遁ルニハ、若カズト相率キテ國土ヲ去
レリ、チヤンピオンハ、大宰副王ヲ諫メテ、其暴ヲ禁止セントシタレモ、其
效ナカリキ、初メ士刺牙特拉ヲシテ垂涎セシメタル富國モ、今ヤ烏土侯
ノ領内ニ於テハ、最モ荒寥ナル地方トハナレリ、然レモ魯比拉士人ノ精
神氣象ハ、之レカ爲ニ消滅セズシテ、獨立ヲ謀リタルコトアリ、今日其人民
ハ、銃槍ノ戰ニ於テ印度僱兵中、最精最良ナルモノナリト云フ、
千七百七十三年ノ英國議院ノ會期ニ於テ、印度政府ノ憲法ニ一大變革
ヲ加フルノ議案ヲ提出シタリ、此法律ハ督制條例ト稱スルモノニテ、此
法律ニ據レハ、榜加拉州ハ他ノ諸州ヲ支配スベシ、其州長ハ、大守ト稱シ、
之ヲ輔翼スルニ、四名ノ參議官ヲ以テスベシ、又高等裁判所ヲ甲爾加達

ニ置キ、判事長一名及ヒ之ニ屬シタル三名ノ判官ヲ以テ組織スベシトアリ、而シテ此裁判所ハ、大守及參議官ヨリ獨立シタルモノニシテ、民事刑事ノ裁判ヲ司リ、其權力ノ廣大ナル、無限ナリキ、條例ノ中ニハ、大守及ヒ參議官タルモノヲ指名シ、在職各々五年ト爲ス、初メテ大守ニ任セラレタルモノハ、哈士丁斯ニシテ、四名ノ新參議官ノ中、一名ハ、商會ノ役員伯バ空爾ウエルナリ、餘ノ三名ハ、英國ヨリ派遣セラレタルモノニシテ、クレベリンクレベリン、モンソンモンソン、フランシスは是レナリ、——此三名ノ新參議官ト判事長エリシヤーイーンベイモ亦來レリ、

哈士丁斯ハ、此等ノ新參議官ト、久シク相軋轢セシモ、其結局、哈士丁斯ノ運命強ク、皆其勝利ヲ得テ依然トシテ大守ノ職ニアリケル、

第七章

哈士丁斯ノ征畧其二

是時ニ當テ、印度帝國ノ全体ハ二頭政府ノ体制ニテ虛名ヲ有スルモノト、實權ヲ有スルモノトハ、各々相異ナレリ、回教ノ「ナボツア」等則チ烏土侯ウルトノ如キハイデウハツド侯ノ如キハ、己ニ主權アル君主ナレトモ尙ホ自ラ稱シテ帖木兒家ノ代官ナリト云ヒ、之ト同時ニ麻刺加ノ如キハ箇々獨立ノ地位ニアレトモ、自ラ稱シテ一帝國內ノ所領州ナリト云ヒ、而シテ儀式上ニ於テハ「セハツイ」ノ嗣王ト其宰臣即チ「ベシユア」トチ以テ已レノ上ニ立ツモノト爲セリ、其王ハ、無能ノ人主ニシテ其宰臣ハ、世襲ノ大官ナリ、而シテ布拿爾ブナールノ地ニ一政府ヲ開キ、儼然王者ノ如クオランガバツド及ベシヤアルノ諸州ヲ領セリ、

又麻刺加人ノ一種ノ人民ガ元來住居セシ所ハ、印度西岸ニ連亘セル荒漠タル山岡ニアリシガ病カシギ日布帝ノ時、此等ノ地方ニ住居セシ、人民ハ、

彼ノ雄壯ナル^レハ^レシ^ハソ^ノ旗^下ニ^レ屬^シ富饒ナル隣近ノ所領内ニ侵入シ
タリ麻刺加人ノ豪勇ナル未タ幾ナラズシテ衰弱王國ノ腐敗セル中ヨ
リ生シタル新建國內ニ其名ヲ轟カシ忽チ征畧家ノ地位ニ上リ國內ノ
領地半ハハ是レ麻刺加侯國トハ爲リヌ其初メハ盜賊タルニ過ギザリ
シモ今ヤ勢力アル諸侯ト爲リ孟斯拉士家ハ一隊ノ剽掠者ヲ率キテ伯
拉亞^フノ廣土ヲ領シ^ハ機哥瓦^ワノ牧者^ニノ一族ハ加日刺士^トヲ治ムル王
朝ノ基礎ヲ作り^シ盛牙^キ及ヒ保爾加爾家^ハ馬爾瓦地方ニ割據シテ勢力ヲ
有シタリキ

此時榜加拉政府ニ於テハ一警報ニ接セリ即チ佛國ノ勇將布拿爾^ノ地
ニ到着セシトノ報知是レナリ哈士丁斯ハ敵兵ノ未タ至タラザルニ佛國
及麻刺加ノ連合未タ成ラサルニ先チテ直チニ攻撃ヲ試ント決心シタ
リ適々麻刺加人中宰臣ト爲ルノ權ヲ爭フモノアリケレハ哈士丁斯ハ
此主張者ヲ助ケ軍ヲ進メテ印度半島ヲ橫絶シ孟斯拉士家ノ酋長ト親密

ナル同盟ヲ作りタリ然ルニ此時大陸ニ於テ英佛開戦セリトノ急報ア
リシカバ哈士丁斯ハ一瞬ノ猶豫モナク直ニ英斷ヲ以テ榜加拉ニ於ル
佛國ノ商館ヲ占奪シ更ニ馬德拉斯ニ令シテ奔地志埃利^ヲヲ占有セシム
是ニ於テ城堡ヲ築キ屯營ヲ設ケ準備全ク整頓セリ然ルニ哈士丁斯ノ
西方ニ向ケタル遠征軍ハ十分ノ成功ヲ得ル^ヲ能ハザリキ然レハ哈士
丁斯更ニ其志ヲ變スル^ヲナク新ニ大將ヲ發シ先日ノ失敗ヲ償ヒ是レ
マテ歐洲軍旗ノ未タ至ラザリシ地方ニ英國ノ威武ヲ耀カシタリ

哈士丁斯ノ麻刺加人ニ施セシ策畧ハ最初ノ間ハ其使用セシ人々ノ失
計ニ依リテ其効ナキニ終リタリト雖モ其固執ノ志ト熟練ノ才トニ由
テ終ニ成功ヲ見ルニ至ラントモリ何ソ圖ン此時恐ルベキ危難忽チ哈
士丁斯ノ頭上ニ墮落シ來ラントハ其危難トハ何ソヤ拜提爾耶厘^ノ勃
興是レナリ

是レヨリ先キニ一個ノ回教單人アリ南方印度ノ戰爭ニ於テ漸ク其名

ナ輝カシ、爾來征服ト指揮トニ由テ非常ノ勇氣豪膽ヲ顯ハシタリ、是レ即チ拜提爾耶厘ナリ、印度帝國四分五裂ノ、諸侯各々一方ニ割據スル時ニ當テ耶厘ハ、南部地方ヲ橫斷スル一陵賣索爾ニ達スルノ地ヲ得テ最モ壯大鞏固ナル新帝國ヲ創建シタリ、當時馬德拉斯ニ於ケル英人ハ耶厘ヲ防クベキ準備モナク、直ニ其敗ル所ト爲リ、印度僱兵其武器ヲ抛テテ降ヲ納レ城堡ハ、詭計ヲ以テ奪ハレ、幾日ナラズニテ、コラールン山北ノ曠野ヲ舉テ皆之ヲ耶厘ニ與フルノ已ムベカラザルコ至レリ、已ニコソテ英將「サー」ヘクトル、マンローハ一軍ニ將トシ、ベイリーモ亦別ニ一軍ヲ率キテ耶厘ニ向ヒ之ト戰ヒシカ、皆敗衄シ、南方印度ニ於ケル英領ハ將コ土崩瓦解セントスルノ勢アリ、唯英人ノ手中ニ殘リシモノハ、僅ニ二三ノ城砦ニ過キザリシノミ、

此敗報ノ加爾甲達ニ達スルヤ、哈士丁斯ハ平生ノ機敏ト活斷トヲ以テ二十四時間ニ此變事ニ應スベキ策畧ヲ整ヒタリ、哈士丁斯ハ、麻刺加人

ト隙ヲ構ヘシモ此ニ至リテ之ト調和セザルベカラズ、亦馬德拉斯ニ向ヒテ大軍及ヒ金錢ヲ送ラザルベカラズ、而シテ今日マテ失敗多キ戰爭ノ指揮ヲ活潑有爲ノ人傑ニ委任スルヲ、最第一ノ急務タリ、由テ耶厘ニ抗センガ爲ニ「サー」エルシートヲ以テ將帥ト爲シ、全權ヲ委任シタリ、幾モナクシテ遠征軍ハ、速ニ派遣セラレ、佛國ノ艦隊ハ、印度洋ニ達ス、先チ馬德拉斯ニ達シタリ、耶厘ノ威力モ次第ニ制セラレ、波爾的諾布ノ大勝ハ、英軍ノ武名ヲ回復シタリ、

榜加拉政府ノ財政ハ、困迫ノ極ニ達シ、加フルニ戰爭ノ爲ニ、從前ヨリモ、尙ホ其甚シキヲ増シタリ、哈士丁斯ハ、之レガ爲ニ復タ幾多ノ方畧ヲ運ラザルベカラズ、而シテ其第一ニ着眼シタルハ、比ニス、抑モ比ニスノ都府ハ、其富盛ト云ヒ、其威嚴ト云ヒ、人口ト云ヒ、印度ニアリテハ最優等ノ地位ヲ占ムルモノナリ、此地方ハ、元來、印度諸侯ノ配下ニアリテ、其諸侯ハ莫臥爾ニ臣禮ヲ行ヒタルモノナリシガ、印度大乱ノ間ニハ、

比尼里斯ノ君主ハ獨立シ但々鳥土ノ副王ニ服シ居レリ然レモ鳥土ノ副王ノ爲ニ抑壓セラレシカバ其君主ハ却テ英人ノ防護ニ頼リ終ニ榜加拉政府ノ臣屬ト爲リ其君西埃土盛克ハ歲貢ヲ奉ゼリ(千七百八十年メテ起ルヤ西埃土盛克ハ其定例ノ貢賦ニ次クニ五十万磅ノ巨額ヲ要求セラル、千七百九十九年同様ナル金額ヲ征收セラ、千七百八十年此請求復タ起リシガ、西埃土盛克ハ幾分カノ免除ヲ得ンガ爲ニ密ニ大守ニ向テ二万磅ノ賄賂ヲ呈セシガ、哈士丁斯ハ此賄賂ヲ取レリト云フ)此ニ至リテ、哈士丁斯ハ、財政ノ困難ヲ救済センガ爲ニ、意ヲ決シテ掠奪ノ計ヲ運ラシ先ツ之レヲシテ爭乱ヲ釀サシメ、尋テ兵ヲ遣ハソ之ヲ敗リ其領地ヲ擧ゲテ英國ノ支配ニ屬セシメ、其君主ニハ親戚ノ一人レ「シヤ」ノ地位ニ就ケリト雖モ、比尼里斯侯是レヨリ榜加拉副王ノ如ク唯年金ヲ受ケテ生活ヲ送ルニ過キザルノミ、此變革ノ爲ニ商會ノ歲入ハ一年二十万磅ノ増加ヲ得タリト雖モ、利益少ナキカ爲ニ豫期ニ反シタルヲ以テ、哈士丁斯ハ鳥土侯ニ對シテ、一層殘忍ナル處置ヲ施シ巨額ノ利ヲ奪取セタリ、

是ヨリ、哈士丁斯ハ依然榜加拉政府ノ上ニ立チ、千七百八十五年ニ至リシガ、國內錯乱ノ原素漸ク其跡ヲ絶チ、内治ノ方向、稍々平和ト爲レリ、麻刺加ノ乱已ニ定マリ、拜提爾耶厘モ死シ、其子地破齊布ハ英人ト條約ヲ結ビ、賣索爾ノ軍カルナツクヲ退キ、印度ノ人民、英人ニ向テ抗敵ヲ試ムルモノ少ナキニ至レリ、己ニシテ、哈士丁斯ハ職ヲ辭シテ英國ニ歸リシガ、印度政畧ニ對シテ非常ナル彈劾及ヒ攻撃ヲ受ケタリ、

哈士丁斯ハ、八月二十二日ヲ以テ死セリ、年八十六、哈士丁斯、天資聰敏、明察ニシテ事理ニ通シ、耐忍ニシテ、屈撓セズ、其爲サント欲スル所ハ如何ナル危難ヲ蹈ムモ、之ヲ貫徹セズンハ止マズ、而シテ大事ニ臨ミテハ、常ニ雄斷快裁ヲ以テ之ニ當ル、故ニ能ク印度帝國ノ事業ヲ經營シテ卓越非凡ナル偉勳ヲ建ツルヲ得タリ、

野史氏曰ク、英國ノ印度ヲ經營スルヤ、克雷武ナカリセバ、其大業ヲ創ムルヲ能ハズ、克雷武アリト雖モ、哈士丁斯ナカリセバ、安ソツ能ク、其

大業ヲ維持シ、兼テ之ヲ擴張スルヲ得ンヤ、克雷武ノ事業、哈士丁斯
 ナ俟テ益々其規模ヲ宏濶ニシ始メテ、東印度征服ノ基礎ヲ定ムルヲ
 得タリ、克雷武ノ才、鄧艾ノ如ク、其膽畧之ニ過ギ、哈士丁斯ノ才、鍾會ノ
 如ク、其智謀亦之ニ過グルモノアリ、豈細過小疵ヲ以テ、其大功偉勳ヲ
 没スルヲ得ンヤ、

獅巖曰、海上還無萬派聲、嶽邊豈有千峯勢、

龍潭曰、德川家光嘗與群臣評人物、或曰、某善士也、家光曰、衆皆爲善乎、曰
 然如此、凡庸人耳、賢豪之士、卓然自立、不求合流俗、故其人毀譽相半、若人
 之善士、則非我之所取也、以區々細過、罵克雷武、哈士丁斯二人者、恐不免
 爲家光所乾笑、

第八章

印度ノ覆滅

賣索ノ蘇爾丹、地破齊布、父ノ志ヲ繼キテ、英國ニ抗セシガ、千七百九十二
 年英將「マルクイス」コロンウオリス、精兵ヲ率ヰテ、賣索ノ首府「西林伽巴
 坦」ヲ圍ミ、シカバ、地破齊布大ニ驚キ、約スルニ、封土ノ半ヲ割キ、金塊三千
 五百万磅ヲ贈ンコトヲ以テシ、其二子ヲ質トシテ誓ヒ、漸ク和ヲ講セリ、千
 七百九十四年、約ニ由リテ、二子歸ルコトヲ得タレ、後チ又英人ニ抗シテ、
 「セチラル」バイルドノ爲ニ首府ヲ襲ハレ、地破齊布戰死セリ、時ニ千七百
 九十九年ナリ、是ヨリ德干ノ地、日チ逐ヒテ英國ノ統轄ニ歸シ、英人ハ次
 第ニ恒河ヨリ印度ノ全地ニ、其權ヲ專ニセリ、

其後ウエルレス、シイ十萬ノ兵ヲ督シ、國威ヲ張り、其名ヲ土人ノ酋長ヲ
 保護スルニ托シ、各酋長ノ廳署ニ英國ノ守兵ヲ置キ、其俸給ヨリ衣服飲
 食ノ末ニ至ル迄、皆其酋長等ノ資費ヲ以テ之ニ給セシメ、若シ其約ニ違

フキハ印度大守ハ、其酋長ノ歲入若クハ領地ヲ以テ、其償ニ充ツルコト
定メタリケレハ、諸小國、相率キテ全ク諸國ノ版圖ニ入り、然ザルモ、徒ニ
空名ヲ擁シテ英、人ニ服事スルニ至レリ、

千八百十年ヨリ、同シキ五年ニ及ブマデ、英人ハ屢々グアリオル、インツ
ルナグプール等、麻刺加人種ノ小國ト戰ヒ、皆之ヲ破リ、デリーアグラ、ド
アブ、ブンデルクンド、キユタツク、バラソール等ノ各地ヲ征服セシニ依
リ此等小國ノ酋長ハ、爾來英人ノ配下ニ屬シ、苟モ英政府ノ認許ヲ得ル
ニ非ザレハ歐洲人ヲ雇ヒ、且ツ之ヲ使役スベカラズト云フノ約ヲ結ビ、
纔ニ和議ヲ媾スルコトヲ得タルノミ、千八百十四年ヨリ、同シキ十六年ニ
至ルマテ、英人復タ拿布爾ノ瞿爾喀斯人ト兵ヲ構シ、恒河以北ノ地ヲ占
取セシガ、此時麻刺加人ノ酋長ヲ首トシテ各小國ノ酋長等、兵ヲ各所ニ
起シテ、英人ヲ掃蕩センコトヲ謀リ、數回奮戰セシモ、結局英人ノ制スル所
ト爲リ、麻刺加ノ大國モ此ニ至リテ滅亡セリ、千八百十五年ヨリ同シキ

十八年ニ至ルマテ、双方相爭ヒタリ、是ヨリ恒河沿岸ノ小國及ビ德干ノ
小國ハ、纔ニ獨立ノ虛名ヲ存スト雖モ、其實ハ、印度大守欽差ヲ其京城ニ
置キ、之ヲ抑制セリ、印度ノ全國、南ハコモリオン岬ヨリ北ハ喜馬拉亞ノ
山嶺ニ至ル迄、一億六千餘万ノ人民、或ハ全ク英國ノ版圖ニ歸シ、或ハ其
政令ニ服シ、或ハ獨立ノ虛號ヲ保ツト雖モ、其箝制ヲ受ケ、印度ノ地大抵
英國ノ駕馭ヲ受ケザルモノナキニ至レリ、

印度ノ東方ニ當リテアラマブイトラノ一葦帶水ヲ隔テ、緬甸國アリ、千
七百五十三年、國王亞郎布拉、北求人ヲ逐ヒ、一時頗ル勢威ヲ振ヒシカ、王
殂スルニ及ヒテ、内訌相繼キ、國內治ラズ、加フルニ、支那ノ侵凌スル所ト
爲リ、衰頹日ニ甚シ、己ニシテ千八百廿四年、曼尼布爾ノ一小國酋長繼續
ノ爭ヨリ、英人ハ終ニ緬甸ト兵ヲ構シ、英將アーチバード、カムプベル一
萬餘ノ兵ヲ率キテ蘭東ニ上陸シテ、其地ヲ略セシカバ、タボイ、メルグイ、
マルタパン等ノ諸城風ヲ望テ降り、翌年カムプベルハ、更ニ進ミテ緬甸

ノ内地ニ入り、數回奮戰シ、遂ニ之ヲ破リ、布羅牟ヲ以テ其本營ト爲シ、部下ノ將校ヲ派シテ、亞斯參及ヒ阿臘干ノ地ヲ零セシメ、尋テ大ニ布羅牟ノ近傍ニ戰ヒ、緬甸ノ兵ヲ破リ、シカバ、緬人勢究シ力竭キ、和議ヲ乞ヒ、終ニ阿臘干、メルグイ、ゴボイ等ノ地ヲ舉ケテ英人ニ交付シ、巨額ノ償金テ出シテ貿易條約ヲ結ビ、且ツ英國ノ欽差、其首府阿瓦ニ駐在スルヲ允諾セリ、其後、千八百五十二年、更ニ數端ヲ開キ、英國ノ艦隊、イワツヂ河ヲ溯リ、マル、タバ、ラングン、ハツセイ、北、布羅牟等ノ各地方ヲ占領シタリ、緬人、敗衄ノ餘、更ニ再タヒ和議ヲ乞ヒ、北求ノ地及ヒ南方ノ諸州ヲ割キテ之ヲ英人ノ有ニ歸セリ、是ニ於テ英人ハ終ニ榜加拉灣ヲ環繞スル沿海ノ地ヲ舉ケテ、悉ク之ヲ其版圖ニ入ル、一ヲ得タリ、英國ノ勢威大ニ振フ、

爰ニ又印度河邊ニ當リテ、兩箇ノ獨立國アリ、其南ニアルモノヲ身提ト稱シ、其北ニアルモノヲ羅爾ト稱ス、此二國ハ、綱紀紊亂シテ國勢衰頹シ、

殊ニ侯位ハ、其酋長常ニ相爭ヒ、互ニ相和セザルカ故ニ、英人ハ兵ヲ出シテ之ヲ併畧セント欲セリ、然ルニ二國ノ人民、敢テ力ヲ戮セテ防戦スルノ決心ナク、二三ノ酋長ハ、纔ニ其兵ヲ集メテミアニ及ヒ、ハニ於テ抗戦セシト雖、尼終ニ英人ノ敗ル所ト爲リ、千八百四十三年、身提ハ、全ク英國ノ配下ニ屬スルニ至レリ、魏モナクシテ、英人復タ兵ヲ出シテ西哥人ヲ征ス、一西哥人ハ、其初メ印度河上流ノ本若ニ據テ國ヲ建テ、回教ト斐羅門教トヲ混合シタル一箇ノ宗教ヲ奉シ、其人民ノ氣象勇悍ニシテ戰ニ熟セリ、酋長林日星ノ境內ヲ統治セシ際、佛人アルラール及ヒ其他ノ歐洲人ヲ雇ヒ、其兵ヲ鍊習セシメ、四隣ヲ侵畧セシ、モ、肯テ其鋒ニ櫻ル、モノナカリキ、千八百三十九年、林日星殂スルニ及ビテ、其子孫害ニ遭ヒ親戚宰相等、互ニ權ヲ爭ヒ、國政紊亂セシカハ、歐人ハ其地ニ居ルヲ好マズ、皆去リテ本國ニ歸リタリ、爾來兵士橫暴ヲ極メ敢テ政府ノ命ヲ奉セズ、政府モ之ヲ統制スルノ力ナク、一日英國所領ノ地ヲ侵襲セ

シテ謀リ、千八百四十五年十一月、西哥人六万相率テ、ストレシ河ヲ渡リ、英領ノ地ニ侵入セリ。是ニ於テ、英將ハ、一チンク撃テ、之ヲ其國內ニ追躡シ、直ニ本若コ迫テ、其地ヲ占領シ、更ニ羅爾ニ欽差ヲ置き、一万ノ兵ヲ留メテ、其變ニ備ヘ、特ニ近傍ノ小國ヲ併吞セントセリ。然ルニ、本若人ハ、英人ヲ悦ビズ、コロチル^{コロチル}ローレンスノ邦政ヲ掌リシ際ニハ、一時靜謐ナリシガ、幾モナク、ローレンス去リ、千八百四十八年、本若ノ南部、モル丹^{モル丹}ノ人民終ニ兵ヲ起シテ、英人ヲ逐ヒ、其動搖、本若ノ全地ニ及ビ、阿富汗ノ人民モ亦兵ヲ舉ケテ、英人ニ敬シ、其將デカンモーレー^{デカンモーレー}兵ヲ督シテ、エナ^{エナ}ナ^ナ河邊ニ陣シ、英軍ニ向ヒタリ、已ニシテ、英軍之ヲナリアンカラニ邀ヘ、戦ヒ、數時間劇戦ニ及ビ、タレ^{タレ}、當時其勝敗ヲ決スル^{決スル}能ハザリシガ、其後、グーシラット^{グーシラット}ノ戦ニ、英軍捷利ヲ得テ、大ニ西哥人ヲ敗リ、翌千八百四十九年、本若ノ地ハ全ク英國ノ版圖ニ屬シタリ、英人ハ、西哥ノ兵ヲ解キテ、之ヲ其隊中ニ編入シ、其首謀者ヲ捕ヘテ、之ヲ獄ニ繫キ、酋長馬爾拉^{馬爾拉}

牙^牙ノ尙ホ幼稚ナルヲ以テ、其名ヲ教育ニ托シテ、之ヲ巴士拿^{巴士拿}ニ幽閉セシム、而シテ、其母ハ遁レテ、拿布爾ニ赴キタリ。

千八百五十六年、二月七日、印度大守ダルフス、終ニ特里王ヲ廢シテ、其地ヲ兼併シ、其財貨ヲ占奪シ、王ノ臣民ヲシテ、英政府ノ下ニ服従スル^{服従スル}ヲ命セシム、王、涕泗漣如、唯々トシテ、英人ノ命ニ順フ、千八百五十七年五月、印度ノ土兵、英人ノ不義ヲ憤リ、兵ヲ舉ケテ、英人ヲ屠戮シ、皆特里府ヲ望テ、雲集セリ、印度ノ諸侯之ヲ助クルモノ多カリシモ、印度未ダ獨立ノ時機ニ達セズ、苦戦スル^{苦戦スル}。二年ニシテ、復タ敗衄セリ。是ニ於テ、英國府ハ大ニ此ニ虞ル所アリテ、千八百五十八年、東印度商會ノ特權ヲ廢シ、印度ヲ以、維克杜利亞女帝ノ直轄ト爲シ、女帝自ラ、印度帝ノ位ヲ兼ヌ、東印度ノ運命此ニ至リテ、盡キタリ。

獅巖曰、斯膝一屈、不可復伸。

龍潭曰、花藥夫人詩云、君王城上豎降旗、妾在深宮何得知、四十万人倖解

甲也無一箇是男兒、印度二億万人中、果無一男兒乎

第九章

印度ノ事情

習俗及人種印度人民ハ久シク他邦ノ屬隸ト爲レリト雖モ、數千年間、國風ヲ保持シテ、之ヲ更革セズ、今日ニ至ルマテ、其言語、風俗、宗教、習慣、若クハ地方ノ政治、營生ノ慣例ナハ、固執偏愛シテ、新奇ニ遷ルヲ欲セザルニ似タリ、庶民ノ狀貌ハ、黃赤色ナレモ、上流ノ貴顯ハ、白皙ニシテ、毫モ歐洲人種ト異ナルヲナシ、其軀幹ハ、中体ニテ、骨格ハ整理シ、且ツ剛健ナリ、性極メテ儉約ニシテ、節度アリ、好ミテ他人ヲ崇尊シ、惻切ノ情ヲ表ス、然レモ氣象薄弱ニシテ、吝嗇ナルヲ以テ、往々外人ノ蔑視スル所ト爲ルヲ

免レズ、上古印度ノ社會ニ行ハレタル階級的ノ制度ハ、今日ニ至ルマデ、現存セリト雖モ、決シテ種姓種族ニ屑々カラザルカ如シ、且ツ其階級ノ舊例ヲ破壞スルヲ以テ主旨トスル、教派モ亦多ク輩出シ、種姓種族ノ制亦嚴ナラズ、

印度ニ於テ、人種ノ變化シタルヲ、古今ノ歴史ニ於テ、甚ク罕ニ見ル所ナリ、上古ノ亞利亞人種ハ今日ノ歐洲人種ト其本一ニテ、其子孫ハ即チ今日ノ印度人ナリ、印度ノ土人ハ、皆亞利亞人ノ驅逐スル所ト爲リ、山地ニ入リテ今日マテ現存セリ、西曆紀元後八百年ニ至リテ、波斯ヨリ移住セル波斯人、及猶太人復印度ニ住シ、波斯人ハ、波斯教ヲ奉シ、猶太人ハ猶太教ヲ奉セリ、其後チ亞刺比亞人、亞爾美尼亞人、西里亞人、阿富汗斯坦人、土耳其人等雜住シ、——回々教ヲ奉ズルモノ、又歐洲諸國ノ人民モ來リ住セリ、

又印度人ト英人トノ間ニ、一種ノ族民ヲ生ゼリ、通常、此人種ヲ以テ、印度

英吉利半生人ト爲ス、即チ是レ甲爾加達人ノ一派ニシテ、日チ逐ヒテ蕃殖シ、頗ル剛膽英氣アル人種ナリ、此人種ハ、大ニ英人ノ賤シム所ト爲レリト雖モ、富豪ノ人士多ク、且ツ博識多才ノ士アリテ、歐洲人士中、有名ナル學士ト並ビ立チテ、肯テ之ニ下ラズト云フ、歐洲人ハ、此人種ヲ輕侮スルヲ、最モ甚シク、若シ歐洲ノ婦人アリテ、印度英吉利ノ半生人ト婚姻ヲ結ブヲアレバ、假令ヒ其家ニ巨万ノ資ヲ累積スレモ、忽チ上流社會ノ交誼ヲ絶ツベシト云ヘリ。

(宗教及言語印度ニ於テ、宗教ノ變化セシヲ、亦甚シ、今日印度ノ全國ニ彌蔓シテ、最モ盛ンニ行ハル、モノハ、温都斯教即チ婆羅門教ナリ、婆羅門教、一ニ之ヲ「ゼニズム」宗ト名ク、是レ即チ印度ノ國教ニシテ、分レテ三十餘派ト爲ル、琳愛謁教、蘆薩巴ト名クル婆羅門之ヲ創立ス、ノ如キ亦婆羅門教ノ分派ニシテ、南印度ニ行ハル、)

回教人ノ侵入セシヨリ、回々教亦印度ニ行ハル、今日回教信奉ノ人民ハ、

全國人口十六分ノ一ニ居ルト云フ、蓋シ印度ノ回教人民ハ、温都斯人ニ比スレハ、才能智力アリ、且ツ膽氣モ之ニ優レリト雖モ、性質極メテ傲慢ニシテ、嫉妬ノ念、甚ク深ク、加フルニ貪婪ニシテ、厭クヲ知ラズ、亞克婆爾大帝ハ、本ト回教ヲ信奉セシ者ナルモ、自ラ悟ル所アリシト見エ、新發明ヲ爲サント欲シ、天主教ノ傳道師ヲ招キテ、其教理ヲ研究シ、終ニ伊羅匪ト稱スル新教ヲ建設セリ、然レモ此教ハ、行ハレザリキ、佛教ハ、印度ニ於テ、其勢力ヲ失シ、萎靡シテ振ハズ、其信徒三四百万人ニ過キズト云フ、然レモ近來、佛敎ノ衰頹ヲ恢復セント欲スルモノアリ、オルゴット氏ノ如キ、實ニ其人ナリ、耶蘇教モ亦印度ニ傳ハリ、益々隆盛ナラントスルノ勢アリ、

北印度ノ言語ハ、現今不通ナル梵語ニ類シ、南印度ノ語ニ比スレハ、頗ル相異ナルモノ多シ、北部 即チ温都斯 國語中、著名ナル土音ハ、非回教人民ノ多ク文壇ニ用ユル所ノ言語、即チヒンヂ 語、亞刺比亞語、及

ヒ波斯語ノ混合セシガ爲ニ、轉訛セシ一種ノピンジユ語ニシテ、回教人民ノ談スル所ノ温都斯坦語——即チウルジユ語——榜加拉語、本若語、麻刺加語、ガセラツチー語ナリ、德干即チ温都斯坦半島ノ南部ニ行ハル、所ノ言語ハ、言語ノ儘ニ轉化セシモノニシテ、殆ント韃靼語ニ近シ之ニ屬スル所ノ土音ハ、テルグ語、陀尸彌爾語、カナリリース語、シンガリース語、錫蘭語等ナリト爲ス、

第十章

印度ノ事情其二

(食料及産業)歐洲人ノ印度ニ遊歴スルモノハ、往ク所トシテ、天然土地ノ宏大沃饒ナルニ、昏迷シテ、欣然涎ヲ垂レザルモノナシト云フ、土人ハ、極

メテ質素ニシテ、食料ハ、調理割烹ノ煩ヲ用ヒズ、芭蕉、菓、椰子實、冬佛ノ如キ、天生ノ美味ヲ具ヘ、之ヲ烹煮スルキハ、却テ其香味ヲ損スルモノ多シ、其火食ヲ要スルモノハ、米穀ヲ以テ第一ト爲ス、家屋ハ、鉋鑿刀鋸ノ修飾ヲ要セザル竹幹ヲ以テ其材料ト爲シ、竹枝ヲ以テ之ヲ結束シ、粘土盤ヨリ掘出セル泥土ヲ塗抹シ、新ニ刈ル所ノ椰子葉ヲ以テ屋上ヲ覆蓋セリ、印度ノ植物産ニ於テ、米ヲ以テ第一ト爲ス、其種類ニハ、凡ソ二十五アリ、中印度ヨリ、東南印度ノ如キハ、一年間ニ三回ツ、ノ收穫アリ、其他菜蔬ノ類ニ至ルマテ、蕃殖充盈シテ少シモ欠乏スル所ナシ、但シ西北印度ノ如キハ、乾野确地多ク、東南印度ノ如ク、果物ノ蕃生ヲ見ズ、(印度河邊ノ地ハ、ストレソ河會流ノ下ニ於テ、大抵炎砂ノ地方ニテ、河幅モ次第二狹小ト爲ル、其ノ會流ノ上ニ於テ、水流善ク土地ヲ濕ホシ、植物ヲシテ、十分ニ繁茂セシム、恒河ノ邊ニ於ケル地ハ、上半ニ於テ、小麥ヲ生シ、下半ニ於テ、稻米ヲ生ズ、ブラマプトラ河ハ、夏秋ノ交ニ至レハ、年々漲溢シテ兩岸ヲ

浸シ、其河邊稻米ヲ産スルヲ下恒河邊ニ異ナルヲナシ、
印度人又大麥、小麥、粟、玉蜀黍等ヲ作り、甘蔗、蘆粟ヲ栽培シテ砂糖ヲ製シ、
其海外ニ出ル額數亦多シ、棉花、棉布ヲ製出スルヲ亦大ナリ、又柔杜ト名
クル麻類ヲ産シ、之ヲ以テ粗布ヲ造リ、囊袋、包布ト爲シ、米穀砂糖ヲ包裝
セリ、麻、大麻、亞麻、苧麻、等ノ製産モ亦少ナカラズ、此
外ニ種々ノ香料ヲ製出シ、胡麻、荳蔻、生薑、肉桂等ハ、其第一ニ位セリ、咖啡、
茶、煙草、阿片等ノ如キ、皆其製出ノ盛ナルヲ見ル、茶樹ハ、印度ノ内地ニ茂
生シ、北緯廿六度ヨリ、廿八度ニ達シ、東徑九十四度ヨリ、九十六度ニ亘ル
所ノ一地方ハ、全土皆是レ茶樹ニシテ、剩地ヲ見ズト云フ、而シテ其品質
ハ、支那ト同シク、榜加拉、西藏ノ間ニ介立スル地方、亞斯參ニ於テ茶ヲ培
シ、之ヲ製シ、大ニ貿易品ヲ生セリ、
國人、又染料ヲ製出シ、就中藍青ヲ以テ第一ト爲ス、又名木良材ヲ産ス、就
中竹材ハ、印度貧民ノ取テ以テ百般ノ需用ニ供スルモノニシテ、千畝ノ

竹アレハ、其富王侯ニ敵スト云ヘル程ナリト云フ、又幾那皮ヲ産セリ、蓋
シ幾那皮ハ、元ト是レ南米ノ産ナルガ、近年ニ至リテ、此地ニ移植セシモ
ノナリ、其外ニ鑛物ノ産出ヲ述ベンニ、金屬ニハ、金銀、銅、鉛、鋅、亞鉛、水銀、
鋼、鎮、安底模尼、等アリ、又寶石類ニハ、紅寶石、上緬甸ハ、紅寶石ノ鑛山ヲ以
テ著ハル、碧玉、瑪瑙、瑠璃、金剛石、鑽石等アリ、又石炭、硝石等ヲ出スト、夥シ、
貿易ノ隆盛ナルハ、此貨物ノ夥シキヲ以テ、之ヲ知ルニ餘リアリトス、
運輸及工業英人ノ施政ニ由テ、印度ノ開化、大ニ進歩シ、電線ヲ架シ、郵便
ヲ開キ、鎮道ヲ設ケ、其他運河溝渠若クハ、石炭、鑛坑ノ工事等ノ如キ、頻々
トシテ相興レリ、運河ノ里數ハ、凡ソ一万三千哩餘ニ達シ、鎮道モ亦之ト
同一ナル度ニ達セリト云フ、千八百八十七年十二月三十一日ニ於テ、印
度鎮道事業ニ投入セル資金ニ、布設工事中ノモノ、並ニ測量中ノモノ
ヲモ包含セリ、ハ一八七、二二一、五二一磅ニシテ、之ヲ千八百八十六
年最終日ノ一七八、三七〇、七七六磅ニ比スレハ、八、八五〇、七四五磅ノ増

加ナリ、蓋シ印度ニ於テハ、從來鐵道ノ工事甚タ盛ニシテ、今日モ亦其増設ヲ止メズ、而シテ其建設ノ目的ハ、單ニ商業ノ得失ノミニ非ズシテ、兵器的ノ鐵道ニ屬スルモノ、最モ多シ。

第十一章

印度諸邦ノ位置及英國ノ政治

印度全國ノ中ニ於テ、英領ニ屬スルモノ之ヲ十二洲ニ分ツ、今マ左ニ其諸邦ノ位置ヲ畧述スベシ。

英國領臺ノ下ニ三洲アリ、曰ク孟買、曰ク馬德拉斯是レナリ。副領臺ノ下ニ三洲アリ、曰ク榜加拉、曰ク西北洲、曰ク、アソマヤア是レナリ、又代理長官ノ下ニ四洲アリ、曰ク、中央洲、曰ク、アスサム、曰ク上下緬甸、曰クアソマヤ

マン及ヒニコバル諸嶋是レリ、總督直轄下ニ三洲アリ、曰ク、アソメル、曰クベラー、曰ククール、是レナリ。

又英領ニ非ザル地方ハ、十一アリ、又純然タル獨立領タルモノニアリ、今マ左ニ之ヲ畧述スベシ。

蓋シ大諸侯ノ地五アリ、曰クナイザム、曰クカシミール、曰クマルワア、曰ク、シンデア、曰クマール、是レナリ。小諸侯地ノ重ナルモノハ、六アリ、曰クボウバル、曰ク、ホールカア、領曰クカツテ、曰クトラパンコール、曰ク、パチヤラ、曰クギクワ、領是レナリ。

以上ノ諸侯地ハ英領ニ非ザレド、半ハ是レ英國保護ノ下ニアリ、其眞ニ獨立領ト稱スルモノハチバル及ヒブリークノ二州ト爲ス。

印度ニ關係セシ英國植民地ヲ擧グレハ、錫蘭嶋、マルダイブ、ラツカデイ、諸嶋及ヒ海峽植民地是レナリ、英人ノ外、歐洲人ノ印度地方ヲ占領スルモノヲ擧クレハ、葡萄牙及ヒ佛蘭西ナリ、葡國ハ俄亞、及ヒヂニウ

チ領シ、佛國ハボンゼーエリーチ領セリ、又佛國ノ馬德拉斯洲ニ於ケル領地チ擧クレハ、曰ク、ヤナローン、曰ク、カラシカル、曰ク、マヒー是レナリ、
 榜加拉洲ニ於ケル佛領ハ、チヤンダーゴール是レナリ、
 印度政府ノ上ニハ、從督アリテ以テ、英國女皇陛下チ代表シ、之チ助クルニ六名ノ議員ト、將軍ヨリ成立スル參事院以テス、政府ノアル所ハ甲爾加達ニシテ、恒河ノ支流フーグリ河ノ左岸ニアリ、(英人ノ市街ハ、屋宇皆宏、壯美チ極メ、煉瓦チ以テ之チ造レリト雖モ、土人ノ市街ハ、瓦造モアリ、土造モアリ、竹屋モアリ、其体裁一ナラズ、但シ竹屋ハ最も多ク四面席チ以テ之チ覆ヒ、鄙陋觀ルコ足ラズ、)甲爾加達ノ都府ハ、豐饒ナル三菱洲ノ中部ニ位シ、大洋航海ノ衝ニ當リ且ツ大鐵道ノ極ニアルチ以テ、貿易繁盛十哩ノ埔頭ナレモ、商賣ニ取リテハ、尙ホ其狹窄ナルチ疑フ許リナリト云フ、(暑期ノ間ニハ、總督ハ志牟拉^{シムラ}ニ其政廳チ移スチ例ト爲セリ、)志牟拉ハストレ^シ河ノ水源ニ近キ所ノ養生場ニシテ、海面ヨリ高キヲ、七千

呎ニ至ル、

印度ニ於ケル英國ノ兵備ハ、斯^モ跋^イ即ハチ土人兵十二万八百八十二人、義勇兵一万人、選卒兵十九万人、印度屯在兵三十万人ニシテ、其他錫蘭及印度洋諸嶋ニ若干ノ屯在兵アリ、印度ノ地ハ、英國ニ於テ、兵備チ要スル、
 最も多カルベキニ付キ、以上ノ兵ニテモ、尙ホ不充分ナルベシ、
 抑モ英國ノ印度チ占領スルヤ、全ク之チ壓服シテ英制ノ下ニ從ハシムルムノニアラズ、或ハ依然トシテ舊封建諸侯チ保存シ放任ニ付スルモノアリ、或ハ英國ノ顧問官チシテ、特ニ其政治ニ關涉セシムルガ如キモノアリ、要スルニ印度領地ノ政治、錯雜一ナラズシテ、宛然小共和國ノ風アリ、然レモ印度ノ侯伯ニシテ、英國ノ命令ニ從ハズシテ、兵員チ増ス^トアレハ、直チニ之チ禁壓スト云フ、

野史氏曰フ、余聞ク、印度ニ遊ブモノハ、印度ノ都府中、王宮ノ遺墟チ始メトシテ、各國諸侯ノ舊館等チ巡覽スルニ、皆敗頽セザルハナク、唯老

松古栢ノ天ニ參スルヲ見ルノミト云フ噫——國亡山河在——トハ
豈嘗ニ老杜ノ感ノミナラヤ、

第十二章

英國ノ苛政ヲ論ズ

「^{アフリヤン}亞利亞人ハ、印度ノ土人ヲ壓倒シ、階級的ノ制度ヲ以テ其民權ヲ束縛シ、
タリキ其後ヲ馬哈默德教人ハ土人并ニ温都斯人ヲ征服シ又莫臥爾帝
蒙古ヨリ侵入シ、全國ヲ蹂躪シ、壓制ノ政治ヲ施シタリキ、英人、之ヲ占領
スルニ及テ、印度人ヲ視ルヲ豚犬ノ如ク、之レガ權利ヲ束縛シ之レガ自
由ヲ牽制シ、其政治ハ英人得意ノ慘忍苛虐ヲ極メ、其弊今日ニ至リテ極
マレリ。」

英國ノ苛政ノ一ハ、鹽ノ主權法ナリ、英國ガ鹽ニ依テ、專ラ其利ヲ占ムル
ハ恰モ漢ノ武帝ノ時ニ於ケル、鹽鐵主權ノ法ニ似タリ、漢ノ主權法ハ唯
タ是レ其賣リ方ヲ管督セシマテニ過キズシテ其價ハ、平常ニ異ナルヲ
ナキモ、印度ノ如キハ則チ然ラズ、其法非常ノ價ヲ倍取シ、此法ヲ以テ、印
度全國ノ鹽價ヲ統一シ、英國財政ノ收入ヲ計ルモノトス、一
今マ其價ヲ云ヘバ、印度ノ「ロビー」我ガ一圓ニ當ル——ノ十分ノ分
分五ニ當ル、此中、其一分ヲ以テ、其正價ト爲シ、其七分五ハ、之ヲ求ムルカ
爲メノ印紙代ナリ、——今マ假リニ我カ日本ノ金ヲ以テ之ヲ云ヘハ十
錢ハ、正シク鹽ノ代價ト爲リ、七十五錢ハ、之ヲ求ムルカ爲ニ、添出スベキ
紙代ト爲ル、之ヲ總計スレハ、鹽一合ノ價ハ、八十五錢ホトニ爲ル、——其
鹽ヲ得ルノ貴キ已ニ此ノ如シ、加フルニ印度ハ、幅員廣大ニシテ海濱遼
遠ナルヲ以テ、鹽ヲ覓ムルノ路、此等ノ苛法ヲ外ニシ、他ノ方策モナシ、左
レハ貧窶ナル細民ハ、苦辛ノ餘百方搜索シテ、竊ニ山土若クハ樹葉等ヲ

剪テ、多少ノ鹽ヲ取ルモノアリ、然ルニ此事ニシテ發覺スル時ハ、忽チ重懲役ニ處セラレ、家族ヲ擧テ、遂ニ饑餓ニ倒ル、モノ往々少ナカラズ、其深刻殘忍殆ント言語ニ絶セリト謂ハザルヲ得ズ、

印度人民ガ鹽ノ爲ニ苦ムルモノ、此ノ如クナルト同時ニ、其他ノ國稅、地方稅及ビ百般ノ諸稅、亦皆從テ倍蓰シ、人民ハ其勞力ニ得ル所ノ者ハ、過半之ヲ政府ニ収メテ、僅ニ殘ル所ノモノヲ以テ、一家ヲ繼キ一命ヲ保ツニ過ギザルカ故ニ、細民ハ、擧テ深淵ノ底ニ沈淪スル有様ナリト云フ、

其二ハ、訴訟裁判ノ事ナリ、抑モ印度ニ於テハ、訴訟裁判四ヶ所アリ、勸解裁判所、初等裁判所、上等裁判及ヒ大審院是レナリ、其裁判上ノ表面ニ於テハ、其体制、歐洲ノ裁判所ノ如ク、儀式ト尊嚴トヲ備フル所ノ法廷ナリ、然ルニ實際ハ、全ク之ニ反シテ、巧詐汚穢言フニ忍ヒザルアリテ、人民ノ權利自由ハ、爲ニ其剝奪ニ遇フモノ、比々皆然ラザルハナシ蓋シ其裁判官タル多クハ、是レ學識モナク、經驗モナキ無賴ノ人ニシテ、職

ヲ以テ法ヲ枉グ代言人ハ、利ヲ逐ヒテ人民ヲ誑惑シ、以テ之レカ利ヲ計ルニ汲々タルニ由ル、抑モ印度ノ如キ、溫度百三四十度ニ昇リ、炎燃燬シカ如キ、邦ニ於テハ、他邦ノ人民、好テ來任スルモノ甚タ稀レナリ、而シテ其好テ此地ニ來住スルモノハ、全ク私利私慾ヲ貪ルヲ圖リ、曾テ裁判ノ事務ヲ執ル才能ナキニ非ザルモ、公平ニ法律ヲ守ルノ精神ナキモノニ過キズ、加フルニ本國ハ、遼遠ニシテ、恣睢專斷ノ事ヲ爲スモノ敢テ之ヲ咎ムルモノナカルベケレハ、私瞞ノ手段ヲ運ラスニ便利ナルカ故ニ、各官、大抵蓄財歸郷ノ主義ヲ以テ專一ト爲シ、他アルヲ知ラザルノ徒、皆印度ニ來ル、此ノ如キ私利私欲ヲ貪ル所ノ小人、印度ノ裁判官ト爲ルヲ以テ、人間ノ道德、廉耻ハ、蕩然トシテ、地ヲ掃ヒ、光明ナル良知、清淨ナル良能、去テ其觀念ヲ失シ、狡獪ニシテ、(人間ノ價值ナキ)姦詐ナル暴民ハ、裁判官ノ聲息ヲ窺テ運動シ、其代言人ハ、牽強附會ノ言ヲ設ケテ、良民

|| 富裕ニシテ資産アル || ヲ騙賺シ、姦民衆ヲ煽キテ、之ヲ牽制スル間

ニ於テ訴訟百出、其煩擾ナル、名狀スベカラザルモノアリ、訴訟ノ出ルト同時ニ大審院ニ上告スルモノアリ、然レテ大審院モ亦賄賂ノ爲ニ動かサレ公平ノ判決ヲ下サス、姦民益々其毒ヲ縱ニシ、愈々其利ヲ受ケ良民ハ多クハ、其害ヲ蒙リテ、怨嗟悲涙ノ中ニ呻吟スルノミ、

近世ニ及ヒテ、英國女皇陛下ヨリ、印度ニ於テ、若シ其裁判上ニ服承セザルモノアルハ、本邦ニ來リテ訴ヘ出ツヘシトノ令アレテ、其能ク英國ニ赴キテ、之ヲ争ントスルモノ少ナキヲ見ル、蓋シ其情實ニ於テ万々己ムベカラザルモノニ例セハ、我カ身代財産ヲ傾ケ盡スモ、耐ヘ難キモノニハ或ハ五株六株申シ合セテ、代言人ヲ撰擧シ、遠ク英國ニ行キテ公平ノ裁判ヲ請フモノアリ、然レテ其費用等ノ莫大ナルカ爲ニ、終ニ其家産ヲ破リテ自ラ倒ル、ニ至ルモノ、比々皆是レナリ、然ルニ狡詐ナル代言人ハ益々此機ニ乘シテ、兩國ニ印英ニノ間ニ出沒シテ、印度人ヲ瞞着誘惑シテ、大ニ其利ヲ占ムルモノ勝ケテ數フベカラズ、而シテ此

際、其禍ヲ蒙ルモノハ、富民ヲ以テ最モ多シト爲ス、印度ノ疲弊、此ニ至リテ、其極度ニ達シタリ、

余聞ク、印度人民ノ三害物ハ、獅子、猛虎、及ヒ毒蛇ナリト、抑モ此三獸ハ、印度國初以來ノ害物ニシテ、人民ノ之レカ爲ニ害ヲ蒙ルモノ年毎ニ七八百人ニ及ブ、茫々タル恒河沿岸ノ曠野中、猛虎ノ棲住スルモノ、其數ヲ知ラズ、又獅子ハ、喜馬拉山中ニ蕃生シ、四方ノ群山ニ移住シテ、咆哮震動シ毒蛇ハ、山ト野トヲ間ハス、出沒隱見、人ヲ見レハ、衝突スルコト、恰モ彈丸ヲ飛ハスカ如シ、一タビ之ニ觸ル、トハ、立ロニ即死セザルハナシ、其害毒慘烈、物ノ譬フベキモノナシ、此三害物ハ、政府ノ力ト雖モ、容易ニ之ヲ除鋤スルコト能ハズ、實ニ印度永遠ノ病ナリトテ人民之ニ苦マザルハナシ、然レテ此三害物ヨリモ、猶一層至慘至毒ナル病アリ、何ゾヤ他ナシ、印度全國ヲ統治シ、人民ヲ羈轡ノ下ニ苦シムル所ノ苛政是レナリ、猛獸毒蛇ヲ拒クニ、其方アルヲ知ル、英人ノ政畧ニ至リ

テハ、直ニ一國ノ運命ト國民ノ氣象トヲ驅リ將テ、深淵ノ底ニ沈淪シ
了ラシムルモノ也、野史氏曰ク——苛政猛於虎——

第十三章

印度ノ貿易ヲ論ズ

上古ノ文明ハ、四ヶ所ノ河原地方ニ起リテ漸次ニ他ニ布及シタルモノ
ナリ、即チ支那ノ文明ハ、黃河ト揚子江トニ發シ、亞西里亞及ビ巴比倫ノ
文明ハ、幼發拉的河ト低格里河トニ發シ、埃及ノ文明ハ、尼羅河ニ發シ、印
度ハ、身毒河ト恒河トニ沿ヒテ起リタリ、但シ印度ハ、一方ニ於テハ、巍峨
タル山嶽相連亘シ、西藏ノ高原ニ横ハリテ、支那ト相隔絶シ、他ノ一方ニ
於テハ、スーリーマン山脉及ヒ波斯、亞富汗ノ高原ヲ以テ米所波太承亞

ト相隔絶シタルカ故ニ、他ノ地方トノ交通、容易ニ開ケザリシヲ、已ムナ
得ザル所ナリト謂フベシ、

印度ハ、古來ヨリ政治上ニ於テ受動的ノ地位ニ立チシカ如ク、商業上ニ
於テモ亦受動的ノ地位ニ立チ、常ニ歐洲人ヲシテ其商業ノ企設計畫ヲ
專ニセシメタリ、是レ其一ハ地勢ノ然ラシムル所ト、其一ハ人民ノ氣象
ノ然ラシムル所トニ由ルトハ、雖モ亦東西兩洋ノ貿易ニ巨大ノ利
アリテ、古來各國ノ之ヲ專有センコトヲ力メタルニ由ル、各國之ヲ爭ヒテ
或ハ得アリ、或ハ失アリ、或ハ成アリ、或ハ敗アリシト雖モ、現今ニアリテ
之ヲ專有スルモノハ、實ニ英國ニアリ、

第十五世紀ノ頃ニ當テ、歐洲ノ商人ハ、夢寐ニ印度ヲ見、其富ニ垂涎シ、一
日モ早ク、之ニ直接ノ航路ヲ求ムルコト、當時緊要ナル問題ナリキ、而
シテ此問題ヲ解釋セシハ、實ニ彼ノ華斯哥德噴馬ガ、千四百九十八年、五月
二十日ヲ以テ印度海岸ニ達セル時ニアリ、抑モ喜望峯航路ノ發見ハ、決

偶然ノ出來事ニハ非ズ、學術的ノ訓練、深遠ナル研究、周到ナル準備、不撓ナル精神ニ由テ、其結果ヲ見ルニ至リシナリ、(彼ノ航者ト尊稱セラレタル葡萄牙皇子顯理ハ)印度人ノ直航路ヲ發見セントノ決心ヲ起セルニ當リテ、有名ナル學者ヲ各地ヨリ招聘シテ、少壯ノ子弟ヲ訓練セシメ、自親ラ其教育ヲ監督シ、數年ニシテ、其國人ヲ歐洲中最モ學識アル航海者ト爲スニ至レリ(ベシ)フ、印度航路發見ノ空想的ノ思想ヨリ出テタルニ非ザルヲ知ルベシ、**華斯哥德噴馬ノ印度航路發見ハ、久シカラズシテ、重要ナル數多ノ結果ヲ現出セリ、第一ニ葡萄牙人ハ、此直航路ノ爲ニ運賃ヲ節シ得ルヲ、莫大ナリシカハ、歐洲中最低ノ價格ヲ以テ、東洋品ヲ鬻クヲ得タリ、是ニ於テ歐洲各地ノ商人ハ、競ヒテ里斯本ニ赴キ、里斯本ハ、遂ニ貿易ノ中心タル地位ヲ占メタリ、里斯本ヨリ印度商品ハ、アントウエルフニ向ケ輸送シ、同地ヨリ更ニ他ノ各地方ニ配送スルヲト爲レリ、一是時アントウエルフハ頓ニ北部歐羅巴ノ商業中心ト爲リ、里斯本ニ亞キテ其繁盛ヲ極メタリ、**

喜望峯航路ノ發見セフレタル時ニ當リテ、威內斯人ハ、此新航路ニ由テ、

葡萄牙人ト共ニ利ヲ分ツヲ欲セズ、却テ葡萄牙人ノ功ヲ妬ミ、之ヲ妨ケントシテ、埃及國王ト同盟シ、王ノ爲ニ蘇士ニ於テ船舶ヲ築造シ、艦隊ヲ備ヘ、葡萄牙人ヲ襲撃センヲ計レリ、然ルニ當時、葡萄牙ニ亞爾、アル、イダ明達其人アリ、一撃ノ下ニ此艦隊ヲ破リ、勢復タ振フヲ能ハザラシメタリ、實ニ千五百八年ナリ、此敗後、威內斯ノ商業ハ、遂ニ滅絶ノ其跡ヲ留メザリキ、**喜望峯航路ノ發見以來、歐洲諸國ノ航業ハ、益々盛ニシテ、互ニ印度ノ商業ヲ專ニセント欲シ、競争久シク斷ヘス、皆印度ヲ以テ一大燒點ト爲シ、何レノ國、何レノ人民ガ、印度商品ノ運搬者ト爲リ、配送者ト爲ルベキカ**ノ問題ハ、二百五十餘年ノ間、歐洲航業國ノ肝膽ヲ挫キ、之ヲ爭ヒテ止マザル所ナリキ、而シテ西班牙人、及ヒ葡萄牙人ハ、世人モ一般ニ之ヲ南洋航路ノ專權者タルベキ國トシテ許セリ、是ニ於テカ、更ニ東北若クハ西北ニ通路ヲ求メテ、印度ニ達セントスルノ企業起リタリ、此企業ハ、結局其目的ヲ達スルヲ能ハザリシカハ、之レカ爲ニ地理研究ノ功績ヲ擧ケ

タルヲ實ニ夥カリキ、斯クテ北方ニ新路ヲ求メントスル計畫モ、遂ニ徒勞ニ屬セシカバ、諸國ハ更ニ又南洋喜望峯航路ノ利ヲ分クンコト望ミシニ、西班牙人及葡萄牙人ハ、之ヲ喜ハズシテ、互ニ敵對ノ勢ヲ示セリ、爾來、幾多ノ運動アリテ、一起一仆、常ナカリシモ、財本及商勢、共ニ里斯本ヨリアントウエルプニ移リ、アントウエルプヨリ更ニテムステルダムニ移リ、又一轉シテ、テームス河畔ニ移リ、彼ノ那破藩ノ戰亂終レル頃ニモ、英國ハ、依然トシテ海上ニ最大ノ權勢ヲ振ヒ、獨リ悉ク遠洋貿易ノ通運業ヲ其手ニ掌握セシノミナラズ、尙又全世界ニ向ケテ、印度品ヲ配送スル中央地トハナリス、是レ實ニ歷史上ノ一大事變ナリトス、

商勢ノ轉遷シテ、英國ニ移レルコト、此ノ如シ、然ルニ、凡ソ今ヲ距ルコト二十年前ニ、佛人屬節夫ガ、豪膽ト、巧智トナリテ、蘇士運河ヲ開鑿シ、亞非利加ヲ亞細亞ト分離セルヨリ、歐洲各國競ヒテ、航路ヲ此ニ取り、又印度ノ商利ヲ爭ハントスルノ一時期ヲ開キタリ、今ヤ、通運配送業ニ一大變動ヲ

惹キ起サントスルノ兆候ハ、益々明カナラントセリ、抑モ蘇士運河ハ、喜望峯航路ノ商業ヲ地中海ニ轉シテ、己ニ東西ノ交通上ニ種々ノ變化ヲ生スルモノナリ而シテ、其利害ヲ感スルコト多キハ、歐洲諸國中、英國ヲ以テ最第一ト爲ス、

蘇士運河開通ノ爲ニ、生スル所ノ變化ニ三アリ、(第一)往時東洋ノ原品及ヒ製造品ハ、先ツ英國ニ渡リ、英國ヨリ之ヲ各國ニ配送スルコト爲リシモ、今ヤ運河ヲ經テ、直ニ地中海ノ諸港ニ陸揚スルモノ、年々其高チ増シ、從ヒテ、荷德沙、トリエスト、威内斯馬爾塞等ノ諸港ハ、南部及中央歐羅巴ノ配送中央地ト爲リ、アントウエルプ及漢堡ハ、北部歐羅巴ノ配送中央地ト爲リタルカ故ニ、商業中心ノ他所ニ移ルニ從ヒテ、英國ハ之ニ應スルコトケノ損失ヲ蒙ラザルベカラズ、尤モ今日ノ英國ハ、尙ホ通運業ノ多分ヲ其手ニ掌握シ居レバ、一朝歐洲ニ事アリテ、英國モ戰亂ノ禍害ヲ逃ル、一能ハザルハ、其通運業モ、十分ナル防衛ヲ爲スルニ非ザレハ、他

國ノ手ニ移シテ、亦未タ測ルベカラズ、凡ソ一タヒ他國ノ手ニ移リタル業ヲハ、再タヒ英國ニ復センコト、決シテ容易ナル事ニハ非ズ、夫レ英國ハ、現世紀ノ初メヨリ、久シク商權ヲ專ニシ、之レカ爲ニ大陸諸國ノ製造家ガ苦メラレタルコト、亦大ナラズヤ、然ラハ則チ、歲月ヲ經過スルニ從ヒ、其配送業ノ一轉シテ他國ニ移ルコトアルベキハ、數ノ免レザル所ナルベシ、今ヤ果シテ運河開通ノ爲ニ、一大變動ヲ生スルノ時期ニ際會セリ、此變動タル、英國ガ世界貿易ノ中心タル地歩ヲ失フニ於テ、著ルシキ關係ヲ有セルモノナリ、知ラズヤ、通商路、其位置ヲ變スレハ、商業中心モ亦其位置ヲ變セザルベカラズ、ト云フハ宇内ノ天則ナルコトナリ、

(第二)通商ノ喜望峯航路ヨリ、蘇士運河ニ移レルカ爲ニ、船舶ノ構造ニ、著ルシキ變化ヲ生シタリ、元來蘇士運河ヲ通過スル航路ニハ、石炭積入地モ、數多之レアリ、加フルニ波濤モ、ピスケー灣ヲ除ケハ、概シテ他ノ遠航路ヨリモ平穩ナリ、之ヲ以テ此新航路ニ用ユル船舶ハ、往時喜望峯航通

ノ時ニ用ヒシ船舶ニ比スレバ、石炭積量、速力、保續、通航程度等、皆劣レリ、是レ畢竟スルニ、石炭積入地ヲ恃ミ、又海上ノ穩カナルニ慣レテ、印度其他ノ東洋航通船ヲ造ルニ當リ、昔日ノ如キ完美ナル船舶ヲ造ルノ意ナキニ由ル、此等ノ船舶ヲ以テ、喜望峯ヲ廻航スルコト、到底得テ望ムベカラズ、故ニ戰亂其他ノ事變ノ爲ニ、蘇士運河ヲ閉鎖スルコトアラハ英國ノ東洋貿易ハ、其レ何ヲ以テ之ヲ行ルベキ、豈危殆ノ至リニ非ズヤ、貿易ノ航路ハ、之レアリ、此航路ニ適スル船舶ハ、之レナシ、英國東洋貿易ノ勢、漸ク其衰頽ヲ幾微ノ間ニ現ハシタリ、

(第三)運河開通ノ爲ニ、印度商業ノ位置ハ、受動的ヨリ、施動的ニ移ントセリ、サウヰヤム、ハンタルモ言ヒシカ如ク、印度ハ、漸次ニ繁榮發達シテ、製造國ト爲リ、食品輸出國ト爲リ、以テ其本國ナル英國ノ勞動者ト競争ヲ起セリ、抑モ英國ノ領地ニシテ、繁榮スルハ、固ヨリ英國ノ喜ブ所ナレド、現時ニ至テハ、攻守勢ヲ異ニシ、英國ハ、却テ印度ノ爲ニ苦シメラレ

インドスルカ如シ、最近印度ノ商業ハ、其進歩ノ著ルシキヲ、實ニ驚クニ堪ヘタリ、其商品輸出高ハ、千八百七十四年ニ終ル五ヶ年間ニ、毎年平均、五千七百万磅ナリシモ、千八百八十四年ニハ、八千八百万磅ト爲レリ、就中嵩高ノ物品ハ、異常ノ輸出増加アリ、小麥ハ、最初輸出品中ノ一小部分ヲ占ムルニ過キザリシモ、今ヤ、印度ノ重要ナル物産ト爲レリ、其輸出高ハ、千八百七十三年ニハ、百七十五万本ナリシモ、今ヤ二千百万本ニ達セリ、而シテ今後尙益々増加シテ、幾千ノ巨額ニ下ルベキヤ、未タ測ルベカラズ、之ニ加フルニ、小麥ノ輸出高如何ニ多シト雖モ、印度輸出ノ一部分タルニ過キズ、他ノ輸出品モ亦益々増加シテ止マズンバ、印度ノ輸出ハ、英國及ヒ歐洲各國ノ製産家ヲ壓倒スベキヲ推シ知ルヘキナリ、要スルニ小麥ハ將來ニ起スベキ劇烈ナル競争ノ先驅ト謂フベシ、以上ハ英人サー、ウヰルソン氏ノ説ヲ折衷シタルモノトス、シ、ダブルユー、

(又目下印度ニ於テ、各種ノ工業中、最モ所得ノ多キハ、綿絲紡績ニアリ

ト云フ、一千八百八十七年ノ調査ニ據レハ、印度國中ニ、一萬八千五百三十六臺ノ織布器械アリ、此内九割ハ孟買配下ニアリ、其製造スル綿布ハ、獨リ自國ノ用ニ供スルノミナラズ、遠ク東洋諸嶋ニ輸入シ、未タ支那及日本ニ輸入スルモノ少ナシト雖モ、其侵入ノ期、遠カラザルベシ、波斯灣ノ沿岸、及ヒ亞丁港ヲ經テ波斯、亞剌伯ノサンジバル港ニ輸送スルモノ多シト云フ、今マ印度紡績絲ノ東洋市場ニ進歩セシ有様ト、英國同系ノ同系場ニ沈滞セル景況ヲ聞クニ、英國ハ年々稍退縮スルモ、印度ハ、毎年増加シ、十二年前ニハ、僅ニ八百萬斤ニ足ラザリシモ、其間ニ殆ント十四倍シ、千八百八十八年ハ、無慮一億千三百五十萬斤ニ進ミタリトス、蓋シ印度ニ綿絲紡績業ノ起リシ原因ハ、元ト是レ自國ノ需用ニ充ル目的ヨリ生シタルモノニシテ、幸ニ坐ナカラ厚料ヲ得ルノ好地位ニアルヲ以テ容易ニ其巨利ヲ得タリシカバ、射利ニ銳キ資本家ハ、忽チ之ニ注目シ、未タ數年ナラ

ザルコ、紡績絲ノ供給ハ、遂ニ市場ニ溢レ、進退維レ谷マリテ己ムヲ得ズシテ、販路ヲ海外ニ求ムルニ至リ、初メテ英國ト競争シ、千辛万苦、遂ニ今日ノ全勝ヲ制スルコ至レリ、然レモ其今日ニ至リシ所以ヲ尋ヌレハ、決シテ偶然ニハ非ズ、内ニハ工場ノ組織ヲ改メ、經濟ヲ巧ニシテ、入費ヲ減シ、器械ヲ改良シ、職工ヲ鍛鍊シ、外ニハ運送ノ便ヲ計リ、内外商估ノ力ヲ藉リテ需用地ノ嗜好ヲ採リ、荷造ヲ改良シ、賣方ニ便ニシタルカ如キ勉勵盡精ノ結果ニ賴ルニ非スシテ何ゾヤ、——工業上ニ於テモ、印度ノ漸ク受動的ノ位置ヲ脱シテ、施動的ノ位置ニ移ントスルノ兆候ヲ見ル、

要スルニ、方今宇内ノ商勢如何ヲ觀察スルニ、印度品其他ノ物産ヲ輸入シ、通運スルノ業ハ、歐洲航業國ノ皆之ヲ爭ヒテ取ル所ナリ、荷モ此ノ如クニシテ已マザレハ、英國ハ、早晚、其歐洲ニ於ケル東洋貿易ノ中心タル地步ヲ失ヒ、其現有ノ通運業ヲモ殺カル、事ナキヲ保スベカラズ、是時

ニ當リテ、印度ノ商勢ハ、如何ニ轉變スヘキ乎、是レ實ニ將來ノ一大問題トナリス、

第十四章

英國ノ印度ヲ經營シタル政策ヲ論ズ

野史氏曰ク、英國ガ印度ヲ經營スルノ際、實地ニ適用シタル籌策ハ、佛國ハ、名士猶布烈ノ講究セシ所ノ戰取經濟策ヲ用ヒタルモノ也、余之ヲ聞ク、猶布烈ハ曾テ佛國ニ於テ、英邁卓識ノ名ヲ博シタル政事家ナルガ印度ノ形勢ヲ評シテ曰ク、——印度人ハ歐洲人ノ攻撃ニ對シテ抗敵スルヲ能ハズト雖モ、歐洲ノ將校士官ヲシテ之ヲ指揮シシムル所ハ、強兵タルヲ得ベシ、——又曰ク、——印度各部ノ種族人民ハ、各々其風俗氣象

豈大開不世之智
勇提十萬之貔貅
而攻彈丸一小朝
鮮蹂躪如意而經
畧之實効無一足
觀焉者末路不援
爲明軍所迫蹙焉
賴嶋津氏泗川之
苦戰奇捷而獲十
萬之兵全軍還國
今克雷武哈斯丁
猶普列之徒以僅
々千百之兵單刀
直入普探虎穴而
擒虎子其畧取大
帝國不出數年何
等偉畧何等壯舉
試使貴公見之則
將作何等觀耶噫

ナ異ニシ其間ニハ、毫モ協同一致シテ、愛國心ヲ發揮スルコト能ハザレカ
故ニ英國人ハ、深ク其思慮ヲ運ラヌコト及バズシテ、之レカ人心ヲ離間シ、
由テ以テ族民ノ間ニ、鬭爭騒乱ヲ起サシムルコトヲ得ベシ、左レハ、英人ハ
印度ヲ經營スルコト當テ、本國ノ軍隊及ヒ兵糧等ヲ要スルコトナク、一ニ之
ヲ敵地ニ資リ、以テ目的ヲ達スルコトヲ得ベキナリ、ト
夫レ英國ノ印度ヲ經營スルヤ、軍隊糧食其他一切ノ需用、専ラ之ヲ敵地
ニ藉リ、殆ント空拳ヲ以テ亞細亞洲中支那帝國ニ亞キテ、廣大ナル印度
全國ヲ席捲シタルモノナリ、試ニ想ヘ、千八百五十七年温都斯坦ニ於ケ
ルムールシニ、ダバッドノ南方ニ位スルブラセルノ大戰ニ、英將羅德克雷
武カ印度ノ大軍ヲ激破シ、此戰ニ因テ、榜加拉ヲ畧取シ、相踵キテ、印度全
國ニ其脚底ニ蹂躪シタル迄ノ間ニ、英人ノ死傷ハ、僅カニ七十二人、
即死スルモノ二十二人、負傷スルモノ五十人、トニ過キザリシコトハ非
ズヤ當時印度兵ノ總數六萬八千人ニシテ、其死傷算ナク英軍ハ、其驅ル

所ノ土人兵ヲ除ケハ、僅ニ六百五十人ニ止マリ、タリキ、是レ實ニ英國ガ
戰取經濟策ヲ用ヒテ、善ク土人ヲ駕御シ、其力ヲ籍リテ、以テ經營ノ志ヲ
達シタル所以ニシテ、多ク軍資ヲ費サ、リシ所以ナリ、ト

英國カ剛迺狡黠ノ手段ヲ逞クシテ、印度ノ土人ヲ驅使シ、其目的ヲ遂ク
ルコトヲ得タルハ、即チ印度聯邦ノ族民、愛國協同ノ精神ニ乏シク、兄弟相
視ルコト、讐敵ノ如ク、一致團結ノ敵愾ノ心ヲ鼓舞スルコト能ハザルカ故ナ
リ若シ印度億萬ノ人民ニシテ、鍊テ一塊ト爲リ、打テ一丸ト爲リ、敵愾ノ
氣ヲ勵シ愛國ノ血ヲ灑キ、一國ノ全力ヲ傾ケテ、外敵ヲ禦カシメバ、克雷
武哈士丁斯智ナリト雖、其レ安ンズ其隙ニ乘スルコトヲ得ンヤ、然ルニ
印度ノ人民タル特殊ノ氣象精神、一モ以テ存スルモノナク、一家相爭ヒ
兄弟内ニ鬭キ、坐ナガラ、敵人ヲシテ其隙ニ乘ゼシム、是ヲ以テ狼慾逐々
トシテ飽クコトヲ知ラザル、英人ハ、是レ天ノ我ニ與フル所ノ寶庫ナリト
看做シ、群至シテ境ニ逼リ、其土人ヲ招キテ、以テ我カ翼ヲ添ヘ、其城塞ヲ

墮シテ我が居ト爲シ、印度ノ倉庫ハ、據リテ以テ私有ト爲シ、印度ノ關稅ハ、収メテ以テ己レノ藏ト爲ス、印度帝國ノ運命盡キタリ、
英人ノ眼光、己ニ印度帝國ノ元氣朽チテ、其腐敗ノ絶頂ニ達シタルヲ、
看破シタリ、是ニ於テ英人ハ、第一ニ兵威ヲ以テ屬地ヲ平定スル前ニ先
チテ、其地ニ、本國ノ製産品ヲ輸入シ、以テ地方ノ財源ヲ耗盡セシメタリ
キ、第二ニ、印度ヲ征定スルニ臨ミテ、本國ノ財力ト、土人兵ノ力トヲ使用
シ本國ヨリハ、若干ノ士官ヲ派遣セシノミニテ、更ニ其軍隊ヲ派出スル
ヲヲ要セザリキ、第三ニ殖民地ノ土人ガ、本國ノ羈絆ヲ脱センカ爲メ、衆
心ノ團結ヲ爲ザル間ハ、英國モ、殖利ヲ專コソ、之ヲ支配スルヲ得タ
リキ、第四ニ、英人ハ本國ノ爲ニ、殖民地ノ利、竭盡スル迄ハ、該地ニ於ケル
土人ノ不平心ヲ惹キ起サシムルヲナク、特ニ一揆ノ乱ヲ醸スヲナカラ
シメンカ爲ニ、地方ノ風儀、慣習、國語、文學及ビ宗教等ハ、一切之ヲ破壊セ
ズシテ、従前ノ如ク保存シ、且ツ其殖民地ノ政廳ノ官吏及裁判官等ノ如

キハ、依然トシテ、土人ヲ以テ之ニ任定スルモ、其之ヲ監督セシムルニ、若
干ノ本國人ヲ以テシテ、其指揮スル所ニ從ハシメ、此監督官ニハ地方ノ
秩序ヲ保維スルヲ、及ビ專ラ重稅ヲ徵収セシムルヲニ注意セシメタリ
キ、第五ニ、殖民地ニ於ケル施治者ト被治者トノ關係、相親暹密合スルハ
ハ、昔時葡萄牙人ノ西印度ニ於ケルカ如ク、又西班牙人ノ亞米利加ニ於
ケルカ如ク、遂ニ本國ノ所領主權ヲ失墜スルヲ免レサルノ故ヲ以テ、
殖民地ニ於ケル本國人ト、土人トノ關係ハ、双方共ニ相親昵セシメズ、却
テ遠ク阻隔セシメタリキ、

英國ガ印度經營ニ於ケル、最初ヨリ計畫セシ所ノ目的ハ、全ク以上ノ主
義ニシテ之ニ由テ以テ終ニ印度全國ヲ其脚底ニ服セシメタル者ナリ、
此ノ如キ剛毅神敏、得テ端倪スベカラザル呑噬策ヲ用ヒテ、猜忌相攻メ、
浮泛自ラ輕ンズル印度人民ヲ攻ム、印度帝國ノ死シ了ルヤ智者ヲ俟テ
知ラザルナリ、先修云ヘルヲアリ、曰ク—— 窺人者之情、窺於人者固有所

不知、——ト英人、巧ニ權詐縱橫ノ策ヲ以テ、印度人ヲ弄シ、印度人常ニ心放レ眼眩シ、自ラ其掌中ニアリテ知フザリシモノナリ、豈其策ヲ挫キ、之ヲ未萌ニ防スルコト知ンヤ、抑モ英人ノ印度ヲ經營シタル策ハ、佛國ノ名士猶布烈ノ論策ニ在リト雖、東洋ノ兵家孫武之ヲ千年以前ニ確言シタリ、曰ク、——取用於國、因糧於敵——ト英人ハ、善ク之ヲ神ニスルモノト謂フベキ哉、

獅巖曰、故曰軍食可足也、

龍潭曰、猶普烈膽畧殆過克雷武、不使之得其志者佛國輿論政畧也、抑亞爾明達、亞伯傑兒克及克雷武、哈士丁材幹膽畧殆相類、猶普烈亦決未讓此數人、而猶布烈獨不得大展其志、是豈非輿論政畧之失乎哉、使孤拔將軍恨死於福州漳海者亦此政畧也、今日使武郎日將軍流寓於異鄉之地者亦此政畧也、經綸進畧取用因糧手段、非剛邁英明之士、未足語焉、噫、猶布烈雖憤死、克雷武、哈士丁、因其策成其功、猶布烈之膽氣識力於是乎益顯矣、

第十五章

印度ノ形勢ヲ論ズ

舊來ノ政畧ヲ守株シテ、活機ノ妙用ヲ知ラズ、傳世ノ頑說ヲ死執シテ、大勢ノ圓轉ヲ視ルコト能ハザルハ、今日ノ英國ナリ、試ニ今日英國カ印度ニ於ケル位置ヲ察スレハ、此言ノ實ヲ穿テル評タルヲ知ラン、——世ノ論者、動モスレハ、五十年前ニ於ケル、政事家ノ印度ニ關シタル意見ヲ把リ來テ、今日ノ形勢ヲ論セントスルモノアリ、是レ豈活機ヲ見ルモノ、言ナランヤ、

夫レ露國ノ眼光ヲ中央亞細亞經營ノ策ニ注キシヨリ、茲ニ數十年、其虓

武驚悍ノ將校士官ヲ養成シ、鷹揚雄飛ノ志ヲ蓄ヒタルモ、亦一日ノ故ニ非ズ、英國ノ恃テ以テ印度帝國ノ一大藩屏ト稱セシ所ノ土耳其ハ、露國ニ壓倒セラレ、君士但丁堡ノ城上ニ鷲影ノ翻々タルヲ見ルハ、將ニ遠キニアラザラントス、セバストポールノ戰ハ、其捷利果シテ何クニアルカ、黒海已ニ露國艦艘ノ横行スル所ト爲レルニ非ズヤ、伯林條約ノ盟ハ、其得失果シテ孰レニアルカ、バトーム港ハ、已ニ露帝ノ占領スル所ト爲レルニ非ズヤ、波斯支ヘス、基華裂ケテ屬隸ト爲ル、爾來、進取雄飛ノ策、益々進ミテ愈々逼リ、裏海ノ沿岸ヲ侵シ、嘿爾秘ヲ領シ、邊底ヲ取り、更ニ阿富汗ノ内治ニ關涉シ、希刺土ヲ吞ント欲ス、而シテ、露國中央亞細亞ノ線路ハ、蜿蜒トシテ裏海ヲ超エテ嘿爾秘ニ達シタリ、嘿爾秘ヨリシテ、希刺土ニ達スルヲ、二百四十哩ニ過キザレハ、其到達ノ時間ハ、通常行軍ノ規則ヨリ之ヲ云フモ、猶ホ二週間ノ程ニ過ギズ、印度ノ關門、岌々乎トシテ、其レ危キ哉、

元來露國ハ、一種不可思議ノ英氣豪膽アリテ、其一タヒ志セシ所ノ企畫ハ、如何ナル勅敵ニ際會シテ、骨ヲ暴ラス、山ヨリモ堆カク、血ヲ灑キテ杵ヲ漂ハスニ至ルモ、之ヲ貫徹セズンバ、止マザルナリ、然ルニ今ヤ、露國ノ強敵タリシ土耳其ノ勢挫ケ、波斯已ニ危ク、慄悍ナリシ中央亞細亞各部ノ種族、漸ク首ヲ俛シテ露國ノ膝下ニ就キ、前途ハ、唯見ル、平々坦々、直キ一砥ノ如ク、快馬鎮蹄ノ指ス所、滿目ノ大河山河、皆其靡ク所ト爲ンコト、勢已ニ此ノ如シ、抑モ知ラズ、英國ハ希刺土ノ關門ヲ擁シテ、阿富汗ヲ保ントスル乎、阿富汗已ニ露國ノ腕底ニ達セシコト如何センヤ、阿富汗ノ要地ニ據リテ、印度ヲ守ントスル乎、印度モ亦露國ノ掌中ニアルコト免レザルナリ如何センヤ、世ノ空論家ハ、露國ノ君民ハ、既ニ其達シ得ベキ限界ノ地ニ達シ、最早ヤ寸歩モ進入スベカラザルヲ察シ、其中央亞細亞ニ對スル政策、即チ南方ノ境域ヲ擴張スルノ熱心ヲハ、輒ク放擲シ去ルモノト信ゼリ、是レ豈五十年前ニ於ケル印度ノ形勢ヲ視テ、今日ノ形勢

ヲ視ザルモノニ非ザルナキヲ得ンヤ、苟モ中央亞細亞ニ於ケル露國進
取呑噬ノ政策ニ注意スルモノハ、誰レカ此ノ如キ謬見ヲ抱クモノアラ
ンヤ、——英國ノ頑梗ニシテ、活機ヲ達觀スルヲ能ハザルモノ、此ニ至リ
テ極マレリ、

想フニ露國ハ己ニ嘿爾秘ヲ併畧シタリ、若シ一步ヲ進メテ、希刺土ヲ占
領センカ是レ阿富汗ヲ呑ムノ兆候ナリ、阿富汗ヲ呑ムノ日ハ、印度帝國
ヲ呑ムノ日ナリ、——露國ニシテ印度ヲ呑ムノ日ハ、中央亞細亞ノ一大
瀾ヲ盪起スルノ時ニシテ、印度帝國ニ於テ、新革命ノ起ル時ナルベキナ
リ、印度ハ進テ波瀾ヲ捲キテ、獨立ノ旗ヲ翻サントスル乎、抑モ亦英領ノ
富庫ヲ移シテ、北方ノ強鷲ニ與ヘントスル乎、禍ヲ變シテ福ト爲スモ機
一轉ナリ、禍ヲ以テ禍ニ易フルモ亦機一轉ナリ、其神機ヲ洞觀スルモノ
ハ、要スルニ其人ニアリ、

英國ガ印度ノ寶藏ヲ失フハ、外敵ノ侵畧ニアリ、是レ必然免ル可ラザル

ノ數ナリ、而シテ今マ其内政ニ於テモ、亦其ノ失墜ヲ免レザルモノアリ、
請フ之ヲ歐洲識者ノ說ニ徵シテ之ヲ論スベシ、

英國カ印度ヲ失ハザルベカラザルモノハ、其教育策、宜キヲ得ザルニア
リ、凡ソ未開ノ人民ヲ教化スルニハ、決シテ俄然之ヲシテ開明ノ域ニ進
入セシムルヲ能ハズ、必ズ幾多ノ歲月ヲ以テ、漸進セシメザルヲ得ザル
ハ、當然ノ理勢ナリ、然ルニ英人ガ印度人ヲ教育スル所ノ主義方法ハ、全
ク之ト相背馳セリ、夫レ英人ガ印度人ヲ教育スル所ノ主義方法ヲ觀ル
ニ、英國政府ハ、一方ニ於テハ、教會及ヒ爾他救恤協會等ノ請願ヲ容レ、又
一方ニ於テハ、印度ニ於ケル、郵便、鐵道、電信其他公共ノ役員ヲ養成スル
目的ヲ以テ、夙ニ諸種ノ學校ヲ建立シ、悉ク本國人ヲシテ、之レカ教師タ
ラシメタリ、事今チ距ルヲ三十年前ノ事ナリ、爾來幾多ノ學生ヲ養育シ、
今日ニ至ルマデ、十萬ノ學生ヲ養成シタリキ、然レモ其結果ハ、歐洲人ト
印度人トノ中間ニ位スル一種奇異ノ思想ヲ有スル所ノ人物ヲ養成セ

シニ過キズシテ、從來團結心ニ乏シキ所ノ印度人種中ニ、更ニ一種ノ民族ヲ増加セシニ外ナラズ、是ヲ以テ將來印度人ハ往昔英人ガ之ヲ占領セシ方策、即チ土人間ニ擾乱ヲ醸生セシムル手段ヲ用ユル時ハ、英國ノ所領權ヲ占奪センコト、容易ナルベシ、然レハ印度ハ、自ラ起タザレハ、他ノ歐洲人ガ、英國ニ代リテ之ヲ占領スルニ至ンモ亦未タ測ルベカラズ、而シテ異日亞細亞洲ヨリ一大英雄ノ士、起ルアリテ、印度人ヲ服従セシメ、其全力ヲ併セテ、歐洲人ニ對シ、戰端ヲ開ク迄ハ、歐洲人ハ、印度ノ主權ヲ保持スルコトヲ得ベキ歟、

抑モ印度ノ開化セシコト、今チ距ルコト三千年以前ヨリシテ、已ニ識者ノ之ヲ認定スル所ナリ、而シテ其間一治一乱、甲起リ乙仆レ、國朝ノ興廢其常ナク、印度ノ主權者幾回トナク變更セシト雖モ、前世紀ノ末造迄ハ、其能ク印度ヲ統御シタルモノハ、悉ク是レ亞細亞人種ナリキ、然ルニ、爾後、英人ガ吞噬ノ志ヲ逞クセント欲シ、始メテ恒河河畔ニ進ムニ及ヒテ、印度

人チシテ、黑白氷炭相容レザル所ノ人種ト相接近セシムルコト至レリ、夫レ英國ハ泰西ノ極隅ニ位セル日進ノ文明國ト雖モ、之ニ反シテ東洋ニ位スル印度ハ、往古ノ遺風ヲ保持スル所ノ守舊國ナリ、而シテ此ノ如ク、素質習性ヲ異コスル東西人民ノ間ニ、宇内文明ノ進動力ヲ與ヘタル事件、即チ英人ガ、兵力ヲ以テ印度ヲ攻奪セシカ如キ戰乱ハ、皆是レ夥多ノ犧牲ヲ費シタル所ナリ、然レモ此等ノ戰乱ハ、將來東西洋ノ人民間ニ於テ、得テ避クベカラザル所ノ大戰争ニ比スレハ、實ニ微々タル小戰争ニ過キザルベシ、其將來ノ戰争トハ、何ツヤ、他ナシ、其起由スル所、專ラ輓近學術ノ進歩ニ隨伴スル所ノ競爭、是レナリ、

夫レ、蒸氣及ヒ電信ノ効力ニ由テ、遼遠ノ距離ヲ近縮シ、以テ世界人類ノ交通往來ヲシテ自由ナラシメタリ、今チ試ニ茲ニ東西洋人民ノ有様ヲ評センニ、譬ヘハ、妙ニ東西兩岐ノ流水アリ、東流ハ、潺々タル緩流ナレモ、西流ハ、滔々タル急流ナリ、然レモ此兩流ハ、緩ナルモ將タ急ナルモ、早晚

相合ノ、一條ノ大流ニ歸シ、其流勢ヲ均一ナラシムベキハ、必然ノ勢ナリ、即チ東西洋ノ關係相密着シテ、一致セザルヲ得ズ、而シテ此兩人種ヲシテ相接近セシムベキ第一ノ幫助物ハ、蒸氣及ヒ電信ノ力ニシテ、彌々其關係ヲシテ相密通セシムル所ハ、先ツ農産物、及ヒ工作品等、其價格ヲ東西ニ通シテ、均一ナラシムベシ、又之ニ次キテ、彼此人夫ノ賃金ニ至ルマテ、相平均セルニ至リ、其賃金額ハ、東洋人ノ満足スル低點ヲ以テ、定率ト爲スニ至ルベシ、然レニ此一點ニ於テハ、歐洲人ガ東洋人ニ對シテ一着ヲ輸セザルヲ得ザルハ、歴然掩フベカラザル事實ナリ、近年歐洲ノ市場ニ於テ、印度産麥類ノ價直ハ、歐洲産ノ麥類ヨリモ、非常ニ廉ニシテ、年々印度ニ産出スル夥多ノ麥類ハ、漸次歐洲ニ於ケル耕夫及ヒ其家族ヲ變勤スルノ力アリト謂フベシ、工作品ノ如キモ亦然リ、東洋人ガ歐洲ノ機械類ヲ使用シ、以テ夥多ノ工作品ヲ製出シ、其製作ヲ精巧ニシ、特ニ價値ヲ廉ニシテ、陸續歐洲ニ輸入スルニ至ラバ、恐クハ、歐洲人ト雖

凡、之ヲ防クヲ能ハザルベシ、人夫ノ事ニ於ケルモ亦然リ、目下歐洲ノ坑夫ハ、通常一日五法^{フラン}ヲ費サ、ルハナシ、左レハ之ヲ使用スル坑主ニ於テ、亞細亞人ヲ以テ之ニ代フル所ハ、歐洲ノ坑夫ニ給スル賃金ヨリモ、幾倍ノ少額ヲ以テ幾多ノ人夫ヲモ備使スルヲ得ベシ、果シテ然ラハ、是時ヨリ歐洲ノ人夫ハ、忽チ生業ノ路ヲ失シ、到底亞細亞人ト同一ノ賃金ヲ得テ満足スルニ非ザレハ、止マザルベシ、要スルニ、現時歐洲人ガ、亞細亞人ニ超絶セル一點ハ、唯ダ是レ智巧技術ハ、稍々進歩セルニ過キザルハ、ミ、然レニ、寡ハ固ヨリ以テ衆ニ敵スヘカラズ、小ハ固ヨリ以テ大ニ當ルベカラズ、昔時希臘文明ノ人民ハ、羅馬人ノ爲ニ、本國ノ主權ヲ占奪セラル、ヲ防クヲ能ハザリシヲ以テ之ヲ證スルニ足ルニ非スヤ、野史氏曰ク、英國カ、印度ハ、寶庫ヲ失ヒ、露國カ、之ニ代リテ、其主權ヲ占奪スルニ至ルベキヤ、否ヤ、ハ、最早今日ニ於テ經過セザルベカラサル所ナルベシ、而シテ印度ガ世界貿易ノ中心ト爲リ、其伎倆ヲ政治ノ新舞臺ニ

揮ヒ支那帝國ト共ニ亞細亞大洲ノ權衡ヲ握リテ歐洲各國ト相對峙スル強國ト爲ルベキヤ否ヤハ是レ亦將來ノ問題ナルベシ吾人ノ注目セサルベカラザルモノハ實ニ此兩大題目ニアリ——一首ヲ賦シテ以テ筆ヲ収ム、

我、有、熱、血、灑、無、地、寒、窓、青、搖、燈、一、穗、感、極、中、宵、不、復、眠、抽、架、印、度、亡、國、史、諸、侯、分、裂、國、勢、危、鷓、蚌、徒、招、漁、人、窺、己、無、英、雄、聯、邦、國、甘、將、山、河、付、獐、獅、獐、獅、當年乘勢入。特里城頭鬼晝泣。厥角稽首二億人。亂後草木血痕濕。逸居偷安遺邦家。奈此無廉無耻何。敵將凱旋壓城日。土人齊唱大平歌。嗚呼印度事已矣。雖有萬卒無一士。草莽不起華盛遜。民間未見巴寧爾。投筆慷慨忽掩編。山月影白老松邊。君不聞風前咫尺亞洲路。万壑毒龍笑登天。一獅巖曰活機轉處。電光猶遲善制之者在其人哉。

龍潭曰中央亞細亞是宇內和戰之一大咽喉也而印度當其鎗鎗焉今也露國印度經畧之策一定而不可撼苟至其雄兵百萬突出之時印度革命

龍潭曰金獅毒龍
之巖常注在巨阿
附

之機破裂也必矣明鏡當臺寶劍離匣印度山川中央亞細亞沃野適足以秣露將之快馬焉耳

米峯曰經畧進取經濟之策是唯在君主英剛其宰相得人之邦國而後可期其成績焉至於民治主義之邦國則不然今之英國形勢一變其政治悉是民治的雖有克雷武哈士丁不遑展其驥足也必矣露西亞則反之其君相其士民中有志之徒協心決意以貫徹立君主主義焉其目的確乎不拔泰山不啻噫印度之落于露西亞即斯拉勃人種之掌握也應不出于廿年也是非吾一人之私言也英人查列斯士馬爾敏及佛人列沙爾諸家識者之所共證言推判而不疑也

印度史卷三 大尾

附錄

外編

佛國記

釋法顯

法顯昔在長安、慨律藏殘缺、遂以宏始二年己亥、與慧景等、往天竺、尋求成律、初度隴、至乾歸國、坐訖、前行至罽檀國、至張掖鎮、值張掖大亂、道路不通、張掖王留作檀越、復夏坐訖、進燉煌沙河、行十七日、計可千五百里、至鄯善國、其國王奉法、可有四千餘僧、悉小乘學、從此西行、所經諸國、胡語國々不同、然出家人皆習天竺書、天竺語、往此一月、復西北行、十五日、到僞衣國、僧四千餘人、皆小乘學、法則齊整、往二月餘日、又西南行、路中無居民、涉行艱難、所經之苦、人理無比、在道一月五日、到得于闐國、僧數萬人、多大乘學、家々門前皆造小塔、最高者、可高二丈許、其國十四、大僧伽藍、不數小者、有大乘寺、三千僧共提樞、食、威儀齊肅、器鉢無聲、法顯欲觀行像、停三月日、觀行像訖、進合子合國、在道

二十五日，便到其國。國王精進，有千餘僧。大乘學在此十五日已。於是南行。四日，入葱嶺山，到於臆國。安居訖，行二十五日，到竭叉國。值其國王作五年大會。四方沙門雲集。其地山寒，不生餘穀。惟熟麥耳。有佛唾壺及佛齒塔。國當葱嶺之中。從此北行，向北天竺。在道一月，得度葱嶺。葱嶺冬夏有雪。又有毒龍。窟已。到北天竺，始入其境。有一小國，名陀歷。順嶺西南行。十五日，岸崔險絕。石壁千仞。下有水名新頭河。昔人鑿石通路。施傍梯者，凡度七百度。梯已躡，懸鉅過河。兩岸相去，減八十步。漢之張騫、甘英，皆不至也。渡河到烏菴國。是正北天竺也。盡作天竺語。佛遺足跡及晒衣石。法顯等住此國。夏坐，坐訖，南下到宿呵多國。其國佛法亦盛。從此東行五日，到犍陀衛國。是阿育王子法益所治處。自此東行七日，有國名竺剌尸羅。竺剌尸羅，漢言截頭也。佛爲菩薩時，於此處以頭施人。故因以名。從此南行四日，到弗樓沙國。是屬膩迦王起塔處。高四十餘丈。閻浮提塔唯爲上。佛鉢，即在此國。昔月氏王大興兵衆，來伐此國。欲取佛鉢。既伏此國已，欲持鉢去。乃按飾大象，置鉢其上。象便伏地，不能得前。更作四

輪車，載鉢，八象共牽。復不能進。王知與鉢緣未至，深自愧歎。即於此處起塔。及僧伽藍。西行十六由延，至那竭國。醯羅城。供養佛頂骨、佛齒、佛影、佛錫杖。佛僧伽梨。有諸羅漢，辟支佛塔及千數。住此二月。南度小雪山。山北陰寒，人皆噤戰。復自力前過嶺。南到羅夷國。住此夏坐。坐訖，南下。行十日，到跋那國。從此東行。三日，復新頭河。兩岸皆平地。過河有國，名毗茶。佛法興盛。僧衆萬數。又經捕那。到摩頭羅國。片沙河已西。天竺諸國，國王皆篤信佛法。供養衆僧。時，則脫天冠。共諸宗親群臣，手自行食。行食已，鋪氈於地。對上座前，坐於象僧前。不敢坐床。佛在世時，諸王供養法式，相傳至今。從此以南，名中國。中國寒暑調和，無霜雪。無戶籍官法。唯耕王地者，乃輸地利。欲去便去。欲住便住。王治不用刑罔。有罪者，但罰其錢。隨事輕重。雖復謀爲惡逆，不過截右手而已。舉國人民，悉不殺生。不飲酒。不食葱蒜。唯除旃荼羅。名爲惡人。與人別居。若入城市，則擊木以自異。人則識而避之。不相搪揆。國中不養豬鷄。不賣生口。市無屠行。及酤酒者。貨則用具齒。唯旃荼羅獵師賣食耳。自渡新頭河，迄於南海，四五万里，皆平坦。無大

山川止有河水從此南行十八由延有國名僧伽施佛上忉利天爲母說法來下處佛以受天食三月故身作天香不同世人即浴身後人於此處亦起浴室浴室猶在優鉢羅比丘尼初禮佛處今亦起塔住龍精舍夏坐起東南行七由延到屬饒夷城城接恒水南行三由延到一林名阿梨佛於此中說法經行坐處盡起塔從此東南行十由延到沙祇大國出沙祇城南門道東佛本在此嚼楊枝刺土中即生長七尺不增不減諸外道婆羅門嫉妬或斫或拔連棄之其處續生如故此中亦有四佛經行坐處從此南行八由延到拘薩羅國舍衛城城內人民稀曠都有二百餘家則波斯匿王所治城也大愛道故精舍處須達長者井壁及耨掘魔得道般泥洹燒身處後人起塔皆在此出城南門千二百步即祇洹精舍池流清淨林木蔚然佛上忉利天爲母說法九十日波斯匿王思見佛即刻牛頭旃檀作佛像置佛坐處佛後還入精舍像即避出迎佛佛言還坐吾般泥洹後可爲四部衆作法式像即此坐此像最是衆像之始後人所法也佛於是移住南邊小精舍東北六七里毗舍佉母作精舍此處故在祇洹

精舍大搜落有二門一門東向一門北向此園須達長者布金錢買地處也佛住此最久說法度人經行坐處亦盡起塔舍衛城東南四里瑠璃王欲伐舍夷國世尊當道側立立處起塔城西五十里到一邑名都維是迦葉佛本生處般泥洹處皆悉起塔迦葉如來全身舍利亦起大塔從舍衛城東南行十二由延到一邑名那毗伽是拘樓秦佛所生處從此北行減一由延到一邑是拘那含牟尼佛所生處從此東行減一由延到迦維羅衛城城中都無王民甚如丘荒只有衆僧民戶數十家而已即白淨王故宮太子與難陀等撲象擗射處箭東南去三十里入地全泉水出後人治作井令人飲之佛爲太子出家及得道還見父王處故蹟具在各有塔表之佛在尼拘律樹下東向坐大愛道布施佛僧伽梨處此樹猶在城東北數里有王田太子樹下觀耕者枝城東五十里有王國名論民夫人入池洗浴出池北岸二十步舉手攀樹枝東向生太子太子墮地行七步二龍王浴太子身浴處遂作井及上洗浴池今衆僧常取飲之凡諸佛有四處常定一者成道處二者轉法輪處三者說法論義伏外道處四者

上切利天爲母說法來下處餘則隨時示現焉此國空荒人民稀疎道路怖畏
 白象獅子不可妄行復東行五由延有國名藍莫ブルモ此國王得佛一分舍利還歸
 起塔即名藍莫塔ブルモタ從此東行三由延太子遣チヤンダカニバルダナ車車匿匿白馬還處亦起塔從此
 東行四由延到炭塔亦有僧伽藍復東行十二由延到拘夷那竭城クニヤナガ城北雙樹
 間希連河邊ヒラシヤバチ世尊於此北首而般泥洹及須跋最後得道處以金棺供養世尊
 七日處金剛力士放金杵處八王分舍利處皆悉起塔有僧伽藍今悉現在其
 城中人民亦稀曠止有衆僧民戶自此東行五由延到毗舍離國有往昔國王
 千子傲弓仗處後人於此處起塔今亦在從此東行四由延到五河合口阿難
 摩竭提國向毗舍離欲般涅槃諸天告阿闍世王アヂヤサトル即自嚴駕將士衆追到河上
 毗舍離諸梨車リヤハ聞阿難來亦復來迎俱到河上阿難思惟前則阿闍世王致恨
 還則梨車復怨則於河中央入火光三昧燒身而般泥洹分身作二分各在一
 岸俾兩國王各得半身舍利還還塔度河南下一由延到摩竭提國凡諸中國
 唯此國城邑爲大民人富盛競行仁義年々常以建卯月八日作行像四輪車

高三丈許其狀如塔懸繪幡蓋四邊作龜皆有坐佛菩薩立侍可有二十車婆
 羅門子來請佛佛次第入城入城內再宿通夜然燈道俗雲集香花伎樂供養
 國中長者居士各於城中立德醫藥舍以施貧病城南三里阿育王最初
 所作大塔此塔前有佛脚跡起精舍戶北向塔塔南有一石柱圍丈四五高三
 丈餘上有銘題云阿育王以閻浮提布施四方僧還以錢贖如是三反塔北三
 百步阿育王本於是作泥梨城中央有石柱亦高三丈餘上有師子柱上有銘
 記作泥梨城因緣及年數日月此從此東南行九由延至一小孤山山頭有石
 室石室南向佛坐其中天帝釋將天樂般遮彈琴樂佛處帝釋以四十二事問
 佛一々以指畫石畫跡故在此中亦有僧伽藍從此西南行一由延到那羅聚
 落是舍利弗本生村舍利弗於此村般泥洹即此處起塔今亦現在從此西行
 一由延到王舍新城チヤシキ新城者阿闍世王所造中有二僧伽藍出城西門三百步
 阿闍世王得佛一分舍利起塔高大嚴麗出城南四里南向入谷至五山裏五
 山周圍狀如城郭即是瓶沙王舊城ヒンシヤ東南上十五里到耆闍崛山チヤラフ峯秀端麗是

五山中最高顯於新城中，買香華油燈，倩二舊比丘，送法顯，上耆闍崛山，華香供養，然燈續明，慨然悲傷，收淚而言，佛昔於此，說首楞嚴，法顯生不值佛，但見遺跡處所而已，即於石窟前，誦首嚴嚴，停止一宿，還向新城，出舊城，北行三百餘步，道西迦蘭陀竹園精舍，今現在搏南山，西行三百步，有一石室，名寶波窟，佛食後常於此坐禪，又西行五六里，山北陰中，有一石室，名車帝佛泥洹後，五百阿羅漢集經處，出經時，鋪三空座，莊嚴，校飾，舍利弗在左，目連在右，五百衆數中，少一阿羅漢，大迦葉爲上座時，阿難在門外，不得入，其處起塔，今亦在搏山，亦有諸羅漢坐禪石窟甚多，從此西行四由延，到伽耶城，城內亦空荒，復南行二十里，到菩薩本苦行六年處，有林木，從此西行三里，得彌家女，奉佛乳糜處，從此北行二里，佛於一大樹下，石上，東向坐，食糜，樹石今悉在，石可廣長六尺，高二尺計，中國寒暑均調，樹木或數千歲，乃至萬歲，從此東北行半由延，到一石窟，菩薩入中西行，結跏趺坐，心念我成道，當有神驗，石壁上即有佛影，現，長三尺許，今猶明亮，時天地大動，諸天在空中，自言此非過去當來諸道成

道處，去此西南減半由延，具多樹下，是過去當來諸佛成道處，諸天說是語，已，即便在前唱導而去，菩薩起行，離樹三十步，天授吉祥草，菩薩受之，復行十五步，到具多樹下，敷吉祥草，東向而坐，自上苦行六年處，及此諸處，後人皆於中起塔立像，今皆在，佛得道處，有三僧伽藍，皆有僧住，衆僧民戶供給饒足，戒律嚴峻，威儀坐起，人衆之法，佛在世時，聖衆所行，以至于今，佛泥洹已來，四大塔處，相承不絕，四大塔者，佛生處，得道處，轉法輪處，般泥洹處，從此南行三里，至鷄足山，大迦葉今在此山中，劈山入，入處不容人，下入極遠，有旁孔，迦葉全身在此中住，孔外有迦葉本洗手土，彼方人若頭痛者，以此土塗之，則差，此山榛木茂盛，又多獅子虎狼，不可妄行，法顯還向已連弗邑，順恒水西下十由延，得一精舍，名曠野，佛所住處，今現有僧，復順恒水，西行十二由延，到迦尸國波羅捺城，城東北十里許，有仙人鹿野苑精舍，世尊成道已，後人於此處，起精舍，佛始轉法輪，度拘隣等五人處，爲彌勒授記處，皆悉有僧伽藍，從此西北行十三由延，有國名拘隣彌，其精舍名瞿師羅園，佛昔住處，今有衆僧從此南行二百

由延、有國名達喇^{ダラ}，是過去迦葉佛僧迦藍，穿大石山作之，凡有五重，最下重作象形，有五百間，第三層作馬形，有三百間，第四層作牛形，有二百間，第五層作鵠形，有百間，最上有泉水，循石室前繞房而流，諸層室中，處々穿石作窓牖，室中朗然都無幽暗，其室四角頭，穿石作梯磴，上處今人形小，綠梯上，正得至昔人一脚所躡處，因名此寺爲波羅越^{ボロコ}，波羅越者天竺鵠也，其寺中常有羅漢住，此土丘荒無人，民居去山極遠，方有村，皆是邪見，不識佛法，沙門婆羅門及諸異學，彼國人民，常見人飛來此寺，於時諸國道人，欲來禮此寺者，村人則言，汝何以不飛耶，我見此間道人皆飛，道人方便，答言，翅未成耳，達喇國險道路艱難，而知處欲往者，要當資錢貨，施彼國王，王然後遣人送，展轉相付，示其逕路，法顯意不得往，承彼土人言，故說之耳，從波羅捺國東行，還巴連弗邑，法顯本求戒律，而北天竺諸國，皆師々口傳，無本可寫，是以遠步，乃至中天竺，於此摩訶衍僧伽藍，得一部律，是摩訶衍祇衆律，佛在世時，最初大乘所行也，於祇洹精舍，傳其本，自餘十八部，各有師資，大歸不異，復得一部抄律，可七千偈，是薩

婆多衆律，此秦地衆僧所行者也，亦皆師々口傳，相傳授，不書之於文字，復於此衆中，得雜阿毗曇心，可六千偈，又得一部純經，二千五百偈，又得一卷方等般泥洹經，可五千偈，又得摩訶衍祇阿毗曇，故法顯住此三年，學梵書梵語，寫律，道整獨停不歸，法顯本心欲令戒律流通漢地，於是獨還，順恒水，東下十八由延，其南岸有瞻波大國^{チヤバ}，佛精舍經行處，及四佛坐處，悉起塔，從此東行五十由延，到多摩梨帝^{タムラシテイ}，即是海口，其國有二十四僧伽藍，佛法亦興，法顯住此二年，寫經及畫像，於是載商人大舶，汎海西南行，得冬初信風，晝夜十四日到師子國^シ，彼國人云，相去可七百由延，其國在大洲上，東西五十由延，南北三十由延，左右小洲，乃有百數，其間相去，或十里，二十里，或二百里，皆統屬大洲，多出珍寶珠璣，有出摩尼珠地，方可十里，王使人守護，若有採者，十分取三，其國和適，無冬夏之異，草木常茂，田種隨人，無有時節，佛至其國，以神足化惡龍，於王城北跡上，起大塔，高四十丈，金銀莊核，衆寶合成，塔邊有僧伽藍，名無畏山，中有一青玉像，高三丈許，通身七寶，炎光威相嚴顯，非言所載，法顯去漢地，積年

所與交接，悉異城人，山川草木，舉目無舊，又同行分折，或留或亡，顧影唯已，心常懷悲，忽於王像邊，見商人以晉地一白絹扇供養，不覺凄然淚下，滿目，其國前王遣使中國，取貝多樹子，於佛殿旁種之，高可二十丈，其樹東南傾，王恐倒，故以八九回柱，柱樹樹當柱處，心生，遂穿柱而下，入地成根，大可四圍許，其城中多居士長者，薩薄商人，屋宇嚴麗，卷陌平整，四衢道頭，皆作說法堂，月八日，十五日，鋪施高坐，道俗四衆，皆集聽法，其國人云，都可五六萬僧，悉有衆食，王別於城內，供五六千人衆食，佛齒常三月中出之，未出十日，王莊校大象，使一辯說人，著王衣服，騎象上，擊鼓喝言，菩薩從三阿僧祇，却苦行，不惜身命，以國妻子及挑眼與人，割肉買鴿，截頭布施，投身餓虎，不憚髓腦，如是種々苦行爲衆生故，佛在四十九年說法教化，全不安者安，不度者度，衆生緣盡，乃般泥洹，般泥洹已來，一千四百九十七年，世間眼滅，衆生長悲，却後十日，佛齒當出，至無畏山精舍，國內道俗欲植福者，各々平治道路，嚴飾巷陌，辦衆華香供養之，種々法事，晝夜不息，滿九十日，乃還城內精舍，法顯住此國二年，更求得彌沙

寒律藏本，長阿含雜阿含，復得一部雜藏，此悉漢土所無者，得此梵本已，即載商人大舶，上可有二百餘人，後係一小船，海行艱險，以備大船毀壞，得好信風，東下二日，便值大風，船漏水入，商人欲趣小船，小船上人，恐人來多，即斫繩斷，商人大怖，命在須臾，恐船水漏，即取粗財貨，擲著水中，法顯亦以軍持及澡灌并餘物，棄擲海中，但恐商人擲去，經像唯一心，念觀世音及歸命漢地衆僧，我遠行求法，願威神歸流，得到所止，如是大風，晝夜十三日，到一島，潮退之後，見船漏處，即補塞之，於是復前，海中多有抄賊，遇輒無全，大海瀾漫，不識東西，唯望日月星宿而進，若陰雨時，爲逐風去，亦無准，當夜闇時，但見大海相搏，晃然火色，龍鼉水性恠異之屬，商人荒遽不知那向，海深無底，又無下石住處，至天晴乃知東西，還復望正而進，若值伏石則無活路，如是九十日許，乃到一國，名耶婆提，其國外道婆羅門興盛，佛法不足言，停此國五月日，復隨他商人大船上，亦有二百許人，賚五十日糧，以四月十六日發，法顯於船上安居，東北行趣廣州，一月餘日，夜鼓二時，遇黑風暴雨，商人買客，皆悉惶怖，法顯爾時，亦一心

念觀世音及漢地衆僧、蒙威神佑、得至天曉、曉已、諸婆羅門譏言、坐載此沙門、使我不利、遭此大苦、當下比丘置海峒邊、不可爲一人令我等危險、法顯本檀越言、汝若下此比丘、亦并下我、不爾便當殺我、汝其下此沙門、吾到漢地、當向國王言汝也、漢地王亦敬信佛法、重比丘僧、諸商人躊躇不敢便下、於時天多連陰、海門相望、僻誤、遂經七十餘日、糧食水漿欲盡、取海鹹水作食、分好水、人可得一升、遂便欲盡、商人譏言、常行時可五十日、便到廣州爾、今已過其多日、將無僻耶、即便北西行求岸、晝夜十二日、長廣郡界、岸山南岸、便得好水菜、但經涉險難、憂懼積日、忽得到此岸、見藜藿菜、依然知是漢地、然不見人民及形跡、未知是何許、或言未至廣州、或言已過、莫知定處、即乘小船入浦、覓人欲問其處、得兩獵人、即將歸、令法顯譯語問之、法顯先慰安之、徐問、汝是何人、答言、我是佛弟子、又問、汝入山何所求、其便謊言、明當七月十五日、欲取挑臘佛、又問、此是何國、答言、此是青州長廣郡界、統屬劉家、聞已、商人歡喜、即乞其財物、遣人往、長廣大守、季嶷、敬信佛法、問有沙門、持經像、乘船汎海而至、即將人從

至海邊、迎接經像、歸至郡治、商人於是還向揚州、劉法青州、請法顯、一冬、一夏、夏坐訖、法顯遠離諸師、久欲趣長安、但所營事重、遂便南下、向都、就諸師、出經律、法顯發長安、六年到中國、停六年、還三年、達青州、丸所游歷、滅三十國、沙河已西迄、天竺、衆僧威儀法化之美、不可詳說、竊唯諸師未得備問、是以不顧微命、浮海而還、艱難具更、幸蒙三尊威靈、危而得濟、故竹帛疏所經歷、欲令賢者同其間見、

此紀行ニ據レハ、法顯ノ印度ニ赴クヤ、天山南路ヨリ、雪山ノ險ヲ越エテ、天竺ニ入リ、錫蘭ニ至リ、歸路海ニ航シテ歸國シタルモノナリトス、而シテ印度ニ停マリシコト、十二ノ星霜ヲ費シタリ、法顯ノ意氣卓落、亦想見スルニ足ル、余聞ク當時法顯人ニ語テ曰ク、印度ノ文物隆盛ヲ極ム、其皎明月ノ如シ、ト然ラハ則チ當時印度ノ文明ハ、其絶頂ニ達シ、東方諸邦ノ仰ク所ト爲リシヲ、亦疑チ容レサル所ナルベシ、

使西域記

釋 惠 生

魏神龜元年十一月冬，太后遣崇立寺比丘惠生與敦煌人宋雲向西域取經，凡得百七十部，皆是大乘妙典。初發京師，西行四十日，至赤嶺，即國之西疆也。山無草木，有鳥鼠同穴。又西行二十里，至吐谷渾國。又西行三千五百里，至鄯善城。又西行千六百里，至且末城。有召光伐胡時所作佛菩薩像。又西行千三百七十五里，至末城。又西行二十二里，至捍摩城。有于闐供佛之塔，其旁小塔數千，懸幡萬計。又西行八百七十八里，至于闐國。有國王所造覆盆浮圖一，有辟支佛靴，于今不爛。于闐境東西三千里，神龜二年七月廿九日，入朱駒波國。人民山居，不立屠殺，食自死肉。風俗語言與于闐同。文字與婆羅門同。其國疆界可五日行偏。八月入渴盤陀國。西行六百里，登葱嶺山。復西行三日，至鉢孟城。三日至毒龍池，爲昔盤陀王，以婆羅門咒々之。龍徙葱嶺西，去此地二千餘里，自發葱嶺，步々漸高，如此四日，乃至嶺。依約中下，實天半矣。渴盤陀國正在山頂，自葱嶺已西，水皆西流入西海。世人云：是天地之中。九月中旬入鉢

和國。高山深谷，險道如常。因山爲城，氈服窟居，人畜相依，風雪勁切，有大雪山，望若玉峯。十月初旬入嚙噠國。居無城郭，隨逐水草，不識文字，年無盈閏，用十二月爲一歲。受諸國貢獻，南至牒羅，北盡敕勒，東被于闐，西及波斯，四十餘國，皆來朝貢，最爲強大。王帳周四十步，器用七寶，不信佛法，殺生血食，見魏使，拜受詔書，去京師二萬餘里。十一月入波斯國。境土甚狹，七日行過，人居山谷，雪光耀日。十一月中旬入除彌國。漸出葱嶺，磽角危峻，人馬僅通，鉄鎖懸度，不見底。十二月初旬入烏塲國。北接葱嶺，南連天竺，土氣和暖，原田膾々，民物殷阜。國王菜食長齋，晨夜禮佛，日中已後，始治國事。鐘聲偏界，異花供養，聞魏使來，膜拜受詔。國中有如來晒衣履石之處，其餘佛跡所至，炳然每一佛跡，輒有寺塔，覆之。比丘戒行精苦，至正光元年四月中旬，入乾陀羅國。土地與烏塲國相似，本名業波羅爲嚙噠所滅，遂立敕勒爲王。國中人民，悉是婆羅國爲嚙噠口典，而國王好殺，不信佛法，與罽賓爭境，連年戰鬪，師老民怨，坐受詔書，凶慢無禮，送使一寺，供給甚薄。西行至新頭大河，復西行十三日，至佛沙伏城。迦郭靖

直林泉茂盛，土饒珍寶，風俗淳善，各僧德泉道行高奇，石像莊嚴，通身金箔，有迦葉佛跡，復西行一日，乘舟渡一深水，三百餘步，復西南行六十里，至乾陀羅城，有佛涅槃，後二百年，國王迦尼色迦所造雀離浮圖，凡十二重，去地七百尺，基廣三百餘步，悉用文石爲階，塔內佛事千變萬化，金盤晃朗，寶鐸和鳴，西域浮圖最爲第一，復西北行渡一大水，至那迦羅國，有佛頂骨及佛手書梵字石塔銘，凡在烏場國二年，至正光二年還闕。

印度史附錄終

題印度史之後

沃土從來乏大賢。枉教碧眼躡山川。
瞿曇妙法知何用。日月影昏天竺天。

米峯 小山正武

亞細亞小國史

北村 三郎 編述

第一篇

朝鮮史

第一章

地理畧説

朝鮮ハ、一ニ高麗ト稱ス、北ハ滿洲及ヒ西比利亞ニ隣シ、西ハ滿洲及黃海ニ接シ、南ハ朝鮮海峽ニ臨ミ、東ハ日本海ニ面ス、北緯三十三度ヨリ起リテ、四十三度ニ至リ、東徑百二十四度ヨリ起リテ百三十度ニ至ル、國內ヲ分チテ八道ト爲ス、京畿道、忠清道、慶尙道、全羅道、江原道、黃海道、平安道、咸鏡道是レナリ、又之ヲ小別シテ州、府、郡、縣、驛、堡ト爲シ、各々監司、都護、府使、牧使、郡守、縣令、監、節度使、防禦使、令使、察訪等ノ官ヲ置キ、政令ヲ施行ス、稻田四十六萬八千三百六頃、畑地三十萬九千八百七頃アリ。

朝鮮ハ、寒國ニシテ、北地殊ニ甚シク、三南ノ地稍々温暖ナリ、平安、咸鏡ノ諸道ハ、冬月、往來ヲ絶スルヲアリ、江海悉ク凍リ、江水亦氷ニ鎖ス、咸鏡道ハ、冬月ニ至レハ、大雪降り、道路爲ニ梗塞ス、——京城ハ、京畿道ニアリ、四方各々十里朝鮮ノ十里ハ日本ノ三十八丁四分ニ當ル、周圍四十里ニシテ、繞ラスニ塀ヲ以テス、市街ヲ分ナテ、東部、西部、南部、北部、中部ノ五ト爲シ、部毎ニ令、都事各一人ヲ置キ、各營所ヲ設ケ初メハ、訓練都監、禁衛營、衛營、龍虎營、總戎廳ノ五營ヲ置キ各一人ノ大隊ヲ置テ五軍門ト稱セシカ、今ハ改メテ統衛壯衛兩營ト爲シ、西洋ノ式ニ倣ヒテ軍隊ヲ訓練セリ、其數合シテ六千人之ヲ往時ニ比スレハ、殆ント三分ノ二ヲ減セリ、——又惠民署アリ、窮民ノ病メルモノヲ救ヒ宣惠廳アリテ宣惠ノ時ニ賑ヲ行ヒ平市署アリ、市中升秤賣買ノ事ヲ掌ル、城内ハ固ヨリ城外ノ本道ハ瓦屋ナリ、其他ハ瓦屋、藁屋交々參差タリ

白頭山バイトウサンハ、國中第一ノ高山ニシテ、其高サ二十四里、頂上ニ白岩アリテ恰

モ雪ノ如シ、陰曆九月ヨリ三月間ハ、積雪皚々トシテ峯ヲ埋メ山勢南ニ面シテ國ヲ懷抱ス、第二チ濟州ノ漢拏山ト稱ス、北ニ面シテ遙ニ白頭山ニ面ス、慶尙道ニ島嶺アリ、其ノ高サ大約廿里アリ、其他高峻ノ諸山亦多シ、蓋シ朝鮮ノ地タル、重嶂層巒、處トシテ之レアラザルハナク、國中三十里絶テ洞野平郊アルヲ見ズト云フ、

白頭山ヨリ落ル所ノ水ハ、鴨綠江、黑龍江、豆滿江ニ入り、豆滿江ハ白頭山ノ背ヨリ發シ、東北ニ向テ流下スルヲ六十餘里、穩城ニ至リテ、漸ク東南ニ折レ、殆ント半圓形ヲ爲シ、又流瀉スルヲ二十餘里ニシテ、海ニ注ク、水底白砂ニシテ、水質純良ナリ、鴨綠江、モ源チ白頭山ニ發シ、平安道ヲ流下スルヲ百餘里ニシテ海ニ入ル、河中往々隱礁暗洲アリ、邊岸ハ險塞絶壁、宛然トシテ天塹ヲ成シ、西岸夷ニシテ、東岸毎ニ險ナリ、其夷處ニハ、鎖堡關寨ヲ設ケ平安沿江百餘里、七邑ノ間二十八鎮堡ヲ羅列ス、今日廢毀セルモノ甚々多シト云フ、

八道中ノ島嶼、多キヲ全羅慶尙二道トス。嶋嶼ノ大ナル者、一ヲ濟州ト稱シ、二ヲ南海ト稱シ、三ヲ巨濟ト稱シ、土人之ヲ三嶋ト呼ブ、其外ニ、江華、喬桐、珍嶋、天城、鹿嶋、馬嶋及ヒ鬱陵嶋等アリ、濟州、南海、巨濟ノ物産ニハ、柑、柚及ヒ海産物アリ、其他ノ諸嶋ニモ亦海産物アレハ、皆嶋守ナリ、命使萬戶ニテ、支配スルモノナリ、

第二章

國朝ノ興亡

現今ノ朝鮮人ハ、元ト是レ長白山以北ノ種族ナリ、其人種初メ慄悍ニシテ、星霜ヲ經ルニ及ビテ、漸ク南方ニ出テ、往古ヨリ朝鮮半嶋ニ居住セル土民ニ原人ニテ、驅逐シ、又ハ征服シテ、終ニ此地ニ遷徙セシモノト

知ラル、左レハ、現今朝鮮人ノ遠祖ハ、滿州並ニ朝鮮ノ北部ニ於テ其基業ヲ開キシモノナリ、

朝鮮ハ、初メ朝鮮ノ名稱ヲ以テ、國ヲ建テシガ、一變シテ三韓ニ馬韓、辰韓、辨韓ニト爲リ、再變シテ三國ニ高句麗、百濟、新羅ニト爲リ、三變シテ新羅三國ヲ一統シ再ヒ變シテ高麗ト爲リ、最後ニ朝鮮ノ古號ニ復セリ、

古朝鮮ノ開國ハ、檀君ヲ以テ祖トシ次ヲ箕子ト爲ス、箕子、殷ノ人民ヲ率キテ今ノ大同江ノ西、平壤ノ地ニ來リ、井田ヲ定メ、教育ヲ施シ、始メテ支那ノ文物ヲ傳ヘ、封城ヲ以テ朝鮮ト號セリ、此時ノ土民ハ、洞穴ニ居リ、木葉ヲ被リ、耕耘、火食ヲモ解セザル蠻俗ナリシモ、箕子之ヲ教化シ、工藝ノ道ヲ授ケタリ、其後數世ニシテ國治ラス、燕王、朝鮮ヲ伐ナテ方千里ノ地ヲ取ル、然レハ其後ヲ燕ノ爲ニ侵サレタル地ヲ復セリ、箕準ハ、箕子四十一世ノ孫ナリ、此時燕、亡ビシガ其臣衛滿、奔リテ朝鮮ニ入り、韓臣ト爲リ、百

里ノ地ニ封セラレ、己ニシテ衛滿、異謀ヲ生シ、箕準ヲ逐ヒ、自立シテ朝鮮王ト爲レリ、是ニ由テ箕子ノ苗裔、相傳フルヲ四十一世、千百三十一年ニシテ亡ブ、衛滿ノ朝鮮王ト爲リシハ漢ノ惠帝ノ時ニ當ル、衛滿勇敢ニシテ武略アリ、隣國ヲ併セ、王城ヲ大同江ノ東ニ建テリ、其孫右渠ノ時ニ及ヒテ、漢ニ抗シ、武帝ノ亡ボス所ト爲レリ、事載セテ支那帝國史漢ノ武帝紀ニアリ、是ニ於テ、朝鮮亡ビテ其版圖皆漢ニ入ル、

朝鮮ノ亡ビシ頃ニ當リテ、彼ノ半嶋ナル大同江以南ヲ三部ニ分テ、三韓ノ名アリ、馬韓、辰韓、辨韓是レナリ、

馬韓ハ半嶋ノ西ニアリ、箕準、己ニ國ヲ奪ハレ、海上ヨリ來リ、國王ト爲ル、後ヲ漢ノ成帝ノ時ニ、鴻嘉三年扶餘國王ノ子、溫祚ナル者起リテ馬韓ノ地ヲ併セテ王ト爲リ、國號ヲ百濟ト稱ス、——辰韓ハ、半嶋ノ東ニアリ、秦ノ亡ビシ頃ニ當リテ、秦人來リテ半嶋ノ東邊ニ居リ、漸次ニ土民ヲ撫シ、四隣ヲ兼併シテ、遂ニ辰王ト爲ル、其後ヲ勢威益々強ク、國號ヲ改メテ

辰羅後チ改メテ新羅ト稱スト稱ス、——辨韓ハ、辰韓ノ南ニアリ、任那モ亦此中ノ一部ナリ、後チ辰羅ノ爲ニ併吞セラレ、

是ニ於テ朝鮮裂ケテ、三國ト爲ル、百濟、高句麗、辰羅是レナリ、高句麗ハ、北ニアリ、辰羅ハ、東南ニアリ、百濟ハ、西南ニアリ、共ニ鼎足ノ勢ヲ爲シ、相爭フモノ數百年ニ至ル、

百濟ハ、其始祖ヲ溫祚ト云フ、其先ハ扶餘國ノ人也、溫祚ノ時ニ當テ、百濟文物稍々開ケ、儒佛ノ二教頗ル行ハル、我神功皇后ノ三國ヲ征シサセ給ヒシハ、此時ニシテ、世々日本ニ入貢セリ、又佛法ヲ傳ヘ、王仁ノ我國ニ來リシモ亦此國ヨリセリト云フ、——唐ノ朝ニ至リテ、辰羅ハ、唐ニ頼ルヲ以テ、百濟、高句麗、力ヲ合セテ之ヲ伐ナケレハ、辰羅、援テ唐ニ乞ヒシニ、唐太宗軍ヲ發シ來リ攻ム、百濟ノ軍、其敗ル所ト爲リ、國王ハ遁レテ北ニ奔リ、城陷リテ國亡ブ、溫祚國ヲ建テシヨリ、是ニ至テ三十一世、七百年ヨリ、亡ブ、我齊明天皇壬戌ノ年ナリ、其後チ百濟ノ僧道琛、我が天智天皇ノ三年ニ、僧軍ヲ募リ、先王ノ從子福信ト共ニ恢復ヲ謀

ツリ、是ヨリ先キニ日本ニ賀ト爲シタル王子豊璋ヲ迎ヘテ國ニ還ヘシ、且ツ援兵ヲ出サンコトヲ乞フ日本船船百餘艘兵万余ヲ以テ豊璋ヲ送リケルニ、僧兵放地ヲ復シ、豊璋ヲ迎ヘテ王位ニ即カシメシガ、未ダ機ナラズ唐ノ大軍來リシカバ、福信懼レテ道琛ヲ殺シ、王ハ又福信ヲ殺シ更ニ援兵ヲ日本ニ乞フ、日本ノ軍ト唐軍ト白江口ニ戰ヒテ利アラズ、王遁レテ高麗ニ入リ唐軍全境ヲ併吞セリ、百濟人海ヲ渡リテ日本ニ歸化シタルモノ甚ク多シト云フ)

高句麗ハ其始祖ヲ東明王朱蒙ト稱ス(——平壤ニ都セリ)扶餘國ヲ去リテ、南ニ遷リ、鴨綠江ノ西北ニ於テ國ヲ建テ、高句麗ト名ク、此時ハ我崇神天皇六十年ニ當レリ、其後チ四隣ヲ併吞シテ版圖ヲ擴メ(——古朝鮮ノ地モ其版圖ニ入レリ)遼河ヨリ日本海ニ達シ、國中チ分チテ五部ト爲シ國號ヲ高麗ト改ム、(——隋ノ煬帝、大軍ヲ率キテ海路ヨリ來リ攻メシカニ、戰利アラズシテ退軍セリ、事載セテ、支那帝國史隋煬帝紀ニアリ)唐ノ太宗ノ時、高句麗命ニ從ハザルヲ以テ、唐ノ爲ニ攻メラレ、大ニ其敗衄ヲ被リ、降ルモノ多シ、(事載セテ、支那帝國史唐太宗紀ニアリ)唐ノ高宗大軍ヲ發シ、復タ高句麗ヲ伐チシガ、此時百濟己ニ亡ビ、高句麗ノ勢孤ニシテ

大軍ヲ支フルコト能ハズ、終ニ其亡ボス所ト爲ル、始祖東明王ヨリ、是ニ至リテ、二十八世、七百年ナリ、

辰羅 || 又新羅ト號ス || 其始祖ヲ赫居正ト稱ス(——慶州ニ都セリ)辰羅ハ、百濟、高句麗ノ唐ノ爲ニ亡ボサレタル時ニ當テ、國勢獨リ盛ニシテ、三國ノ地皆新羅ノ有ト爲レリ、(——唐之ヲ封シテ、浪樂軍王新羅王ト爲ス)是ニ於テ使チ唐ニ遣ハシ、其制度ヲ移シ、國內大ニ治マリ、文物典章燦然タリ、辰羅、後チ高麗王建ノ爲ニ亡ボサル、始祖赫居正ヨリ、二十八世、九百十三年ニシテ亡ブ、

後高麗ハ、其始祖ヲ王建ト稱ス、松嶽郡ノ人ニシテ前ノ高麗王ノ後裔ナリ、王建ノ時ハ、方ニ是レ支那五代ノ乱世ニシテ、干戈多事ナルヲ以テ東方ヲ顧ミルニ遑アラズ、王建機ニ乘シテ、兵ヲ起シ、遂ニ新羅ヲ征シ、半嶼ノ全地ヲ擧ケテ、其有ニ歸シ、都ヲ總申江ノ畔松都 || 今ノ開城 || ニ置キ、城郭ヲ經營シ、互市文學ノ中心ト爲ス、王建、佛教ヲ信スルコト最モ深

カリシヲ以テ、佛教盛ニ行ハレタリ(聞ク、我延喜年中、己ニ木版活字ノ製
 ナ知リ、之ヲ用ヒテ印行スル所ノ書アリ)其後嗣ニ至リテ、契丹ノ蹂躪ス
 ル所ト爲リ、鴨綠江以西ノ地ハ、皆契丹ノ有スル所ト爲レリ、己ニシテ女
 眞ノ一族、新ニ起リテ、渤海ニ據リシガ、高麗ハ、之ト謀ヲ通シ、戰テ契丹ノ
 兵ヲ退ク、爾後女眞ト結ビテ國內大ニ始マルモノ、幾ント二百年、民庶其
 業ニ安ンズ、晩年朝政漸ク紊乱シ、國勢衰微シ、將軍李成珪王ヲ廢シ、代リ
 王ト爲ル、是ニ於テ國亡ブ、王建ヨリ、三十三世、四百五十年ニシテ、我ガ後
 龜山天皇元中九年ニ當ル、

新朝鮮——即チ今ノ王朝——ハ其始祖ヲ李成珪ト稱ス、初メ成珪高麗
 王ニ事ヘ功ヲ以テ將帥ト爲リ、權勢内外ニ震ヒシガ、此時ニ國王、驕淫ニ
 シテ國政ヲ修メズ、國民皆望チ成珪ニ屬ス、國王、明ニ抗セント欲スレバ
 成珪聽カズ、遂ニ王ヲ廢シ自立シ、故號ヲ復シ、朝鮮ト稱ス、是ニ於テ使チ
 遣ハシテ明ノ服色制度ヲ用ヒ、其正朔ヲ奉セリ、是レチ新朝鮮ノ大租ト

爲ス——其後チ、李昭ノ時ニ當リテ、日本關白豊臣秀吉ノ爲ニ、攻メラレ、
 其土地三分ノ二ヲ失ヒ、國殆ント亡ビントス、幾モナク秀吉殂スルニ及
 ヒテ始メテ其國ヲ復セリ(事載セテ支那帝國史後篇明神宗紀ニアリ)西
 曆千六百三十六年——明ノ思宗、崇禎九年(後鞏國ヲ建テ、清ト號ス、己
 ニシテ清遂ニ明ヲ滅ボシ、尋テ朝鮮ヲ攻メテ、其京城ニ迫リシカハ、朝鮮
 君、民清ニ降り約シテ、方物ヲ獻シ、是ヨリ國王ノ廢立、必ス、清帝ノ冊命認
 可ヲ受クルトナレリ、其後チ國人、耶蘇教徒ヲ虐殺シ、千八百六十六年
 佛國水師提督路日ノ爲ニ、砲撃セラレ、千八百七十七年、米國水師提督日
 耳士ノ爲ニ亦砲撃セラレ、千八百七十五年、日本ノ軍艦朝鮮ノ海岸ヲ測
 量シシガ、國人之ヲ砲撃ス、明年日本ト和ヲ講シ、修交條約ヲ訂結ス、——
 其後チ日本ト交渉ヲ生セシコト頻々相踵ク(事皆載セテ、支那帝國史後篇
 朝鮮事變紀ニアリ)是ヨリ各國(米、露、英、佛等ノ諸國)ノ使節、朝鮮ニ至リ、之ト
 國際條約ヲ訂結シ、其獨立國タルコトヲ認ムルニ至リタレバ、其實貧弱ニ

シテ政權ト云ヒ兵權ト云ヒ利權ト云ヒ皆之ヲ欠キ毫モ獨立自主ノ國格ヲ成サズ

朝鮮ヨリ遼東ノ間即チ鴨綠江ノ北ニ一帯ノ局外獨立ノ地アリ其形海
岸ヨリ滿州地方ニ及ビ長サ大約百五十里日本里程此地丘陵起伏土
質膏腴道路モ亦平坦ナリ人口大約三十萬四府并ニ清野ノ村落ヲ施シ
シカ明末ニ及ビテ東方ノ邊寇ヲ防グガ爲ニ所謂ル清野ノ村落ヲ施シ
禁府村落民庶共ニ擧ケテ之ヲ四方ノ稠密ノ郷モ一旦荒蕪ニ歸シ虎
狼ノ窟ノ又ハ匪賊隱匿ノ地ト爲スレバ夜間ニ於テ若シ發覺スル
爲スモノ死刑ニ處セラルト云フ近年ニ至リテ人口年々蕃殖スルガ
地ヲ以テ復々邊防ノ要處ト爲サス殊ニ地方ノ人口年々蕃殖スルガ
故ニ漸次ニ人民ヲ此地ニ轉徙セシメ朝鮮政府ハ一言ダモ之ヲ抗論ス
ルコト能ハス左レ昔時其北疆ニ連リテ堅固ナリシ邊境石壁モ今ハ
唯崩壞ニ任セテ管テ修理ヲ加フルモナシ其跡ヲ絶ツヤ想フニ當
ニ遠キニ非ザルヘシ事載セテ大島圭介
氏ノ支那東北沿革考ノ紙尾ニアリ

第三章

今王及大院君

朝鮮今王諱ハ熙初メ載晃ト名ク興宣大院君李昱應ノ第二子ナリ癸亥
ノ歲西曆千八百六十三年我文久三年清曆光緒三年哲宗嗣ナ
キヲ以テ大王大妃ノ命ヲ奉シ入テ翼宗ノ大統ヲ承ケ翼成君ニ封セラ
レ冠禮ヲ行ヒ十二月十三日位ニ即ク兩寅ノ歲我カ慶應二年
命正贈議政驪城府院君純簡公閔致祿ノ女ヲ立テ王妃ト爲ス
興宣大院君李昱應石坡ト號ス國王ノ生父ヲ以テ攝政ノ職ニ任シ威福
ヲ擅ニシ政權ヲ握ルコト十餘年國人推重シテ大院君ト稱ス昱應内行廉
潔好テ史書ヲ讀ミ口ヲ開ケハ必ズ周孔ヲ稱シ務メテ人心ヲ收攬セン
トス守舊過激ノ徒其風ヲ慕ヒ翕然トシ之ニ歸向シ食客常ニ其門ニ滿
ツト云フ

國王嘗テ日本辨理公使花房義質ノ說ヲ容レテ元山仁川ノ二港ヲ開キ

稍々開明ノ道ニ志アリ、日本陸軍中尉堀本禮造ナルモノヲ延キテ、始メテ泰西ノ兵式ヲ用ヒ、衛兵ヲ訓練シ、稱シテ新兵ト曰ヒ、國王時ニ親閱スルヲアリ、是時ニ當テ、守舊黨ノ人士、李萬孫、崔益絃、黃在鶴、白樂寬等各々起テ時事ニ忼慨シ、謂ラク、我カ大臣姑息ニシテ、日本ノ恐嚇及要求、一ニ其意ニ順ヒ、或ハ敢テ之ニ違フヲナシ、苟モ此ノ如クニシテ止マザレハ、恐クハ國ヲ舉ケテ他人ニ聽クニ至ラン、ト當局者ヲ歷詆シ、言頗ル過激ニシテ、人心洵々タリ、ト是時大院君、政柄ニ與ラズ、務メテ韜晦セリト雖、其素志ニ非ズ、常ニ國王及ヒ閔泳翌等ガ二三ノ志士ト開國ヲ主倡スルヲ見テ頗ル憤懣ヲ懷キ居リシガ之ヲ内ニシテ軍人、之ヲ外ニシテ學士、當世ニ不平ナル者皆頼テ以テ重シト爲セリ、ト幾モナクシテ、李戴先(大家君)、李鍾學、李鍾海、趙中鎬、柳道爽等間ニ乘シテ不軌ヲ圖リシガ事覺ハレ、戴先ハ獄中ニ燒死シ、道爽ハ濟州ニ謫セラレ、餘ハ皆刑戮ニ遇ヒ、一時底平セリ、然レモ士庶ノ心益々激昂シ、隱然トシ

テ不測ノ禍ヲ伏藏シ、竟ニ京城ノ變乱アリ、ト西曆千八百八十二年、我カ明治十五年(清曆光緒八年)、ト亂民黨ヲ結ビテ、大闕ニ逼ル、時ニ大院君、其夫人閔氏ト共ニ王宮ニ入り、國王、王妃及ヒ閔謙鎬ト共ニ一處ニ在リ、亂民、殿階ニ來リテ、頻ニ閔謙鎬ヲ覓メシカバ、大院君願テ謙鎬ニ向テ曰ク、ト衆人皆汝ヲ覓ム、何ツ出テ、之ニ見ザルヤ、ト謙鎬曰ク、ト今マ我出テ、之ヲ見レハ、必ズ害セラレントス、ト大院君強テ之ヲ出セシカバ、謙鎬己ムヲ得ズ、降りテ階下ニ至ル、亂民忽チ謙鎬ヲ捕ヘテ之ヲ殺シ、更ニ來リテ王妃ヲ覓ム、大院君、衆人ニ謂テ曰ク、ト王妃ハ婦人ナリ、婦人ヲ覓ムルハ、何ノ爲メツ、ト是時王妃、己ニ避ケテ後宮ニ至リシカバ、亂民之ヲ尾躡ス、王妃其章服ヲ脱シ、之ニ換ユルニ宮婢ノ服ヲ以テシ、遂ニ逃レテ閔台鎬ノ匿ル、所ニ至レリ、台鎬ハ世子ノ正室ノ父ナレモ、守舊ノ說、大院君ト同シク、且ツ大院君ノ意ヲ迎ヘントセヨリ、之ヲ待ツト冷淡ニシテ、將ニ之ヲ大院君ニ報セントスルノ兆候アリ

リケレハ、閔泳翊其意ヲ知り、同志李樹廷ト相謀リ、李氏ノ妾ヲ台鎬ノ居
 ニ入レ、間ヲ窺ヒ、泳翊ノ密書ヲ王妃ニ呈シ、私カニ館ヲ脱スルヲ勸メ、
 夜ヲ待テ館ヲ出ツルヲ得タリ、李樹廷一力士ヲ率テ王妃ヲ扶ケ、揚
 州ニ逃レ、又忠州ニ至リ、又逃レテ清州ニ至ル、牧使具完植、厚ク之ヲ奉シ、
 親兵ヲ以テ之ヲ護衛セリ、時ニ監察沈宜濼、書ヲ以テ王妃ノ居所ヲ清國
 提督吳長慶ニ報シ、遂ニ復位セラル、一ヲ得タリ、
 乱民轉シテ、日本公使館ヲ襲撃シ、呼テ曰ク、倭奴ヲ殺セ、倭奴ヲ殺セト、一
 銃ヲ乱射シ、之ヲ攻ム、日本公使花房義質、部下ト僅ニ逃レテ、仁川港ニ達
 シ、尋テ英國軍艦ニ搭シテ去レリ、己ニシテ義質命ヲ奉シ、水師ヲ率テ、
 其罪ヲ問フ、朝鮮政府償金ヲ出シ、乱黨ヲ捕ヘテ之ヲ誅シ、事定マル、
 是レヨリ先キニ、大院君ハ、清國觀察馬建忠ノ拘去スル所ト爲リ、直隸保
 定府ニ幽囚セラレタリ、其後ヲ釋放セラレテ朝鮮ニ歸リシモ、政柄ニ干
 預セズト云フ、大院君ノ歸國スルニ臨ミテ、李鴻章ハ、山高水深、斯人不出、

烟精霞想、其情可知、一ノ二句ヲ贈レリ、李氏ニハ、大院君ガ再々ヒ政治世界
 ニ入ルキハ、復々閔氏ノ一族ト確執ヲ生スルヲアラシメ、憂ヒ、紅塵ヲ避
 ケテ隱遁セラルベシト勸メタルニ、大院君ニモ之ヲ承諾セシカバ、右ノ
 句ヲ書シテ箴ト爲シタリト云フ、
 千八百八十四年、復々變乱アリ、朝鮮政府ハ、日本ノ爲ニ、償金ヲ出シ、事漸
 ク平ク、是ヨリ後テ朝鮮ハ、清國ノ關涉ヲ蒙リ、其政權ハ、清國駐在官ノ手
 ニ落テ、國王ハ、其牽制セラル、所ト爲ルト云フ、一

第四章

金玉均ノ小傳

朝鮮ニ於ケル改進黨ノ首領ニシテ、西曆千八百八十四年——我カ明治

十七年朝鮮京城ノ乱ニ其聲名ヲ著ハシタルモノハ金玉均及ヒ朴永孝ナリ斯二人ハ其門地ト云ヒ勢力ト云ヒ朝鮮ニ在リテハ第一流ノ人士ナレバ其畧傳モ亦同國ノ形勢如何ヲ察スルニ於テ餘リアリトス由テ今マ諸書ヲ參觀シテ其小傳ヲ作ル

金玉均ハ參議炳基ノ養子ニシテ朝鮮ノ巨族ナリ玉均天資俊敏少ヨリ經世ノ志ヲ懷キ嘗テ人ニ語テ曰ク——凡ソ斯世ニ志アルモノハ備サニ人民ノ疾苦如何ヲ知ラズンバ以テ政ヲ爲ス可ラズ——ト志ヲ決シテ國中ヲ遍歴シ形勢ヲ視察セリ年二十二ノ時謁聖壯元ノ科ニ撰ハレシカ當時國王ノ生父ナル大院君政柄ヲ採リ平素金氏ノ一族繁盛ニシテ國內ニ權力アルヲ忌ミシガ故ニ玉均政府ニ用ヒラレズシテ家居スルヲ前後十年常ニ快々トシテ樂マズ日韓兩國條約改修ノ事アルニ先テ玉均ハ歐米各國ノ書籍ヲ蒐集シテ同志ノ士ト之ヲ講習シ錦陵尉朴泳孝其兄朴泳教及ヒ徐光範國王ノ從弟李載兢ト其主義目的相投合シ

テ其ニ心腹ノ交ヲ爲セリ元來朝鮮ノ風習トシテ大ニ門閥ヲ尊ビ門閥家ト稱セラルモノハ概テ驕傲ニシテ人民ト交際セザルニモ拘ハラズ玉均ハ貴族ノ身ヲ以テ此ノ風習ヲ洗刷セント欲シ自ラ進ミテ民間ノ人士ト交際セリ故ニ國中有志ノ士民玉均ヲ推シテ改進黨ノ領袖トナスモノ多カリキ

西曆千八百七十六年(明治九年)朝鮮ハ我日本ト條約ヲ訂結スルノ舉アリ時ニ朝鮮遲疑シテ決セズ會議十餘日ニ亘ル此時大院君ハ閔氏ノ一族ト互ニ政權ヲ爭フ始メ大院君ハ閔氏ノ爲メニ權力ヲ占メラレ閔氏ガ大院君ノ權ヲ奪フヤ王妃閔氏女官張氏及王妃ノ族弟奎鎬族姪泳穆等ト策ヲ定メテ大院君ノ權力ヲ殺キ其兄升鎬ヲ舉ゲテ之ニ代ラシメタレバ未ダ幾クナラサルニ大院君密カニ爆發物ヲ投シテ閔氏ノ家ヲ燒キ升鎬及ヒ其母子等ヲ殺シ閔氏ノ嗣終ニ絶ヘシカバ奎鎬ノ兄台鎬ノ子閔泳翊ヲ以テ養子トス是ニ於テ奎鎬ノ威權漸ク強キヲ加ヘシガ

久シカラズシテ病死セシカバ、泳翊代リテ政柄ヲ把ルニ至レリ、後國王張氏ヲ幸シテ王子ヲ生マシム、山中ニ閑居スルヲ前後三年、然レモ其王父ニシテ且ツ前ニハ樞要ノ地位ニ在リシヲ以テ、在廷ノ臣僚等之ヲ畏敬スルモノ多シ、而シテ閔氏ハ專ラ權柄ヲ握ルト雖モ、時務ニ通曉セザリケレハ大院君私ニ百官ヲ煽動シテ、日韓兩國條約ノ改修ヲ非議セシム、閔氏ハ黨派ノ争ノタメニ、大院君ニ抗敵センヲ力メクリト雖モ、朝野悉ク大院君ノ説ニ傾キタルヲ以テ、已ムヲ得ズ其ノ議ニ從ハントス、時ニ右議政朴珪、胥清、語譯官吳慶錫共ニ年齒高ク、才學アリテ少シク世務ニ通ズ、二人力メテ百官ノ議ヲ排シテ大院君ニ抗シ、且ツ閔氏ニ説キテ遂ニ條約ヲ訂結セシムルニ至レリ、——大院君ハ珪、慶錫ノ二人ヲ呼ヒテ賣國ノ臣ト稱セシガ、後久シカラスシテ二人共ニ病死スト云フ、己ニ日本ト條約ヲ改訂スルノ後モ、在廷ノ重臣等皆日本ノ使臣ト往來スルヲ忌ミ、頑乎トノ一意、鎖國ヲ主トセルヲ以テ、彼我ノ國情相通セ

ズ、玉均之ガ爲メニ其國ヲ誤ラシヲ恐レ、竊ニ日本ノ國情ヲ察セント欲シ、朴、徐、李ノ諸人ト議シテ、僧李東仁ナルモノヲ日本ニ遣シ、尋テ李憲愚、卓挺桓ノ二人ヲ遣フ、書ヲ日本ノ顯官岩倉具視、井上馨ニ贈ル、此時ニ方テ閔氏ノ權力尙ホ頗ル熾ナルヲ以テ東仁以下ノ輩使命ヲ全クシテ歸レリト雖モ、直チニ閔氏ニ從ヒテ復タ金朴二氏ノ下ニ就カズ、閔氏及ヒ洪英植等、東仁ヲ國王ニ薦メ、日本ノ國情ヲ上奏セシメシガ、是ヨリ國王稍々意ヲ改進ニ注キ、尋テ朝臣十人ヲ日本ニ遣ハセリ、朝臣等歸ルニ及テ、具ニ日本ノ國情ヲ奏ス、是ニ於テ國王及ヒ泳翊等漸ク改進ノ主義ニ傾キタリ、然レモ國王、偷儒、斷以テ疑ヲ決スルニ足ラズ、明以テ理ヲ燭ス、不能ハサルカ故ニ、其政權ハ一ニ朝臣ノ爲メニ左右セラレ、善ク有爲ノ人ヲ用ユルヲ能ハズ、玉均ノ如キハ職務ニ罪アルノ故ヲ以テ、邊塞ニ竄逐セラレ、ニ至レリ、——李東仁ハ後ニ暗殺セラレタリト云フ、此ノ時、朝鮮ノ内政修ラズ、百姓困憊ヲ極メ、利へ改進守舊ノ二派相軋

シテ、紀綱大ニ紊乱ス、既ニシテ玉均宥サレテ京ニ歸リ、我明治十四年又朴徐等ト謀リテ大ニ政府ノ内治ヲ改革セントシタレ、當時年齒尙ホ少ク、且ツ權位ノ卑キヲ以テ用ヒラレズ、當時李載兢ハ既ニ病死セリ、三人乃チ密カニ日本ニ航セント欲シ、行テ之ヲ閔泳翊ニ謀ル、閔泳翊僅カニ金玉均徐光範ノ行ヲ可トシ、朴泳孝ヲ留メテ已レト同行セシメントス、是ニ於テ金、徐、二人先ヅ發シテ日本ニ至リシモ朴終ニ志ヲ違スルヲ得ズ、後殆ント半年ニシテ京城ニ變乱起リ、王妃乱ヲ忠清道ニ避ク、西曆千八百八十二年、我明治十五年七月、大院君勢ニ乘シテ起リ、國王ヲ脅制シテ恣ニ誅戮ヲ行フ、玉均乱ヲ聞キ急ニ歸リテ仁川ニ至ル、時ニ支那ノ軍艦數艘、早ク己ニ仁川港ニ來泊ス、玉均魚允中ノ支那船ニ駐在スルヲ察知シ、潜ニ行キテ共ニ善後ノ策ヲ議ス、允中ノ策ハ、支那ノ勢力ヲ借リテ大院君ヲ支那ニ拘囚スルニアリ、玉均大ニ其策ヲ非トシ曰ク、是レ一時ノ急ヲ救ハンカタメニ國家ヲ支那ニ賣ルモノナリ、別ニ國內

ノ志士ヲ募リテ、以テ其道ヲ謀リ、繼テ立國ノ策ヲ講スルニ若カズト、力爭スルヲ一晝夜、允中從ハズ、此時趙寧夏、金宏集使節ヲ以テ仁川ノ日本艦ニ至ル、玉均因テ此二人ヲ招キ、前策ヲ切言シタレ、二人共ニ之ヲ危ミテ歸レリ、是ニ於テ玉均服ヲ變シテ日本公使花房義質氏ト共ニ京城ニ至リ、直チニ朴泳孝ヲ訪フ、時ニ泳孝同志數十人ヲ率テ仁川ニ赴キ、日本船品川丸ニ投セル後ナルヲ以テ、僅カニ徐光範ト邂逅スルヲ得タルノミ、此時平日ノ朋友己ニ零落シテ幾クモナシ、玉均又屢々書ヲ以テ國王ニ上疏セントシタレ、皆達スルヲ得ズ、後數日花房公使談判ノ調ハザルヲ以テ、退キテ仁川ニ還ル、玉均共ニ謀ルベキモノナキヲ以テ、亦仁川ニ還レリ、花房公使又朴泳孝ヲ品川丸ニ訪ヒ、相伴ヒテ京城ニ至ランヲ勸メ、且ツ爲メニ盡ス所アランヲ約ス、泳孝乃チ金剛艦ノ小汽艇ニ投シ、水路京城ニ至ル、時ニ王妃尙ホ乱ヲ避ケテ山中ニ在リ、大院君ハ己ニ支那兵ニ拘ヘラレ、魚允中、洪英植、趙寧夏、金宏集、金允植ノ

五人政權ヲ掌握ス、泳孝其胸算ノ齟齬スルヲ以テ、直ニ宮中ニ至リテ英植、允中ノ二人ニ會シテ曰ク——唯リ支那兵ノミヲ以テ我カ衛戍トセハ、後日必ラス禍アラソ、如カス日米英ノ諸國ニ請ヒテ其兵ヲ借リテ、同シク警衛ニ充テソニハ果シテ然ラハ其罷メ歸ルノ日、支那兵獨リ我國内ニ留マルノ患ナカラソ——ト英植大ニ之ヲ賛成シタレ、允中ハ已レ自ラ支那兵ヲ借リタルヲ以テ、固執シテ聽カズ、泳孝怒リ大ニ之レト激論セシカ英植國王ノ親裁ヲ請ハント欲スルニ及ビテ二人乃チ止ム、蓋シ國王允中ノ爲メニ脅制セラレシヲ以テ、善ク其說ヲ納ル、一能ハサルヲ知レハナリ、翌日英植王命ヲ以テ、泳孝ヲ其邸ニ招キ、告ルニ金徐二人ヲ召返スベキヲ以テス、泳孝乃チ水路ヨリ再ヒ仁川ニ至リ、玉均及ヒ光範ヲ招キテ共ニ歸リ、國王ニ謁見ス、國王、玉均ノ手ヲ握リ、泣テ曰ク——朕悔ラクハ汝ノ諫ニ從ハサリシヲ、汝能ク善後ノ策ヲ立テヨ——ト、是ニ於テ玉均建白スル所甚ダ多シ、然レモ允中等玉均ヲ憎ム、一甚シ

カリシカバ、其說容ル、所ト爲ラズ、後、日韓和約成リ、日本ノ東京ニ於テ之ヲ批准スル時、大臣チ日本ニ派遣スルコトヲ約ス、允中等其ノ任ニ當ルベキモノヲ問フ、玉均、泳孝ヲ薦ム、各大臣等マダ玉均ヲ擧ケテ副使タラシメントス、玉均力メテ之ヲ辭シ、唯ダ巡回周覽ノ名ヲ以テ泳孝ト共ニ日本ニ至ラント乞フ、廷議之ヲ許シ、朴泳孝ヲ大使トシ、金晚植ヲ副使トシ、徐光範ヲ以テ書記官トシ、金玉均及ヒ閔泳翌等ト共ニ日本ニ至ラシム

己ニシテ、泳孝等、使節ヲ竣リテ歸國ス、玉均治道策ヲ著ハシテ之ニ托シ、執政ニ贈ル、其要領道路ヲ修メ、商務ヲ興シ、兵士ヲ養フニ在リ、玉均日本ニ駐マリ、各國ノ公使、又ハ日本ノ俊士ト交ヲ結ビ、歐洲ノ事情ニ於テハ、頗ル啓發スル所アリ、未ダ幾クナラス、國王屢々書ヲ以テ之ヲ召スニ依リ歸國シテ、獻替スル所甚ダ多シ、此時閔氏ノ一族、玉均ヲ疾惡スルコト殊ニ甚タシカリシモ、國王玉均ヲ信用セシヲ以テ、少シク勢力ヲ得ルニ至

レリ、曾テ上疏シテ曰ク——俊秀ノ子弟ヲ擇ヒ、外國ニ派シテ教育ヲ受ケシメ、其歸ルヲ待テ登用セハ、其國ニ補アルコト、大ナルベシ——ト、國王之ヲ嘉納ス、玉均乃チ官吏商人ノ中ニ於テ最モ秀逸ナル年少者四十餘名ヲ撰拔シ、之ヲ日本ニ遣ハセリ——徐載弼ノ如キハ即チ其尤ナルモノ、生徒ヲ統率シテ日本ニ至リ、陸軍戸山學校ニ入り、卒業セシ後歸國セリ

是ヨリ先キニ、魚允中以下ノ各大臣、皆權勢ヲ失ヒ、李祖淵、尹泰駿、韓奎穆、閔午鎬、閔泳翊等代リテ政權ヲ掌握セシガ、訛政夥シク弊害勝ケテ言フ可ラズ、當五錢ヲ通用シテ大ニ商賣ヲ妨ク、又官ヲ賣リ、爵ヲ鬻キシカハ國內ノ富裕ナルモノ産チ傾ケ家ヲ取ルモノ比々皆然ラサルハナシ、泳翌又頻リニ支那ニ結ビ、獨逸人穆麟德^{ムルリン}ヲ延キテ相共ニ陰謀シ、玉均等ノ勢力ヲ壓倒セント欲ス、玉均及ヒ泳孝等大ニ國家ノ爲メニ之ヲ憂惜シ、竊ニ國王ニ勸メテ速ニ英斷ヲ以テ國勢ヲ挽回スルノ策ヲ上ル、國王依

違シテ決スルコト能ハズ、玉均、泳孝、乃チ英植、光範、載弼及ヒ李賣鍾、申福模ト議シ、諸外國公使等ト圖リテ事ヲ舉ケ、國王ヲ景祐宮ニ遷シ、王命ヲ以テ日本公使ニ托シ、其護衛兵ヲ以テ王宮ヲ防衛セシメ、又閔台鎬、趙寧、夏韓奎穆、李祖淵、尹泰駿及ヒ宦官柳在賢等ヲ殺ス、時ニ閔泳翊革命黨ノ爲メニ襲ハレ其片耳ヲ斬ラル、時ニ西曆千八百八十四年(我明治十七年)十二月ナリ、玉均、泳孝等豫シメ處理ヲ定メ、内政外交ノコトニ就キテ、大ニ改革スル所アラントセシガ、支那ノ政府ノ派遣セル兵營軍司馬袁世凱、總兵吳兆有等直チニ兵ヲ率キテ王宮ニ迫リ、日本兵ト戦フ、事載セテ支那帝國史下冊朝鮮事變記ニアリ、玉均等事ノ急ナルヲ見テ國王ヲシテ宮外ニ脱セシメ終ニ走リテ日本ニ逃ル

第五章

朴泳孝ノ小傳

朴泳孝ハ、工曹判書元陽ノ第三子ナリ、幼ヨリ天資英敏奇氣アリ、十二歳ノ時、驕馬ニ擇ハル、驕馬ハ國王ノ女婿ニシテ、泳孝ハ先王哲宗ノ女ニ配セシナリ、蓋シ朝鮮ニ於テ國婿ヲ揀ブノ法ハ、門閥高シ、清廉ニシテ操ヲ守ルノ家ニ就キテ之ヲ取リ、而シテ其之ヲ撰ブノ方ハ先ツ其貴族中、特ニ俊秀ナルモノ數人ヲ舉ゲテ、其中ヨリ再ヒ二三人ヲ拔キ、最後ニ國王王妃ノ取捨ニ由テ、其最モ秀逸ナル者一人ヲ國婿ト定メ、國王ヨリハ之ニ土地家屋ヲ給與ス、泳孝其撰ニ中リ、儀賓府錦陵尉ノ爵、中樞府上輔國正一位ノ官ヲ賜ハリタリ、然レモ泳孝富貴ニ驕ラズ、其言行ヲ苟クモセカリケレバ、國人其清慎ニ歎服ス

此時ニ方リテ、大院君政權ヲ握リテ威福ヲ恣ニス、始メハ大ニ泳孝ヲ愛セシカレ、其長スルニ及ヒテ改進黨ノ主義ヲ取リ、我説ニ從ハサルヲ以テ、

之ヲ憎ムコト頗フル甚シク、時々威權ヲ以テ之ヲ脅制セントス、然レモ泳孝固ク志ヲ執リテ屈撓スル所ナカリシト云フ、

已ニシテ朝鮮日本ト條約ヲ締結スルノ舉アリ、時ニ閔氏政權ヲ握リ、國勢漸ク將ニ衰頽ニ傾カントス、泳孝益々志ヲ當世ニ注キ、金玉均、徐光範等ト相親ミ、刎頸ノ交ヲ爲シ、俱ニ共ニ心ヲ同シクシ、力ヲ戮セテ國家ヲ扶持スルコトヲ自任ス——當時泳孝ノ兄泳教ハ、亦英才ノ人ニシテ、眼ヲ

文明ノ事物ニ注ギ、歐米各國ノ事情ニ通シ、地球說畧等ノ著書アリ、

泳孝、金玉均等ト議シテ僧李東仁ヲ日本ニ遣ハス、前章金玉均ノ傳ヲ參看セヨ、時ニ閔氏政柄ヲ弄シテ痛ク泳孝等改進黨ノ徒ヲ憎ミ、金玉均ノ如キハ罪ヲ得テ遠謫セラレシガ、獨リ泳孝ハ國王ノ保護厚カリシヲ以テ、幸ニ事ナキヲ得タリ、泳孝是ヨリ益々志ヲ失ヒ、國家ノ爲ニ身ヲ忘レ、力ヲ王事ニ盡サンコトヲ期セリ、時ニ國王内ハ王妃ニ溺レ、外ハ權臣ニ制セラレテ、能ク其志ヲ行フコト能ハス、國政益々陵遲セントスル勢アリ、己コ

シテ兵士糧食ニ乏シキヨリシテ内乱ヲ作シ明治十五年ノ夏大院君機ニ乗シテ起テ叛乱ヲ煽動シテ再々ヒ國政ヲ握ル、泳孝其構誣ニ陷ンテ恐レ家士數人ト共ニ京城ヲ出テ輕舟ニ掉シ、流ニ順ヒテ仁川ノ濟物浦ニ赴キ、日本船品川丸ニ搭ス、日本公使花房義質來リテ泳孝ヲ勸メ、京城ニ還ラシメ、且ツ爲メニ力ヲ盡サンコトヲ言ヒケレハ、泳孝是レヨリ京城ニ入ル、時ニ支那兵既ニ大院君ヲ拘囚シ、支那兵王宮ヲ護衛ス、朴孝之ヲ不可トシ、大ニ魚允中等ト争フ、議聽カレス、既ニシテ王命ヲ奉ジテ玉均、光範等ヲ招致ス、幾クモナクシテ正使ニ任セラレ、玉均等ト共ニ日本ニ赴ク、前章金玉均ノ傳ヲ參看セヨ。

泳孝ノ日本ニ在ルヤ、見聞ヲ廣クシ、思想ヲ新ニシ、絶テ固陋守舊ノ見ナク、常ニ各國公使ト交リシカバ、公使等泳孝ノ卓見ヲ賞セサルナシ、其後北米合衆國ノ朝鮮ヲ獨立國ト認定シ、之ト修好貿易ノ條約ヲ批准シタルハ、泳孝ノ日本駐在中ニ計畫セシ所、與カリテ力アリト云フ、泳孝己

ニ使命ヲ竣リテ國ニ歸リ、國王ニ上疏シテ内政改良ノ急務ヲ陳ス、其最モ人目ヲ聳動シタルモノヲ擧レハ曰ク、我政府ノ曩ニ西教ヲ信スル人民ヲ殺シタルハ、實ニ天理ヲ破ルノ甚シキモノニシテ、若シ之ヲ止メサレハ則チ國內數万ノ天主教徒等、起テ禍乱ヲ生ズルコトナシト云フ可ラズ、今後宜シク之ヲ默許シ、亦無辜ノ民ヲ虐殺ス可ラズ、ト又曰ク、國アレハ人民アリ、人民アレハ道路アリ、道路アリテ車馬通シ、車馬通シテ運輸便ナリ、運輸便ニシテ商務興リ、商務興リテ國家始メテ富強ナルベシ、ト又曰ク、汗穢物ヲ鋤去シ、田地ヲ培養シテ市區ノ溝渠ヲ清潔ニセハ、兼テ衛生ノ方ト爲ルベシ、ト又曰ク、罪人ヲ處罰スルニ酷虐ノ刑法ヲ以テスルハ、大ニ正道ニ反セリ、由テ警察及ヒ懲役ノ法ヲ設ケテ人民ノ生命ヲ保護スベシ、ト又曰ク、國內ノ人民聞見ナク、政事ノ何タルヲ知ラサルハ、固陋是ヨリ甚シキハナシ、苟クモ之ヲ開導セント欲セハ、其聞見ヲ廣ムベキコト、第一ノ先務ナリ、故コ

宜シク博文局ヲ設ケ、外國教師ヲ雇ヒ、各國文明進步ノ書籍及ヒ新聞紙ヲ翻譯シ、之ヲ國內ニ傳播シ、人民ヲシテ閱覽セシムベシ。ト、又曰ク

——年少聰明ノ人士ヲ撰拔シ、學校ヲ設ケテ之ヲ教育セハ、人民其固陋ヲ免レテ、文明ノ智識ヲ進ムベシ。——ト、議論剴切、事理明暢、切ニ時弊ニ中ル國王奏ヲ聞テ深ク然リト爲シ、泳孝ニ授ルニ漢城判尹ノ職ヲ以テシ、又新ヲニ治道、博文、警巡ノ三局ヲ置キ、泳孝ヲシテ此等ノ事務ヲ施行セシム、未ダ其緒ニ就カサルニ、守舊黨ノ人士之ヲ疾ミ、是レ人民ニ便ナラズ、空シク國費ヲ徒糜スルノミ也ト、之ヲ國王ニ讒誣セシカハ、泳孝ハ忽チ其職ヲ罷メラレ、山間ニ屏居シテ復タ政務ニ執掌セズ、故ニ其朝鮮ノ爲メニセントスル良圖善計ハ、一モ之ヲ實行スルヲ得ザリキ、

幾クモナクシテ金玉均、李祖淵等國王ニ奏スルニ、朴泳孝ノ精神確乎タルヲ以テセシカハ、國王更ニ泳孝ヲ起シテ廣州留守トナシ、兼テ守禦營守禦使ノ職ニ在ラシム、廣州所有ノ兵士、元來万ヲ以テ數フト雖モ、只

是レ老弱羸弊、或ハ虛飾怯懦ニシテ徒ニ紙上ノ兵タルニ過キス、泳孝深ク之ヲ慨シ、歐洲ノ兵式ニ倣ヒテ兵士ヲ訓練セシム、奏請シ、國王ノ許ヲ得テ練兵場ヲ廣州ノ城内ニ設ケ、先ツ數百人ヲ募リテ、之ヲ練習ス、閔泳穆等ノ徒、其舉動ヲ嫉ミ、百方計ヲ搆ヘテ之ヲ罪ニ陷レント欲ス、泳孝大ニ怒リ、決然職ヲ辭シ、其兵ヲ京城ニ送リテ近衛ノ兵士トナラシメ、自ラ去テ米國ニ漫遊セント欲ス、日本ノ知友之ヲ止メタルヲ以テ果サス、退キテ東江ノ別莊ニ居リ、後進ノ士ヲ獎勵シテ陰ニ時機ヲ待チ居リケル、

此時ニ方リテ、閔族諸氏權ヲ爭ヒ、私欲至ラサル所ナク、國政益々乱ル、且ツ支那人ノ兵ヲ率キテ京城ニ駐在スルモノ、頻リニ朝鮮ノ内治ニ干涉シ、朝鮮ノ權臣閔台鎬、閔泳翊、閔泳穆ノ諸人之ト往來シテ益々依頼ノ心ヲ生ジ、事大ノ主旨ヲ表ス、殊ニ支那ノ兵士ハ傍若無人、市街ヲ横行シテ粗暴至ラサル所ナク、人民憤懣スルヲ甚ト雖、斥之レテ訴フルニ由ナ

ク適々之ヲ政府ニ訴フルモノアレハ、政府モ亦事大黨ノ威ヲ憚カリテ、反テ其訴フル者ヲ罰ス、三品官李範晋ノ如キ、其身貴族タルニモ拘ラズ、支那人ハ尙ホ之ヲ捕ヘテ打擲セシカバ、人民愈々支那人ノ侮慢ヲ憤リ、將ニ暴起セントスルノ勢アリ、然ルニ閔泳翊等兵力ヲ以テ人民ヲ壓倒シ、反テ李範晋ヲ罪スルニ至レリ、朴永孝國勢斯ノ如キヲ見テ悲憤措カズ、窃カニ國王ニ告ケテ禍ヲ未萌ニ防ガンヲ勸メシカバ、國王躊躇シテ決スルヲ能ハス、泳孝等乃チ玉均以下同志ノ士ト謀リ事ヲ舉ク、我明治十七年西曆千八百八十四年、事ハ載セテ支那帝國史後冊ニ在リ、泳孝等日本兵ニ托シテ王宮ヲ護衛セシメ、又命ヲ奉シ舊政ヲ改革シ、大ニ爲ス所アラントセシガ、袁世凱兵ヲ率ヰテ王宮ヲ襲ヒ、事全ク成ラズ、是ヨリ先キ袁世凱ノ來襲スルニ先チ、日本支那ノ兵將ニ戰ハントセシメテ、泳孝決然策ヲ畫シテ曰ク——國家ノ與亡實ニ此一髮ノ機ニ在リ、宜シク日本兵ト合シテ支那兵ト雌雄ヲ決スベシ——ト、同志ノ士多ク同セ

サルヲ以テ終ニ止ムト云フ、是ニ至リテ事敗レ、泳孝等日本ニ逸ル、嗚呼朴泳孝、金玉均等ノ徒、天下ノ志士ト結ビ、奸兇ヲ掃除シ、國政ヲ改革シテ以テ獨立ノ長計ヲ定メント欲セシモノニ非ズヤ、然ルニ事皆意料ノ外ニ出テ、蹉跎零丁、孤身空シク天涯ニ飄蕩シ胸中ノ策、空シク一夢幼ニ歸ス、其末路亦悲ムベシ、

野史氏曰ク、山陽翁曾テ云ヘルヲアリ、曰ク——延平宗以抗相門、院政廟論所相傳承、其猶寬平之擢任菅氏耶、文武雖異、其意一也——ト、今ヤ、朝鮮、舉朝男子ナク、其國王ハ、亦是レ宋ノ文帝ノ流亞ニシテ、到底自ラ汝ノ長城ヲ破リテ、汝ノ陳亮ヲ謫スルヲ免レズ、而シテ其所謂ル士大夫ナルモノハ、甲黨ハ、清國ニ依頼シテ寧ロ之レカ藩屬タルヲ甘ン、乙、以テ其苟安ヲ全クセント欲シ、乙黨ハ、我國往昔ノ長袖者流——文縟餘リアリテ、氣力足ラス、ノ甲ハ、平氏ニ倚リ、乙ハ、源氏ニ頼リテ、以テ苟安ヲ全クセント謀ルト一般ナリ、達人ノ活眼ヨリ之ヲ觀レバ、甲

乙到底巢幕ノ燕タルヲ免レヌ、此ノ如クニシテ安ソツ能ク其國ノ獨立ヲ扶持スルコ足ン平、野史氏曰ク、朴泳孝及ビ金玉均ノ志士、身ヲ隣國干涉權臣跋扈ノ際ニ投シ、獨立ノ大義ヲ唱へ、自主ノ正理ヲ論シ、隻手ヲ以テ、額瀾ヲ支ヘント欲シ、斷然義旗ヲ舉グ、事跌ツキ、計敗レタリト雖モ、亦男子タルコ愧ナズト謂フベシ、昔シ、ルイス、コスシユーナ波蘭ノ滅亡ヲ嘆シ、慨然トシテ恢復ノ志ヲ興シ、歐米各國ヲ巡リテ、滿腔ノ熱血ヲ濺キ、義兵ヲ請ントシタリキ、嗚呼泳孝、玉均ハ、朝鮮ノルイス、コスシユーナヲフントスル乎、其能ク支那ノ干涉ヲ絶チ、國勢ノ危殆ヲ挽キ、之レヲシテ東洋ノ自主獨立國タラシムルハ、決シテ容易ナル業ニ非ス、然レモ一敗シテ氣益々奮ヒ、再敗シテ愈々壯ニ、百敗シテ毫モ、屈セザルハ、大丈夫兒ナリ、泳孝、玉均ノ氣宇、當ニ此ノ如クナルヘシ、其成敗利鈍豈之ヲ問フコ足ランヤ、

第四章

政治及風俗

〔政治〕王室——大祖李成珪ガ高麗ヲ滅ボシ、都ヲ漢城ニ移シ、國ヲ朝鮮ト號セシヨリ、四百九十八年ニシテ、今王李熙（第二十八世）ニ至ルマテ王統一系相繼ク、第十四世李昭ノ時ニ日本豊公ノ侵入アリ、李宗ノ時ニ清國入寇ノ乱アリ、以後ハ、時々内乱アリシカモ、外國ヨリ、甚シキ侵入ヲ蒙リタルコナク、依然君主獨裁ノ政体ニシテ、國王其政ヲ親裁スルノ制ナリ、

王統ハ世襲男統ニシテ正妃ノ出チ世太子ト爲シ、出無ケレハ、妃嬪ノ出チ立ツ又モシ正妃妃嬪共ニ男子ナケレハ王族中ヨリ擇ヒテ世太子コ立ツルナリ、

王妃ハ國王ノ正室ニシテ、之ヲ中宮殿ト稱シ、正妃モ稱ス、妃嬪ハ、其定員ナシ、歷代國王ノ中ニハ、一人ノ妃嬪ヲ置カザリシ者モアリ、王ハ數十人

ナ置キテ後宮ノ盛ナル者モアリ、王母ハ之ヲ太妃ト稱ス、若シ王祖母アルキハ、之レヲ王太妃ト稱シ、曾祖母アレハ之ヲ太王太妃ト稱シ、宮内ニ別殿ヲ構ヘテ尊崇セラル、

太王大妃、王大妃、大妃、中宮殿ニハ各々女官數名アリテ侍仕ス、尙宮、尙衣、尙食、尙醞以上官名、嬪、貴人、徵儀以上後宮、是ナリ、其中ニ於テモ嬪ト貴人ハ、最モ貴顯ニテ、位一品又ハ二品ヲ賜ヒ、常ニ左右ニ侍仕ス、故ニ多クハ兩班ノ息女之ヲ勤メラル、

世子ハ東宮ト稱シ、別殿ニアリ、世子師——議政ヨリ兼務世子傳——左右議政ヨリ兼務輔德、司書、進善、贊善等ノ諸官アリテ、輔弼スレハ、皆文官ナリ、之ヲ春坊ト稱ス、武官ハ、桂坊ト稱シテ翊衛等ノ官吏アレハ、其倍ハ三品以下ニテ、威權ナキ輩ナリ、蓋シ春坊ハ、學術ヲ訓ヘ、德行ヲ育スルノ任ナレハ、桂坊ハ、護衛ヲ掌ルノミ、故ニ世子ハ、曾テ武事ヲ講シ、武藝ヲ學ハル、トナシト云フ、

王族ハ、其祿位共ニ極メテ貴シト雖ハ、之ヲ要職ニ置クコトハ甚ダ稀レナリ、是レ權威ヲ得レハ、王室ヲ奪フノ猜忌ヨリ出ヅルノ故ナリト知ラル、内官ハ、閤官ト云ヒ、常ニ宮内ニアリテ、王ニ侍仕シ、文符及ヒ出納鎖鑰ヲ掌リ、各官ノ守直ヲ司トルモノナレハ、祿モ厚ク位モ高ク、崇祿大夫ニ昇ルコトヲ得レハ、政務ニ關セザルヲ以テ輔國大臣タルコトヲ得ズ、王妃諸嬪ニ昵近スルニ付キ、此官ハ皆罽丸ナキモノナリ、但シ閤官トテ獨身ノミニハアラズト云フ、

宰相ハ其數定員ナク、凡ソ三十員アリ、朝鮮ニテ宰相ト云フハ、三議政ハ勿論、領事、都提調マテヲ云フ、又無職ニテ宰相ノ稱アリ、但シ國家ノ大事アルキハ、參朝スト云フ、功臣又ハ忠臣ノ子孫ハ科ナクシテ、蔭官トナリ縣令マデ至ルヲ得、但シ其人物ノ如何ニ由テ宰相ニ登ルコトヲ得ルト云フ、

堂上官名——領事判事知事——同知——僉知アリ——堂下官名——

正——僉正——判官——主簿——直長郎——參事奉事都事——以下文武ヲ別タス以下武官堂上別將——千總——營將把總廳以下堂下百總——哨官アリ、兩班文官三百八十九員、武官二百四十三員ナリ、其詳カナルハ、本書之ヲ掲ケズ、——制度、刑律、服色、飲食等ハ、詳カナルモノアレド、本書ハ其煩雜ニ流ル、ノ故ト、且ツ本著ニ緊要ノ關繫少ナキノ故トヲ以テ、一切之ヲ省ク、)

(風俗)——朝鮮ノ男子ハ、京畿、黃海、忠清、全羅、慶尙、江原、諸道ノ人物ヲ以テ優柔ナリト爲ス、此ノ地方ノ人々ハ、總テ氣質寛裕ニシテ生業モ亦蠶織スルカ如シ、而シテ農工商共ニ富メルモノ稀ナリ、又平安、咸鏡、諸道ノ人物ハ、全國中ニ於テ、氣質硬悍ニシテ、農業山海ノ勞作ニ堪ヘ、其力業ハ三南人ヨリモ強シ、)

女子中等以上ノ女ハ、猥リコ戶外ニ出ルコトナシ、常ニ縫針ノ業ヲ專ラニシ、漢文ニ嫻フモノ稀レナリ、中等以下ノ婦女ハ、總テ勞働ヲ以テ業トシ、農耕ハ男女共ニ之ヲ爲セリ、——婚姻、喪禮及ヒ其他産業等、亦之ヲ掲ケズ、)

第七章

文學

朝鮮ノ文學及ヒ宗教等ハ、皆支那ニ基キ、別ニ觀ルニ足ルベキモノナシ、學士ノ最上官ヲ大提學ト云ヒ、位從一品ニシテ、重要ナル圖書等ノ文章ヲ起稿ス、書ノ最上官ヲ寫字官ト云ヒ、位五位ニシテ、小科ノ部ニ之レアリ、大科ノ部ニ入ラズ、)

朝鮮人、文學上ニ於テ、卓識ノ學士モナシ、新奇ノ發明モナシ、但テ其贊稱スベキハ、吏讀諺文ノ發明是レナリ、吏讀ノ發明ハ、辰羅慶州府ノ學士、薛

聰ナリ、相傳フ、薛聰ハ、博學多識ニシテ、最モ支那印度ノ古文ニ嫻ヒ、多年ノ研究ヲ以テ、國音ニ稱フ所ノ國字ヲ發明シ、之ヲ名ケテ吏讀ニイロクニ一ニ之ヲ吏套ト稱ス。之ヲ用ヒテ朝鮮ノ國音ヲ發スルノ妙ハ、日本ノ假名文字ニ勝レリト云フ、但シ吏讀ハ、我日本ノ万葉假名ノ類ニシテ、漢字ヲ以テ文ヲ書スモ、唯々其音ノミチ、假リテ字義ヲ取ラザルモノナリト聞ク、一或ハ云フ、此文ヲ吏吐イット稱スト、支那ノ俗文ノ如キモノナリト是乎故、又是白齊ノ如キ語アリト云フ。

諺文ノ發明ハ、今ノ朝鮮國王世宗ナリ、訓民正音ヲ製シ、之ヲ名ケテ諺文ト稱ス、初メ世宗以爲ラシ、諸國各々文字ヲ製シ以テ其國方語ヲ記ス、獨リ我國ニ於テハ之レナシ。ト即チ字母廿五字ヲ製セリ、蓋シ新羅ノ吏讀ハ其發音流暢ナラズ、其功用十分ナラザル所アルヲ以テ、世宗更ニ滿洲、印度、蒙古ノ字ニ依リテ正音ヲ創製セシナリ、而シテ此諺文ハ、僅ニ字母廿五字ヲ縱橫ニ構成シ、轉換無窮ニシテ、事物ノ有形無形ヲ問ハズ

自在ニ之ヲ記スベク、又其音ノ清濁強弱、抑揚長短、意ノ如クナラザルハナシ、

가 가저 겨 교 꼬 구 규 그 기 마
 나 나너 너 노 뉴 니 나
 다 다타 타 도 두 드 디 드
 라 라리 러 로 료 류 르 리 르
 마 마머 며 모 묘 무 무르 미 르
 바 바버 버 보 묘 부 부부 브 비 브

아	사	파	타	카	차	하	자
야	샤	파	타	카	차	하	자
어	서	퍼	터	커	처	허	저
여	셔	퍼	터	커	처	허	저
오	소	포	토	코	초	호	조
요	쇼	포	토	코	초	호	조
우	수	푸	투	쿠	추	후	주
유	슈	푸	투	쿠	추	후	주
으	스	프	트	크	츄	후	즈
이	시	피	티	키	치	히	지
이	스	프	트	크	츄	후	즈

과 귀 와 뒤 와 뒤 와 뒤 와 뒤 와 뒤 와 뒤 와 뒤
 와 뒤 와 뒤 와 뒤 와 뒤 와 뒤 와 뒤 와 뒤 와 뒤

第八章

産業及貿易

朝鮮ハ、微弱ノ一小邦ナリト雖ニ、素ト石炭、銅鉄ノ鑛山ニ富メリ、若シ能ク之ヲ採掘スルニ至ラハ、亦繁盛ノ望ナキニ非ズ、
 金礦ハ、咸鏡平安江原慶尙諸道ニアリ、然レニ平時之ヲ採掘セス、銀礦ハ
 京畿——忠清——全羅——ノ諸道及ヒ全國到ル處ニアリ、平時鉛ヲ採

ルト稱シテ、探掘ス銅礦ハ、京畿、永平、忠清、清安、尼山、慶尙、
 陝川、三喜、昌原、盈徳、彦陽、全羅、光州、和順、黃海、長連、
 載寧、江原、安峽、淮陽、襄陽、ニアリ、
 穀物ニハ、粟、麥、蕎麥、菽等アリ、八道ノ中ニテ、米少ナキハ、咸鏡、平安、二道
 ニシテ、北地ハ、專ラ稷麥等ヲ耕作ス、三南ノ中、濟州、嶋モ亦米少ナシ、紬ハ、
 諸道ヨリ出ツレ、平安道ヲ以テ最良ト爲ス、紬ノ類、種々アリテ、其名稱
 數十種ニ分ツト云フ、棗、栗、楮、漆、桑等ハ、農家皆之ヲ培養ス、木棉ハ、諸
 道ヨリ産出シ、綿ノ産ハ、全羅、慶尙、二道ヲ以テ最良ト爲ス、下等ノ人民ハ、
 綿服ヲ着シ、中等以上ノ人々モ亦製品ニ依リテ之ヲ着用セリ、紙ハ、
 諸道ヨリ出ツレ、全羅道ヲ以テ第一ト爲ス、朝鮮ノ産物中ニテ、紙ハ、其
 第一ニ居リ、僧徒多ク之ヲ漉出ス、此紙ノ堅硬ニシテ、良好ナルヲ、支那ニ
 優レリト云フ、其他朝鮮ニハ、牛、馬、虎、豹、魚類等、孰レモ之レアラサル
 ハナシ、

朝鮮ノ關稅局ハ、現今支那總稅務司ノ支配ニ屬セリ、其收入ノ内ヨリ徵
 稅費ヲ扣除シ、殘額ノ四分三ヲ、朝鮮政府ノ收入ト爲ス、左レハ政府ノ受
 クル所ノモノハ、實ニ僅少ノ額ニ過キズ、海上ハ、支那トノ貿易、其進歩甚
 タ遅々タレ、日本人トノ貿易、稍々増進セリ、然レハ朝鮮ハ、舊來支那ト
 陸地ノ通商アリ、支那ニ達スルニハ、道ヲ滿州ニ取ルヲ以テ、沿道ノ滿州、
 各府、多少ノ貿易ヲ爲セリ、朝鮮新開ノ各港ニ於テ、支那貿易ノ少ナキ
 ハ、此ニ原因スルモノナルベシ、朝鮮ハ、年々使節ヲ派シテ、支那ニ朝貢ス
 ル毎ニ、商人モ亦此使節ニ隨伴スト云フ、

朝鮮ノ日本支那ニ輸出スルモノハ、金、黃牛皮及紙ヲ以テ第一ト爲シ、其
 他人參、藥劑、土產、金巾等數品アリ、其開港場ニ於テ、諸外國ニ賣出スル品
 產物ノ重ナルモノハ、牛角、蠶豆等ニシテ、同國人ガ、主トシテ輸入スル品
 ハ、麻布、薄地木綿、石油等ナリ、若シ能ク其礦山ヲ開發スルノ新策ヲ施サ
 ハ、同國ハ、物産ノ外ニ金屬及ヒ石炭ヲ輸出スルヲ得ベシ、然レハ國運

衰頹シ、鐵山ノ富モ徒ニ地下ニ埋沒セラレ居ルノミ、
又近來朝鮮ニ於ケル露國ノ勢力ハ益々増進シ、朝鮮ノ人民中、其意思目的共ニ露國ノ臣民タルヲ悦ブモノアリ、今日露韓ノ貿易ハ微々タルニ過キズト雖、將來商業上、重大ナル關係ヲ有スルニ至ントスルノ勢アリ、

第九章

朝鮮ト各國トノ關係

朝鮮ハ、一小國ナリト雖、其地勢正ニ東洋ノ咽喉ニ當レルガ故ニ、日清露英獨ノ一大爭地ト爲リテ、其政治上ニ於ケル位置ハ今日ニ至ルマデ定ラザルナリ、左レハ朝鮮ノ問題ハ取りモ直サス、東洋ノ問題ニシテ、活

眼識者ノ最モ注意スベキ所ニ非ズヤ、

(第一)朝鮮ト支那トノ關係、朝鮮ハ、支那ノ干涉ヲ受ケズノ、日本ト和親航海通商ノ條約ヲ締結シ、又近來ニ至リテ、國際法ノ慣例ニ倣ヒテ、歐洲各國ト同様ノ條約ヲ締結シタルヲ以テ、其之ニ由テ得タル所ノ權利及ヒ受ケタル義務ハ、當ニ朝鮮國ノ有スベキ所ナリ、而シテ各國ハ皆朝鮮ヲ以テ獨立國ト看做シ、亦中立地ト認定シ居ルカ如クナリト雖トモ、其國力ノ微弱ナル、果シテ其獨立主權ヲ實行スルコト足ル乎ト云フニ、毫モ之ヲ證明スルコト足ルノ事實ナキナリ、
否外國ノ干涉若クハ指揮ヲ受ケズシテ、內治外交ノ權ヲ、獨立的ニ施行スルコト能ハザルナリ、抑モ朝鮮ノ、上古以來、支那ノ版圖ニ入りタル事實ハ、姑ク之ヲ置クモ、今日已ニ其干涉ヲ受ケ居レリ、國王及后妃ノ爵位ヲ贈ル者ハ、支那政府ニ非ザルナキカ、
聞ク十七世紀ノ終リ、第十八世紀ノ始メニ於テ朝鮮國王ノ選拔シタル皇統繼承者ハ、其皇太子ノ名稱ヲ受クルニ先、支那帝國ノ

承認ヲ受ケザルベカラズ、又其愈々王位ヲ踐ムニ及ヒテ、之レニ北京ヨリ王號ヲ贈ルマデハ、自ラ王ト稱スルヲ能ハズト云フ、是レ北清日報ノ説ナリ。——嘗テ顧問官トシテ孟麟穆ヲ朝鮮ニ紹介シタルモノハ、支那政府ニ非ザルナキカ、又其代人ヲ撰定シタルモノモ、支那政府ニ非ザルナキカ、國王及ヒ宰相ノ裁決ヲ仰フ所ノモノモ、支那政府ニ非ザルナキカ、朝鮮國後見人ノ地位ニ立ツ所ノ袁世凱ヲ派遣セシモ亦支那政府ニ非ザルナキカ。——清國理事官袁世凱ハ千八百八十四年京城ノ變ニ際シテ、支那政府ノ爲ニ功勞アリシヲ名トシテ現任ニ登リタルモノナルガ、爾來、着々其歩ヲ進メ、理事官ノ名稱ヲ廢シテ、駐在官ト云ヘル名辭ヲ自稱シ、且ツ倨傲ノ方法ニテ、朝鮮國王ニ助言ヲ爲シ、甚シキハ、指揮ノ語氣ヲ用ユルニ至レリ、而シテ公會ノ宴席ニ於テ賓客タランヨリハ、寧ロ主人ノ体裁タルガ如シ、世凱自ラ揚言シテ曰ク、余ハ朝鮮ニ於テ、本國ノ想ヲ爲スカ故ニ、能ト此体裁ヲ爲スナリト、——然ラハ則チ、朝鮮ハ陽ニ厯然

タル、獨立國ノ表面ヲ粧フト、雖モ其實ハ支那駐在官陰ニ内治外交ヲ支配スルノ力アリト謂ハザルベカラズ、

朝鮮ガ支那ノ支配ヲ受ケルヲ此ノ如クナルモノハ、蓋シ歴史上ノ關係ト、疆土ノ接近トニ由リテ、然ラザルヲ得ザルモノアリ、畢竟スルニ朝鮮チシテ進歩セシメタルモノハ、實ニ支那ノ文化ニシテ、印刷術ナリ、繪畫術ナリ、絹織物業ナリ、培茶業ナリ、漆工ナリ、船工ナリ、造酒業ナリ、其他、玩弄物諸器械書籍等ナリ、百般ノ工藝産業ハ、皆支那ヨリ傳輸セザルモノナシ、——其宗教、法律、教育、國語、自國ノ文法ヲ用ヰルニモ拘ラズ、(人種、風俗ハ勿論皆支那ニ賴ル)又其地勢如何ト云ヘハ、支那ノ政事家ハ、朝鮮ヲ以テ、支那帝國首府ノ防禦ニ於テハ、左ノ手ノ如シトマデ斷言シタル程ノ關係ヲ占ム、彼ノ安南ノ如キ、緬甸ノ如キ、其位置タル、遙カニ南方ニアルヲ以テ、支那帝國ノ安危ニ直接ノ關係ナシト雖モ、朝鮮ハ、則チ然ラズ、實ニ東洋ノ大勢ニ關スルヲ少カラズ、故ニ國力ヲ傾ケテ争フベキモノ

ト爲セリ、支那ノ文士姚文棟云ク、上策如英、之待亞、富汗、廢其自主之權、一切聽吾措置、今日ハ英ノ亞富汗ニ於ケル、恩威足ラザルノ憾アルヲ見ル、中策如英、法之扶持土耳其、爲之遣兵扼守要地、今日ハ英佛ノ力、土耳其ヲ扶持スルコ足ラズ、下策令萬國公會開埠、與太西通商、ト亦以テ支那人士ノ意ノアル所ヲ知ルニ足レリ、是レ豈支那政府ガ朝鮮ニ干涉スル所以ニ非ズヤ、但シ支那政府カ果ノ能ク朝鮮ヲ守リ得ベキヤ否ヤ、果ノ能ク朝鮮管理ノ責ニ當テ、長大ナル海岸ト、六ヶ所ノ港灣トヲ防衛スルヲ得ヘキヤ否ヤニ至テハ、是レ別個ノ一問題ニ屬セリ、支那滿洲ノ地ハ、喀準喀爾ヒ及蒙古トハ、其形勢ヲ異ニシ、南北ハ固ヨリ論スルニ及ハス、一帯ニ天險ノ要害アリテ、國境ヲ爲シ、山岳相列ナリ、黑龍江ノ東西ニ奔流ス、而シテ東方ニ當リテハ、烏蘇里ノ南北ヲ劃スルモノアリ、其山岳岡阜、森林大河細流、皆兵畧上ノ目的ヲ達スルニ於テハ、攻守兩ナカラ、形勝ノ便アリ、此緊要ニシテ大切ナル、滿洲ノ要地ヲ防衛シ、其防衛ヲ

完全ニスル非ザルヨリハ、支那政府ハ、眞ニ能ク朝鮮ヲ防衛スルニ於テ

困難ナルベシ

(第二)日本ト朝鮮トノ關係 日本ガ朝鮮ニ對スルハ、重モニ政畧上(貿易上モ勿論)ニ於テ、密接ナル關係ヲ有セリ、支那ニシテ朝鮮ヲ屬國タラシメンカ、是レ殆ソド我日本ヲシテ貿易上ノ奴隸タラシムルモノナリ、否政畧上ノ奴隸タラシムルモ亦自由ナリ、我カ便道ヲ壅塞スル全ニスル所ハ我カ貿易ヲ杜絶スルモ亦自由ナリ、我カ便道ヲ壅塞スルモ亦自在ナリ、然ラハ則チ日本カ東洋ニ對スル位置ハ、甚タ輕ク、英露ノ間ニ屹立シテ、我カ勢力ヲ伸暢スルヲ能ハザルベシ、豈東洋ノ權衡ヲ左右スルヲ望ムヲ得ンヤ、又露國ヲシテ、朝鮮ニ蟠據セシメンカ、是レ亦我日本ノ首尾ヲ截斷シ、日本ノ胴體ヲ左右セラル、ノ憂アリ、之ヲ切言スルハ、露國カ朝鮮ヲ蠶食スルノ日ハ、之ト同時ニ、我日本ハ彼ノ掌中ニアルヲ免レサルモノナリト、謂ハザルベカラズ、是レ實ニ日本ガ朝

鮮ニ對スル關係ノ甚ク重大ナル所以ナリ、
 第三露國ト朝鮮トノ關係 露國ノ朝鮮ニ對スルハ、亦重モ政界上ニ於テ、最モ密接ナル關係ヲ有セリ、(一) 退守的ノ關係アルト同時ニ進取的ノ關係アリ、(二) 朝鮮ハ、支那ノ東方ニ於テ、最モ兵界上ノ形勝ニ當ル、之ヲ得レハ、以テ東洋ノ形勢ヲ制スルニ足リ、之ヲ得ザレハ、以テ東洋ニ雄飛スルニ足ラズ、蓋シ露國西伯利亞鐵道ノ竣完スル日ニ至ラハ、浦鹽斯德港ニ賴リテ、海路ノ交通ヲ擴メ、兵備及ヒ運輸ニ就キテ、其鐵道ヲシテ効用ヲ完全ナラシメザルベカラズ、然ルニ、浦鹽斯德港ハ、冬季ニ方リテ、堅氷其河口ヲ封鎖スルカ故ニ、露國ハ、必ス周年船艦ノ出入ニ差支ナキ良港ヲ得テ、以テ西伯利亞鐵道ノ運用ヲ活潑ナラシメザルベカラズ、而シテ此ノ如キ良港ハ、果シテ何レノ處ニ於テ之ヲ見ル乎、朝鮮ヲ舍テ、其レ將ク何クニ求ムベキ露國ノ東洋ニ雄飛センカ爲ニ、朝鮮半島ヲ併呑セリ、早晚必ズ來ルベキ數ナリ、(三) 東洋ノ事情ニ詳ナル所ノ露人

某氏ハ、余コ向ヒテ、西伯利亞鐵道ニシテ、成功スルノ日ハ、露國ハ、支那ニ對シテ、毫モ危懼ヲ懷クニ及ハズ、支那ヲ防クニ於テ、十分餘力アリト斷言セリ、(四) 是レ豈露國ガ隱然朝鮮ノ内治ニ關涉シテ、勢ヲ養ヒ力ヲ貯ヒ、由テ以テ大ニ爲ス所アラントスルニ非ズヤ、

(第四) 英國ノ朝鮮ニ對スル關係 英國ノ朝鮮ニ對スルハ、消極的ノ關係ニシテ、香港ヨリ朝鮮ニ至ル航路ヲ擁護スルモノ是レナリ、英國ハ朝鮮ノ問題ニ付キテハ、自ら主動的ノ地位ニ立タズ、常ニ清國ノ後援ト爲リテ、露國ニ當ルモノ、如シ、然レモ露國ノ舉動ノ機敏活潑ナル、往々其後ニ瞻若スルモノナキニ非ズ、是レ英國ノ最モ苦心シテ、朝鮮ノ問題ニ注意スル所以ナリ、

野史氏曰ク、朝鮮ノ位置ハ、東洋ノ波瀾ヲ盪起セル一大爭地ナリ、其國貧弱ニシテ、自立スルヲ能ハズ、其君主孱弱ニシテ、大勢ヲ挽回スルヲ能ハズ、其人民、自個特殊ノ精神ナク、到底其國ノ獨立ヲ維持スルニ足

ラズ、各國ノ此國ニ干涉スル亦必至ノ勢ナリ、荷モ露國西伯利亞鐵道ニシテ成功スルノ曉ニハ、此國ハ裂ケテ支那ニ入り、露ニ入り、英ニ入り、東洋ノ波蘭タランモ、亦未タ測ルベカラズ、此時ニ當リテ、我國ハ、如何ナル策畧ヲ運ラシテ波瀾ノ中心ニ立ントスル乎、政事家ノ三省スベキハ、實ニ此ニアリ、

(附言)朝鮮ノ諸嶋ヨ付キ、兵畧上ニ取リテ、其要衝ヲ占ムルモノアリ、巨文嶋、濟州嶋、永興港是レナリ、巨文嶋ハ二個ノ長形ノ嶋ト、一個ノ小嶋ヨリ成リ立テ、内嶋ヲ巨文嶋ト名ケ、土人ハ之ヲ三嶋ト稱ス、朝鮮全羅道、群嶋中尤モ我五嶋ニ近キ嶋嶼ナリ、東北ハ、我對馬ヲ距ルヲ凡ソ八十英里、凡ソ我四十里許、長崎ヨリ航スルニ、日本形船ヲテモ、稍巨大ニシテ迅速ナルモノニ乗シテ、快風ニ駕セハ、半日ヲ費シテ至ルベシ、該港ハ實ニ天然ノ良港ニシテ、或ル航海専門家ノ話ニモ、全羅道屬嶋中第一等ナルベシト云フ、濟州嶋ハ、巨文嶋ヲ距ルヲ西三十英里、釜山ヨ

リ巨文嶋ニ至ルノ航路ナレハ、其對馬ヲ距ルヲ巨文嶋ヨリモ近シト云フ、又永興港ハ巨文嶋ヨリ北ニ距ルヲ凡ソ百八十里、長崎ヨリ五百七十里、横濱ヨリ千二百里、ニコライスク港ヨリ千五百六十里ニシテ、露國最南部ノ浦鹽斯德港ハ、永興港ヨリ北方三百九十里ノ所ニシテ、航程一日ヲ以テ達スベシ、該港ハ、朝鮮ノ東海岸ニアリテ、世人ノ未タ知ラザル所ノ一良港ナリト云フ、

外編

附錄

朝鮮壬辰ノ役、即チ豊臣秀吉ノ來侵ニ就キテ、我國史已ニ之ヲ記シ、
明史モ亦備ニ記載アリ、然レモ間マ逸事ノ傳ハラザルモノ多シ、今
マ左ニ明人王志堅、朝鮮人清虛ノ詩ヲ記シテ以テ參觀ニ供ス、

觀馮生所藏倭王錦袍歌

王志堅 明人

馮生示我倭錦袍、腥風凜々寒髮毛、天吳紫鳳恍惚是、水底蛟人親自纜、倭王
昔日乘潮入、箕子城頭鬼夜泣、道旁瓦礫青珊瑚、茫々荒草人膏濕、休徒暫住
釜山塢、帳下健兒作施舞、何人東征擁貔貅、前茅初度遼海頭、咄哉奉使竟不
效、抱頭竄却臨淮侯、軍中誰復探虎穴、猛士如雲皆縮舌、馮生奮髯獨決往、丈
夫生計三尺鏡、當時清正酋中雄、偏師坐擁千旗紅、葛巾直往恣談笑、一言未
畢竟已通、倭國有亦天倭人、亦有心對君指心與君語、戴天願如滄海深、臨別
慙慙重回首、西望長途醉杯酒、征袍自解錦雲鮮、贈君剛及西風後、來歸朝軍

一番變諱却和我盡言戰。征夫羽箭各垂腰。東南轉餉車遙々。兵連海外不可解。從此司農心計勞。馮生趣駕歸田去。盡鑄腰鎌作農具。只今噉々長安塵。姓名不上論功疏。茅齋夜靜聞寒拆。聽君話舊燈花落。君不見錢將軍。夜半提師斬陣雲。功高不賞人所惜。鼠牙雀角何紛々。世上難憑伸與屈。勸君且盡盃中物。

馮生ハ、即チ馮仲纓ヲ指ス。嘗テ清正ノ軍ニ使シタルモノナリ、亦以テ

仲纓ノ一生ヲ知ルニ足レリ(詩中倭王云云ニ關シタル事、殊ニ詳カ)

戰場行

僧清虛 朝鮮人

憶昔當日水戰時。萬艇飛海如天鵝。兩兵交攻杳莫分。忍痛大聲波欲竭。霜劍如林翻日色。斬盡千頭如一髮。茫茫碧海驚魂泣。夜月寒砂照白骨。百里春林燕子飛。柳村無人鶯語滑。君不聞大平日久。人心頑放逸懈怠。天亦罰客過秋風。一杖去古寺。斷碑荒草沒。

清虛國王李昭ノ命ヲ奉シテ、諸道ノ僧兵ヲ總攝シタルモノナリ、當時

戰爭ノ事情ヲ描キ出シテ、咄々眞ニ通ル。大平日人心頑ノ數句、殊ニ喫咽ヲ極ム。嗚呼宴安ノ毒ハ、彼レモ亦自ラ之ヲ知レリ。

第二篇

安南史

第一章

地理畧説

安南ハ、一ニ越南ト稱ス、北緯八度三十分ヨリ起リテ、二十三度ニ至ル、東南ニハ支那海ヲ控ヘ、西ニハ老撾、東蒲塞ト相隣シ、北ニハ支那ノ兩廣雲南省ト境ヲ接シ地形細長ニシテ、北ヨリ南ニ亘ルカ故ニ、其中央部ニシテ、其幅ノ最モ狹キ所ハ僅ニ一度ニ足ラサル部分アリ、

安南ノ全國ヲ南北二圻ニ分ル、河靜以南ヲ南圻ト稱シ、以北ヲ北圻ト稱ス、
ニ大別シ、又三十三省ニ小分ス、省ハ二三府ヲ統ベ、府ハ三四縣ヲ管シ、其制全ク支那ト相同シ、其地、北ノ東京ニ對シ、北圻ニ對シ、以南ノ交趾ヲ除クノ外、老撾國內ヨリ走り來ル所ノ山脉蜿蜒トシテ、相疊ナリ、直ニ海濱ニ臨ミ、地味極メテ疲瘠ナリ、凡ソ全國民ノ賴テ以テ衣食ノ倉庫ト爲ス

所ハ、交趾及ヒ東京ノ二地方ニシテ其倉庫ハ、皆佛人ノ占奪スル所ト爲
リ、王家阮氏ハ、僅ニ疲瘠一塊ノ山地ヲ保テ、制ヲ佛人ニ受ケ、僅ニ其餘喘
ヲ繫クニ過キズ、

東京ハ安南ノ最北部ニシテ土人ハ之ヲ北圻ト稱ス、蓋シ東京ノ名ハ、往昔
黎氏ノ朝ニ於テ、河内ニ都シテ、交都ト稱シタル時ヨリ始マルニシ
テ、北ハ支那ト境シ、其地形、山地平地ノ二大部ニ分ル、其平地ハ、乃チ歐洲
人ノ三角地ト稱スル所ニシテ、内ニ三大河アリ、最北ナルモノヲ潯江ト
稱シ、中央ナルモノヲ津次江ト稱シ、歐人之ヲ大平河ト稱スニ南
方ニアルモノヲ紅河ト稱ス、紅河トハ、歐人ノ稱呼ニシテ、土人ハ之
ヲ珥河ト稱ス、此三河ニハ、數多ノ支流アリテ、縱横ニ交叉シ、河身皆
深ク、概チ小汽船ヲ通シ、漕運ニ便ナリ、其河流沿岸ノ地ハ、最モ沃饒ニシ
テ、大ニ農産物ニ富ム、其重モノナルモノヲ舉グレハ、米穀ハ、冬夏二季ニ収
穫アリ、此國第一ノ産物タリ、桑樹ハ、終歲青々トシテ色ヲ變セス、寒暖時

季ヲ論セズ、替ヲ養フヲ得ベシ、砂糖モ亦頗ル土地ニ適シ、其莖稈ノ長
大、實ニ驚クベキモノアリ、其他蔬菜、果實等枚舉スルニ遑アラズ、但シ農
業上ハ幼稚ニシテ、其興スヘキ事業、其開クベキ荒地頗ル多ク、土地ニハ
木材ハ勿論、金銀、銅、鉛、石炭モ亦少ナカラズト云フ、苟モ其人アリテ、水陸
運輸ノ便利ヲ謀リ、農業ヲ獎勵シ、商業ヲ隆盛ナラシムルハ、東洋ノ沃
土ト爲ルベキヤ必然ナリ、然ラハ則チ佛國ニ取リテ、將來亞爾塞、突尼斯
ノ右ニ出ツル富庫ト爲ルベキモノハ此東京ナルベシ、

第二章

國朝ノ興亡

安南ノ歴史モ朝鮮ノ如ク國朝ノ興廢定リナシ西曆紀元前二百年ヨリ紀元後七百年代ニ至ルマテ常ニ支那ノ版圖ニ屬セリ千年ノ時代ノ初メ外藩ニ列ス

千六百年代ノ初メ莫登庸ナルモノ兵ヲ起シテ國王黎維諱ニ叛シ王走リテ清華順化ヲ保テシガ孫黎維潭ニ至リ其謀臣鄭氏及阮氏ト謀リ莫登庸ヲ伐テ遂ニ國家ヲ復興セリ是ヨリ阮鄭二氏世左右ノ相タリ後テ鄭氏阮死シ孤幼ナルニ乘シテ之ヲ順化ニ出シ國王ヲシテ廣南ニ居ラシメ自ラ政權ヲ擅ニセリ鄭棟ニ至リ益々驕横將ニ國ヲ篡ントシ廣南ノ土酋阮岳阮惠ヲ誘キテ之ヲ攻滅ス鄭棟死スルニ及ビテ鄭惠又廣南ノ兵ヲ起シテ鄭氏ヲ攻メ遂ニ之ヲ滅ボシ自ラ代リテ國政ヲ擅ニシ盡ク王都ノ珍寶ヲ取り廣南ニ歸リ其將阮任ニ命シ兵數万ヲ率キテ東京

ヲ攻メシム王黎維祈使ヲ遣ハシテ援ヲ請ニ乞フ實ニ千七百八十六年ナリ即チ高宗乾隆五十一年明年清兩廣ノ督臣孫士毅ニ命シテ阮惠ヲ討チ大ニ之ヲ破ル詔シテ維祈ヲ冊封シ安南國王ト爲ス已ニシテ維祈不徳ニシテ衆望ヲ失フニ及ヒテ阮惠復タ安南ニ據ル然レモ清軍ヲ懼レテ降ヲ乞ヒ名ヲ光平ト改ム乾隆五十三年清廷ニ來朝セリ其子阮光積封ヲ襲ク是レヨリ先キ黎氏世々廣南ニ王ト爲リ順化海港ヲ以テ門戶ト爲シ占城暹羅ト壤ヲ接セシガ阮光平已ニ兵力ヲ以テ國ヲ篡ヒ國用空乏ス是ニ於テ烏艘船百餘總兵官十二ヲ遣ハシ軍餉ヲ辨スルヲ以テ名ト爲シ多ク清ノ海盜ヲ招キテ嚮導ト爲シ閩粵江浙ニ寇セシカハ清ノ各省騷然タリ是時ニ安南已ニ廣南ト怨隙アリ黎氏ノ故臣阮福映帥ヲ乞フニ及ヒテ共ニ力ヲ合セテ西都ヲ恢復シ並ニ海賊莫扶觀等ヲ縛シ以テ之ヲ清廷ニ獻ス千八百二年高宗嘉慶七年福映安南ヲ滅シ先世黎氏ノ爲ニ仇ヲ復シ清廷ニ請ヒテ越南ヲ以テ國ニ名ク清帝福映ヲ

封シテ越南國王ト爲シ、兩年一貢、四年一朝ノ例ヲ定ム、是ヨリ福映ノ子孫、世襲スト云フ、

佛人カ安南ト交通ノ端緒ヲ開キタルハ、千七百八十年紀ニアリ、其後千八百五十九年、安南ハ、佛國及ヒ西班牙ト不和ヲ生シ、和議整ハザルヲ以テ、佛西兩國聯合軍ノ爲ニ攻メラレ、和ヲ請ヒ兵ヲ罷ム、爾後佛國ハ、着々歩ヲ進メテ、勢力ヲ安南ノ地ニ及ボシ、遂ニ今日アルヲ致セリ、(事載セテ支那帝國史後篇、清佛戰爭紀ニアリ、請フ參觀セヨ)

野史氏曰ク、余之ヲ得菴居士ニ聞ク、曰ク、余ノ歐洲ニ遊ブヤ、途次安南ヲ過ク、其國人多ク馬丁船丁ナドノ賤業ヲ執ル顔カタチ、吾國人ニ似タレド、氣風柔弱ニシテ男子モサナカラ婦人ノ如シ、骨格モキハメテ短弱ナリ、ト又同地ニ於テ、居士ノ讀メル歌ヲ聞ク、曰ク、人の國の亡ビし跡を來て看れば、草木のいろも物あはれあり、ト亡國光ノ景ヲ描キ出シテ、其慘悽ヲ極ム、朝鮮、暹羅、諸國ノ此、悲况ニ陥

ルハ、其レ豈遠キニアランヤ、殷鑑實ニ安南ト緬甸トニアリ

第三章

政治風俗及文學

(政治)安南ノ官制ハ、全ク支那ニ倣ヒシモノニシテ、順化府ニハ文ニ吏、兵、禮、刑、兵、工ノ六部アリ、各部ニ、尙書一名、參知、正副、二名、侍郎、正副、二名、辨理一名ヲ置ク、別ニ輔政大臣アリテ、六部ヲ綜理セリ、武ニ五軍、前軍、中軍、後軍、右軍、左軍、アリ、一軍ハ、二千五百人ヨリ成リ、都統一名之レカ司令タリ、軍ヲ五衛營ニ分テ、每隊ニ一名アリテ之ヲ統率シ、一隊ハ、兵士五十人ヨリ成ル、

各地方文武官ノ組織ハ、文ニ總督、概テ二省ヲ管ス、巡撫、每

省一名——布政使、按察使、知府、知縣等ヲ置ク、亦支那ニ異ナラス、武ニ提督、領兵、管員、率隊等アリ、順化府五軍ノ編制ト粗ボ相似タリ、之ヲ要スルニ、文武百官ノ制ハ、一ニ支那ノ制度ニ模倣シタルモノニシテ、政府官吏ノ賂賂公行若クハ苛政虐民ノ弊亦甚シト云フ。

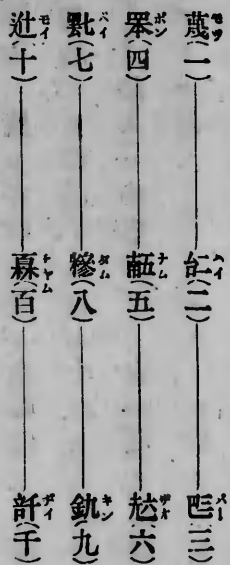
(風俗)安南土人ノ頭髮、剪ラス、剃ラス、但タ男子ハ梳リテ腦後ニ結束セリ、紅色或紫線等ノ布、又ハ絹ノ手帕ヲ以テ頭周ヲ巻キ、間々方形ナル籠甲ノ櫛ヲ戴クモノアリ、外出スルキハ、日光ヲ掩ハンカ爲ニ、笠ヲ蒙ルヲ以テ常ト爲ス、女子ハ前髮ヲ二ツニ分チ、之ヲ後方ニ梳テ一髻ト爲シ、其髻端ヲ、白色或ハ紺色ノ絹又ハ布ヲ以テ包ミ、之ヲ頭周ニ巻キタルノミニニテ、別ニ飾ヲ爲ス、フナシ、外出ノ時ニハ、男子ト同シク笠ヲ戴クト雖モ、其衣服ハ、男女共ニ同形ニシテ、舉動モ亦相類スト云フ。——衣服ノ体裁ハ貴賤男女ニ拘ラズ、頗ル粗惡ニシテ、東浦塞人ハ、安南ヲ呼テ弊衣國ト稱セリ。——履物ハ、大約チ富家ノ老人等ノミニテ、用ユルノミニニテ、一般ノ

人民ハ徒跣ナリ、而シテ其稀ニ見ル所ノモノハ、形ヲ全ク我日本ノ下駄雪踏ニ異ナラス。

(家屋)土人ノ家屋ニハ、概造、木造、竹造ノ三種アリ、其概造ノモノハ、概チ支那風ニシテ、外觀ハ、美麗ナルモノアレモ、其内部ハ、區畫錯雜、家什散乱、不潔甚シク、空氣ノ流通最モ惡シ、概造ハ、河内南定等ノ大市街ニ於テ之ヲ見ルノミニニシテ、村里ノ間ニ至リテハ、神社佛閣及ヒ官舎等ヲ除クノ外、總テ木造、竹造ノ二種ナリ、其木造ナルモノハ、大約富人ノ住居ニシテ、家屋ノ周圍、屋内ノ區畫ハ、木板或ハ竹片ヲ編シテ、泥ヲ塗リタルモノヲ以テ之ニ充ツ、屋上ヲ葺クニ瓦ヲ以テスルハ、最上等ノモノニシテ、通常一般ノモノハ、蒲葵ノ葉ヲ用ユ、屋内ニハ、竹或ハ木ヲ以テ作りタル、麤惡ナル扣床ヲ置キ、其上ニ席ヲ敷キ、以テ起坐、寢食ノ所ト爲ス、家什ハ、中等人士ノ家ト雖モ、銅製ノ釜、粗磁ノ碗皿數個ヲ備フルノミニテ、竈ノ如キハ、概チ之ヲ設ケズ、甌片三四片ヲ屋隅ニ置キ、以テ炊煮ノ所ト爲ス、其陋

推シテ知ルベキノミ、
 安南人種ハ其面貌支那人ニ似テ、体軀短少、骨格脆弱ナリ、皮膚ハ薄黒ニシテ、印度呂宋邊ノ人ニ似タリ、蓋シ蒙古種ト南部ノ人種ト相混合セシ者ナルベシト云フ、其人民ノ性質ハ、一時伶俐ナルカ如クナレド、思慮淺薄ニシテ、絶テ艱難ニ從事スルコト能ハズ、且ツ人ヲ俟ツニ、猜疑ヲ以テシ、輕浮最モ甚シ、且ツ生來脆弱ナル身体ヲ以テ、上下一般ニ鴉片ヲ嗜ムヲ以テ、其精神氣象懦弱ニシテ、惰民日一日ヨリモ増加ス、國運ノ衰頽亦實ニ想フベシ

(學術)安南ノ學術文章ハ、總テ支那ヲ學ビ、其建國二千年ノ舊キニ涉ルト雖、學問上、一事ノ發明ナク徒ニ虛文ニ汲々トシテ、實學ヲ勉ムルモノアルヲ聞カス、——但シ安南ノ文字ニ、二種アリ、一ハ支那字ニシテ、一ハ支那字ヲ集合シ、一種ノ文字ヲ作りシモノナリ、此文字ハ、奇怪ニシテ殆ント解スベカラザルモノアリ、今マ其數字ヲ左ニ掲ゲン、



閩萬

概テ是レ土音ニ同シキ支那字ヲ取テ數字ト爲シ、其數字タルコト明瞭ナラシメンカ爲ニ再クヒ支那數字ヲ附加シタルモノトス、土人通常ノ書牘等ニハ、皆此作字ヲ用ユ、又此種ノ文字ヲ以テ作ル所ノ詩文ヲ以テ國文及ヒ國語詩ト稱セリ、

第四章

劉永福ノ事傳

劉義字ハ、永福、阮亭ト稱シ、又三省ト號ス、廣東欽州ノ人ナリ、初メ吳鯤ナルモノニ從ヒテ安南ニ入ル、吳鯤ハ、元ト長髮賊ノ一部將ナリシガ、清軍ノ爲ニ敗ラレ西曆千八百六十九年——即チ安南ノ嗣德十九年——部下一万餘人ヲ率キテ廣西ヨリ、奔リテ安南ノ境ニ投シ、山太原、高平、北寧等ヲ陷レテ之ニ據レリ、其後十四年、西曆千八百六十九年——嗣德廿四年——ニ至リテ、清國政府ハ、安南王ニ命ノ兵ヲ出シ、吳鯤ノ討伐ニ會セシム、是ニ於テ、清軍及ヒ安南ノ兵、南北ヨリ、吳鯤ヲ夾撃セシカバ、鯤ノ勢大ニ挫劔シ、鯤モ亦戰死セリ、永福僅ニ其餘黨ヲ収メテ山間ニ逃レダリ、永福、膽智アリ、西曆千八百七十年——嗣德二十四年——山西ノ總督黃繼炎——此人ハ安南國王ノ女ヲ娶リ、所謂駙馬ニシテ、國內ニ於テ最モ權勢アリト云フ——ナルモノニ依リテ、安南ニ降リ、永ク其國民ト爲リ、

不毛ノ地ヲ開墾シテ自ラ其力ヲ食ミ、且ツ國境ノ防衛ヲモ爲サンコトヲ乞ヒケレハ、王之ヲ容レ、與フルニ保勝庸——即チラオカイ——ノ地ヲ以テス、永福是ヨリ、部下ノ兵士ヲ屯田セシメ、出入ノ貨物ヨリ稅ヲ抽キ、政治、經濟等、皆獨立ノ組織ヲ成シ、自ラ其部落ノ酋長ト爲レリ、永福ト共ニ、吳鯤ノ一部長ヲリシ黃崇英ナルモノアリ、永福ノ威望日ニ隆ンナルヲ見テ之ヲ嫉ミ、遂ニ兵ヲ集メテ永福ニ抗シ、兩軍屢々戰鬪シ、更々勝敗アリシガ、結局、黃崇英ハ、永福ノ爲ニ敗ラレテ福死シ、餘黨奔逸シ、或ハ永福ノ部下ト爲ルモノアリ、是ニ於テ永福ノ勢力益々張ル、初メ此戰鬪ノ際ニ、永福ノ軍ハ、黑旗ヲ樹テ、崇英ハ黃旗ヲ立テタリシガ、是レ其黑旗黃旗ノ名稱ノ起リシ濫觴ナリトス、

永福、英畧アリ、好テ四方ノ人物ヲ網羅シ、猛將ヲ養ヒ、壯士ヲ鍊リ、其地遂ニ巨鎮ト爲ル、其生聚ノ人口、大約二十萬人、其中、黑旗隊ニ屬スルモノハ、八萬餘、黃旗隊ニ屬スルモノハ、六萬餘、白旗隊ニ屬スルモノ三萬餘、土人

兵二萬餘、皆勇敢強捷、膂力アリ、技擊ニ習ヒ、山ヲ蹴リ、壑ヲ涉ル、鳥獸ノ如ク、勁旅ヲ以テ稱セラレ、黑旗ノ老營ハ、天險要衝ノ地ニシテ、峻巖絕壁、人容易ニ之ヲ過グルコト能ハス、且ツ紅河ノ流水ヲ導キテ、二大濠ヲ設ケ重兵ヲ置キ、内地ニ入レハ、天府鎮ニシテ、商賈盛ンニ街衢モ亦廣潔ナリト云フ、

其後、西曆千八百七十一年——嗣德二十五年——永福ハ、黃繼炎ヲ助ケ、部下ノ兵ヲ率キテ河内ニ入り、佛人ト戰ヒ、終ニ之ニ勝テ、功ヲ以テ三宣提督——宣光、興化、山西ノ提督——ニ任セラレ、其兵士ハ、安南ノ常備兵ト爲リ、糧餉ヲ給セラル、——然レ兵士ハ皆支那ノ服裝ヲ變ヒス——尋テ又佛軍ト戰ヒ、海軍中佐李比爾ヲ斬リ、義勇男ノ爵ニ叙セラレタリ、是レヨリ黑旗兵ノ首帥、劉永福ノ名、始メテ中外ニ轟ク、事載セテ支那帝國史後篇ニアリ、讀者之ヲ參觀セヨ、佛國ハ、安南ヲ經畧シ了ルニ及ビテモ、終ニ黑旗兵ヲ芟除スルコト能ハスト云フ、

安佛戰爭ノ際、永福檄文ヲ發シテ、兵士ヲ鼓舞ス、其文ヲ見テ其風采ヲ想望スルニ足ル其檄文ニ曰ク

嗚呼皇天無親、明德是輔、聖人有訓、佳兵不祥、我越南、自白雉入貢以來、知中國有聖人、不敢自外、托於帡幪覆幬之中者、數千年於茲矣、中國亦待之以誠、撫之以惠、愛如骨肉、而親若家庭、偶有外患、內憂、莫不煩天朝之綏靖、越南臣民、惟知有中國、不知有他國、故與各外國、絕不相通、蠶茲法夷、逞其強悍、恃其機械、輒敢肆焉蠶食、恣厥鯨吞、毒比長蛇、貪逾封豕、既竊踞夫西貢、又潛窺夫東京、外托保護之名、中懷難測之志、試思分疆畫界、各有臣民、各有政教、何待越祖代謀、是其藉辭行詐、包藏禍心、可以不言而喻、况自法兵東夷之後、攻城掠地、荼毒越民、越南之倉庫、據爲己有、越南之關稅、收爲私藏、越南之城池、遭其蟠踞、越南之元氣、被其剝喪、招越南之叛民、以添其翼、墮越南之險阻、以快其心、種々狂悖之行、神人之所共忿、天地之所不容、我越人、凡有血氣、莫不痛心疾首、透爪裂眦、願得食法人之肉、寢法人之皮、

真有一夫大呼、市人皆左袒之勢、永福以羈旅之身、受國王恩遇、資以土地、授以甲兵、其初一成一旅之衆、得所藉手、十年生聚、十年教訓、積數十年之心力、有勁卒數萬人、賴以保障、東南用資戰守、三軍之士、當知食毛踐土、恩威並隆、去順效逆、殃咎立至、越南雖偏小、向爲中朝不侵不叛之臣、今越有難、中國必爲援助、茲者鎮撫唐中丞、粵西撫徐中丞、皆已帶甲百萬、分道出關、天兵遙駐、聲勢赫耀、粵督張制軍、粵東撫裕中丞、亦皆部署周至、轉應不窮、近又特簡彭宮保、來粵督師、以守爲戰、韓范坐鎮西、賊喪膽、我軍有此應援、士氣定當益奮、本提督不過中原一武夫、流寓來越、荷蒙國王恩禮、有加重賞、委任爾衆士、亦屢蒙大惠、祿養有年、三軍銘挾續之恩、多士戴如春之澤、固宜激發忠義、競作干城、而况中朝大皇帝、又特沛殊恩、寄以重任、本提督固責無旁貸、爾衆士亦義不容辭、當思受國王之恩養、咸懷報主之忱、荷中朝之化裁、彌助尊王之義、先登陷陣、奮不顧身、飢剝法夷之膚、渴飲法夷之血、滅此朝食、所向無前、法夷之機械、適足自阱、法夷之凶暴、適足自戕、前者

法酋拿破翁第一、頗善用兵、其國人稱之天神、擐甲執兵、千人辟易、彼恃其武勇、橫暴不已、卒爲英人所俘、爲世大辱、厥後拿破翁第三、率乃祖之攸行、志在開疆、性喜用武、橫征暴斂、戢怨小邦、天怒人憤、蘊久必發、爰假手普國、殲厥巨魁、燬其國都、法人氣爲之不揚、歐西各國、羞與爲伍、似此亦可稍斂跡矣、而乃猶復怙惡未悛、不敢吐氣於他邦、轉欲逞志於我國、我越南雖僻處海濱、號稱積弱、然師以曲直爲老壯、兵以順逆爲勝負、法兵雖強、曾何足懼、自法夷入寇、狼奔豕突、跋扈鳴張、幾於日無越人、本提督率爾有衆、起而力爭一戰、而遠威悅、授首再戰、而寶滑遁逃、科烈不能逞其凶、夏文不能施其計、大旗所指、蚩尤潛光、長戈所揮、淵日再起、賊軍矢窮糧盡、困守一隅、以海防河內爲負隅之恃、而我軍分道以擾之、丞肆以疲之、奇兵正兵、互爲策應、攻城攻野、動合機宜、南定驚草木之兵、海東慄烽烟之警、賊軍皆墨、我武維揚、法夷猶敢執迷不悟、逼我順化、蹙我都城、乘我國之新喪、利援兵之道遠、遂乃抑勒新主、強爲要盟、夫要盟神弗福之、盟可要可塞、何足措意、而法

夷乃自爲得意、益復驕橫、又敢窺我北甯、侵我桑臺、中朝之大度、則藐爲畏、我軍之果毅、視若仇讐、不恤衆口之交譏、不顧天心之弗順、國狗之瘼、遍於友邦、巴蛇之含肯、遺夫象群、賊與我勢、不兩立、我與賊義、不俱存、今與爾有衆、共伸天討、各奮神威、轉戰無前、有進勿退、得法夷首一級、賞銀五十兩、賊首倍之、獲兵船一艘、賞如其船之數、燬鎮艦者倍之、其有我國遊民爲法夷所羅致、脅令當兵者、倘能悔罪自拔、悉予免究、反戈攻後、因而獲勝者、仍論功行賞、不問前愆、惟法夷及其所部之黑夷、則盡殺毋赦、必使東京之餘孽掃蕩無遺、西貢之腥聞、漸除淨盡、上以副中朝倚卑之隆、中以報國主休養之德、下以舒越人怨毒之心、成敗利鈍、所不遑計、爾衆士欲建不世出之奇勳、成不朽之偉業、惟本提督馬首是瞻、功多有厚賞、不迪有顯戮、爾衆士惟時懋哉、檄到如律令、

永福沈毅ニシテ智謀アリ、善ク兵ヲ用ユ、豊面雄幹、鬚髮毳々トシテ雪ノ如シ、亦安南ノ男子ナリ、若シ安南人ヲシテ、皆永福其人ノ如クナラシメ

ハ、未タ必ズシモ、歐洲人ノ輕侮ヲ受クルヲ、今日ノ如クナラザルベシ

第五章

安南ト日本トノ關係

安南ハ、特ニ支那ニ關係アルノミナラス、其先世ニ溯レハ、我國ニモ關係アル所ノ國ナリ、今日ハ、所謂ル——國亡山河在——ト云フベキ凄凉タル有様ヲ呈スレテ、東洋ノ大勢ニ志アルモノハ、宜シク注目セザルベカラサル所ナリ、故ニ吾人ハ、安南ノ我日本ト往來通商シタル始末ヲ畧叙シ、以テ我國人ノ情ヲ慨切ナラシムヘシ、

我日本ニハ、古代ハ勿論、豊臣氏ヨリ、徳川氏ノ初世ニ當リテモ、戰艦ニ用ユルニ足ル大船アラザルカ如シ、現ニ豊公文祿ノ役ニモ、水軍ハ、常ニ朝

鮮及ヒ明軍ノ爲ニ敗ラレタルホトノ事ナルコト、朝鮮ノ船ハ、當時モ今日モ同様ニテ、海戰ニ堪ユベキ船ナキヲ以テ知ルベシ、然ルニ我水軍ハ、常ニ志ヲ得ザリシヲナレハ、其兵船トテモ推シ知ルベシ、但シ商船ニ至リテハ、三檣ノ大船アリテ、海外ニ遠航シタルコト明カナリトス、此大船アリシハ、足利氏ノ季世、元龜、天正ノ頃ニハ、外人ノ渡來、周遊自在ニシテ、豊ノ大友、奥ノ伊達ヨリ、織田信長ニ至ルマテ、皆歐洲人ト交通シタルコトナレハ、外船ノ我國ニ來ルモノ多ク、邦人ハ、外船ニ摸シテ大船ヲ造リシナルベシト思ハル、其ハ始ク置キ、我國人ノ海外ニ遠航シタルハ、足利氏ノ季世ヨリ始マリ、徳川氏ノ世ニ至リテ、益々盛ナリキ、

徳川家康、英明ノ政事家ヲ以テ、國ニ當リ、東西某々ノ諸藩ヨリ、長崎、大坂、堺、京都、駿河ノ商民ニ限リテ、大船ヲ造リ、海外ニ渡航スルコトヲ許サレタレハ、安南、東京、東浦塞、暹羅、呂宋等ノ諸國ハ、皆我カ通商地タラザルハナカリキ、而シテ安南ト我國トノ關係如何ト見レハ、安南國王黎維新ノ弘定

二年——明ノ神宗万曆二十九年、即チ我慶長六年、將軍家康ニ贈リタル書ニ曰ク、

茲屢蒙家康公貴意、前差白濱顯貴、發船往販、通商結好、又蒙賜文翰、乃前任都堂往復、今、我新任都統元帥、欲依前軍兩國交通、不幸至舊年四月間、顯貴船舶在順化處海門、被風蕩、船無所依、

此年家康ヨリ其答書ヲ贈ラル、其文ニ曰ク、
日本國源家康、復蒙安南國統兵元帥瑞國公、信書落手、卷舒再三、自本邦、長崎所港之商船、於其地、逆風破舟、凶徒殺人者、宜教誡之、

其後日本慶長八年ニ至リテ、彼ニ贈リタル書ニ曰ク、
渡海商人、請寡人曰、異日來敵邦之時、于海濱、于嶋嶼、到府縣村邑、任船主、心可寄寓之、大望即命、陋邦士民、而書商人住居、可隨所思、書商船貨財、不可侵掠之、印札而付與焉、

是ヨリ我國人ノ海外ニ航スル者ハ、御朱印ヲ賜ハリタルモノニ限リ、家

余聞之長崎之士
盧高則君曰長崎
有舊家某氏者其
祖先通商往來安
南通羅而娶安南
國王之王女某者
當時該王女之所
携來之嫁及諸般
寶器傳在子孫之
家今長崎之一寶
物云々蓋當時日
本商人之豪膽與
安南國王之小弱
固可相想也

康ハ交通ノ諸國ニ向ヒテ爾後貴國ニ至ルモノハ特許ヲ與ヘタルモノ
ナレハ亂暴ノ所業ニ及ブベカラスト雖モ万一不法ヲ爲スモノアレハ
其掟通リニ處分アルベシトノ意ヲ通セラレタルヲ德川氏ノ記錄ニ見
エタリ左レハ安南ニ航スル者ニモ朱印ヲ賜ハリ其旨彼ニ通セラレタ
ル事ナリト知ラル其後慶長年間ヨリ元和年中ニ於テ安南王ト往復ア
リタルヲ屢々ナレバ就中其最モ見ルベキモノハ家康ヨリ安南國頭目
黃公ニ贈リタル書ナリ其文ニ曰ク

日本國源家康致書安南頭目黃公比年鴿舶往還二國之情好稍可徵矣
感佩深甲辰六月我舟人亡恙歸辱復書添以嘉幣若干青貝肆疋白絹大
好五疋牙扇二件香蠟一瓶薰香一瓶厚意不可言焉一止於信之一語誠
是國家治教之要矣乎夫信者吾人性中之固有而感乎天地貫乎金石無
以不通豈啻交隣通好而已哉雖是千里莫不同其風也所以五方皆不殊
此性者也歟由是觀之則其不同者特衣服言語之末而已然則千里万里

雖遠衣服言語雖殊有其不遠者不殊者而存是以所謂一信也前使不德
往還彼此之間上下其手表裏其言而多誤事情故處之以國刑想在貴國
亦如此乎凡舟人者僉市兒販夫之徒而僅見小利則忘大辱其言多任喜
怒之恣而不足取其信自今而後二國之信者在書書之信者在印以是爲
證耳矣故今附舟人以今夏之復書貴國子細檢焉方物數事聊寓綏好之
禮書中又言貴國者詩書禮義之國而非市貨會集之地苟市貨會集之事
唯利是務真可鄙焉然亦通論之則四民孰非民八政孰非政安民爲政之
外無詩書禮義詩書禮義之外無安民爲政是亦五方固有之定性而乃一
信之所主在也貴國之所誠者在彼失信而屢生不好之事而已二國不失
其信則縱雖有小人何至生不好之事乎然亦不可以不誠若生事則二國
各有刑法乎哉

秀忠ノ世ニ至リテハ安南トノ交通更ニ其盛ヲ致シタリ其事ノ著キモ
ノヲ擧レハ交趾通商ノ御朱印ヲ茶屋四郎二郎ニ賜ハリタルカ如キ本

多上野介、土井大炊介ガ將軍ノ令ヲ奉シテ、互ニ居留人民ヲ處分スル事
ニ付キテ、安南ノ大臣ニ書ヲ贈リタルカ如キ、當時交趾ニ在留セル船本
彌七郎ニ制令ヲ與ヘ、日本ヨリ交趾ニ渡海セル諸商人ハ、同人ノ付屬タ
ルベシ、非法ノ輩アルニ於テハ、屋形次第成敗セラルベキモノナリト達
セラレタルカ如キ、益々其交通ノ歩武ヲ進メタルヲ見ルニ足ル、將軍
家光ノ時ニ至リテモ、安南トノ往復尙ホ絶ヘザリシガ、寛永十二年、國人
ノ外國ニ航スルヲ禁セラレタル以來、我が商船ハ、復々彼ニ赴クヲ
得ズ、安南ヨリハ、長崎奉行ニ書ヲ贈リテ、貿易ヲ回復センヲ請ヒタル
ヲ頻リナリケレド、遂ニ允可セラレズシテ、交チ絶ツトハナレリ、亦惜
ムベシ、

日本ト安南トノ關係、其親密ナルヲ、此ノ如シ、此ノ親密ナル交際ヲ爲シ
タルハ、蓋シ當時ノ政事家、徳川家康ノ、宏畧ヲ以テ之ヲ綏御シ、其驩心ヲ
結ビタルノ致ス所ナリ、然ルニ先世我ト親密ナル交際ヲ有セシ安南國
ニシテ、佛國ノ爲ニ征畧セラレテ、今日亡國ノ有様ト爲レルハ、豈慨嘆ス
ヘキノ極ニ非ズヤ、我國人タルモノハ、慨然トシテ奮起スル所アレハ、誠
ニ東洋ノ幸ナリ、

第三篇

暹羅史

第一章

國朝ノ興亡

暹羅ハ亞細亞ノ赤道地方ニアル一個ノ王國ニシテ、東ハ安南ニ界シ、西ハ英領緬甸及ヒ榜加拉灣ニ接シ、北ハ獨立ラオス國及ヒ英領緬甸ノ北部ニ境シ、南ハ暹羅灣ニ臨ミ、面積二十五萬英里アリ、
暹羅ハ、上古ノ沿革詳ナラズ、西曆千三百五十一年、ソモテツトフラタイ
ホウデマ第一世位ニ即キ、子孫相承クルヲ二十世、二百五十一年ヲ歴タ
リ、是ヲ第一朝ト爲ス、——千六百三年、フラヨリオンタム代リ立テ、子孫
ニ傳フ、僅カニ二十八年、王其下ノ爲ニ廢セラレ、是レヲ第二朝ト爲ス、六
百三十一年、フラヨフラサン位ニ即キ、四世ニ傳ヘシガ、兇徒ノ爲ニ弑セ
ラル、尋テ第三子ノ子位ニ復ス、九世ニ傳ヘ、百三十八年ヲ歴タリ、是ヲ第

三朝ト爲ス、
 千七百六十七年、暹羅、緬甸ノ攻撃スル所ト爲リ、遂ニ亡ブ、清帝緬甸ヲ伐
 ナ大ニ之ヲ破ル、暹羅ノ人民、其遣臣鄭昭ヲ推シテ王ト爲シ、盡ク舊封ヲ
 復シ、都ヲ盤谷^{バンコック}ニ定ム、千七百八十二年、其將ホレマラチヤフラダヨトフ
 ア位ニ即ク、是レチ今ノ王家ノ始祖ト爲ス、三世ヲ歴テ今王チユラロ
 ンクルンニ至ル、今王ハ千八百六十八年ヲ以テ位ニ即キ、銳意シテ治ヲ
 圖リ、宮室衣食、往々歐米ノ風ニ倣ヒ、宮中ニ學校ヲ設ケ、米人ヲ聘シテ王
 族男女ヲ教育セリ、暹羅、各國ト通交スルハ、千八百二十二年、英國印度商
 會ト約ヲ結ブニ始マル、爾後各國漸ク至リ、領事館ヲ置ク、千八百五十七
 年、使チ英國ニ遣ハシ、同シキ六十年使チ佛國ニ遣ハス、尋テ貴族少年
 チ歐洲ニ留學セシム、千八百七十四年、使チ印度ニ遣ハシ、互市ヲ約シ、疆
 域ヲ定ム、千八百八十七年、即チ我明治廿年ニシテ暹羅曆紀元千二百四
 十九旬ニ當ル、日本ト修交條約ヲ締結セリ、一

第一章

政治、産業及風俗

〔政治〕 一國ノ行政權ハ、王ト内閣トニ屬シ、内閣ハ、陸海軍、外務、司法、農務、
 宮内、大藏ノ大臣ヨリ組織ス、一縣ヲ分ツコト四十一ニシテ、知事之ヲ治
 ム、外ニ王子ニ屬シタル領地アリ、租稅ハ、海關稅ヲ除クノ外、總テ地租ヨ
 リ徵収ス、

〔産業〕 暹羅ノ人口凡ツ六百万、尤モ眞成ノ暹羅人ハ二百万ニシテ、其他
 支那人百万、ラオス人二百万、馬來人百万ヨリ成レリ、首府ヲ盤谷ト稱ス、
 人口四十万乃至六十万アリ、暹羅ナル國名ハ元ト緬甸ニテラオス人種
 ニ付シタル「シヤン」ト云フ語ト同シキ者ナリト云フ、土人ハ自ラ國名ヲ
 タイー或ハムアンタイト呼ブ、其義ハ、自由ノ王國ト云フ義ナリ、商業工
 業ハ、甚タ盛大ナラス、其原因ハ、主トシテ土人ノ封建主義ノ土地所有者
 ノ制ヲ受クルニ由ル、土人ハ、借地主ノ爲コ、毎年、時限ヲ期シ、一月乃至三

月間勞働ヲ致スノ義務アリ、是ヲ以テ土地ノ多クハ沃饒ナルモ、爲ニ耕作充分ナラス、思フニ良地コシテ耕作ニ適スルハ、其ノ二十分ノ一ニ過ギスト云フ、商賣ハ殆ント全ク外國人ノ手ニアリ、近年ハ、支那人多ク移住セリ、然レモ亦土人ノ如ク勞働ノ義務ニ就カス、商賣ノ中心ハ、首府盤谷ニシテ、千八百八十五年、當府ヨリ外國ニ輸入シタル價額ハ、百五十七万二千七百八十八磅ナリ、輸出品ノ重モナルモノハ、米ニシテ、香港及ヒ新嘉坡ニ向テ輸出シ、同年ノ噸數ハ、廿一万七千七百七十九噸ニテ、其價九十八万八千六百六十四磅ナリ、次ハ胡椒ニシテ、其價七万四千二百二十一磅、次ハ、麻粟樹ニシテ其價九万五千三百四十八磅、次ハ皮ニシテ二万七千九百三十一磅、次ハ家畜ニシテ、二万六千五百五十五磅等ナリ、又同年輸入セルハ、百十三万八千三百八十八磅ナリ

(風俗) 暹羅ハ、熱帶ノ地ニアリ、其温度常ニ八十三四度ヨリ、九十八九度ノ間ヲ往來スルヲ以テ其衣服ノ如キモ、極ノテ疎ニシテ、唯ダ巾四尺、長

七尺程ノモノヲ腰ニ纏ヒ、其端ヲ股ヨリ後ヘニ折ル、前ヨリ見レハ、恰モ日本ノ股引ノ如シト云フ、尤モ婦人ハ此外ニ巾一尺、長五尺程ノ布片ヲ胸ニ捲キテ乳ヲ掩ヒ、其殘レルヲ肩ニ掛ケリ、其服制ハ、上下ノ差別ナク、其別アルハ、品質ノ美惡アルノミ、近世歐風ニ心酔シ、上等社會ニテハ、洋服ト固有ノ服トヲ取捨折衷シテ採用セリ、下ニハ固有ノ服ヲ着シ、上ニハ「マントル」ヲ着セリ)

國人ハ、最モ粧飾ヲ好ミ、指環、腕環、足環、耳環、鼻環等ヲ用ユ、食物ハ、重モニ米飯ト魚肉ナリ、

國民ノ氣象ハ、概シテ孱弱小膽、加フルニ輕卒事ヲ謀ルヲ願ズ、但シ順從ニシテ、不遜ノ質ナシ、土人ハ固陋野鄙自ラ安ンズ、是レ其生ナカラニシテ、外人ノ蔑視スル所ト爲ル所以ナリ、

第三章

兵制

現時暹羅ノ兵ハ、步砲ノ二種ヲ合シテ、一萬人許ト爲ス、其兵士ハ皆日々操練場ニ於テ演習セリ、戰時ニハ、國王乃チ其官吏ヲシテ悉ク其奴隸ヲ出サシメ、或ハ各州ノ總督及郡吏ヲシテ更ニ貫丁ヲ出サシムルヲ例ト爲ス、但シ諸侯ノ權力、實ニ其領地ニ及ボスノミナラズ、其率キル所ノ國軍將卒ニ及ビ、其人民ハ、種族ニ於テ、之ヲ區別シ、高等官ヲ以テ其都統ト爲ス、有時ノ日ニハ、國王守衛ノ爲ニ、悉ク國士ヲ徵集シ、各官吏ハ、其大小ニ應ジテ皆其兵士ヲ徵集シ、以テ之レカ指揮ヲ爲セリ、若シ自ラ之ヲ指揮スルコト能ハザルハ、男子若クハ親戚ヲシテ之ニ代ラシム、一各兵ノ食料ハ、皆之ヲシテ自辨セシメ、其兵器、被服ハ政府之ヲ給ス、而シテ其兵器ハ、小銃ノ鹵盾ヲ負フモノアリ、衣服ハ簡素ニシテ、青色、赤色若クハ綠色ナリ、袴ハ皆短小ノ綿布製ニシテ、其色ハ各隊皆差異アリ、帽ハ、

製ヲ用ヒ、或ハ木皮、竹製ナルモノアリ、士官ハ金絲ヲ以テ織布セル絹布ノ外套ヲ着シ、司令官ハ、一人ノ身ニシテ、數種ノ服色アリ、譬ヘハ、一週間ニ於テ、日曜ハ白色、月曜ハ黄色、火曜ハ紫色、水曜ハ綠色、木曜ハ青色、金曜ハ黑色、土曜ハ淡青色ノ服ヲ用ユルカ如シ、但シ耶蘇教徒ハ、其制皆歐洲ニ倣フ、其國軍ヲ出スヤ、必ス先ツ婆羅門僧ヲシテ其日ヲトセシメ、且ツ各兵ヲ潔拔セシム、此時人像ヲ造テ敵ニ擬シ、副官ヲシテ之ヲ斷頭セシメ、一擊ノ下ニ之ヲ兩斷スルヲ以テ吉兆ト爲シ、否ラサレハ凶兆ト爲ス、是レ一般ノ風習ナリト云フ、又最末ノ禮トシテ、出征軍、指揮官自ラ其劔ヲ揮ヒ、其傍ヲ銅鑼及其他ノ諸器ヲ鳴ラシテ以テ各軍ノ發途ヲ祝セリ、盤谷府中ニ兵務局ヲ置キ、全國ノ兵事ヲ掌リ、其局中ニ全國壯丁ノ名簿アリ、最高官吏之ヲ監督セリ、國中ノ兵役ハ、二十一年ト定メ、全國ノ人民皆之ヲ免ル、コトヲ得ス、有事ノ時ニ、悉ク全國兵ヲ徵集セバ、二十万許ヲ得ヘキモ、平時ハ、近衛兵ノ外、之ヲ召集シ、之ヲ訓練セザルヲ以テ、或ハ無

用ノ兵タルヲ免レズ、戰時ニ際シ、近衛兵ヲ各軍ニ分配シ、未タ事ノ至ラザルニ先テ之ヲ教習セシムルニ過キス、而シテ其兵器ノ如キハ、此際之ヲ武庫ニ採リテ以テ之ヲ貸與スルモノナレバ、スニテアル四万口及ビ歐洲ノ廢銃ニ止マルノミ、尤モ兵丁ノ外ニ、多ク象ヲ募集シ、其數少クハ三千頭ニ下ラスト云フ、

渭南河口、盤谷府ノ下巴^{ス、ナン}克南其他ノ近隣ニ於テハ、壤國從前ノ陸軍疆域制法ノ如ク、一ノ屯兵ヲ置キ、平時ニハ、其堡砦ヲ警衛セシメ、戰時ニハ之ヲ守禦スルノ義務ヲ負ハシム、其兵士ハ各司令官ノ旗下ニ屬セズ、一ニ皆特別ノ制ニ仍ル、然レバ其散逸ヲ豫防スルガ爲ニ、身ニ點文ヲ施シ、以テ之ヲ羈束セリ、平時ハ概シテ制服ヲ着セズ、毎日堡砦中ニ在テ、大砲ヲ運轉シ、演習ヲ爲セリ、然レバ射的ヲ爲スヲナシ、

平時各地方ノ州郡ノ大小ニ應シ、皆制服ヲ着セル儘少ノ兵丁ヲ以テ近衛兵ニ充ツ、但シ其服ハ皆粗惡ニシテ、實テ近衛兵タルノ名ニモ背ケリ

ト云フ、又近衛兵中ニ古兵衛兵、新近衛兵ノ目アリ、新古ノ近衛兵ノ士官常ニ相軋轢シテ止マズ、之ヲ要スルニ、近衛二兵ノ倨傲ナル、全國中之ヨリ甚シキモノナシ、古近衛ハ、今日已ニ廢員ナレバ、陸軍ノ特別勤務アルニハ之ヲ使用スルヲナキコト非ズ、新近衛ハ、各種兵ヲ以テ之ヲ編制スト、雖レ甚ク僅少ノ兵ヲ以テ一部隊ヲ成スカ故ニ、數軍團ヲ集合スルモ、兵數極メテ寡ナシ、

新古近衛兵ノ外ニ、王宮近衛兵アリ、其數稍多ク、其俸モ亦少シク厚シ、此兵ヲ分テテ二種ト爲ス、第一ニハ步兵、大約四百人アリ、其制服ノ價甚ク巨額ヲ要シ、其兵器ハ皆スニテアル銃ト爲ス、其指揮官ハ王ノ側衛官ニシテ、悉ク暗黒色ノ上着ヲ服シ、長キ金絲ヲ以テ之ヲ飾レリ、側衛官一人毎日交番シテ王側ニ近侍ス、國王洋服ヲ着用スル大禮ニアリテハ、此側衛官亦其近衛ノ制服ヲ着スルノ例ト爲ス、第二ニハ騎兵、其數步兵ニ比スレハ稍寡少ナリトス、此兵ハ英國ノ部隊ニ擬シ、其名皆同一ナレバ皆

不熟練タルヲ免レズ、此二種ノ兵ハ、王ノ直令スル所ニシテ、勅諭ヲ以テ
毎月交換シテ、宮殿中ニ屯在セリ、古例ニ、若シ事アレバ、國王自ラ銀笏ヲ
吹キ以テ群臣ヲ召集セリ、

凡ソ士官ハ、國中特別ノ榮譽ヲ有スルモノニシテ、王ノ牌官亦之ヨリ出
ツ、然レモ其牌官ハ概シテ各王子、或ハ高等官吏ノ子孫ノミチ登庸セリ、
新近衛ノ部隊ハ、歩兵砲兵及ヒ僅少ノ騎兵ニシテ、砲兵ハアームストロ
ングノ後裝砲ヲ用ユ、

各士官ハ、國王ノ自ラ叙任スル所ニシテ、其各高官ノ旗下ヨリ出ツル所
ノ士官ハ、其高官之ヲ叙住ス、其他新近衛士官ハ、陸軍大臣自ラ其族戚若
クハ屬隸ヲ登用スルヲ得ベシ、將佐ハ、皆舊例ニ勘合シ、各士官ヲ保證
シ、陸軍大臣ヲシテ之ヲ命セシム、古來暹羅國中ニ、陸軍大臣アリシカモ、
陸軍省ナカリシガ、歐人ノ交通開クルニ及ヒテ、始メテ之ヲ設ケ、自後兵
制稍々整頓セリ、

國中、専ラ警察勤務ニ任スル所ノ兵團——憲兵ノ如キモノ——アリ、常
ニ操練ヲ事トセズト雖モ、其演習式ハ、一ニ皆英法ニ仍ル、射的ハ獨リ士
官ノ演習スル所ナリ、

白象ノ郡府中ニ來ルコトアレハ、都人皆以テ祥兆ト爲シ、悉ク在府ノ軍隊
ヲ發シ、奏樂シテ以テ之ヲ祝シ、樂音祝辭、殆ント市街ニ響應シ、歡聲湧ク
カ如シ、樂隊ハ一ニ歐洲ノ式ニ倣ヒ、其樂器亦皆歐洲ヨリ來ルモノトス、
諸兵ハ、平常概チ盤谷ニ在リテ、兵營内ニ屯集セリ、近衛歩兵士官ノ勤務
所ハ、美麗ナルモノニシテ、其中ニ弄球場、及ヒ讀書室ヲ備フ、是ヨリ先キ

ニ、酒肉販賣所ヲ設ケシモ、近來國王之ヲ禁セリト云フ、
海軍ハ、規模亦小ニシテ、汽船十四隻アリ、而シテ其最大ナルモノチ、五千八
百十五噸ト爲スト云フ、砲合計五十一門アリ、

第四章

山田長政ノ小傳

山田長政ハ、日本尾州ノ人ニシテ、通稱ヲ仁左衛門ト呼フ、
或ハ云フ長政勢州ニ生レ、山田邑其廟祝ノ弟子ト爲ルト、
後ヲ單身海外ニ航シ暹羅ニ入リテ逸比留國王ト爲レルモノハ、實ニ斯人ナリ、
長政幼ヨリ倜儻不羈生産ヲ事トセズ、喜テ兵ヲ談シ、議論人ヲ動カス、日
本元和寛永ノ交ニ當リテ、各地有爲ノ商人、争テ交趾、暹羅、東京、東浦塞及
ヒ西洋諸國ニ航シ互市スルモノ、陸續踵ヲ接ス、元和ノ初年駿府ノ商人
瀧佐左衛門、太田治郎右衛門ナルモノ、將ニ海外ニ赴カントス、長政之ヲ
聞キ、與ニ往カント請ヒシカハ、聽カレズ、起程日アリ、長政之ヲ偵知シ、先
發西上シテ、復之ヲ大坂ニ要シ、固ク請ヒテ己マザリシカハ、二人モ亦之
ヲ辭スルヲ能ハス、相携ヘテ台湾ニ至ル、商事己ニ竣リ、將ニ歸帆ヲ揚ン
トス、政長獨リ留リテ二人ニ訣レ暹羅ニ趣ク、

是ヨリ先キニ、日本慶元ノ間、關原及ヒ大坂ノ役アリ、其逋徒亡卒、僞テ商
民ト爲リ、海外ニ航シ、各地ニ横行スルモノ甚ク多シ、時ニ暹羅國王、日本
人ヲ待ツヲ頗ル優ナリ、其城外ニ於テ土地ヲ貸與シ、名ケテ日本街ト稱
ス、是ニ於テ日本人ノ妻子ヲ携ヘテ居ルモノ數百家アリ、此時阿和國兵
ヲ起シ、
或ハ公フ六昆國ナリト、
國內大ニ亂レシカハ、國王之ヲ
憂ヒ、日本人ヲ招キ、問テ曰ク、
聞ク貴邦人、戰陣ニ熟セリト、誰レカ能
ク此内亂ヲ鎮定スベキト、
長政對テ曰ク、
外臣ハ皆羈旅ノ商民、
其數三百餘人ニ過キズ、然レモ國王若シ之ヲ用ユルキハ、請フ囊鍵ヲ屬
シテ以テ命ヲ聽カン、敵兵強シト雖モ、臣等當ニ之ヲ芟除スベシ、
國王喜ビ、日本人ニ約シテ、防キ戰ハシメ、大ニ敵兵ヲ敗ル、
己ニシテ國王、長政ノ才學アルヲ聞キ、乃チ之ニ授クルニ、食邑ヲ給シ、
亞ア國守ノ稱ナリ、
ト稱シ、累遷シテ、太子大傅ニ至ル、幾モナク、封
セラレテ某國王ト爲リ、二万石ヲ領ス、長政、本國人ヲ集メ、校ヲ量リ、職ニ

授ケ、各差アリ、兵士四十人、雜兵百人、輕卒二百餘人、均シク日本ノ軍裝ヲ着シ、鹵簿ヲ嚴ニシ、威儀ヲ盛ニシ、相率キテ、其封土ニ入リシカハ、觀ルモノ震駭セザルハナシ、土人益々長政ノ威武ニ畏服スト云フ、後十一年、述職、王城ニ至リ、留マリテ王ノ側ニ侍シ、政務ヲ輔佐シ、寵眷甚ク厚シ、國王、一日從容トシテ、長政ニ語テ曰ク、予嘗テ之ヲ卿ニ聞ク、和漢帝位皆之ヲ其子ニ傳フ、唯堯舜ハ賢者ニ讓レリ、然レモ賢者豈常ニ之ヲ得ベケンヤ、我國ノ法ハ、兄弟アレハ、之ニ讓リ、之レナケレハ、子ニ傳フ、嫡嗣ヲ乱シ、正統ヲ混スル、予ヨリ始マル、宜シク法ヲ改メテ子ニ傳ヘ、以テ万世ニ至ラン、幼弟一人、當ニ之ヲ佛門ニ入ラシムベシ、ト乃チ之ヲ久留園ノ精舍ニ遣ハシ、髮ヲ削リテ僧ト爲シ、是ヨリ之ヲ各屬國ニ諭シテ均シク之ヲ遵奉セシム、時ニ逸比爾國王已ニ老ヘ、其弟查別爾、已ニ立テ世子ト爲ル、便チ使チ遣ハシテ、王ニ請ヒテ曰ク、臣既ニ立テ兄ノ嗣子ト爲ル、理復タ兄子ヲ改立スヘカラス、臣既嗣ク後チ俟テ、再タビ其子

ニ傳ヘ、以テ王命ニ遵フベシ、ト王大ニ怒リテ曰ク、法重ク人輕シ、人チ以テ法チ廢スルコト能ハズ、勅ニ違フモノハ、罪シテ赦スコトナシ、爾ヲ速ニ兄ノ子ヲ立テ、相共ニ來リテ罪ヲ謝スベキナリ、然ラザレハ、予唯三軍ヲ率キテ罪ヲ問ハンノミ、ト使者復命セシモ、查別爾聽カズ、王益々怒リ、長政ヲ召シテ曰ク、予卿ノ言ヲ用ヒ、法ヲ改メテ嗣ヲ定メ、卿ヲ以テ太子ノ師傅ト爲ス、夫レ師傅ナルモノハ、位尊ク任重シ、苟モ大封無ケレバ、人將ニ之ヲ輕ンセントス、今マ逸比爾國王叛チ謀リ、自ラ滅亡ヲ速ク、卿官軍ヲ率キテ、其城池ヲ取リ、其地ヲ領セヨ、是レ予ノ封スル所ナリ、ト長政跪拜恩ヲ謝シ、即日啓行、手兵五百、官軍二万ヲ率キテ、逸比爾ニ至リ、王命ヲ傳フ、查別爾巴ニ軍備ヲ整ヒ、一戰勝ヲ決セント欲シ、門ヲ開キテ、迎ヘ戰フ、長政諸軍ト共ニ奮闘シ、終ニ之ヲ敗ル、是夜、啜亞查機利ナルモノアリ、逸比爾國王ノ同族ナリ、親ラ長政ノ陣ニ到リ、哀求シテ和ヲ請ヒ、復城ニ入リテ、查別爾ニ説キ、極メテ利害ヲ陳セシカハ、查

別爾之ヲ諾シ、城池ヲ以テ查機利ナシテ、孟留ニ奔ラシム、長政遂ニ城ニ入リテ事ヲ視ル、夙夜懈ラス、號令簡明、民心稍々安ンズ、是ニ於テ其家臣大塚十左衛門ヲ擧ケテ家老ト爲シ、其城ヲ代守セシム、日本ノ士民、皆其麾下ニ屬シ、暹羅人及ヒ逸比爾人二万人ヲ招徠シテ、其臣屬ト爲ラシメ、各々官ヲ授ケ俸ヲ給シ、差アリ、長政親兵二千餘人ヲ率キ、其行列ニハ、日本式ヲ用ヒ、射ヲ緋威ノ鎧ヲ着シ、鉞形ノ冠ヲ戴キ、鹿車ニ乗シ、近臣左右ニ扈從シ、大軍前後ニ擁護シ、鏡角ヲ吹キ、鉦鼓ヲ鳴ラシ、和スルニ凱歌ヲ以テス、万民群集シ、耳目ヲ驚カス、王城ニ至ルコ及ヒテ、長政入觀シテ恩ヲ謝シ、且ツ征討ノ實蹟ヲ詳陳セシカバ、王大ニ喜ヒテ曰ク、卿ノ武畧衆ニ超ユ、暹羅人ノ及フベキ所ニ非ズ、ト是レヨリ益々尊重ヲ加ヘ、日ニ左右ニ侍シ、万機必ズ先ツ長政ニ詢諮シテ決スト云フ、

是時、暹羅世襲ノ宰相惠利宇ノ國主高漢カハ、長政ノ上ニアリ、已ニシテ國王不豫ナリ、ガ、王自ラ其起ザルヲ知リ、大漸ニ及ビテ、高漢長政以下ノ重

臣ヲ招キ、之ニ遺諭シテ曰ク、朕病篤シ、今當ニ位ヲ太子ニ傳フヘシ、爾等力ヲ協セ、心ヲ同マシ、太子ヲ輔佐セヨ、國家ノ大事ニ至リテハ、事大小トナク、悉ク成法ニ依リテ施行シ、苟モ變易スベカラズ、以後高漢ハ王城ニ駐マリ、太子ヲ擁護セヨ、長政ハ其封土ニ赴キテ國政ヲ治メヨ、

ト王崩ス、暹羅新王即位ノ元年、長政、遺命ヲ奉シ、王城ヲ發シテ其封土逸比爾ニ赴キ、高漢獨リ王城ニ留マリ、太妃ニ奉侍シ、太子ヲ輔佐シ、百事ヲ裁決ス、高漢ノ寵遇日ニ盛ンニ、太妃、竊ニ之ヲ愛シ、夫婦ノ約アリ、新王時ニ年十三、其事ヲ聞キ、大ニ驚キ、將ニ高漢ヲ召シ、力士ヲシテ之ヲ殺サシメントス、事洩ル、太妃王ヲ招キテ後宮ニ至リ、密ニ心腹ノ宮婢ヲシテ、之ヲ毒殺セシメ、倉皇葬ヲ治メ、新王暴ニ病ミテ死セリト稱ス、國中ニ布告シ、太妃朝ニ臨ミ、親ラ庶政ヲ處理ス、

長政、逸比爾ニアリ、計ヲ聞キ、將ニ馳セテ赴カントス、適々王ノ近臣人ヲ遣ハシテ、來リ告ケテ曰ク、太妃密ニ高漢ニ通シ、新王ヲ毒殺シ、且ツ

立シテ女王ト爲ル。ト長政之ヲ聞キ、大ニ怒リ、義兵ヲ起シテ、内乱ヲ掃除セント欲シ、潛ニ軍備ヲ整フ、女王之ヲ聞キ、大ニ驚キ、其嬖臣長得禍ヲシテ、甘言以テ長政ヲ給カシメ、且ツ曰ク、爾ヲノ子俄印未ク封土アラズ、朕今マ俄印ニ賜フニ、太尼六昆ノ二國ヲ以テシ、逸比爾ト併セテ汝ノ有ト爲ス可ナリト、因テ印狀ヲ給シ、副フルニ二國ニ諭知スルノ全狀ヲ以テス、長政ヲ乃テ命ヲ拜シ、恩ヲ謝シ、因テ筵ヲ開キテ、使者ヲ慰勞ス、長得禍感謝シ、歸リ、次ノ日長政禮謝ノ爲ニ、其館ニ至リシガ、長得禍亦酒宴ヲ設ケテ之ヲ饗シ、長政歡ヲ罄シ、夜ニ入テ歸レリ、長得禍王城ニ至リ復命シテ曰ク、長政己ニ命ヲ奉シテ、恩ヲ謝シ、臣ニ待ツテ殊ニ優渥ヲ極ム、然レモ彼レ敢テ心服スルモノニ非ズ、臣竊ニ以爲ラク、長政ノ唯々トシテ、命ヲ聽クモノハ、其心測リ難シ、且ツ領地愈々大ナルトハ、兵ヲ擧グルコト亦甚ク易シ、故ニ彼レ臣ノ館ニ至リシ時、臣盛宴ヲ設ケ、窃ニ酖毒ヲ置キ、然ルニ彼レ毫モ之ヲ疑ハズ、シテ之ヲ啗フ、三月ヲ出テ、

ヲ必ズ病發シテ死スベシ。ト女王之ヲ聞キ、大ニ悅テ曰ク、果シテ爾ヲノ言ノ如ク、長政ニシテ斃ル、ハハ、朕ハ太尼六昆ノ二國ヲ以テ爾ニ賜ヘ以テ、其勞ニ酬ヘン。ト

是時ニ、長政ハ、其子俄印ヲシテ、印狀ヲ賚ヒ、其封地ニ赴キ、其城邑ヲ収メシム、俄印先ツ太尼ニ至リ、直ニ城ニ入ラズ、先ツ其重臣ヲ招キテ、其令狀ヲ示セシニ、重臣等唯々トシテ命ヲ奉ス、又六昆城ニ至リケルニ、國主香ヲ焚キテ之ヲ迎ヘ、且ツ燈ヲ張リテ宴ヲ設ケ、大ニ俄印ヲ饗ス、俄印因テ六昆ニ駐マリ、其田地戸口ヲ稽查シ、地ヲ相テ城ヲ築キ、號令ヲ發シテ政ヲ施ス。ト

女王二年ノ春、逸比爾國王山田長政、暴カニ薨ス、是レヨリ先キニ、長政病發シ、苦痛日ニ甚シ、醫師曰ク、是レ鳩毒深入シ、臟腑己ニ腐敗セリ、不治ノ症ナリト、長政將ニ死セントスル中、密ニ其家臣ニ告ケテ曰ク、余俄印ノ其封土ヲ治ムルヲ俟テ、然ル後、余ニ義旗ヲ擧ケ、以テ先君ヲ弒スルモノ、罪ヲ問ントセシニ、今ヤ不幸ニシテ、豎子ノ毒スル

所ト爲レリ、余死スルノ日ハ、之ヲ俄印ニ告ケ、余ノ遺志ヲ繼カシメヨト
ト俄印六昆ニアリ、父ノ死ヲ聞キ、且ツ悲ミ、且ツ憤リ、乃チ自ラ誓ヒテ曰
ク、〓俄印不肖、謹テ亡父ノ遺命ヲ奉シテ、不天ノ讎ヲ報セン〓ト
俄印、父長政ノ遺訓ヲ奉シ、義兵ヲ起シ、大軍ニ抗シ、連戦利アラズ、六昆ヲ
去リ、艱難苦楚自ラ甘ンシ、東浦塞ニ投シ、兵ヲ借リテ暹羅ヲ攻メント欲
ス、時ニ内乱アリ、俄印奮テ國王ヲ助ケ、然ル後チニ、大ニ爲ス所アラント欲
欲セシガ、不幸ニシテ此地ニ戦死シ、國讐ヲ復スルヲ得ズト云フ、
長政、眇乎タル身ヲ以テ、孤帆千里、暹羅ニ入り、奇勳ヲ海外ニ建ツ、亦偉男
子ナル哉、然リ而シテ、暹羅國王崩シ、太妃不貞、奸邪權ヲ擅コスル時ニ當
リ、長政首トシテ義旗ヲ舉ケント欲シ、宿志未タ成ラスシテ、毒殺セラル
其心事亦悲ムベシ、然レモ英風豪氣、凜々トシテ異域ヲ震動スルモノ今
日ニ至ルマテ生ケルカ如シ、長政其レ何チカ恨ミンヤ、

第五章

暹羅ト日本トノ關係

暹羅ハ、支那ニ關係ヲ有スル所ノ國勢ニシテ、東洋ノ全局ヨリ、之ヲ觀察
スレハ、殆ント安南ニ亞シ所ノ要地ナリ、此要地ニシテ、歐洲強國ノ爲ニ
糧食セラレス、今日ニ至ルマデ、獨立ノ体面ヲ維キタルヲ、寔ニ此國ノ幸
ナリト云フベシ、而シテ、此國ハ、中古以來、我が日本ト共ニ交通往來シ、互
ニ厚誼ヲ全クセシ事アリ、是レ將來東洋ノ聯合ヲ謀ルニ於テモ、最モ其
緊切ノ捷路タルベキナリ、

日本國民ノ暹羅ト交通シテ、互ニ貿易ヲ通シタルハ、文祿ノ頃ヨリシテ、
已ニ文献ノ徵スルニ足ルベキモノアリ、然レモ、是レ蓋シ兩國貿易ノ私
交ニ止マリテ、政府ノ通信ニハアラザリシガ如シ、日本政府ガ、暹羅ト交
際ヲ開キタリシハ、慶長十一年、(明ノ神宗萬曆三十六年、即チ西曆千六百
八年ナリ)九月將軍德川家康ガ、暹羅商船ノ船主ニ附スルニ、暹羅國王ニ

贈ルノ書簡ヲ以テ、我カ軍器、鎧三領、長太刀十柄ヲ贈リ、鐵砲ト奇楠トヲ
求メタルニ始マレリ、次テ十四年ニ至リ、再クヒ本多上野介(正純)ニ命シ
テ、書ヲ送ラシメタルコ、暹羅國王モ亦使節ヲ派シテ書ヲ寄セ物ヲ贈リ、
以テ厚意ヲ通シタリ、

爾後兩國ノ人民相互ニ往來シ、其使節ヲモ時々來リテ、將軍ニ謁シタリ
シガ、元和七年(明ノ喜宗天啓元年)八月、暹羅ノ兩使、江戸ニ來リテ誓願寺
ニ宿シ、九月朔日登城シテ將軍秀忠ニ謁見セラレタリ、次ニ同キ九年閏
八月二日、前將軍秀忠ニ謁シ、同シキ三日伏見城ニ於テ、新將軍家光ニ謁
シタリ、寛永六年(明ノ思宗崇禎二年)九月ニハ、三人ノ使節、江戸ニ來リテ、
康徳寺ニ宿シ、同シキ十九日ニ登城シテ、將軍ニ謁シタリ、

又駿府記ニハ、十六年八月、長岡越中守、獻象牙、白絹、孔雀、豹等暹羅國商船
故ナリトアルヲ見レハ、諸侯ニモ亦通船ヲ許サレタル事ト知ラル、又十
七年七月晦日、暹羅國商客船頭、猷段子、緋羅、鮫皮等、因令問諸國蠻夷之物

語トアルニ據レハ、商客船頭等ハ、駿河ニ至リテ、前將軍家康ヨリ訪問セ
ラレタル事アリシト見ユタリ、

其後、明曆二年、明ノ永明王永曆十年(五月暹羅ノ使節來リテ國書ヲ捧
ケタレト)是ヨリ先キ、寛永十三年ニ、將軍家光、非常ノ英斷ヲ以テ、鎖國ノ
國是ヲ實行シタルニ依リ、之ヲ却ケテ受ケザリシ、暹羅ト通交ハ、此ニ至
テ絶ヘタリ、(世ノ論者、或ハ家光ガ鎖國ノ主義ヲ實行シタルヲ以テ、海外
貿易ヲ行スルハ、開國ノ交ヲ繼スルノミ、蓋シ當時ニアリテ、鎖國ノ
政事ニ非ザレバ、斷シテ之ヲ行フコト能ハズ、家光ノ此英斷ヲ施シタル
ハ、深ク我國ノ大計ニ於テ慮ルモノアリテ、然ルナリ、唯達識者之ヲ知ル
見ナルソ、何等ノ守株膠柱、政畧ヲ以テ、家光ヲ罪スルハ、何等ノ謬
邊羅トノ通交ハ、遂ニ斷絶スルニ至リシガ、通商ニ至リテハ、家光之ヲ許

シタルヲ以テ、其商船ハ、時々長崎ニ來リシガ、貿易ノ利ナキニ從テ、同シ
ク絶ヘ果テタリ、蓋シ其通商ノ盛ナリシ頃ニハ、暹羅ニ日本街アリ、妻子
ヲ携ヘテ、居ルモノ數百家アリシトノ事ナリ、其暹羅ニ於テ最モ其名ヲ

著ハシタルモノハ、尾州（一）或ハ勢州ニ生ルトモ云フ（二）ノ山田仁左衛門和泉ノ木谷久左工門、長崎ノ津田又左工門、播州ノ天竺徳兵衛等ニシテ、此等人士ノ事蹟ハ皆今日我國ノ人口ニ膾炙スル所ナリ、暹羅ノ我國ニ舊交アルモノ、此ノ如シ、然ルニ中間其交通ヲ絶ナシテ二百年ニ及ビタリ、而シテ明治廿一年（千八百八十七年）ニ至リテ、其絶ヘタルヲ繼ギ、再クビ交通ヲ得ルノ期ニ至レリ、

第四篇

緬甸史

第一章

國朝ノ興亡

緬甸ハ、暹羅ノ西ニアリ、印度ト相接ス、國內、初メ緬甸、阿臘干北求ノ三分レ、各相攘奪シ、緬甸害ヲ受クル最モ甚シ、西曆千六百年、緬甸人、兵ヲ率キテ北求ヲ征服セリ、其後千六百九十六年、北求、荷蘭ノ兵ヲ藉リ、緬甸ヲ攻メテ、連戰連捷、其首都阿瓦ヲ衝キ、國王、底布里ヲ擒ニシ、緬甸ノ全地ヲ擧ケテ、其有ト爲セリ、未タ幾ナラスシテ、緬甸人、義兵ヲ招集シ、阿瓦ヲ恢復シテ、盡ク舊地ヲ収メ、遂ニ師ヲ出シテ北求ヲ征服セリ、國王山巴領位ニ嗣クニ及ビテ、北求復ク叛キ、兵ヲ擧ケテ、緬甸ニ抗ス、山巴領親ラ之ヲ征シ、勝ニ乘ジテ暹羅ヲ取ル、後ハ暹羅ノ爲ニ破ラレ、僅ニ麻刺加以西沿海ノ數地ヲ存スルノミ、山巴領卒シ、其弟皿底拉尼勃老嗣キ、又阿臘干

ヲ併セテ、一國ト爲シ、更ニ加查爾加色等ヲ取リ、兵威頗ル振フ、是ヨリ先
 キニ英國人己ニ印度ニ蟠據シ、商會ヲ置キ、其地ヲ統制セシカ、千八百十
 六年ニ至リテ、恒河以北ヲ取ル、印度一億六千万ノ人民、盡ク英國ノ羈
 ヲ受ク、英人尙ホ自ラ慊ラスシテ、將ニ榜加拉灣ヲ取ントス、千八百二十
 六年、英人遂ニ印度兵一万余ヲ以テ、緬甸ヲ攻メ、ガ、緬人自ラ負ミテ英人
 ナ、蔑視シ、王親ヲ兵ニ將トシテ邀ヘ戰フ、英人軍艦ヲ率キテ内港ニ入り、
 進ミテ緬軍ヲ砲撃シ、大ニ之ヲ敗リ、聲言シテ曰ク、直ニ長驅シテ阿
 瓦ヲ取ン、ト國內ノ諸城、風ヲ望ミテ降り、卑辭シテ求メ、阿臘干
 麻爾古等ノ地ヲ以テ埔頭ト爲シ、且ツ償金ヲ出シ、英國公使ノ京城ニ駐
 劄スルヲ聽シタリ、緬人愚妄ニシテ事ヲ辨セズ、尙ホ堅柵重濠ヲ負ミ
 テ英人ヲ蔑視ス、千八百五十二年、復タ英人ト不和ヲ生シ、每戰利アラズ、
 復タ南境ナルヤンコワン等ノ地ヲ割キテ英ニ與ヘ、和ヲ講シタリ、其後
 始メテ都ヲ紅營ニ遷セリ、即チ今ノ王城ナリ、己ニコレヲ又英人

ノ爲ニ北東ノ全地ヲ併有セラレ、事載セテ印度史ニアリ、參觀セヨ、今王
 提保諸王子ヲ殺シテ位ニ登リ、盡ク諸王子ノ眷屬子女ヲ殺シ、前王ノ正
 妃ヲモ、幽シタリ、其暴戾ナルヲ亦甚シトス、千八百八十五年、我が明治十
 九年、英國ト隙アリ、遂ニ悉ク上緬甸ノ全地ヲ擧ケテ英國ノ有ニ歸シタリ
 初メ提保ハ、英軍ノ將ニ境上ニ迫ントスルニ當リテ、夢ニ臂ヲ焚カレタ
 ルヲ見テ、必定英軍ニ勝ツベシト妄信シ、偏ク臣下ニ令シテ盛宴ヲ張ラ
 シメタリ、且ツ王及ヒ其妃ソビアナハ、我國ニ佛法アレハ、敵ニ當ルノ諸
 將ハ、必ズ英軍ヲ敗リ、盡ク之ヲ追逐シ、前キニ侵奪セラレタル地モ、殘ラ
 ス回復シテ、再タビヤンコワンニ王城ヲ建立スベシト確信シ、毎地地圖
 ナ披キテ、ヤンコワンノ何レノ地ノ最モ形勝ニシテ、宮殿ヲ建テ、車駕ヲ
 駐ムルニ足ルベキカヲ籌思シテ、餘念ナキノ有餘ナリシト云ヘリ、此報
 ノ一タビヤンコワンニ達スルヤ、同地ノ英人ハ、捧腹セザルモノナク、一
 イムス、新聞記ノ如キ、戲謔ノ文ヲ草シテ曰ク、若シ緬甸王、及ヒ王妃

ノヤンコワンニ惠臨セラレ、トアラフハ、我英人ハ欣喜セザルモノナカ
ルベシ、我々ハ、已ニ駐駕ノ場所ヲ用意セリ、他ナシ、ヤンコワンノ大樞是
レナリ、若シ其室ノ陋隘ニシテ、住居セラル、トナ肯ンセズンハ、印度孟
買ニ新築ノ大獄アリ、王及ヒ王ノ遊態ニ供スルニ足ラン——ト後ナ果
シテ其言ノ如シ、蓋シ「タイムス」記者ノ言ハ、固ヨリ慘虐ニ過キタルカ如
シト雖、緬甸王ノ迷妄モ亦甚シカルベシ、兵敗レ地割カレ、將死シ城陷
リ、大軍境ヲ壓シテ、滅亡旦夕ニ迫ルモ自ラ其危キヲ知ラザルニ至リテ
ハ、言語ニ絶シタル事ナリト謂ハザルベカラズ、

現今緬甸ノ人口ハ、大約八百万ナリ、之ヲ土地ノ廣袤ト天然ノ富源トニ
比スレハ、實ニ微々タリト云フベシ、下緬甸ノ耕地ハ、總地積ノ十分一ニ
過ギズ、而シテ上緬甸ニ於テハ、耕地ノ總地積ニ對スル比例、尙一層少ナキ
ヲ見ル、蓋シ同國ノ人口ハ三百年前ニハ、現今ノ四五倍アリシナレ、第
十六世ノ末造ニ當テ、紀綱紊亂シ、戰爭大ニ起リ、爲メニ人口ト國力トヲ

毀損スルヲ甚シカリシカ、爾後引キ續キテ、民生ヲ安スルノ日ナカリシ
ヲ以テ、遂ニ既倒ノ國勢ヲ挽回スルヲ能ハズ、在昔今日ニ至レリト云フ、
〔緬甸ト支那トノ關係如何ハ、事載セテ、支那帝國史後篇ニ在リ、故ニ重テ
テ之ヲ贅述セズ、朝鮮、安南、暹羅、及緬甸ノ小史ハ、考證頗ル疎ナルヲ免レ
ス、他日更ニ閑ヲ得テ詳述スルヲアルヘシ〕

第二章

緬甸ト英國トノ關係

其國ハ、廢敗シ、其政ハ紊亂シ、百事殘忍狂暴ヲ以テ、無辜ノ良民ヲ支配セ
ル、緬甸ニシテ、英國ノ附庸ト爲ルニ至ル、亦當然ノ勢ノミ、

蓋シ英國ノ緬甸ヲ占領スルニ至リタル所以ノモノハ、(第一)貿易上ノ形

勢ニ於テ己ムベカラザルモノ是レナリ、余之ヲ聞ク、千八百八十三年ノ事ナリキ、印度政府ハ、アスサム地方ニ鎮道ヲ敷設スヘキ便道ヲ發見セシカ爲ニ、同地ノ東南部ヲ測量セシメタルヲアリシニ、委員ハ進テ緬甸ノ疆界ヲモ測量シタリ、其測量中ハ、種々ノ艱難辛苦ニ遇ヒ、疆域ニ彷徨スル群盜ノ爲ニ、攻撃セラレシコモ亦屢ナリシガ、盡力ノ効、遂ニ空シカラズシテ纔カニ、二百ヤルド乃至二百四十ヤルドノ隧道ヲ要スルノミニテ、極メテ容易ニ開鑿スヘキ便道ヲ發見シタリ、而シテ兎ニ角ニ、此鐵道ヲ大成スルマデハ、必ズ其剽掠人ヲ一掃シテ緬甸ニ侵入セザルベカラズ、是レ貿易上ノ關係ニ於テ、緬甸ヲ占領セザルヲ得サル所以也、且ツアスサム地方ハ、貿易ノ外ニ、更ニ緊切ナル關係アリ、即チ兵零的ノ位置是レナリ、元來英領印度ト露國ノ領地トハ、相距ルヲ甚ク遠カラズ、露國ハ、日ニ南方ノ鐵道ヲ延長シ、阿富汗ニ説キテ鐵道ヲ敷設シ、以テ英領印度ノクエツタ線路ト連絡ヲ通セントセリ、之ニ加フルニ、支那ハ、非

常ノ進歩ヲ爲シ、運輸交通ノ便ヲ改良スルノ利益ヲ知り、又鎮道ノ敷設ハ國中ノ財源ヲ發達シ、兵備及ヒ商業ニ於テ、一日モ欠クベカラザルノ必要ヲ感スルニ至レリ、苟モ清國ニシテ益々鐵道ヲ延長スル時ニハ、緬甸地方モ亦將ニ其影響ニ由テ隆盛ニ赴クベシ、何ゾヤ英領印度ト支那帝國トヲ聯結セント欲セバ、必ズ道ヲ上緬甸ニ借ラザルベカラザレハナリ、是レ兵零上ノ關係ニ於テ、緬甸ヲ占領セザルヲ得ザル所以也、若シ英國ニシテ、鎮道ヲ敷設セント欲セバ、亦上緬甸ニ依ルベキハ、必然ナルベシ、何トナレハ、此道ニ頼リテ、鎮道ヲ敷設スル時ハ、其障礙極メテ僅少ナルノミナラズ、亦容易ニ之ヲ排除スルヲ得ベケレハナリ、之ニ反シテ、ハラマブートラノ海岸ニ沿ヒテ鎮道ヲ布設セバ、人口稀少ニシテ、管ニ其費用ヲ償フニ足ラザルノミナラズ、道路險峻ニシテ、殆ント之レカ開鑿ヲ望ムベカラズ、且ツ支那ノ鎮道ト、其連絡ヲ通スルニ於テ、最モ困難ナルベシ、是レ上緬甸ノ地ハ、貿易上ヨリスルモ、兵零上ヨリスル

モ英國ニ取リテ最モ緊切ノ關係アル所以ニシテ占領ノ已ムベカラザル所以ナリ

要スルニ緬甸ノ地タル一面ニハ印度帝國ヲ防衛スル保障ト爲リ一面ニハ支那ト聯結スルノ要道ト爲リ且ツ其利源ハ英國ノ庫中ニ入ルヤ疑テ容レサルナリ美肉前ニアリ人之ヲ知ラス英人ノ狼慾壓クヲ知ラサルモノ之レヲ奈何ツ雲烟過眼ニ付シ去ルベケンヤ其國ヲ以テ附庸ト爲シ其王ヲ以テ囚奴ト爲シ鯨食ノ心ヲ満足セシムルニ至レルモノ固ヨリ異ムニ足ラサルナリ之ヲ聞ク上緬甸ノ地ニ入リタル英人ノ說ニ據レハ同國ハ土地沃饒ニシテ金銀極メテ多ク珠玉寶石河流ノ砂礫中ニ充滿セリト其言ヤ過甚ナルガ如シト雖モ百カロリエント十安南トナ併セタル一大王國ナレハ將來其財源ヲ利用スルニ於テハ蓋シ亦印度ニ亞グ所ノ沃地富庫ト爲ルベシ野史氏曰ク緬甸ハ唯メ是レ自滅セシノミ亞細亞諸國ノ將來ヲ慮ルモノハ雄遠ノ長計ヲ一定シテ以

テ其獨立スヘキモノハ之ヲ獨立セシムル其分割スベキモノハ各々之ヲ分割シ勇毅剛邁ツ氣象ヲ屬マシテ歐米人ト對峙スルノ道ヲ講セザルベカラズ其方畧ハ此ニ論スベキニ非ズ別ニ論述スルヲアルベシ

亞細亞小國史 終

明治二十八年八月廿一日 登錄
自第一卷第五編六編

版權所有

明治二十八年十二月十八日

印刷

明治二十八年十二月十九日

出版

島根縣出雲
國平田町
森脇勝彌館

編輯者
野口竹治郎

東京市日本橋區本町
一丁目十二番地

印刷者
宮本敦

東京市京橋區銀座
二丁目十二番地

發行所 博文館

東京市日本橋區本町三丁目

萬國歷史全書第五編(廿三年一月十日發兌)廣告

土耳其史

印度土耳其諸國圖(石版)插入

附小亞細亞、埃及及波斯、亞刺比亞各國史

魏猶百萬一國ヲ擧ケテ悉ク是レ一大常備軍ヲ成シ煌々タル七星ノ文ハ照リ輝キテ秋霜
ヲ奪ヒ歷山王拿破崙ガ宇内ヲ席捲シタルカ如キ奇捷奇功ヲ見ルモノハ土耳其帝國ノ盛
時ニ非ズヤ君士但丁征奪家史ハめつて第二世ノ雄奪ノ如キ盛帝そりまん第一世ノ鴻業
ノ如キせりひ第二ノ偉動ノ如キハ或ハ亞細亞ノ野ニ或ハ歐羅巴ノ原ニ或ハ亞非利加ノ
地ニ縱橫奮迅獅子ノ常備軍ニ威ヲ振ヒ世界ノ英雄豪傑ヲ其膝下ニ蹂躪セリ其兵士ノ悍勇
ナル今日普佛ノ常備軍ニ讓ラザルモノハ是レ亦土耳其帝國ノ衰時ニ非ズヤ今日五城ヲ割キ
一幅晚秋ノ光景ヲ畫キ出ダスモノハ是レ亦土耳其帝國ノ衰時ニ非ズヤ今日五城ヲ割キ
明日十城ヲ割キ先王ノ辛苦經營ヲ獲取シタル版圖將ニ盡キントス赴テ境上ヲ視レハ
驚影空ニ綴リ猛火天ヲ焦ガス噫盛衰常ナシ福地ヲ參觀シ土其史ヲ著ハス其文雄絶ナル處
耳其帝國史ナリ北村紫山氏東西古今ノ群書ヲ參觀シ土其史ヲ著ハス其文雄絶ナル處
トス鳴呼世ニハ荒破村ヲ賦絶スルニ倍ノ烟絶ヲ添ヘ風雲筆底ニ遊ハス其文雄絶ナル處
志士ヨ何ヲ播キテ其壯快ナル活劇ヲ見ザルヤ何ア鐘メ萃テ摘ミタルモト爲リ近世史ニ
又土耳其史ニ付スルニ小亞細亞即チ巴比倫及西里亞史猶太史腓尼西亞史アリ埃及史
アリ波斯史アリ亞刺比史ニ細亞即チ巴比倫及西里亞史猶太史腓尼西亞史アリ埃及史
ムモハ忽チニ文化藝術的ノ歴史ト著書ノ精ニシテ戰勝功名ノ歴史ト爲リ近世史ニ
テ航海貿易ノ歴史ト爲リ忽チニ文化藝術的ノ歴史ト著書ノ精ニシテ戰勝功名ノ歴史ト爲リ近世史ニ
切齒扼腕措シテ見ルニ足ラシムトシテ掌中ノ各國ノ興亡隆替ハ勿論其政治風俗宗教哲學
易生活等ヲ見ルニ足ラシムトシテ掌中ノ各國ノ興亡隆替ハ勿論其政治風俗宗教哲學

博文館雜誌大改良廣告

明治ノ天地モ亦將サコ一年ヲ加ヘテ人事進歩ノ程度漸ク一轉セントス、我博文館ハ此ノ活勢ニ推迫セラレテ依然舊態ニ安ンズルヲ好マズ、舊來發行セル處ノ日本之時事、日本之商人、日本之殖産ヲ合シテ**富國**トナシ、やまど錦、日本之文學ヲ合シテ**日本之文華**トナシ、日本之警察ハ**日本之法律**ニ合シ、日本之教學ハ**日本大家論集**ニ合シ(日本ノ少年ハ紙數ヲ倍加ス)悉ク其体面ヲ一新シ且ツ更ニ高尚精良ナル新雜誌ヲ發刊セントス、是レ分散セル衆力ヲ

統合シテ大ニ誌上全体ニ大改良ヲ加ヘンガ爲メナリ、而シテ之ヲ爲サントスルヤ主トシテ野ノ政治家實業家及學士名家ノ輔翼贊助ヲ得テ、議論記事共ニ益々雄偉精確ナラシメ、殊ニ價格ハ一般ニ其割合ヲ低廉ニシ、紙質ヲ精撰シ、印刷ヲ鮮明ニシ、以テ大方ノ眷顧ニ酬エンコトヲ期ス、抑モ我博文館カ雜誌書籍ノ營業ニ於ケル技術ト地位トハ江湖諸君ノ既ニ明知セラレ、所、今ヤ其全力ヲ擧ゲテ雜誌ノ改良ヲ行ヒ更ニ活勢ノ進歩ニ先ンセントス、其結果ノ如何ハ從來愛顧ノ諸君及ビ將來愛顧ノ諸君希クハ廿三年ノ初刊ヲ待テ之ヲ判セヨ

副白來廿三年一月初刊ノ本館諸雜誌ニハ左ノ美麗ナル大附録ヲ呈スベシ
明治廿二年略曆七福人圖入石版密刻七色摺

●七福人ハ東京高名畫師芳年、月耕、清親、年恒、年方、周延、耕一、七氏合作
 ●日本之法律、日本大家論集、日本之少年、江戸會誌、四雜誌ハ來一月、初刊ヲ以テ總テ第貳卷第壹號トシ、富國及日本之文華ノ各雜誌モ半ク年毎ニ總目錄ヲ別ニ印刷呈上スベシ、且ツ掲載ノ記事モ一ク年毎ニ完結セシメ合本等ノ便利ヲ計ルベシ

政治經濟
 社會商業
 農業工業

富國

每月二回
 (一日十
 五日)發
 兌一冊紙
 八十頁

日本之時事 日本之商人、日本之殖産ノ三誌ハ本誌ニ合併ス
第壹號 明治廿三年一月一日發兌

正價一冊金八錢六冊(三ヶ月分)前金四拾五錢十二冊(半年分)前金八拾五錢
 廿四冊(一ヶ年分)前金壹圓六拾錢郵便稅一冊一錢宛
 千古未會有ノ盛事タル國會ハ來年ヲ以テ開カルヘシ、明治廿三年ハ實ニ政治ノ世界ナリ
 實業進歩ノ明鑑タル大博覽會モ亦來年ヲ以テ開ラカルヘシ、明治廿三年ハ又實ニ實業ノ世界ナリ、政治家ノ眼中實業ナカルヘカラス、實業家ノ念頭政治ナカルヘカラス、我富國ハ實ニ此ノ活世界ニ應センガ爲メ生レタルモノナリ、其本質ハ則チ日本之時事(政治雜誌)日本之商人日本之殖産(實業雜誌)ヲ合併化成セシモノニシテ、商工業上ノ論說事實ヲ掲ゲ、政治、經濟、財政、社會、文學上ノ是非批評ヲ公ニシテ、以テ政治家實業家ノ親切精細ナル相談役トナリ、剴切明快ナル忠告者トナリ、日本國富ノ増進ヲ補助セントス、其編輯ハ固ヨリ館員滿腔ノ熱心ニ成リ、且切實ナル經驗ト、深淵ナル學識ヲ朝野ノ名士學士ノ扶助アルヲ以テ、其ノ若眼ノ奇警ナル、其立論ノ剴切ナル、其記事ノ精確ナル、敢テ江湖ニ保証スル所ナリ、苟モ我國現今ノ政治界實業界ニ眼光ヲ注シモノハ、請フ我富國ヲ愛讀セヨ

富國編纂綱目

- (背) 富國像
- (特別寄書)
- (講談)
- (史傳)
- (商業)
- (工業)
- (農業)
- (問答)
- (漫批)
- (雜誌)
- (統計)
- (評書)
- (時寄)

每號內外政治家與業家殖產家ノ石版肖像ヲ掲載ス
 本欄ニハ主任者及館員ノ起草セシ論文二三題ヲ掲載ス
 本欄ニハ學士大家名士ノ高論卓說三四題ヲ掲載ス
 政治家實業家ノ演說筆記モ本欄ニ掲載ス
 經濟財政並ニ農工商業上ノ講義ヲ掲載ス
 政治家實業家殖產家ノ傳記又ハ商工業上ノ沿革由來ヲ掲載ス
 貿易銀行會社金融等ノ事項及ヒ内外商業界百般ノ事項ヲ懇切正確ニ掲載ス
 紡績織物美術製造技藝等工業ニ關スル新說及百般ノ事項ヲ平易ニ掲載ス
 農業水産牧畜山林蠶絲等ノ事項及ヒ殖產業ニ關スル内外百般ノ事項ヲ掲載ス
 商工業上ノ事項及ヒ財政社會上ノ問答ヲ掲載ス
 時事ニ關スル諷世ノ言ヲ掲載ス時々狂書ヲ挿入スルヲアルベシ
 新刊書籍雜誌新聞ノ批評ヲ簡明正確ニ掲載ス
 實業政治ニ關ヒテ汎ク内外古今ノ奇事異聞ヲ登錄ス
 實業上有益ノ雜件ヲ掲載ス
 實業上政治上ノ統計ヲ掲載ス
 江湖南士ノ寄稿一二題ヲ掲載ス
 時事ノ要件ヲ壯快ニ論評ス
 外ニ(時事日抄)(輿論一斑)(物價)
 (時寄)要件ヲ壯快ニ論評ス

●富國第一號ニハ美麗ナル零曆ノ外ニ左ノ附録ヲ呈スベシ

日本新内閣各大臣ノ石版肖像

日本新内閣各大臣列傳 紙數二十余頁 紫山北村君得意ノ筆ヲ以テ編述ス

日本之文萃

毎月二回 三日十日 八日一發 兌一冊紙 數八十頁 每卷密書 挿入

第壹號 明治廿三年一月三日發兌

やまとい錦、日本之文學ノ二雜誌ハ本誌ニ合併ス
 正價一冊金八錢六冊(三ヶ月分)前金四拾五錢十二冊(半年分)前金八十錢廿四冊(一年分)前金壹圓六十錢郵稅一冊一錢宛
 明治ノ文學ハ美平醜平大平小平我日本之文華ハ明治文學ノ花ナリ其花ノ爛漫タル愛スベキ乎愛ス可ラザル乎具眼ノ君子希クハ之ヲ看ヨ我文華ニ掲グルモノハ重モニ當時文學ノ名流タル諸君子ノ錦心繡腸ヨリ吟出テタルモノニシテ傍ラ古時文壇ノ奇才タル人士ノ佳篇ヲモ加ヘ文學ニ關スル評論及ビ小説文章詩歌俳句謠曲ヨリ史傳逸話等ニ至ル迄凡ソ文學上ノ趣味アルモノヲ精英秀絶ナルモノハ之ヲ摘ミ之ヲ蒐メテ一幅眞成ノ文華ヲラシム其編纂綱目ハ左ノ如シ

●論說 ●詩壇 ●歌園 ●俳林 ●文苑 ●小說 ●逸話
 ●雜錄 ●史傳 ●寄書 ●小品 ●閨秀才藻

日本之法律

每月一回(五日)發兌
廿三年一月ヨリ紙數二十頁ヲ増シ
一册紙數壹百頁 每號法律大家
石版背像入

第二卷第壹號 明治廿三年一月五日發兌

(日本之警察ハ廿三年一月ヨリ本誌ニ合併シ且ツ號數ハ第二卷第一號ト改ム)

定價一册金拾錢六册前金五十七錢十二册(一ヶ年分)前金一册八錢郵稅一册一錢

帝國憲法制定セラレテ國家臣民ノ權利義務ヲ明ニシ市町村制實施セラレテ地方自治ノ基礎成ルル況ンヤ帝國立法ノ府タル帝國議會モ將サニ明年ヲ以テ開設セラレントス實ニ今日ハ國民ニ法律制定ノ參與權ヲ得百般ノ法律ハ若クハ改正セラレテ日本帝國人民ヲ完全無欠ナル政治國ノ下ニ支配セントスル際ニ於テ治者被治者トモニ法律思想ノ涵養ヲ要スルヲ固トヨリ論ナク此等ノ需要ニ應ズルコトヲ目的ト爲ス所ノ我日本之法律ノ如キハ亦一大改良ヲ行フヲ以テ社會ノ進化ニ伴ヒ讀者ノ恩顧ニ報セザル可ラズ從來我日本之法律ハ各國ノ法理ヲ研窮ノ之ヲ我法學社會ニ應用シ益々其進步ヲ謀ルモノニ積年ノ希望ヲ滿タスモノナリ於此益々發奮興起シテ大ニ材料ヲ精撰シ記事ヲ正確ニシ高尙ニ馳セズ卑近ニ陥ラズ廣ク法學社會ニ雄視スル諸大家ニ論文ノ起草ヲ請ヒ以テ紙面ヲ一新シ且ツ從來日本之警察之法律ニ合併シテ其警察上ニ係ル論說本誌ニ發見シ來リシ日本之警察之法律ニ合併シテ其警察上ニ係ル論說シカチ一併シテ完結ト爲サンコトヲ期ス畢竟法律ト警察トハ密接ノ關係ヲ有スルベカラズ是レ之ヲ別チテ流レベカラザルモノミナラズ法律家亦警察ヲモ研究セザルベカラス爲ニ大ニ紙數ヲ増スト雖モ定價ハ依然舊ノ如クシテ從來日本之法律及日本之警察ノ讀者諸君ノ恩顧ニ報セントス伏シテ請フ倍舊ノ寵ヲ賜ハラントトス

日本大家論集

每月一回(十日)發兌
廿三年一月ヨリ紙數三十頁ヲ増シ
一册紙數百五拾頁

第二卷第壹號 明治廿三年一月十日發兌

(日本之教學ハ廿三年一月ヨリ本誌ニ合併シ且ツ號數ハ第二卷第一號ト改ム)

定價一册金拾錢六册前金五十七錢十二册(一ヶ年分)前金一圓八錢郵稅一册一錢

十九世紀ノ社會ニ於テハ學術萬丈ノ光輝ヲ發ス日本大家論集(學士ノ名論)發學術上ノ發明記事等ヲ蒐集セルモノニシテ其價值ニシテ而シテ讀者ヲ益スルコト多ク又其裝部數多キヲ實ニ當今雜誌社會ノ最良トシテ又日本之教學ヲ合併シ紙數ヲ増シテ百五十頁ノ海内無雙ノ低廉ナリト爲シ誌上編纂ノ体裁ヲ一新シテ益々學術ノ光輝ヲ發シテ其ノ益ヲ得

本誌改正綱目

- 政學門、法學門、經濟門、天文門、地理門
 - 史學門、文學門、教學門、哲學門、教育門
 - 理學門、衛生門、農學門、工藝門、史傳考證門
 - 詩歌文藝門
 - 內外雜誌門
- (天文 地理 人事 農工 理化 教法 貿易
美術 文事 衛生 兵事 統計 產業 雜事)

日本之少年

第貳卷第壹號 明治廿三年一月一日發兌

正價一冊金八錢六冊(三ヶ月分)前金四拾五錢十二冊(半年分)前金八十五錢
 廿四冊(一ヶ年分)前金壹圓六十錢 ● 郵便税一冊一錢宛

日本之少年ハ日月ト共ニ其隆運ヲ進メ、今ヤ嶄然トシテ頭角ヲ雜誌社會ニ秀出スルニ至
 レリ是レ我少年諸君ガ地位ヲ高メ聲名ヲ發シ來レル徵証ニ非ズヤ、仍テ來年初刊ヨリ
 紙數ヲ倍加シ、記載種目ヲ増加シ、主任者誠實勉強ヲ以テ其編輯ニ從事シ、更ニ多ク學者
 名士ノ補助ヲ仰ギ、又少年諸君ノ意匠慘澹ノ中ニ成レル佳篇ヲ蒐メ、我少年諸君ノクマ
 ニハ啓蒙ノ木鐸トナリ、社會ニ對シテハ少年諸君ノ地位ヲ代表シ、益々實益快樂併セ得
 ルノ好雜誌トナス、其綱目ハ左ノ如シ

- 論說
- 歷史談
- 理學談
- 博物談
- 數學談
- 英學談
- 講談
- 譚園
- 叢談
- 問答
- 遊戲園
- 世事談
- 就學案内
- 群芳集萃

文部大臣從二位榎本武揚公題辭
 宮中顧問官從三位品川彌治郎公題辭

文部大臣秘書官永井久一郎君序文

實地技術百科全書

全部拾貳卷 紙數五千頁
 正價一冊金廿五錢三冊前金七拾二錢六
 冊前金一圓卅五錢十二冊前金二圓五十
 錢 ● 郵便一冊二錢五厘宛
 廿二年六月ヨリ廿三年五月迄ニ完成ス

- 每編 萬國大都會及大建築等之石版密圖挿入ス ● 第八編 一月十五日發兌
- 作文法
 - 漢文和文
 - 普通文
 - 歌之
 - 書法
 - 雄辨法
 - 和漢書法
 - 西洋書法
 - 商用簿記法
 - 俳句
 - 詩作
 - 英語法
 - 音樂法
 - 唱歌法
 - 日本禮式
 - 西洋禮式
 - 茶
 - 活花
 - 園藝法
 - 養蠶法
 - 養鷄秘法
 - 實用染色法
 - 製茶
 - 牧畜
 - 水產
 - 蕃殖製造法
 - 農家心得
 - 家事整理法
 - 和服裁縫法
 - 西服彫刻術
 - 石版法
 - 銅版法
 - 木版法
 - 泰西園藝術
 - 花圃法
 - 果園法
 - 菜園法
 - 洋服裁縫法
 - 毛糸編物法
 - 銘酒釀造法
 - 洋酒釀造法
 - 家庭整理法
 - 防蟻法
 - 陶器製造法
 - 藥物利用法
 - 紡織法
 - 抄紙法
 - 電氣術
 - 寫真術
 - 治金術
 - 建築術
 - 廢物利用法
 - 石鹼
 - 香水
 - 油
 - イソキ
 - 等日用品製造法
 - 煙火術
 - 救荒術
 - 西洋料理法
 - 支那料理法
 - 日本料理法
 - 化粧法
 - 洗濯法
 - 驅蟲法
 - 水上遊戲法
 - 水練法
 - 龍舸法
 - 古代遊藝
 - 貝合蹴球
 - 犬追物
 - 投扇
 - 鷲合
 - 泰西室內遊戲法
 - 玉突法
 - 將棋法
 - 骨牌法
 - 觀相
 - 射法
 - 馬術
 - 體操法
 - 狩獵法
 - 擊劍法
 - 柔術法
 - 治療法
 - 灸法
 - 鍼法
 - 貯金法
 - 儉約
 - 育兒法
 - 看病法
 - 治療法
 - 交際法
 - 體操法
 - 本書ハ農業工業水產山林牧畜等ノ實業ヨリ學藝遊藝家政法等ニ至ル迄荷モ技藝ニ關ス
 ル百般ノ事項ヲ細大網羅シ各專門家ニ囑托編纂シタルモノニシテ今ヤ既ニ全部ノ過半
 ナ發行シ江湖ノ賞賛ヲ博シ數萬部ヲ發賣シ眼ヲ實業教育ニ注クノ士ハ將ニ一讀スヘ
 キモノナリ

吉田鳥尾樞密顧問官品川宮中顧問官五公題辭中川文部大臣秘書官
中村元老院議官並渡邊帝國大學總長田文學士兩君序文

實用新撰百科全書

全部貳拾四卷紙數六千四百頁

定價一冊金拾五錢 六冊金八拾五錢 十二冊金一圓六拾錢 全廿四冊金三圓
郵稅一冊二錢宛 第一編以下欠編ナク取揃居候間何編ニテモ御注文ニ應ズ
總科 ●經濟學 ●政治學 ●法律學 ●財政學 ●行政學 ●社會學 ●統計學 ●憲法 ●歷
史 ●地理 ●商業學 ●農學 ●教育學 ●理學 ●化學 ●生理學 ●論理學 ●倫理學 ●
●心理學 ●哲學 ●動物學 ●植物學 ●金石學 ●地文學 ●天文學 ●歐米學術大
●家傳記並ニ石版肖像及日本地圖萬國地圖(密刻)挿入

告稟成完卷四拾貳部全

●第廿三編 (十二月) ●哲學大意 ●天文要說 ●行政法論綱 ●統計學要論 ●金石學
●廿四編 (十二月) ●哲學大意 ●行政法論綱 ●農業新論 ●金石學 ●統計學要論 ●地文
●新撰百科全書目錄 ●全壹册百卅頁

附博文館雜誌書籍目錄 (十二月廿日發)
總目錄ハ郵稅五錢封入シ御申込次第送附スベシ ●第廿四編御購求ハ諸君へハ
無代價ニテ郵呈ス
本書愈豫期ノ如ク全部大成候ニ付陸續御注文被下度希上候也

英吉利法律學校東京專門學校講師法學士江木衷君著

法律解釋學

全一册 金文字入總卅〇ス
新形洋裝最上美本
定價金五拾錢(初版定價一圓七拾錢)
特別賣價金四拾錢郵稅八錢

●各官衙等ニテ五部以上御注文ノ方ハ特別賣價ノ中更ニ一割々引スベシ
●東京五大法律學校學生諸君並博文館々友諸君ニ限リ全樣割引スベシ
新法日ニ出テ舊律月ニ改メラレ法律專門家モ專門家ナラザル人モ之ガ研究ト理解トノ
爲メニ前後應接ニ違アラザラントス惟フニ限リアル法令ヲ以テ限リナキ世上ノ事物ヲ
支配ス法文如何ニ精細ナリトモ豈ニ能ク一見シテ之ヲ理解シ各場合ニ適用シテ過ナ
キヲ期スルヲ得ンヤ茲ニ於テカ法律解釋學ノ必要生ズ此書ハ法律解釋ノ原理ヲ詳論シ
テ彙キニ世上ノ大喝采ヲ博シ爲メニ洛陽ノ紙價ヲ貴トカラシメタル好著ニシテ法官ト
學生トヲ論ゼズ苟クモ法學ニ志アル諸君ハ共ニ一本ヲ座右ニ備フベキ法典ナリ目下初
版ハ既ニ賣切レ市上亦一本ヲ留メズ古本モ尙ホ現時壹圓以上ニテ賣買セリ需用者ノ督
責頻繁ナルヲ以テ江木先生大ヒニ訂正ヲ加ヘ紙數ヲ増シテ今回弊館ニ於テ再版發行ス
ルニ至レリ印刷製本共ニ初版ニ比スレバ一層ノ美麗ヲ加ヘ價格ハ却テ四分ノ一ニ過キ
ズ(初版ハ他店ニテ發兌セリ是レ本館ノ特有技倆ナリトス伏シテ請フ江湖ノ攻法家舊ニ
依テ高評ヲ賜ハラントナ

●民法 近刻

農商務大臣秘書官法學士江木衷君著

小林雅七郎君著

再版

薩長土肥

全一冊洋裝美本仕立
定價特別價十五錢 郵稅四錢

日本政府ハ薩長土肥人其主權ヲ握レリ日本
政黨ハ薩長土肥人其主權ヲ握レリ日本
往將來共ニ天下ノ一大問題ナリト云フヘシ
本書ハ薩長土肥人ノ特性特格ヨリ觀察テ下
シ之ヲ理論ニ立ツ所以ヲ事實ニ徴シテ天下
主動ノ地位ニ立ツ所以ヲ明カニシ薩長土肥
ノ聯立内閣ニ關シテ上論スル所ノ誤謬ヲ
正シ薩長土肥ノ氣力天下ニ秀テ其政權ヲ四
分スルノ實狀ヲ説キ竟ニ日本將來ノ政事世
界及ビ内閣ノ組織如何ノ問題ヲ忌憚見避セ
ル所ナク論斷セラレシガ如ク其識見卓拔
ノ鏡ノ盤錯ヲ裁ルガ如ク其文章ノ雄壯活
潑ナル光焰萬丈ヲ吐クノ勢アリ荷モ時事ニ
注目シ政治ヲ談スルノ人士ハ將ニ一讀スヘ
キ者也

文士高田早苗君序文

萬國憲法

全一冊四百四十頁洋裝美本
定價金七拾五錢郵稅六錢
特別賣價金貳拾五錢

日本憲法及零史 英吉利憲法及零史
米國憲法及零史 佛蘭西憲法及零史
獨逸憲法及零史 普魯西憲法及零史
和蘭憲法及零史 白耳義憲法及零史
伊太利憲法及零史 西班牙憲法及零史
次 葡萄牙憲法及零史 奧地利憲法及零史
丁 抹憲法及零史 瑞士憲法及零史
本書ハ國會開設ノ期切迫シ志士憲法研究ノ
材料トシテ無比ノ寶典ナリ近來其需用非常
ニ増加致候間増訂再版ノ上初版原價ニ比ス
レハ殆ンド半額ニ引下ゲ候ニ付一層愛讀ア
ラハコトヲ希望ス

四五〇

坪谷善四郎君著

文學十三宅雄二郎君序文

坪谷善四郎君著

再版

政治新論

全一冊紙數三百二十頁洋裝美本
定價金五拾錢郵稅四錢
特別賣價貳拾錢

本書總目次

●第一編國家ノ本義 ●第二編憲法汎論 ●第三編主權ノ意義 ●第四編國家ノ主長 ●
第五編皇位及攝政 ●第六編臣民ノ權利義務 ●第七編帝國議會 ●第八編國務大臣樞
密顧問 ●第九編司法裁判所 ●第十編行政裁判所 ●第十一編歲入出豫算論 ●第十二
編租稅ノ原理 ●第十三編國債ノ性質募集法 ●第十四編官有財產ノ拂下 ●第十五編
會計ノ出納 ●第十六編會計ノ決算 ●第十七編會計ノ檢査 ●第十八編日本國防畧其
一 ●第十九編日本國防畧其二 ●第二十編地方自治體 ●第二十一編地方稅論 ●第二十二編
地方公債ノ性質 ●第二十三編日本過去及現在ノ政權 ●第二十四編日本未來ノ政權
地方制度ハ既ニ實施セラレ帝國議會ハ將サニ開設ニ近ツキ都鄙至ル所政論勃興シ人皆
政治熱ノ爲ニ狂ヒントスルノ今日ニ當テハ粗策誇大ノ空論ノ爲ニ小ハニ一身一家ヲ誤リ
大ハ世上ノ公衆ヲ迷マツ者無キヲ保セズ此書ハ此等政熱ニ逆上シテ迷途ニ彷徨スル
空論者ノ爲ニ熱ヲ醫スルノ清涼散ト爲シ暗ヲ照ラスノ電氣燈ト爲サンコト期シ主トシ
學理上ヨリ前記ノ各項ニ就キ簡明平易ニ論述シタルモノニ議論周到文章簡潔世ノ政
治思想ヲ抱有スル者ハ以テ坐右ノ寶典ト爲ス可ク演壇ニ上ボツテ雄辯ヲ鼓セントスル
者ハ以テ六韜三略ト爲スニ足ルノ好著述ナリ請フ一讀ノ其言ノ誣ナラザルヲ知レ

卜中村義象、丸山正彦、増田于信、落合直文、萩野由之五先生合著

外交

全一冊洋裝美本仕立
正價金廿五錢郵稅四錢
特別賣價金二十錢

本書ハ外交ノ變遷。外國ニ對スル國權ノ弛張。外國ニ關スル彼我人民ノ法律。外國人歸化ノ制。外國ニ關スル土地ノ制。度及所有權。外國人居住地ノ制限。外國人任用ノ例。外交官ノ職制並道外國大使。外國使節接待ノ禮度。日本人ノ外國ニ對シテシテ各種ニ就キ以上ノ諸學士熱心健康ヲ揮ヒ歴史の學術的ヨリ精確ニ論述サレタル好著ニシテ新大維詰ガ黨派ニ偏シテ泛々空論ヲ爲セル者ト同日ニ語ルベカラズ故ニ外交上ニ注目スル人士ハ之ヲ熱讀審思セバ大ニ啓發スル所アルベシ

法制局參事官中橋傳五郎君序 法學士山田喜之助君 閱豐田幾次郎淺野多作兩君合著

証人規則實用

全壹冊 洋裝美本
特別賣價金廿五錢 郵便稅金六錢

世道進歩シ人事日ニ複雜ニ赴クニ隨ヒ諸般ノ取引契約モ亦漸ク頻煩ニ進ムハ自然ノ勢ニシテ而シテ其契約ヲナスニ當リ深ク慎重ノ所無クシテ他日紛議ヲ發生シ裁判訴訟等ノ爲メニ意外ノ經費手數ヲ要スルノミナラス貴重ノ財產ヲ損耗シ權利ヲ屈スルガ如キ事甚ナカラズ故ニ我政府ハ曩キニ公証人規則ヲ制定シ將サニ全國ニ實施セラレントス是レ他日違約等ノ紛爭ヲ防カシガ爲メナリ契約ノ當初ニ該規則ニ準據スルトキハ他日違約者アルモ裁判訴訟等ノ經費手數ヲ要セズシテ直ニ執行シ得ル有要ナル實典ナリ本書ハ實地應用ヲ主トシ正確詳密ナル解釋ヲ加ヘ書式雛形參照等ヲ附シタルモノニシテ全國ノ市町村役場員議員等ハ勿論多少財產ヲ有シ權利ヲ貴重スル者ハ坐右必需ノ要書ナリ

大審院總務長從四位名村泰藏君題辭
司法省參事官法學士江木衷君
控訴院評定官法學士伊藤博治君校閱
坪谷善四郎君著

市町村制

全一冊紙數四百頁余洋裝美本
特別賣價金二十錢郵稅六錢

本書ノ解釋正確詳密ナルハ既ニ江湖ノ定評アル處ニシテ今ヤ第十版ヲ發兌スルニ至レリ曩ニ發兌ノ市町村議員必携ト比較研究セバ地方自治ノ要領ヲ了知スルニ足ルヘシ價格ノ低廉ナルヤ又非常ト言モ可ナリ

帝國文科大學教授內藤耻叟先生著

國體發輝

全一冊洋裝美本仕立
特別賣價八錢郵稅二錢

此ノ書ハ內藤先生ガ得意ノ歴史上ヨリ論下シテ日本ノ國體ヲ明カニシ土地所有人民ノ祖先教化ノ本衣食ノ原等ノ他國ト異ナルコトヲ詳論サレシモノニシテ論據著々實ニ據リテ空ニ流レズ今ヤ我が日本モ世界ト對峙シテ國體國權ノ論益々盛ニ學者多ク心ヲ茲ニ傾ケルニ至レリ去レバ本書ノ如キマタ其ノ參考ニ資スヘキモノニシテ之ヲ讀ムモノハ以テ我が國體ノ如何ヲ辨知シテ大ニ愛國忠君ノ情ヲ發輝スベシ世ノ志士學者一本ヲ購フテ之ヲ通讀セヨ

巖谷一六先生題 內山正如君著

實地 活用品用 日本文法

全一冊紙數二百五十頁洋裝美本
特別賣價金二十五錢郵便稅六錢

普通用文●商農工業用文●女子用文●記事體禮體辭文例●和文例●羅馬字之用法●插花茶式之必得●和洋諸禮式●古語金言錄●諸學術大意●古今壯吟●料理及製造法●日本三景石版圖●世界名所石版圖●本書ハ實用應用ヲ主トシ編纂シタル萬民坐右ノ寶典也

樞密院顧問官正三位品川彌二郎公題辭
兩毛鐵道會社副社長木村半兵衛君序文
大日本織物協會々員須永金三郎君著

日本織物誌

附 實用和洋染色法
全一冊二百五十頁洋裝美本
定價四拾錢郵稅四錢特別賣價廿五錢
本書ハ本邦古來ヨリノ織物ノ沿革製織法ヨ
リ各府縣ノ産額及ビ改良法案染色法ニ至ル
迄詳細編述シタル良書也

やまど新聞主筆探菊散人條野傳平君著

●最負相撲朝日嶽の傳

採色錦
畫數葉
挿入

全一冊紙數三百廿頁頗美本定價卅錢
特別賣價拾五錢郵稅六錢

本書ハ近世相撲社會ニ於テ横綱免許ヲ取リ
評判高キ朝日嶽ノ傳記ニシテ探菊散人ノ艶麗
流暢ナル筆ヲ以テ小説ニ書キ綴ラレタルモ
ノナリ殊ニ洋紙製本トモ艶美ニシテ從來流布
スル小説赤本ノ比ニアラズ挿畫ハ年方子ノ
錦畫數葉ヲ加ヘ價格ハ低廉ナル珍書也

大平樂人著 再版 昭代之樂園樂しむ草紙

●福祿之本府樂しむ草紙
第一編 國民の樂み 第二編 粹子の樂み 第三編 老人の樂み 第四編 少年の樂み
第五編 細君の樂み 第六編 商工の樂み 第七編 旅行の樂み 第八編 學者の樂み
●公私官立學校表 ●金満家一覽 ●俳優給料表
●講談師得意表 ●代言人一覽 ●其他番付數葉入
本著ハ文明世界ノ大雜書トモ稱スヘキモノニシテ賤賤老少學者商工ヲ論セス共ニ愉快ヲ感スル新著ナリ

全一冊紙數四百廿頁洋裝美本 定價金五拾錢郵稅金六錢 特別賣價卅錢

帝國文科大學教授內藤耻叟先生校閱 松井廣吉君著

增訂五版

日本帝國史

附 日本地圖(石版)入
全部完結(紙數四百
正價金卅錢 郵稅
三錢)

森々タル世界ノ國何ソ十百ニシテ止ンヤ、然レトモ三千年來系統連綿タル皇室ヲ戴キ、
君仁臣忠併セテ善ナルモノ我カ日本帝國ノ如キハアラス、特ニ其開國ノ古キヲ遙カニ
英佛曼ノ諸國ニ優リ、文明ノ發達マタ特異ニシテ賞スヘク奇トスヘキモノ極メテ多シ、
若シ活眼靈識ノ史家アリテ之ヲ考究セバ一部世界無双ノ好史ヲ得ベシ、但タ古來日本
史ヲ論スルモノハ体裁宜キヲ得ズ、着眼一局ニ偏シテ未ダ好史ト稱スヘキナシ、本書
ハ記事論評ノ体裁頗ル從來ノ史ト其撰ヲ異ニシ、記スル所神代ヨリ起リテ今年二月十
一日ノ憲法發布式ニ至ル、即チ最近ノ事ヲ記スルニ至テハ本書實ニ冠タリト云フヘシ、
而シテ其ノ間ニ政變戰變等皆萃ヲ摘ミ要ヲ掲ゲテ、治乱ノ沿革ヲ記シ、又制度、文學、
宗教、美術、風俗ノ事等、總テ目ヲ設ケテ其變遷ヲ記セリ、其說ヲ所簡約ニシテ疎畧ニ
失ヒス、詳密ニシテ繁冗ニ流レズ、次序當チ得、繁簡宜キニ適ス、大方ノ諸君苟シモ日本
歴史ノ全豹ヲ窺ハント欲セバ、此書ヲ措キテ夫レ將ク何クニ求メンヤ

樞密顧問官從二位伯爵勝海州先生題詞 向山黃村先生題詩 鼎軒田口卯吉先生序文 學士會院員栗本鋤雲先生評並閱 小山米峯先生評並跋 鈴木天眼子評 北村三郎君著

支那帝國史

全部紙數 上下二册完結
一千百頁
定價 金三十拾錢 郵便稅一册
支那帝國之圖 (石版) 三錢五厘
密刻入

上冊 總叙、太古史、唐虞堯夏殷周春秋戰國(中世紀)秦西漢東漢三國晉南北
下冊 中世紀(唐、五代、宋、近世紀(元、明、清))
世界中國ヲ立ルル最モ古キモノハ支那帝國ナリ其ノ文明最モ速カニ發達シ上代既ニ繁然ノ光ヲ放テテハ支那帝國ナリ且ツ支那帝國ハ古來其ノ疆土廣大ニシテ多ク非凡ノ英傑ヲ出シ治亂戰爭ノ跡甚ダ大ニシテ顔ブル人意ヲ快クスルモノアルノミナラズ漢武帝如キ東亞細亞ヲ席捲シ中央亞細亞ニ及ボシ當時既ニ西國ト通商シ絶大ノ雄圖ヲ張ヒリ其ノ文學ノ如キハ上代ヨリ進歩シテ西洋諸國ニ勝ルヲ數等ナルモノアリ蓋シ支那帝國ノ文明ハ一種特殊ノ文明ニシテ其ノ國民ノ氣象マタ大ニ嘆服スベキモノアリ當今世人動モスレバ之ヲ羨ロシテ深ク意ヲ注カザルカ如シト雖モ是レ冠冕ノ極ナリ抑モ支那帝國ハ世界ノ大勢ニ大關繫ヲ有スベキ國柄ニシテ其ノ歴史ハ以テ世界ノ大歴史トナスコ足ル然レモ古來支那帝國ノ歴史ハ北村君東西ノ書ヲ涉獵シ支那開國以降日清條約ヲ訂結スルニ至ルマデ少シ本國ノ通商ニシテ其ノ歴史ハ支那開國以降日清條約一部ヲ千頁ノ一ニ至ルベキモノナリ其識見卓異ニシテ從來支那人ノ手ニ成レル史中ニハ會テ見ヘザリシ所ノ事實少シトモ且ツ其ノ文章雄麗ニシテ記事ノ煩繁宜ク得タリ本書ノ題序批評ヲ以テス實ニ錦上添花ヲ添フルモノト謂フハ眞ニ適評ナリ加フルニ朝野諸名士革形勢ヲ知リ世界ノ大歴史ヲ知ラント要セバ請フ本書ニ就テ之ヲ求メヨ

萬國歷史全書第四編

二十月十八日發兌

印度史

附朝鮮、安南、緬甸、暹羅、各國史

全部完結 紙數四百六十頁餘
正價金卅錢 郵稅三錢

樞密顧問官鳥尾小彌太子題辭
大藏省主計局長深江順暢君序文
大藏省主稅官小山正武君校閱並批評

朝鮮名士朴泳孝題辭
紫山北村三郎君著

印度ハ世界第一ノ舊國ニシテ歐州今日ノ文明ハ實ハ其ノ泉源ヲ印度ニ發ス蓋シ古希臘羅馬ノ文明ハ之ヲ印度ヨリ傳ヘタルモノニシテ歐州今日ノ文明ハ亦此ノ希臘羅馬ノ餘澤ナリ印度ニハ又波羅門教アリ佛教アリ其ノ教法ノ哲理世界ニ冠絶スト稱セラル然レモ此ノ舊國ハ後ニ四分五裂シテ今ヤ全ク英人ノ版圖ニ歸シ彼ノ世界文明ノ歴史ニ大關係アルガんぢテ河ハ其水流ノ滔々トシテ今尙ホ絶ヘサレモ古代文明ノ事物ハ一空見ル所ナシ今古盛衰ノ差豈管宮女鶴鳴ノミナランヤ朝鮮ハ其立國ノ古キ殆ト支那ニ繼キ文明ノ花風ニ發シ日本ハ上古多ク其風ヲ蒙レリ緬甸暹羅モ亦タ亞細亞ノ舊國ニシテ今ヤ其獨立全カラズ此等諸國本ト古來貿易上ハ縁故多クノミナラス亞細亞振興ノ策ニ於テハ頗アル關係アルモノナリ然ルニ此等諸國ノ史散佚ノ傳ハラサルモノ多ク近來西人ハ一部東門トシテ之ヲ攻究スルニ至レリ紫山北村氏東西ノ書ヲ涉獵シ宗教地理等ヲモ究メテ今此史ヲ編ス其沿革風俗制度宗教文學等ヲ盡シ萃テ極ム之ヲ一讀セハ以テ亞細亞古國ノ一ヲ知ルヘク啓發スル所多カラント特ニ朝鮮史ノ如キハ朴泳孝氏ノ困チ經タルヲ以テ從來ノ書ノ衍ヲ傳ヘ實チ失フ比ニアラス

一ヶ年完成萬國大歴史發兌稟告

上下茫々五千載、人事百般ノ跡ニ就テ之ヲ記シ、之ヲ剖キ、之ヲ評スルヲ歴史ト云フ
 歴史ハ最モ利益アリ最モ趣味アルモノナリ、坐ナカラコシテ千里ノ外ヲ知ルハ地誌ノ
 功ニシテ、一身數千年前ノ情態ヲ知悉スルハ是レ歴史ノ功ナリ、故ニブラウソ、馬遷、
 白石ノ輩各々椽大ノ筆ヲ揮ツテ之ヲ記述ス、今ヤ各國歴史ノ世ニ出ツルモノ少シトモ
 大、然レモ或ハ一方ニ偏シテ詳密ニ過ギ、或ハ廣キニ亘リテ簡ニ過ギ、或ハ記事論評其
 ノ体ヲ得ズ、讀者ヲ迷ハシ煩ハスノ煩ブル多シ、依テ今回弊館ニ於テ萬國歴史全書ナ
 ル一書目ヲ設ケ、各國ノ歴史各々専門得意ノ士ニ就キ著譯ヲ乞ヒ、以テ完全ナル歴史ト
 爲シ、一ヶ年ヲ以テ之ヲ大成セントス、大方ノ諸君一閱ノ上其良否ヲ判セヨ

萬國歴史全書

本書目次

- 第一 日本帝國史
- 第二 支那帝國史(上)
- 第三 支那帝國史(下)
- 第四 (印度及小)
- 第五 土耳其史
- 第六 希臘、羅馬史
- 第七 日耳曼史
- 第八 佛國史
- 第九 英國史
- 第十 露國史
- 第十一 歐洲(西、葡、和、白、)史
- 第十二 米國史

全部十二卷

紙數五千頁以上

每月一冊發兌紙數四百頁以上 ●明治
 廿二年九月ヨリ向一ヶ年間ニ全部完
 成 ●美本仕立 每卷各國石版密圖入
 正價一冊金三拾錢 ●三冊前金八拾五
 錢 ●六冊前金一圓六拾錢 ●全部前金
 三圓 ●郵稅一冊三錢宛

本書ハ支那史ヲ除クノ外總テ一國チ一冊讀切トシ又小國及多ク歴史ヲ有セサルモノハ
 數國ヲ合シテ一冊トス、故ニ本書ハ百科全書等ノ如ク全部完結ノ後分冊合本トナスガ
 如キ煩冗ナシ、且ツ本書ハ校正ヲ嚴密ニシ印刷製本等ニ至ル迄一層ノ注意ヲ加ヘタリ

通信省認可



東京外国語大学図書館



0000 1972 10